

秋田県文化財調査報告書第501集

西 板 戸 遺 跡

窪 遺 跡

2016・3

秋田県教育委員会

シンボルマークは、北秋田市浦田白坂（しろざか）遺跡出土の「岩側」です。
縄文時代前期初頭、1992年8月発見、高さ7cm、凝灰岩。

にし　　いた　　ど　　い　　せき
西　板　戸　遺　跡

— 雄物川上流河川改修事業(西板戸地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 一

くぼ　　い　　せき
窪　　遺　跡

— 雄物川上流河川改修事業(寺館大巻地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 II —

2016・3

秋田県教育委員会

序

本県には、これまでに発見された約5,000か所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これら埋蔵文化財の保存・継承と積極的活用は、地域社会の歴史や文化に親しみ、理解を深め、ふるさとを愛する人づくりにつながります。

一方、雄物川中流部においては度重なる浸水被害への対策として、堤防整備を推進する河川改修事業が行われています。本教育委員会では、こうした災害対策事業との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、雄物川上流河川改修事業（西板戸地区）及び同事業（寺館大巻地区）にそれぞれ先立って、平成26年度に大仙市において実施した西板戸遺跡及び窪遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。調査の結果、西板戸遺跡では中世の掘立柱建物跡や井戸跡、土坑墓・火葬墓、近世の掘立柱建物跡や竪穴状遺構、木棺墓などが、窪遺跡では縄文時代の土坑墓が見つかり、縄文時代や中近世の人々が雄物川流域の川沿いで営んだ暮らしの一端が明らかとなりました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助になることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査の実施及び本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所、大仙市教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成28年3月

秋田県教育委員会

教育長 米 田 進

例　　言

1 本書は、雄物川上流河川改修事業(西板戸地区)に伴い、平成26(2014)年度に発掘調査を実施した秋田県大仙市南外字西板戸に所在する西板戸遺跡の発掘調査報告書と雄物川上流河川改修事業(寺館大巻地区)に伴い、同じく平成26(2014)年度に発掘調査を実施した秋田県大仙市大巻字瀬ノ上に所在する窪遺跡の発掘調査報告書を合冊としたものである。窪遺跡発掘調査報告書については、平成26(2014)年度に刊行した大川端道ノ上遺跡発掘調査報告書に続く、雄物川上流河川改修事業(寺館大巻地区)に係る発掘調査報告書の2冊目に当たる。西板戸遺跡の調査成果の概要については、既にその一部を『平成26年度秋田県埋蔵文化財発掘調査報告書資料』などによって公表しているが、本報告書を正式なものとする。

2 西板戸遺跡の調査要項等については、次の通りである。

(1)調査要項

遺　跡　名　西板戸遺跡(にしいたどいせき)

遺　跡　略　号　7 N I D

遺　跡　所　在　地　秋田県大仙市南外字西板戸81-2外

調　査　期　間　平成26年4月28日～9月9日

調　査　面　積　4,000m²

調　査　主　体　者　秋田県教育委員会

調　査　担　当　者　赤星純平(秋田県埋蔵文化財センター調査班文化財主事)、伊豆俊祐(同左)

総務担当者　柴田真希(秋田県埋蔵文化財センター総務班主査)

※以上の職名は発掘調査当時のもの

調　査　協　力　機　関　国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所、大仙市教育委員会

(2)西板戸遺跡第1図は、国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所提供的1/1,000平面図DXFデータをもとに作成した。第4図及び第5図は、国土地理院発行の1/50,000地形図・『刈和野』(平成21年発行)及び同『大曲』(平成21年発行)を複製して作成した。

(3)発掘調査及び整理作業における以下の作業を下記に委託した。

水準測量および方眼杭設置：有限会社館コンサルタント

掘削作業管理業務：株式会社宮原組

木製品・鉄製品保存処理業務：株式会社吉田生物研究所

(4)以下の理化学的分析は下記に委託し、その分析結果報告を第4章に掲載した。

放射性炭素年代測定：株式会社加速器分析研究所、株式会社パレオ・ラボ

樹種同定：株式会社加速器分析研究所、株式会社吉田生物研究所、株式会社パレオ・ラボ

種実同定：株式会社パレオ・ラボ

(5)本文執筆は、次の通りである。

第1章：伊豆、第2章：赤星、第3章第1・2節：伊豆、同第3節：赤星・伊豆、第4章：上記

(4)の通り、第5章：赤星

3 窠遺跡の調査要項等については、次の通りである。

(1) 調査要項

遺 跡 名 窠遺跡(くぼいせき)

遺 跡 略 号 7 K

遺 蹤 所 在 地 秋田県大仙市大巻字瀬ノ上90

調 査 期 間 平成26年9月29日～10月1日

調 査 面 積 120m²（当初予定16m²）

調査主体者 秋田県教育委員会

調査担当者 谷地薰(秋田県埋蔵文化財センター調査班主任学芸主事) 佐藤淳(同学芸主事)

総務担当者 柴田真希(秋田県埋蔵文化財センター総務班主査)

※以上の職名は発掘調査当時のもの

調査協力機関 国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所

(2) 窠遺跡第4図は、国土地理院発行の1/50,000地形図・『刈和野』(平成21年発行)を複製して作成した。第5図は、国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所提供的1/1,000平面図PDFデータをもとに作成した。図版1の1は1948(昭和23)年米軍撮影の空中写真(USA M1080 24)を複製した。

(3) 本文執筆は、榮一郎(秋田県埋蔵文化財センター調査班主任文化財専門員(兼)班長)が行った。

4 本書の編集は伊豆俊祐・赤星純平が行った。

5 両遺跡の発掘調査及び整理作業において、国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所及び大仙市教育委員会から御援助・御協力をいただいた。また、次の方々から御指導・御助言を賜った。
片岡太郎 工藤伸也 佐々木由香 庄内昭男 仲光克顕 宮本康男 渡辺均 (五十音順、敬称略)

凡　例

- 1 本報告書に掲載した平面図の方位は、世界測地系平面直角座標第X系座標北である。西板戸遺跡については、平成25年の国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所による4級基準点測量成果に基づく。西板戸遺跡における真北の座標北との偏角は、西偏 $8^{\circ}5'$ である。窪遺跡については、平成21年の国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所による3級基準点測量成果に基づく。
- 2 遺構については検出順にその種類を示す略記号と通し番号を付したが、後に遺構ではないと判断したものは欠番とした。遺構に使用した略記号は以下の通りである。
- | | | |
|--------------|-------------|---------------------|
| SA : 柱穴列 | SB : 掘立柱建物跡 | SD : 溝跡 |
| SE : 戸井跡・水溜 | SK : 土坑 | SKI : 穴状遺構 |
| SKP : 柱穴様ピット | SO : カマド状遺構 | ST : 墓(土坑墓、火葬墓、木棺墓) |
| SU : 土器溜まり | | |
- 3 遺跡基本層序はローマ数字で、遺構内層位はアラビア数字で表記した。また、土色記述には農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖2005年版』を参照した。
- 4 遺構実測図および遺物実測図には、それぞれスケールバーを付して縮尺を表示した。
- 5 遺構実測図中に十字記号とともに併記されるグリッド記号の「+」以下の英数字は、各グリッド杭からの方方向及び距離を示している。東西南北はそれぞれEWSNで示しており、例えば「MA50+W 2 m」であれば、MA50杭から真西に2mの地点であることを示す。
- 6 破片土器・陶磁器の実測図中の拓影及び写真は、内外両面掲載の場合、断面図の左側に内面を、右側に外側を配置した。ただし、片面のみの掲載の場合は、内外面いずれの場合も断面図の左側に配置し、内面の場合に限り図中に表記して区別した。なお、見込みの拓影及び写真は断面の上に、底部は断面の下にそれぞれ配置した。
- 7 遺物実測図中に示した土器・陶磁器破片写真は、平置した遺物を垂直撮影したものであり、必ずしも本来の器形の傾きに対応したものではない。
- 8 遺物一覧表中の()内の数値は残存値を、〔 〕内の数値は推定値を示す。
- 9 遺物写真的縮尺は、原則として任意である。一部についてはスケールバーを付しておおよその縮尺を示した。
- 10 本文中で使用した「偽礫」とは、柔らかい粘土やシルトなどの未固結碎屑物からなる礫(土塊)を表す用語である。
- 11 描図中に使用した塗りバターン・記号は以下の通りである。これ以外については、個々の頁に示した。
- | | | | | | | | | |
|-------------|----|--------|---|---------|--|------|--|-----|
| [遺構] | | 柱痕跡 | | 灰・炭化物範囲 | | 焼土範囲 | | 貼床 |
| | RP | 土器・陶磁器 | S | 礫 | | | | |
| [遺物] | | 漆 | | 被熱範囲 | | 自然面 | | 加工面 |

目 次

序		圖版目次	vi
例言	ii	付図目次	viii
凡例	iv	崖遺跡	
西板戸遺跡		本文目次	iii
本文目次	v	挿図目次	viii
挿図目次	v	表目次	viii
表目次	vi	圖版目次	viii

西板戸遺跡

第1章 調査の経過	1	7 墓	39
第1節 調査に至る経緯	1	(1) 土坑墓	39
第2節 発掘調査の経過	1	(2) 火葬墓	44
第3節 整理作業の経過	4	(3) 木棺墓	48
第2章 遺跡の位置と環境	5	8 土坑	50
第1節 地理的環境	5	9 溝跡	54
第2節 歴史的環境	7	10 土器溜まり	55
第3章 調査の方法と成果	11	11 柱穴様ビット	56
第1節 調査の方法	11	12 遺構外出土遺物	56
第2節 基本層序	12	(1) 土器・陶磁器	56
第3節 検出遺構と遺物	15	(2) 銭貨	56
1 概要	15	第4章 理化学的分析	105
2 掘立柱建物跡	18	第1節 放射性炭素年代測定(AMS法)	
3 積穴状遺構	22	及び樹種同定	105
4 柱穴列	24	第2節 種実同定	116
5 井戸跡	27	第5章 総括	120
6 カマド状遺構	34	図版	125

挿図目次

第1図 工事計画と調査範囲	2	第23図 カマド状遺構(3)	75
第2図 西板戸遺跡位置図	5	第24図 土坑墓(1)	76
第3図 西板戸遺跡周辺の地形区分図	5	第25図 土坑墓(2)	77
第4図 西板戸遺跡周辺の地形分類図	6	第26図 土坑墓(3)・火葬墓(1)	78
第5図 西板戸遺跡と周辺遺跡位置図	8	第27図 土坑墓(4)・火葬墓(2)	79
第6図 西板戸遺跡基本層序図(1)	13	第28図 火葬墓(3)	80
第7図 西板戸遺跡基本層序図(2)	14	第29図 火葬墓(4)・木棺墓	81
第8図 掘立柱建物跡(1)	60	第30図 土坑(1)	82
第9図 掘立柱建物跡(2)	61	第31図 土坑(2)	83
第10図 掘立柱建物跡(3)	62	第32図 溝跡・土器溜まり	84
第11図 掘立柱建物跡(4)	63	第33図 遺構内出土土器・陶磁器(1)	85
第12図 掘立柱建物跡(5)	64	第34図 遺構内出土土器・陶磁器(2)	86
第13図 積穴状遺構	65	第35図 遺構内出土土器・陶磁器(3)	87
第14図 柱穴列(1)	66	第36図 遺構内出土土器・陶磁器(4)	88
第15図 柱穴列(2)	67	第37図 遺構内出土土器・陶磁器(5)	89
第16図 井戸跡(1)	68	第38図 遺構内出土土器・陶磁器(6)	90
第17図 井戸跡(2)	69	第39図 遺構内出土土器・陶磁器(7)	91
第18図 井戸跡(3)	70	第40図 遺構内出土土器・陶磁器(8)	92
第19図 井戸跡(4)	71	第41図 遺構内出土土製品・石製品	93
第20図 井戸跡(5)	72	第42図 遺構内出土木製品(1)	94
第21図 カマド状遺構(1)	73	第43図 遺構内出土木製品(2)	95
第22図 カマド状遺構(2)	74	第44図 遺構内出土木製品(3)	96

第45図	遺構内出土木製品（4）	97	第48図	暦年較正年代グラフ（参考）（1）	107
第46図	遺構内出土鉄製品	98	第49図	暦年較正年代グラフ（参考）（2）	112
第47図	遺構外出土土器・陶磁器	99	第50図	西板戸遺跡遺構変遷図	123

表目次

第1表	西板戸遺跡周辺遺跡一覧	9	第13表	鉄製品・鉄津一覧	104
第2表	西板戸遺跡検出遺構一覧	16	第14表	銭貨一覧	104
第3表	掘立柱建物跡一覧	57	第15表	放射性炭素年代測定結果（ $\delta^{13}\text{C}$ 補正値）	106
第4表	柱穴列一覧	58	第16表	放射性炭素年代測定結果（ $\delta^{13}\text{C}$ 未補正値、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代）	107
第5表	柱穴様ビット一覧	59	第17表	樹種同定結果	108
第6表	土器・陶磁器一覧（1）	100	第18表	放射性炭素年代測定試料及び処理	110
第7表	土器・陶磁器一覧（2）	101	第19表	放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果	111
第8表	土器・陶磁器一覧（3）	102	第20表	炭化木樹種同定結果	113
第9表	土製品一覧	103	第21表	遺構別の樹種組成	115
第10表	石製品一覧	103	第22表	種実同定結果	118
第11表	ガラス製品一覧	103			
第12表	木製品一覧	103			

図版目次

図版1	西板戸遺跡遠景（北東から）	125	4	SE161井戸跡 大形植物織維束出土状況（南から）	
1	西板戸遺跡遠景（南から）		5	SE161井戸跡 大形植物織維束接写	
2	西板戸遺跡遠景（北から）		6	SE161井戸跡 完掘（南から）	
3	西板戸遺跡遠景（北から）		7	SE243井戸跡 遺物出土状況（南から）	
4	西板戸遺跡遠景（南から）		8	SE243井戸跡 遺物出土状況（南から）	
5	西板戸遺跡遠景（北から）		図版7	SE243井戸跡 完掘（南から）	131
6	西板戸遺跡遠景（北から）		1	SE243井戸跡 完掘（南から）	
7	西板戸遺跡遠景（南から）		2	SE289井戸跡 碓出土状況（南から）	
8	西板戸遺跡遠景（北から）		3	SE289井戸跡 完掘（南から）	
9	西板戸遺跡遠景（北から）		4	SE292井戸跡 完掘（南から）	
10	西板戸遺跡遠景（南から）		5	SE324井戸跡 完掘（南から）	
11	西板戸遺跡遠景（北から）		6	SE334井戸跡 完掘（北から）	
12	西板戸遺跡遠景（北から）		7	SE335井戸跡 遺物出土状況（南から）	
13	西板戸遺跡遠景（北から）		8	SE335井戸跡 完掘（南から）	
14	西板戸遺跡遠景（北から）		図版8	SE339井戸跡 完掘（北から）	132
15	西板戸遺跡遠景（北から）		1	SE339井戸跡 完掘（北から）	
16	西板戸遺跡遠景（北から）		2	SE395井戸跡 完掘（東から）	
17	西板戸遺跡遠景（北から）		3	SE401井戸跡 遺物出土状況（南から）	
18	西板戸遺跡遠景（北から）		4	SE401井戸跡 完掘（南から）	
19	西板戸遺跡遠景（北から）		5	SO53カマド状遺構 確認状況（南から）	
20	西板戸遺跡遠景（北から）		6	SO53カマド状遺構 完掘（東から）	
21	西板戸遺跡遠景（北から）		7	SO55・56カマド状遺構 確認状況（東から）	
22	西板戸遺跡遠景（北から）		図版9	SO59カマド状遺構 確認状況（南から）	133
23	西板戸遺跡遠景（北から）		1	SO59カマド状遺構 完掘（南西から）	
24	西板戸遺跡遠景（北から）		2	SO59カマド状遺構 断面（南西から）	
25	西板戸遺跡遠景（北から）		3	SO59カマド状遺構 断面（南から）	
26	西板戸遺跡遠景（北から）		4	SO59カマド状遺構 断面（東から）	
27	西板戸遺跡遠景（北から）		5	SO60カマド状遺構 確認状況（南から）	
28	西板戸遺跡遠景（北から）		6	SO60カマド状遺構 半截状況（南から）	
29	西板戸遺跡遠景（北から）		7	SO89カマド状遺構 確認状況（南から）	
30	西板戸遺跡遠景（北から）		図版10	SO111カマド状遺構 確認状況（北から）	134
31	西板戸遺跡遠景（北から）		1	SO111カマド状遺構 確認状況（北から）	
32	西板戸遺跡遠景（北から）		2	SO111カマド状遺構 断面（西から）	
33	西板戸遺跡遠景（北から）		3	SO309カマド状遺構 確認状況（南東から）	
34	西板戸遺跡遠景（北から）		4	SO309カマド状遺構 断面（東から）	

5	SO319カマド状遺構 確認状況（東から）	6	ST326火葬墓 完掘（東から）
6	SO319カマド状遺構 断面（東から）	7	ST331火葬墓 断面（東から）
7	SO333カマド状遺構焼成部 確認状況（南から）	8	ST331火葬墓 完掘（東から）
8	SO333カマド状遺構焼口部 確認状況（南から）	図版17 141
図版11 135	1	ST322火葬墓 断面（東から）
1	ST244土坑墓 断面（西から）	2	ST322火葬墓 完掘（東から）
2	ST244土坑墓 完掘（西から）	3	ST346火葬墓 断面（南から）
3	ST327土坑墓 断面（北から）	4	ST346火葬墓 完掘（南から）
4	ST327土坑墓 完掘（北から）	5	ST388火葬墓 断面（北西から）
5	ST328土坑墓 断面（西から）	6	ST388火葬墓 完掘（北西から）
6	ST328土坑墓 完掘（西北から）	7	ST392火葬墓 短刀出土状況（南から）
7	ST330土坑墓 断面（北から）	8	ST392火葬墓 短刀出土状況接写（南から）
8	ST330土坑墓 完掘（北から）	図版18 142
図版12 136	1	ST392火葬墓 断面（南から）
1	ST336土坑墓 断面（南から）	2	ST392火葬墓 完掘（南から）
2	ST336土坑墓 完掘（南から）	3	ST222木棺墓 断面（南東から）
3	ST337A土坑墓 断面（西から）	4	ST222木棺墓 遺物出土状況（南から）
4	ST337A土坑墓 完掘（西から）	5	ST223木棺墓 断面（北西から）
5	ST337B土坑墓 断面（南から）	6	ST223木棺墓 遺物出土状況（北西から）
6	ST337B土坑墓 完掘（南から）	7	ST224木棺墓 断面（南から）
7	ST338B土坑墓 断面（東から）	8	ST224木棺墓 遺物出土状況（南東から）
8	ST336～338A・B・C土坑墓完掘（南から）	図版19 143
図版13 137	1	ST222～224木棺墓 完掘（南東から）
1	ST343土坑墓 断面（東から）	2	ST284木棺墓 確認状況（北から）
2	ST343土坑墓 完掘（東から）	3	SD92溝跡 完掘（南西から）
3	ST347土坑墓 断面（西から）	4	SD406溝跡 完掘（南西から）
4	ST347土坑墓 完掘（西から）	5	SU54土器溝まり 遺物出土状況（北から）
5	ST348土坑墓 断面（東から）	6	SU280土器溝まり 確認状況（東から）
6	ST348土坑墓 完掘（東から）	図版20 144
7	ST349土坑墓 断面（北西から）	1	SK26土坑 完掘（西から）
8	ST349土坑墓 完掘（北西から）	2	SK27土坑 完掘（西から）
図版14 138	3	SK29土坑 完掘（西から）
1	ST386土坑墓 断面（東から）	4	SK32土坑 完掘（東から）
2	ST386土坑墓 完掘（東から）	5	SK33土坑 完掘（南東から）
3	ST387土坑墓 断面（北西から）	6	SK34土坑 完掘（南から）
4	ST387土坑墓 完掘（西から）	7	SK61土坑 断面（東から）
5	ST389土坑墓 断面（東から）	8	SK62土坑 断面（南から）
6	ST389土坑墓 完掘（東から）	9	SK240土坑 完掘（北から）
7	ST393土坑墓 断面（東から）	10	SK286土坑 完掘（北から）
8	ST393土坑墓 完掘（西から）	11	SK340土坑 完掘（東から）
図版15 139	12	SK341土坑 完掘（東から）
1	ST397土坑墓 完掘（西から）	13	SK342土坑 完掘（東から）
2	ST63A・B火葬墓 断面（東から）	14	SK344土坑 完掘（北から）
3	ST63A・B火葬墓 完掘（東から）	15	SK390土坑 完掘（南東から）
4	ST107火葬墓 断面（東から）	16	SK399土坑 完掘（北から）
5	ST107火葬墓 完掘（東から）	17	SK400土坑 完掘（南から）
6	ST310火葬墓 断面（南から）	18	SK402土坑 完掘（南東から）
7	ST310火葬墓 完掘（南から）	図版21	遺構内出土土器・陶磁器（1）..... 145
図版16 140	図版22	遺構内出土土器・陶磁器（2）..... 146
1	ST315火葬墓 断面（南から）	図版23	遺構内出土土器・陶磁器（3）..... 147
2	ST315火葬墓 完掘（南から）	図版24	遺構内出土土器・陶磁器（4）..... 148
3	ST325火葬墓 断面（南から）	図版25	遺構内出土土器・陶磁器（5）・遺構外出土土器・陶磁器..... 149
4	ST325火葬墓 完掘（南から）	図版26	遺構内出土土製品・石製品・ガラス製品..... 150
5	ST326火葬墓 断面（東から）		

図版27 遺構内出土木製品（1）	151	図版32 炭化材 顕微鏡写真	156
図版28 遺構内出土木製品（2）	152	図版33 炭化材・木製品 顕微鏡写真	157
図版29 遺構内出土木製品（3）	153	図版34 種実同定写真	158
図版30 遺構内出土鉄製品	154		
図版31 遺構内外出土銭貨	155		

付図目次

付図1 西板戸遺跡遺構配置図（1）	付図3 西板戸遺跡遺構配置図（3）
付図2 西板戸遺跡遺構配置図（2）	

窪遺跡

第1章 調査の経過	159
第1節 調査に至る経緯	159
第2節 発掘調査の経過	159
第3節 整理作業の経過	160
第2章 遺跡の位置と環境	161
第1節 地理的環境	161
第2節 歴史的環境	164
第3章 調査の方法と成果	172
第1節 調査の方法	172
第2節 基本層序	172
第3節 検出遺構と遺物	175
1 概要	175
2 土坑	175
3 遺構外出土遺物	176
第4章 総括	179
図版	181

挿図目次

第1図 窪遺跡位置図	161	第6図 窪遺跡基本層序図	174
第2図 窪遺跡周辺の地形区分図・地形分類図	162	第7図 窪遺跡遺構配置図	174
第3図 窪遺跡周辺の表層地質図	163	第8図 窪遺跡SK01	178
第4図 窪遺跡と周辺遺跡位置図	169	第9図 窪遺跡出土遺物	178
第5図 窪遺跡発掘調査範囲図	173		

表目次

第1表 窪遺跡周辺道路一覧（1）	170	第2表 窪遺跡周辺道路一覧（2）	171
------------------	-----	------------------	-----

図版目次

図版1	181	図版2	182
1 窪遺跡周辺の空中写真（上が北）	1	窪遺跡基本層序（東から）	
2 窪遺跡遠景（南東から）	2	窪遺跡SK01確認状況（南西から）	
3 窪遺跡調査区（北から）	3	窪遺跡SK01土層断面（南西から）	
		4 窪遺跡SK01完掘（南西から）	
		5 窪遺跡出土遺物	

報告書抄録	183
-------	-----

にし　　いた　　ど　　い　　せき
西　　板　　戸　　遺　　跡
(7 N I D)

— 雄物川上流河川改修事業(西板戸地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 —

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所(以下、湯沢河川国道事務所)による雄物川上流河川改修事業は、平成25年度に着工された。同事業は雄物川沿岸地域において、昭和19年7月洪水、戦後最大の昭和22年7月洪水等の昭和以降に発生した代表的洪水と同規模の洪水が発生しても、外水氾濫による床上浸水等重大な被害を防止するとともに、水田等農地についても被害の軽減に努めることを目的とするものである。特に雄物川中流部は治水安全度が低く重点的に流下能力の向上を図るために、平成31年度の竣工を目指している。

同事業に伴う堤防整備予定地内には埋蔵文化財が包蔵されている可能性があるため、平成24年に湯沢河川国道事務所長から、秋田県教育委員会教育長(以下、県教育長)に西板戸地区ほかについて埋蔵文化財の分布調査依頼があった(平成24年5月14日付、国東整渦一工第5号)。これを受け、秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室(以下、文化財保護室)は、平成24年度に西板戸地区堤防整備予定地内の分布調査を実施し、新たに西板戸遺跡を発見し、その旨を県教育長から湯沢河川国道事務所長に通知した(平成24年6月20日付、教生-710)。この結果を受けて、平成25年6月24日から6月28日にかけて秋田県埋蔵文化財センター(以下、埋文センター)が6,500m²を対象に確認調査を実施した。調査の結果、対象範囲の中央～北部で遺構・遺物を確認したことから、工事区域内4,000m²について本発掘調査が必要と判断し、その旨を県教育長から湯沢河川国道事務所長に報告した(平成25年8月1日付、教生-1059)。その後、湯沢河川国道事務所と文化財保護室との協議を経て、埋文センターが平成26年度内に西板戸遺跡の本発掘調査を実施することとなった。

第2節 発掘調査の経過

発掘調査は調査員2名の体制で、平成26年4月28日から9月9日まで実施した。人力による発掘に先立ち、4月28日から5月16日までバックホウによって建物基礎等の構造物及び表土の除去を行った。人力による発掘調査は5月19日から9月9日まで実施した。調査経過は次の通りである。

【4月28日～5月1日】調査区内に残る構造物(建物基礎や道路、側溝など)をバックホウにより撤去した。また、この間に調査区内の市道及び私道の撤去に伴う仮設道路の敷設が行われた。【5月2日～9日】バックホウを使用して調査区北半の表土除去を行った。後述するⅢ層上面で焼土を含む大形の落ち込みを検出した。また、現代の建物基礎によりⅢ層が削平されている箇所では、後述のⅣ層上面で柱穴群を検出した。8日、調査区内を通る上水道の付け替え工事が行われた。【5月12日～16日】調査区南半の表土除去を行った。調査区中央で大畑・桧山腰窯産の珠洲系陶器片が多数出土した。この週、調査区内の方眼杭打設が行われた。【5月19日～23日】人力による発掘を調査員2名、現場代理人1名、作業員26名の体制で開始した。機材の搬入、コンテナハウスヤード・調査区周辺の環境整備の後、調査区北端よりⅢ層上面での遺構検出を開始。並行して確認調査トレントの埋め戻し土を



第1図 工事計画と調査範囲

掘り上げ、調査区の基本層序を確認した。この週、埋文センター調査班の佐藤淳学芸主事と富樫那美文化財主事が調査に参加した。【5月26日～30日】調査区北側Ⅲ層上面における遺構検出・精査を行った。Ⅲ層上面での遺構精査後、順次Ⅲ層の掘り下げとⅣ層上面での遺構検出、Ⅳ・V層(後述)の掘り下げとVI層(後述)上面での遺構検出を行った。調査区北側において、表土除去時に確認した大形の落ち込みを精査したところ、竪穴状の遺構と判明した。近世の陶器や貝風呂等が出土したが、同形態の近世の遺構は類例に乏しく廃棄坑と判断、SX08とした。また、調査区中央北寄りで寛永通宝数枚と土人形が出土した。この週、前週に引き続き佐藤淳学芸主事と富樫文化財主事が調査に参加した。28日、湯沢河川国道事務所と調査区北端の境界を確認し、調査区が現状より約2m北側に広がることになった。【6月2日～6日】調査区北側Ⅲ・IV層上面における遺構検出・精査、調査区中央～南側Ⅲ層上面における同作業を行った。北側の調査の結果、IV層以下には遺構・遺物が存在しないことが判明、原則Ⅲ層まで遺構検出・精査を終えることとした。調査区中央の検出作業ではカマド状遺構及び柱穴群の他、大烟・桧山腰窯産陶器の集中部であるSU54土器溜まりを検出した。4日～6日、調査区北端拡張部の表土をバックホウで除去、遺構検出・精査を行い、当該拡張部の調査を完了した。【6月9日～13日】調査区中央～南側Ⅲ層上面における遺構検出・精査、確認調査トレング埋め戻し土の掘り上げを行った。調査区中央～南側の全体で柱穴様ピット群、井戸跡、カマド状遺構、土坑が検出され、中世及び近世の遺物が出土した。遺構の種類及び出土遺物から遺跡が中世～近世の集落跡であることが判明した。12日、雨天のため午前の調査を中止。13日、雨天のため午後の調査を中止。【6月16日～20日】調査区南半Ⅲ層上面における遺構検出・精査、調査区北半IV層上面における同作業を行った。調査区中央で大型の竪穴状遺構SKI210を検出、中世の遺構と想定して精査を開始した。【6月23日～27日】前週の作業を継続した。調査区北側で2棟(SB279・281)、南側で3棟(SB273～275)の掘立柱建物跡を検出し、精査を開始した。また、調査区中央西端で検出されたSE65井戸跡から大量の大烟・桧山腰窯産の珠洲系陶器が出土、同井戸の時期が13世紀前半であることが判明した。【6月30日～7月4日】前週の作業を継続した。SE65の下層から方形に組まれた井戸枠の一部が検出され、井戸枠内には礎・炭化材等が充填されていた。また、調査区中央西端で、掘立柱建物跡2棟(SB301・302)を検出、精査を開始した。2日、大仙市立平和中学校の生徒2名がインターンシップのため発掘体験を行った。【7月7日～11日】前週の作業を継続した。SKI210の底面から多数の炭化材とともに近世の遺物が検出され、近世の遺構であることが判明した。また、調査区中央北寄りで検出した小型の土坑から錢貨が出土し、同底面から円形木棺の痕跡が検出された。周辺では以前に土人形や寛永通宝が出土していたことから、土坑は近世の木棺墓で(ST222)、これと切り合う2基の土坑(ST223・224)も同様のものと推定された。さらに、土人形・寛永通宝の出土地点は、ST284木棺墓であることが判明。周辺は近世の墓域と判明した。10日、台風接近のため調査を中止。11日、前日の台風に伴う豪雨のため調査区南半が水没、調査を中止。水抜き作業を行う。水没の影響でSE65やトレングの壁面が崩落した。【7月14日～18日】前週の作業を継続した。ST222・224から縁鉄、土人形等の副葬品が出土した。【7月22日～24日】SKI210を残し調査区北半の遺構精査が終了。調査区南半Ⅲ層上面における遺構検出・精査を継続した。調査区中央北寄りで検出された近世木棺墓の年代は、出土遺物から18世紀以降であることが判明した。22日、県立大曲工業高校の生徒2名がインターンシップのため発掘体験を行う。25日、職員技術研修会のため調査休止。【7月28日～8月2日】SKI210竪

穴状遺構の精査を完了。出土遺物から19世紀前葉～中葉の遺構と判明した。精査済みのSX08も本遺構と形態や出土遺物が似ることから、竪穴状遺構SKI08に変更した。また、調査区南半Ⅲ層上面における遺構検出・精査を継続した。調査区中央で検出したSE324井戸跡出土の陶器片とSU54土器溜まり出土の陶器片が接合し、両遺構が同時期(13世紀前半)であることが判明した。また、調査区中央で検出された中世の井戸跡SE161の底面付近から直径60cmほどの大形の植物纖維束が出土した。2日、遺跡見学会を開催。見学者45名。【8月4日～8日】前週の作業を継続した。調査区南東部で直径1～1.5m、深さ30～50cm前後の土坑群を検出した。一部の土坑から渡来銭が出土したことから、中世の土坑墓群と推定された。【8月11日～15日】現場夏期休暇。【8月18日～22日】調査区南半Ⅲ層上面における遺構検出・精査を継続した。19・20日、調査区西端を通る生活道路(調査当初に敷設された仮設道路)の切り回し工事が行われ、調査区内の精査終了部分に付け替え道路が敷設された。21日、豪雨のため午後の調査を中止。【8月25日～29日】調査区南半Ⅲ層上面における遺構検出・精査を継続した。前週に切り回した仮設道路部分の表土除去をバックホウで行い、Ⅲ層及びⅣ層上面で遺構検出を行ったが、新たな遺構は確認されなかった。26日、空中写真撮影。28日、大仙市立南外小学校5・6年生39名が遺跡を見学。【9月1日～5日】調査区南半Ⅲ層上面における遺構精査が完了。未検出遺構の確認のため、同Ⅲ層の掘り下げ及びⅣ層上面における遺構検出・精査を行った。調査区中央東側でSB403～405掘立柱建物跡を検出した。また、調査区東端斜面にトレチを4か所入れ、遺構の有無を確認した。同斜面は現代の削平及び地滑りが著しく、遺構確認は困難と判断、同区域の調査を終了した。【9月8・9日】全ての遺構精査を完了した。9日、湯沢河川国道事務所に現場を引き渡し、調査を完了した。

第3節 整理作業の経過

整理作業は、発掘調査終了後、平成26年度から平成27年度にかけて秋田県埋蔵文化財センターで実施した。作業経過は以下の通りである。

遺物については、平成26年10月から翌年3月まで、洗浄、注記、分類、接合・復元、計量の作業を行った後、同4月から12月まで遺物の実測・探拓及びデジタルトレースを行い、デジタルカメラで写真を撮影した。また、遺構内から出土した炭化材の放射性炭素年代測定及び樹種同定、種実同定、木製品・鉄製品の保存処理をそれぞれ外部に委託して行った。各委託先については例言に記載した。

遺構図面・基本層序図等については、平成26年10月から翌年3月まで、図面の整理・修正を行い、同4月より第2原図を作成、並行してデジタルトレースを行った。

平成27年10月より上記のトレース図と写真データをもとに挿図及び図版の編集を開始、これらを参考して本文原稿を作成した。窓遺跡発掘調査報告書原稿と合わせて全体の編集作業を行い、平成28年1月に入稿した。平成28年3月に窓遺跡との合冊として報告書を刊行した。

註1 秋田県教育委員会「遺跡詳細分布調査報告書」秋田県文化財調査報告書第486集 2013(平成25)年

註2 秋田県教育委員会「遺跡詳細分布調査報告書」秋田県文化財調査報告書第491集 2014(平成26)年

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

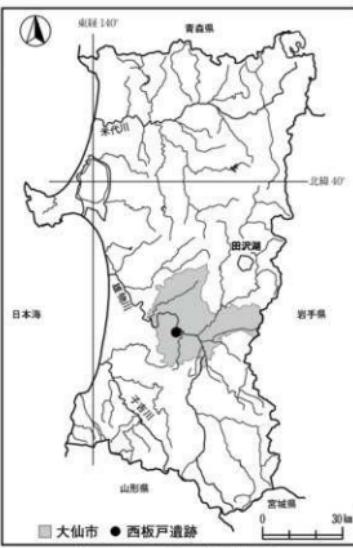
西板戸遺跡は秋田県大仙市南外字西板戸81-2外に所在する。大仙市は、秋田県の南東部に位置し、平成17(2005)年3月、大曲市、神岡町、西仙北町、中仙町、協和町、南外村、仙北町、太田町の一市六町一村が合併して誕生した。東は岩手県和賀郡西和賀町と、西は秋田市・由利本荘市と、南は横手市・美郷町と、北は仙北市に接している。古くから県南の交通の要衝であり、現在でも秋田新幹線や秋田自動車道などの陸路、鉄路の結節点として拠点機能の強化が進んでいる。

本遺跡は大仙市南外地域に所在し、JR奥羽本線神宮寺駅から西約4kmの北緯39度29分46秒、東経140度22分52秒に位置している(第2図)。

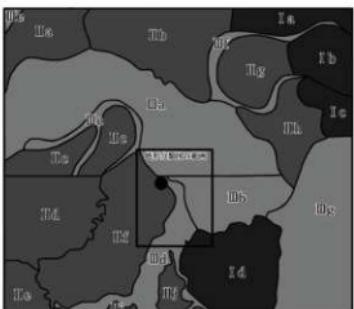
遺跡の周辺地形は、山地、丘陵地、台地(段丘地)、低地によって構成されている(第3図)。北東に諏訪山山地(I a)、杉沢山地(I b)、明光沢岳山地(I c)、南東に姫神山山地(I d)がそびえ立ち、その側辺の西側には大沢郷丘陵地(II c)、坂繁丘陵地(II d)、扇森丘陵地(II e)、立倉丘陵地(II f)が形成されている。遺跡周辺の雄物川の流路一帯では、雄物川狭窄部台地(III a)や雄物川河谷低地(III b)が広がり、その周辺には大沢川低地(III c)、橋岡川低地(III d)、淀川低地(III e)、土買川低地(III f)、横手低地(III g)が位置している。^(註1)

本遺跡の周辺では、雄物川をはじめとする主要河川

流域の低地及び丘陵上に地形の発達が見られる。特に遺跡の近辺は、旧河道が入り組んでおり、雄物川の広々とした眺望の氾濫平野を特徴づけている。そのため、河川の勾配もいたって緩やかで雄物川

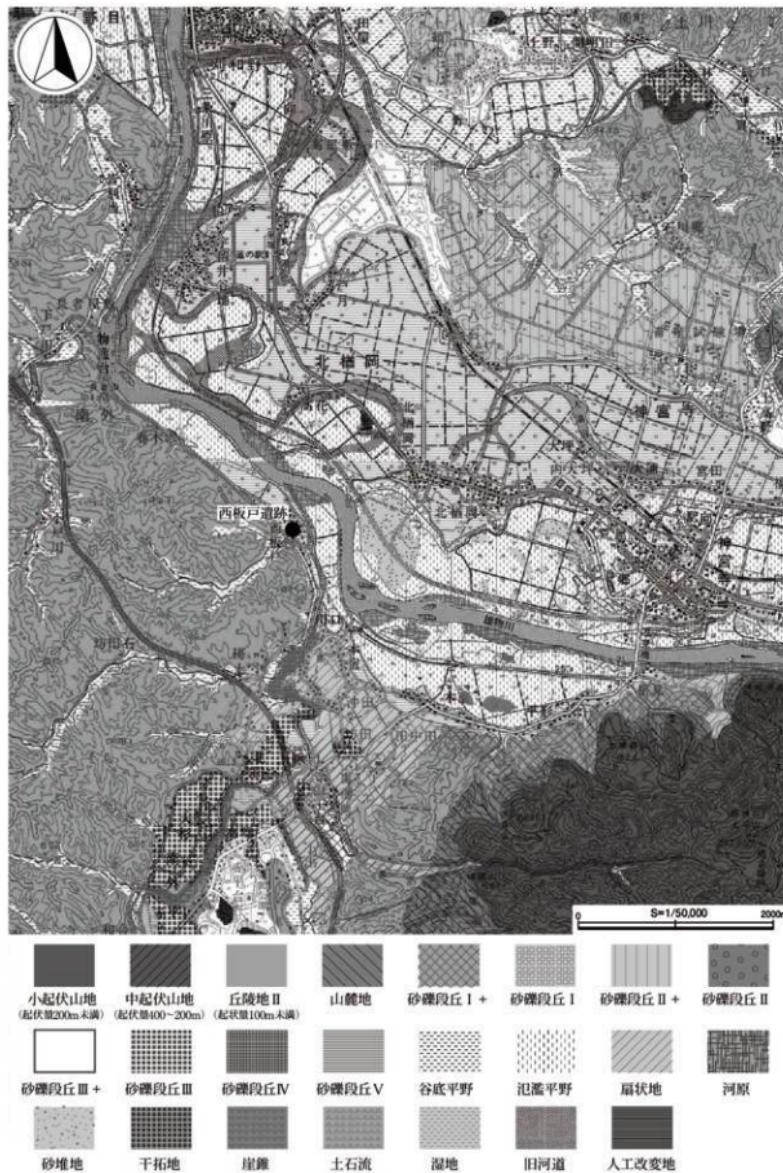


第2図 西板戸遺跡位置図



I 山地	IIg 虚空藏岳丘陵地
I a 諏訪山山地	IIh 金葛丘陵地
I b 杉山山地	IIi 保呂羽山丘陵地
I c 明光沢岳山地	IIj 勝崩山丘陵地
I d 姫神山山地	
II 丘陵地	III 台地・低地
IIa 淀川丘陵地	IIIa 雄物川狭窄部低(台)地
IIb 燐山丘陵地	IIIb 雄物川河谷低地
IIc 大沢郷丘陵地	IIIc 大沢川低地
IId 坂繁丘陵地	IIId 橋岡川低地
IIe 扇森丘陵地	IIIf 淀川低地
IIIf 立倉丘陵地	IIIf 土買川低地
	IIIg 横手低地

第3図 西板戸遺跡周辺の地形区分図 (註1文献をもとに作成)



第4図 西板戸遺跡周辺の地形分類図 (註1文献をもとに作成)

の下流部にも似た緩やかな水流を呈しており、自然堤防が発達している。現在は水田地帯として整備されているが、先行谷最下位の低地には、河原、氾濫平野、砂堆地、旧河道などが散在する。

遺跡は雄物川支流の柏岡川左岸、標高約20mの段丘上に立地している。基盤の表層地質は第四紀に形成された段丘疊層である。

第2節 歴史的環境

西板戸遺跡は中世・近世を主体とする遺跡である。本節では同遺跡の周辺に所在する旧石器時代から近世までの主要な遺跡について概観する。なお、遺跡名の次の()内の数字は第5図と第1表の表示番号に対応している。

旧石器時代の遺跡は、小出I遺跡(48)、小出IV遺跡(44)の2遺跡がある。小出I遺跡では、ナイフ形石器、台形様石器を中心とする石器群と槍先形尖頭器を主体とする石器群が検出されている。

縄文時代の遺跡は、第5図図幅内では早期～晚期の計33遺跡が確認されており、晚期の遺跡が多い。早期では小出I遺跡(48)で土器が出土しており、フラスコ状土坑も確認されている。前期の寺沢遺跡(17)、戸川堤沢I遺跡(35)、前期～中期の刈布沢遺跡(5)、前期～晚期の小出III遺跡(46)、中期の金精野遺跡(4)、山王台遺跡(45)、中期～後期の笹原台遺跡(8)、上野台遺跡(18)、小出IV遺跡(44)、大畠潜沢III遺跡(52)、後期の柏台遺跡(16)、沖田遺跡(32)、茨野遺跡(34)、北田山田ケ沢II遺跡(40)、後期～晚期の布田谷地遺跡(31)、晚期の殿屋敷遺跡(3)、一ト鶴台遺跡(6)、四階沢遺跡(7)、常野遺跡(12)、高城I遺跡(15)、上雨堤I遺跡(19)、上雨堤II遺跡(20)、萩の台遺跡(25)、北田山田ケ沢I遺跡(41)がある。

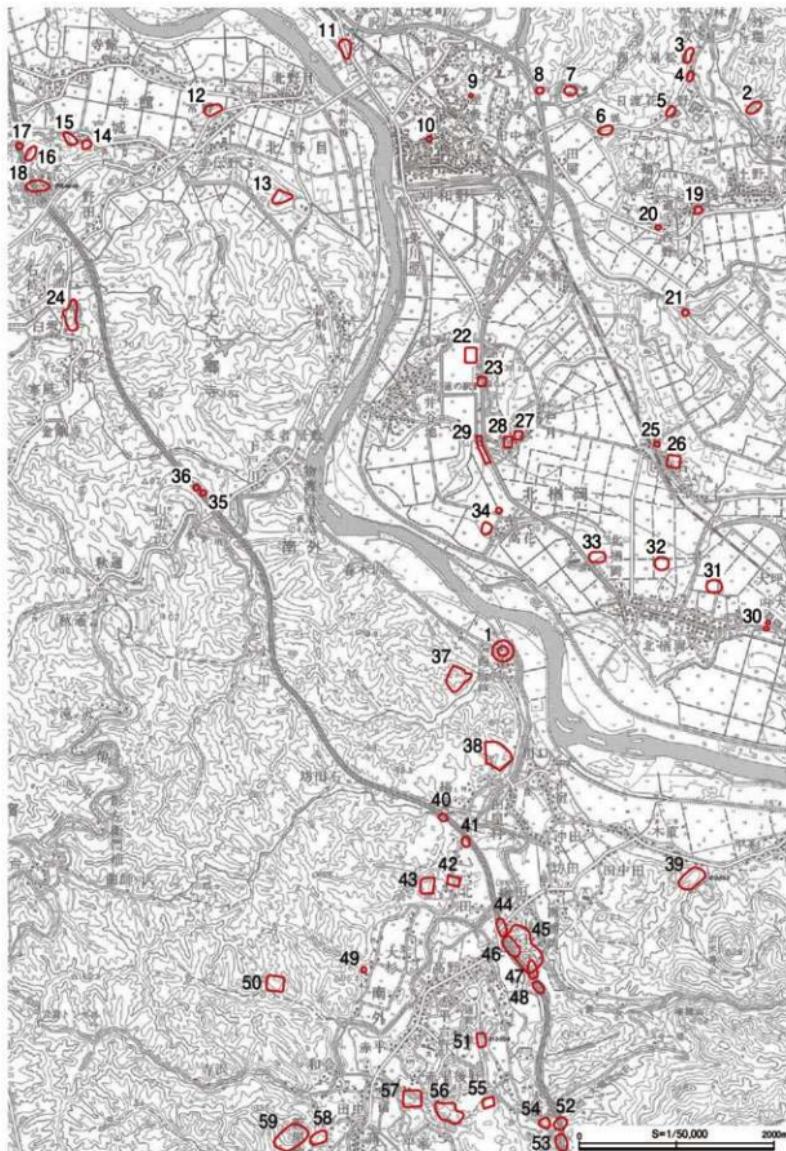
弥生時代の遺跡は、上野台遺跡(18)、北田山田ケ沢II遺跡(40)、小出IV遺跡(44)などが知られている。このうち小出IV遺跡では、竪穴建物跡1棟と弥生時代前期の砂沢式に比定される弥生土器が発見された。

古代の遺跡は、寺沢遺跡(17)、上野台遺跡(18)などが知られている。遺跡数が少なく当該期の具体的な様相は不明であるが、寺沢遺跡では焼失住居1軒を含む平安時代中期の竪穴住居(建物)跡が2軒検出されている。

中世の遺跡は、本遺跡と同じく集落跡である茨野遺跡(34)、陶器窯跡である大畠窯跡(55)、松山腰窯跡(51)、館跡の黒沢館(2)、寄騎館(11)、館ノ城(13)、白坂館(24)、龍藏寺館(28)、猿倉沢館(37)、柏岡城(38)、木直沢館(39)、檀ノ平館(43)、平家館(57)、太郎坊館(59)がある。

平成15(2003)年に神岡町教育委員会によって発掘調査が行われた茨野遺跡では、11世紀中頃から14世紀前半の掘立柱建物跡、井戸跡が検出され、珠洲系中世陶器が出土している。また、珠洲系中世陶器の窯跡のうち大畠窯跡(55)は、その操業年代が13世紀前半頃とされている。遺物は擂鉢、浅鉢、甕、壺、陶錘、分銅形陶製品が出土している。大畠窯跡産の珠洲系陶器は、雄物川下流の秋田市下タ野遺跡でも見つかっており、雄物川舟運を利用した流通の存在が想定されている。本遺跡は大畠窯跡と下タ野遺跡の中間に位置し、やはり雄物川舟運との関連がうかがえる。

一方、館跡のうち本遺跡の南1kmに位置する柏岡城は戦国時代から織豊期まで柏岡氏の居城として存続したことが知られている。長禄2(1458)年に柏岡長景(小笠原信濃次郎光冬)が柏岡城主佐原太



第5図 西板戸遺跡と周辺遺跡位置図

第1表 西板戸遺跡周辺遺跡一覧

番号	遺跡地図番号	道路名	種別	主な遺構・遺物	文献
1	212-52-46	西板戸遺跡	集落跡、墓地	本書参照	
2	212-46-33	黒沢館	館跡	郭・土堤跡・空堀・階段状仕切り	2, 20
3	212-46-8	殿屋敷	遺物包含地	縄文土器(晚期)・土偶・土版・石棒・磨製石斧・石匙・勾玉・朱塗櫛・炭化堅果	1
4	212-46-6	金精野	遺物包含地	縄文土器(中期)・石棒・石小刀・石鍬・磨製石斧・玉	1
5	212-46-7	刈布沢	遺物包含地	縄文土器(前期・中期)・石鍬・石槍・石鏟・石斧・石錐・砥石	19
6	212-46-3	一ト鶴台	遺物包含地	縄文土器(晚期)・石槍・石匙	
7	212-46-2	四隅沢	遺物包含地	縄文土器(晚期)・石鍬	1
8	212-46-53	青原台	遺物包含地	縄文土器(中期・後期)	11
9	212-46-1	上ノ台	遺物包含地	打製石器	
10	212-46-30	御木陣跡	御室館跡		20
11	212-46-31	寄駒館	館跡	鶴の面影を残す郭あり	2, 20
12	212-46-16	常野	狩獵場	土坑・縄文土器(晚期)・石器	7
13	212-46-37	館ノ城	館跡	主郭・帯郭・輪状削り込み	2
14	212-46-38	高城Ⅱ	館跡	主郭・帶郭・土堤跡	2
15	212-46-17	高城Ⅰ	遺物包含地	縄文土器(晚期)・有角石斧・石槍・石棒	
16	212-46-29	柏台	集落跡	住居跡10棟・土坑14基(「プラスコ状ピット」)・焼土遺構2基・縄文土器(後期)・石器	
17	212-46-51	寺沢	集落跡	磐穴住居跡・土坑・縄文土器・石器	4
18	212-46-50	上野台	集落跡	磐穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・縄文土器・石器・弥生土器・須恵器・土師器・土器系中世陶器	4
19	212-46-4	上雨堤Ⅰ	遺物包含地	縄文土器(晚期)・石斧・石錐・石匙・石槍	3
20	212-46-5	上雨堤Ⅱ	遺物包含地	縄文土器(晚期)・土師器・須恵器・铁刀子	3
21	212-46-35	朝夷奈古墳	館跡		2
22	212-45-1	三本杉經塚	經塚	經石	12
23	212-45-2	三本杉一里塚	一里塚	一里塚2基	
24	212-46-39	白坂塚	館跡	主郭・帯郭・陶磁器	
25	212-45-5	秋の台	遺物包含地	縄文土器(晚期)・石棒・石鍬	
26	212-45-6	八石	遺物包含地	縄文土器・石斧・石錐・石匙	
27	212-45-4	龍藏台經塚	經塚		
28	212-45-3	龍藏寺館	館跡	土堤・空堀・井戸跡(後段)	
29	212-45-23	沖田Ⅱ	集落跡	掘立柱建物跡・カマ下状遺構・井戸跡・土師器・須恵器	9
30	212-45-8	小豆沢一里塚	一里塚		
31	212-45-21	布田谷地	集落跡	磐穴住居跡・土坑・溝跡・焼土遺構・須恵器・土師器	14
32	212-45-22	沖田	集落跡	掘立柱建物跡・土坑・須恵器・土師器	15, 8
33	212-45-26	北側岡中野	集落跡	掘立柱建物跡・カマ下状遺構・井戸跡・土師器・須恵器・陶磁器	9
34	212-45-20	美野	集落跡	磐穴住居跡・掘立柱建物跡・縄文土器・石器・青磁・青白磁・須恵器系中世陶器・「ゴブレル」・古鉢	13, 18
35	212-46-48	戸川堤柵Ⅰ	遺物包含地	縄文土器・石鍬(前期)	
36	212-46-49	戸川堤柵Ⅱ	遺物包含地	石器	
37	212-55-3	猿賀沢館	館跡		
38	212-55-4	柄岡城	城跡	青磁・主郭・腰郭・馬場跡・井戸跡	2
39	212-55-2	木直沢館	館跡	空堀	
40	212-55-34	北田山田ヶ沢Ⅱ	遺物包含地	深盤形土器・剖片石器	6, 11
41	212-55-33	北田山田ヶ沢Ⅰ	遺物包含地	土坑・縄文土器・石器・須恵器	6, 11
42	212-55-5	北田	遺物包含地	縄文土器・石匙・磨製石斧・石鍬・有柄石鍬	
43	212-55-6	楓ノ平館	館跡	主郭	
44	212-55-32	小出Ⅳ	遺物包含地	土坑・縄文土器・石器	5, 11
45	212-55-7	山王台	集落跡	住居跡・縄文土器・石棒・石なた・石匙	
46	212-55-40	小出Ⅲ	集落跡	磐穴住居跡・土器埋設構造・土坑・縄文土器・石器	5
47	212-55-39	小出Ⅱ	集落跡	磐穴住居跡・縄文土器・石器・須恵器・土師器・須恵器系中世陶器	5
48	212-55-38	小出Ⅰ	集落跡	磐穴住居跡・土坑・石器・縄文土器・石器・須恵器・土師器・須恵器系中世陶器	5
49	212-55-37	柄岡城大杉古窓	窓跡	陶器	
50	212-55-8	費コ沢窓跡	窓跡	植鉢・甕・陶鍋	16
51	212-55-9	松山腰窓跡	窓跡	植鉢・甕・甕・陶鍋等	17
52	212-55-42	大畑瀬沢Ⅲ	狩獵場	陶しづ・縄文土器・石器	6
53	212-55-41	大畑瀬沢Ⅱ	遺物包含地	縄文土器・石器	6
54	212-55-12	大畑瀬沢	狩獵場	縄文土器・有肩石斧	
55	212-55-10	大畑窓跡	窓跡	植鉢・甕・浅鉢・葉巻形壺・文網形陶製品・陶鍋	16
56	212-55-13	赤平野後	遺物包含地	縄文土器・扁平石棒・石斧(磨製・打製)・石槍	
57	212-55-14	平家館	館跡		2
58	212-55-17	新屋布	遺物包含地	住居跡・縄文土器	
59	212-55-18	太郎坊館	館跡	主郭	

郎時連を滅ぼし、翌年移住したとされる。その後、樋岡氏は慶長7(1602)年、常陸に移封されるまで約150年間樋岡城下を治め続けた。

近世の遺跡は三本杉一里塚(23)、小豆沢一里塚(30)、樋岡焼大杉古窯(49)、斐コ沢窯跡(50)や、平成20(2008)年に発掘調査が行われ、集落跡であることが判明した沖田II遺跡(29)がある。このうち三本杉一里塚遺跡は、秋田県内における江戸期の交通遺跡の代表的なものとして、県の史跡に指定されている。このように本遺跡の周辺は、現在の国道13号線である羽州街道も整備されていたほか、本遺跡の北側に隣接し、雄物川水運と樋岡川水運を連結させる役割を担う西板戸船着場があり、船調役所が置かれたことから水陸交通の要所であった。特に、西板戸に船調役所が置かれたのは、西板戸集落が亀田領、矢島領、秋田領の境地であることから、舟による無法な交易を防止するためであったと考えられている。^(注5)

- 註1 秋田県「土地分類基本調査 大曲」1978(昭和53)年
 秋田県「土地分類基本調査 剣和野」1980(昭和55)年
 註2 南外村史編集委員会「南外村史 通史編」2003(平成15)年
 註3 秋田県教育委員会「第6章 大曲市仙北部 樋岡城」「秋田県の中世城館」1981(昭和56)年
 註4 註2に同じ
 註5 註2に同じ

第1表 文獻

(同表は『秋田県遺跡地図(仙北地区版)』をもとに以下文献を参照し、加筆修正して作成した。表中の文献番号は以下の番号に対応する。)

- 1 秋田県「秋田県史考古編」1960(昭和35)年
- 2 秋田県教育委員会「秋田県の中世城館」秋田県文化財調査報告書第86集 1981(昭和56)年
- 3 秋田県教育委員会「上雨堤遺跡発掘調査報告書—県道本荘・西仙北・角館線改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査一」秋田県文化財調査報告書第149集 1986(昭和61)年
- 4 秋田県教育委員会「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅲ—上野台遺跡・寺沢遺跡・半仙遺跡一」秋田県文化財調査報告書第180集 1989(平成元)年
- 5 秋田県教育委員会「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅶ—小出I・II・III・IV遺跡一」秋田県文化財調査報告書第206集 1991(平成3)年
- 6 秋田県教育委員会「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅷ—北田山田ヶ沢I遺跡・北田山田ヶ沢II遺跡・大畑潜沢II遺跡・大畑潜沢III遺跡一」秋田県文化財調査報告書第205集 1991(平成3)年
- 7 秋田県教育委員会「常野遺跡—主要地方道本荘・西仙北・角館線緊急地方道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書一」秋田県文化財調査報告書第368集 2004(平成16)年
- 8 秋田県教育委員会「沖田遺跡・沖田II遺跡—一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書III一」秋田県文化財調査報告書第443集 2009(平成21)年
- 9 秋田県教育委員会「北樋岡中野遺跡—一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書IV一」秋田県文化財調査報告書第482集 2012(平成24)年
- 10 秋田県教育委員会「遺跡詳細分布報告書」秋田県文化財調査報告書第140集 1986(昭和61)年
- 11 秋田県教育委員会「遺跡詳細分布報告書」秋田県文化財調査報告書第179集 1989(平成元)年
- 12 秋田県教育委員会「遺跡詳細分布報告書」秋田県文化財調査報告書第259集 1995(平成7)年
- 13 秋田県教育委員会「遺跡詳細分布報告書」秋田県文化財調査報告書第365集 2003(平成15)年
- 14 秋田県教育委員会「遺跡詳細分布報告書」秋田県文化財調査報告書第413集 2006(平成18)年
- 15 秋田県教育委員会「遺跡詳細分布報告書」秋田県文化財調査報告書第420集 2007(平成19)年
- 16 南外村教育委員会「大畑窯跡発掘調査報告書」1980(昭和55)年
- 17 南外村教育委員会「大畑・桧山腰窯跡発掘調査報告書」1992(平成4)年
- 18 神岡町教育委員会「茨野遺跡—下野野地区県営担い手育成基盤整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書一」2004(平成16)年
- 19 西仙北町教育委員会「刈布沢遺跡発掘調査報告書」1980(昭和55)年
- 20 西仙北町郷土誌編纂委員会「西仙北町郷土誌」1976(昭和51)年

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

調査区には、遺構及び遺物の位置記録のため、グリッドを設定した。調査範囲内で世界測地系平面直角座標第X系における任意の点(X=-55810.000, Y=-38920.000)を原点とし、X軸方向・Y軸方向に4m間隔の基線を設定して、交点に方眼杭を打設した(第6図参照)。原点を通るX軸方向の南北線をMA、同じくY軸方向の東西線を50とし、南北線には西に向かって昇順する2文字のアルファベットを、東西線には北に向かって昇順する2桁の数字をそれぞれ付した。なお、南北線に付したアルファベットは、A～Tまでの20文字の繰り返しで、LA～LT、MA～MTと記述する。4m四方の各区画は、南東隅を通過する線の記号を組み合わせ、例えばMA50と呼ぶことにした。

調査範囲は宅地跡及び休耕地であり、地表面には住宅基礎や道路等の構造物が残るほか、耕作等による現代の搅乱を大きく受けているため、構造物及び表土をグリッド杭設置の前にバックホウを使用して除去した。グリッド杭設置後、まず確認調査時のトレンチ(1～8トレンチ、9トレンチは本発掘調査対象範囲外のため欠番)埋め戻し土を掘り上げ、トレンチ壁面で遺跡の基本層序を確認した。これらの基本層毎に遺構・遺物の有無に留意しながら全体の掘り下げを行った。遺構検出は調査区北端から一定の範囲で層毎に進めた。当初は後述するVI層上面まで掘り下げて遺構確認を行った。その後、遺構・遺物の検出状況から、後述するIII層以下は遺跡の基盤層と判断し、原則としてIII層上面で最終的な遺構・遺物の確認を行った。ただし、搅乱等によりIII層上面での遺構確認が困難な箇所については、IV層上面まで掘り下げた。調査区東端の斜面に関しては、バックホウを使用して層序観察用トレンチを5か所掘削したところ(12～15トレンチ)、現代の搅乱及び地滑り痕が多く見られたため、遺構・遺物の確認は困難と判断し、調査は土層断面の記録にとどめた。また、基盤層以下の層序確認のため調査区北部に新たに深掘りトレンチを設定、人力で掘削した(10・11トレンチ)。基本層序の記録としては、調査区境界及びトレンチの壁面で、適宜断面図作成と写真撮影を行った。

検出した遺構には、確認した順に遺構種別の略記号と通し番号を付して精査を行った。ただし、掘立柱建物跡と柱穴列を構成する柱穴様ピットについては、PIからの通し番号を別途付け換えた。精査の結果、遺構ではないと判断した場合は欠番とした。遺構の記録は、確認・半截・完掘の各段階に応じて図面作成・写真撮影・土層注記・遺構カード記述を行った。出土した遺物には、遺跡名・区画名(または遺構名)・出土層位・出土年月日を記録して取り上げた。必要に応じて微細図の作成や写真撮影を行い、これらの記録と対応するように遺物番号を付した。

土層注記は、土色、土性、粘性、締まり、混入物の種類・構造・サイズ・混入量の各項目について記述した。土色、混入物の構造・サイズ・面積割合は、新版標準土色帖を参考として記録した。粘性・締まりは、弱い方から強い方に向かって1～5の数値で示した。粘性の大まかな目安は、対象の土を指で潰して固まらないものを1、団子状にできるものを3、細い紐状にできるものを5とした。締まりの大まかな目安は、対象の土を指で押して崩れるものを1、軽く痕の付くものを3、痕の付かないものを5とした。このような堆積土の基本的な属性について機械的に分類・記述した他に、主に堆積

過程とその原因についての補足的な説明を付け加えた。

平面実測は、原則としてトータルステーションを使用し、土層断面図及び微細図の作成は手実測によった。遺跡・遺構の写真撮影は、ニコン製デジタル一眼レフカメラ D800及び同デジタルカメラ COOLPIX S5100を使用した。空中写真は業務委託により、ラジコン・ヘリコプターに搭載したデジタルカメラ及びフィルムカメラで撮影した。

第2節 基本層序

西板戸遺跡は雄物川支流柏岡川左岸の河岸段丘に位置する。調査区の現況は宅地跡及び休耕地であり、現地表面の標高は20m前後である。調査区周辺は、雄物川支流の柏岡川に面する段丘面の東端部に当たり、地形は平坦である。調査区東端は段丘崖の斜面であり、その下を南から北に柏岡川が流れている。調査区の西側は宅地及び耕作地であり、さらに西側は中世城館の柏岡城跡が立地する丘陵地となる。丘陵からは今回の調査区に向かって狹小な埋没谷が伸びている。

調査区内は宅地造成や耕作等により全体的に旧表土以下が擾乱されている。また、東端の斜面部は、現代の擾乱を大きく受けている上、地滑り痕跡が全面に見られる。

基本層序の記録は、確認調査トレントの壁面で1か所、調査区境界の壁面で11か所、今回の調査で設定したトレントの壁面で3か所、計15か所で行い、以下のI～VI層に分層した(第6図)。

I層：現表土

作土等から成る現表土である。

II層：中世以降の堆積層

中世以降の人間活動等により下位のIII層を主な母材として堆積、土壤化した層と考えられる。断続的に堆積・削平を繰り返しているためか、各時期の生活面は確認できない。遺物をわずかに包含する。

III層：中世以前の洪水堆積層

柏岡川の氾濫による洪水堆積層と考えられる。形成時期の下限は、出土遺物の時期から13世紀前半である。本層の上面が中世以降の遺構確認面である。

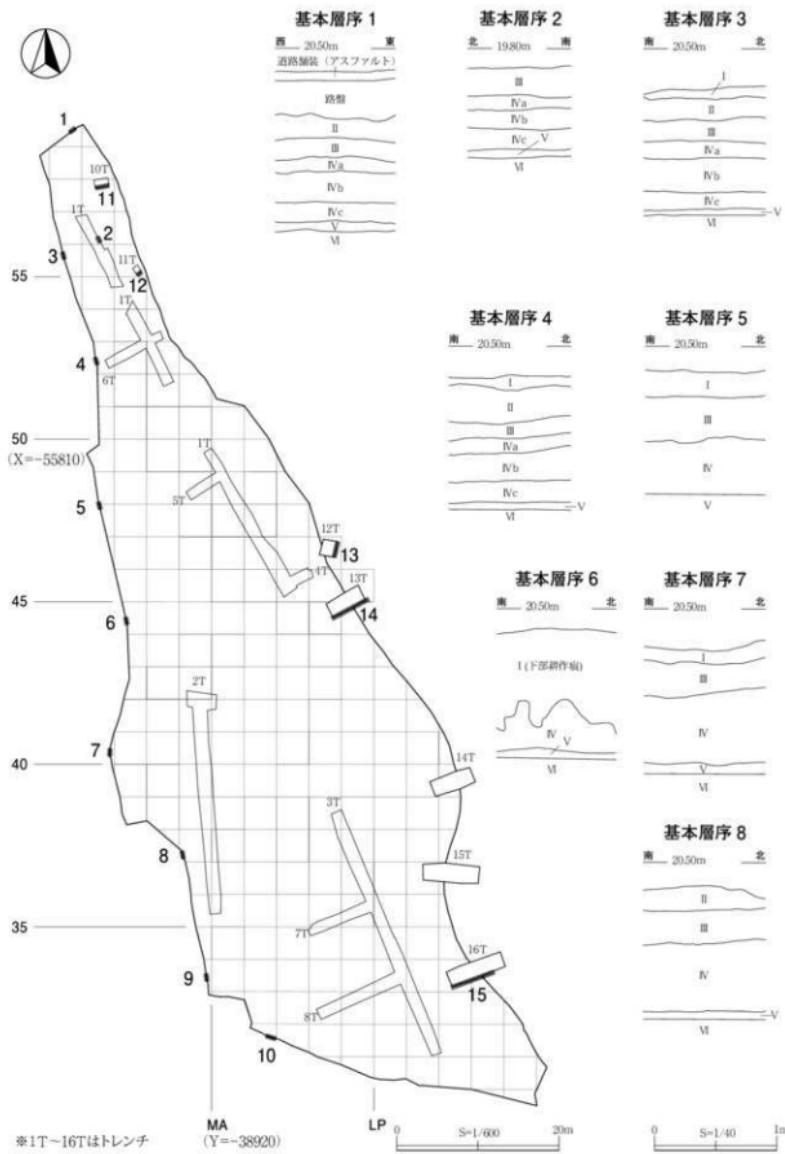
IV層：古代以前の泥炭層

柏岡川後背湿地もしくは、丘陵からの埋没谷を埋積したと推定されるシルト質の泥炭層である。層中には草類の地下茎痕を確認できる。本層以下から遺物の出土はない。III層土が混入する上位のIVa層、中位のIVb層、やや色調が暗い下位のIVc層に細分できる。なお、本遺跡の南に隣接する十二袋遺跡では、本層に相当する層(III層)と本遺跡のVI層に相当する層(IV層)^(注1)の層界より縄文時代後期と推定される土器片が出土していることから、同時期が本層堆積の上限と考えられる。

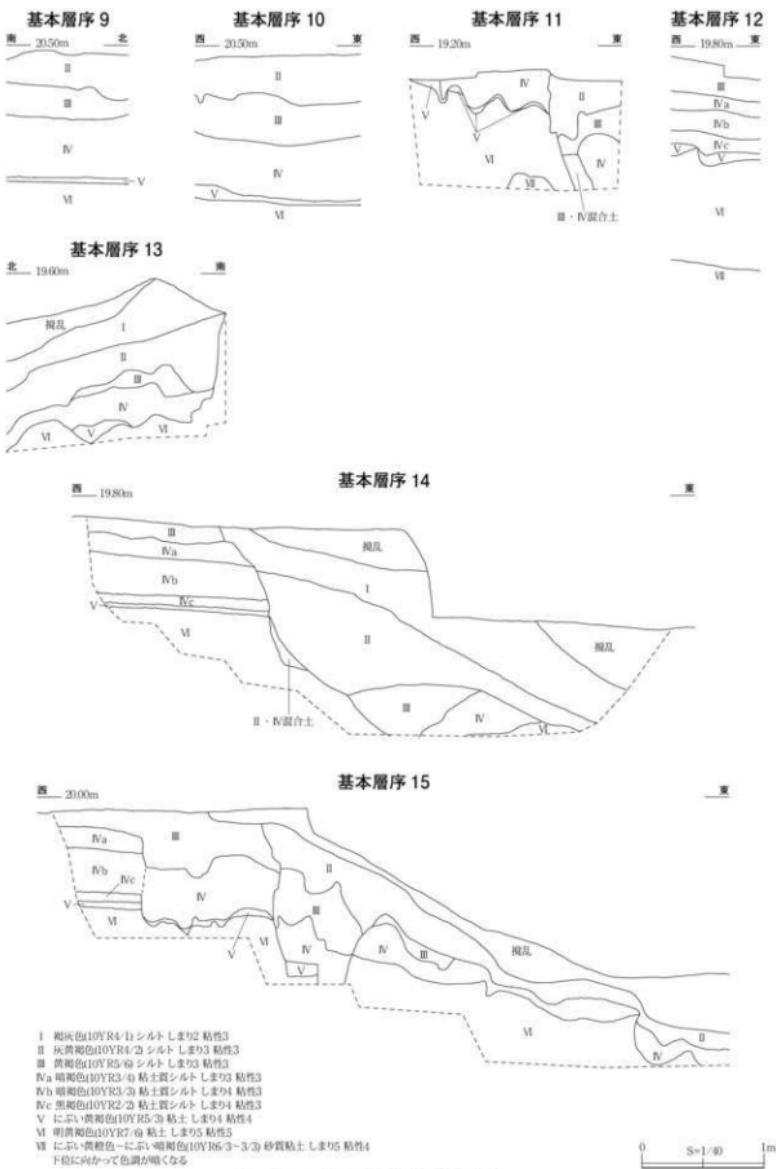
V層：IV・VI層間の漸移層

VI層：氾濫堆積層

柏岡川の氾濫堆積物から成る層である。基本土層12地点では1.5m程度の堆積を確認している。なお、同地点において本層以下には、VI層から漸移的に色調が変化する暗褐色粘土質シルト層が10cm程度、その下には水酸化鉄沈着層が5cm程度、さらに下に褐灰色粘土層を確認したが、報告は以上の記載にとどめた。



第6図 西板戸遺跡基本層序図(1)



第7図 西板戸遺跡基本層序図(2)

第3節 検出遺構と遺物

1 概要

今回の発掘調査においては、掘立柱建物跡9棟、竪穴状遺構2基、柱穴列8条、井戸跡17基、カマド状遺構14基、墓35基(土坑墓19基・火葬墓12基・木棺墓4基)、土坑18基、溝跡2条、土器溜まり2か所、柱穴様ピット127基を検出した。検出遺構の時期は主に中世及び近世であり、詳細については後述する。ただし、時期を特定できない遺構もあることから、本節では時代を分けず遺構種別ごとに報告することとし、柱穴様ピットを除く各遺構の時期については第2表に一覧を記載した。また、検出遺構のうち、近代に属する柱穴列1条(SA07)については具体的な報告を割愛した。

出土遺物は、須恵器、中世陶器、青磁・白磁、近世陶磁器、土師質土器、石製品、土製品(土人形)、ガラス製品(数珠玉)、木製品、鉄製品、鉄滓、銭貨、石器類(剥片・残核)が出土している。近代の陶磁器等も出土しているが報告は割愛する。遺物の大半は中世及び近世の遺構内から出土しており、遺構外からの出土は少ない。種別では、中世陶器の出土量が最も多く、近在する大畠・桧山腰窯(13世紀前半、第2章第2節参照)産製品が大勢を占める。これ以前の時期の遺物としては古代の須恵器及び12世紀後半と推定される白磁、石器類が出土しているが、須恵器・白磁は中世の井戸跡より破片が1点ずつ、石器類は遺構内外から数点と微量であり、これらの具体的な由来は不明である。

以下、遺構種別ごとに詳細時期及び分布の概要を述べる。

掘立柱建物跡、柱穴列、柱穴様ピットは中世～近世に帰属すると考えられるが、詳細な時期を確定できた遺構はない。ただし、柱間距離や柱穴配置等から、堀立柱建物跡のうち、SB279は中世、SB281・403・468は19世紀前葉～中葉の可能性が高い。調査区北側～中央に多く分布し、特に中央付近に密である。中央部では堀立柱建物跡を3棟認定したが、それ以外の柱穴様ピットも多数分布しており、より多くの堀立柱建物跡が存在した可能性がある。

竪穴状遺構はいずれも近世に帰属し、うち1基(SKI210)は出土遺物から19世紀前葉～中葉と推定される。調査区北側及び中央に各1基ずつ分布する。

井戸跡は大半が中世に帰属する。さらに、出土遺物及び放射性炭素年代測定の結果から13世紀前半、14世紀、15世紀前半の3時期に帰属時期が大別される。ただし、その他時代不明のものも一部存在する。分布傾向としては、13世紀前半例は調査区南半西側に、14世紀例は同中央に、15世紀前半例は同東側に分布する。

カマド状遺構は中世に帰属する。時期の特定できる遺物は出土していないが、遺構から採取した燃料材の放射性炭素年代測定結果(第4章第1節)と各遺構の煙道の向きを検討すると、13世紀代例は煙道が西方向を、14世紀～15世紀例は煙道が南北方向を向く傾向が認められ、これら2時期に大別した。13世紀代例は調査区中央西側に分布し、14～15世紀例は調査区南半東側に分布する傾向がある。なお、遺構の全体を検出したものはいずれも焚口部・燃焼部・煙道部が一直線となる平面形を呈する。

墓のうち、埋土中に焼土や炭化物等の層状の堆積が認められるものを火葬墓とし、そうでないものを土坑墓として分類した。土坑墓から人骨の検出はない。火葬墓は、ST392を除いて遺構内で火葬された痕跡はなく、他所で荼毘に付した焼骨を埋葬したものと考えられる。ST392のみ、遺構内で遺体

第2表 西板戸遺跡検出遺構一覧

路号	№	検出区	時期	地図番号	図版番号	遺物地図番号	図版番号
SA	07	MD58-59, ME58	近代	—	—	—	—
SKJ	08	MC50-51	19c前葉～中葉?	13	4	33-46-(21)-(30)	—
SA	17	MCS3 MD51-52	中世?	14	4	—	—
SE	19	MB-MC54	中世?	16	4	—	—
SK	26	MA43	—	30	20	—	—
SK	27	MA42-43	—	30	20	—	—
SK	29	MA42	—	30	20	—	—
SK	32	MB41-42	—	30	20	—	—
SK	33	MB42	—	30	20	—	—
SK	34	MA-MB42	近世～	30	20	—	—
SO	53	LT40-41	13c後葉	21	8	—	—
SU	54	LT40	13c前半	32	19	40-(25)	—
SO	55	LS39-40	13c後葉～14c初	21	8	—	—
SO	56	LS39	13c後葉～14c初	21	8	(34)	—
SO	59	LS40	13c	21	9	—	—
SO	60	LP-LQ42	15c前葉～中葉	22	9	—	—
SK	61	MB40	—	30	20	—	—
SK	62	MB40	—	30	20	—	—
ST火	63A	MC40	15c前半?	27	15	—	—
ST火	63B	MC40	15c前半?	27	15	—	—
SE	65	MC38-39	13c前半	16	5	34-35-36-37-42-43-(21)-(22)-(23)-(27)-(28)	—
SE	84	MA39	—	22	—	—	—
SE	85	LT39	13c前半	16	5	37-40-(23)-(25)	—
SE	86	LP-LR38	—	16	5	(30)	—
SE	87	LR39	13c前半	17	5	34-36-37-41-43-46-(21)-(23)-(26)-(28)-(30)	—
SE	88	LO-LR38-39	中世	17	5	37-(23)	—
SO	89	LR38	15c前葉	22	9	—	—
SE	90	LT38	中世?	17	6	—	—
SD	92	MA47-48	19c前葉～中葉?	32	19	—	—
SD	96	MB46-47	—	30	20	—	—
ST火	107	LN30-31	15c前半?	26	15	—	—
SO	111	LO30	14c	22	10	—	—
SE	161	LO-LP39	13c前半	17	6	37-41-46-(23)-(26)-(30)-(34)	—
SKJ	210	LS-LT42-43-44 MA43-44	19c前葉～中葉	13	4	33-(21)	—
ST木	222	MA46	18c中葉～	29	18-(19)-(31)	—	—
ST木	223	LT-MA46	18c中葉～	29	18-(19)-(31)	—	—
ST木	224	LT-MA46	18c中葉～	29	18-(19)-(31)	—	—
SK	240	LO-LP30	—	30	20	—	—
SE	243	LL-LM31	15c前葉～中葉	18	67	44-46-(29)-(30)	—
ST木	244	MA39	15c前半?	24	11	—	—
SB	273	LR-LS37-38 LT37	—	8	2	—	—
SB	274	LR-LS37-38 LT37	—	8	2	—	—
SB	275	LR-LS36-37	—	8	2	—	—
SB	279	MA50-51 MB-MC50～52	中世?	9	3	—	—
SU	280	MC38	13c前半	32	19	34-39-(21)-(24)	—
SB	281	LS47-48 LT46-47, MA47	19c前葉～中葉?	10	3	33-46-(21)-(30)	—
ST木	284	LT47	18c中葉～	29	19	41-(26)-(31)	—
SK	286	MB43-44	—	30	20	—	—
SE	288	LP44, LQ43-44	15c前半	18	7	38-41-(23)-(26)-(34)	—
SE	292	LO-LP42	15c前半	18	7	38-41-(24)-(26)-(34)	—
SB	301	MB-MC38	—	11	2	33-(21)	—
SB	302	MB-MC41-42	中世?	11	2	—	—
路号	№	検出区	時期	地図番号	図版番号	遺物地図番号	図版番号
SO	309	LO-LP37-38	14c	—	22	10	—
ST火	310	LO36	15c前半	—	27	15	—
ST火	315	LN-L035-36	15c前半	—	27	16	39-46-(24)-(30)
SO	319	MA35	13c	—	23	10	—
SA	320	LP43, LQ43-44 LN44, LS44-45 LT45, MA46	19c前葉～中葉?	14	f42	4	46-(30)
SO	321	LR41	13c後葉～14c初?	23	—	—	—
SO	322	LS38	14c～15c?	23	—	—	—
SE	324	LT42, MA41-42	13c前半	19	7	35-36-38-40-(22)-(23)-(24)-(25)	—
ST火	325	LT-MA34	15c前半?	28	16	—	—
ST火	326	LT34	15c前半?	28	16	—	—
ST火	327	LP35	15c前半	24	11	—	—
ST火	328	LP-LQ35	15c前半	24	11	—	—
ST火	330	LNQ35-36	15c前半	24	11	—	—
ST火	331	LP-LQ36	15c前半	28	16	39-(24)-(30)	—
ST火	332	LP-LQ36	15c前半	28	17	—	—
SO	333	LQ35	14c末～15c前葉	23	10	—	—
SE	334	Q35	14c末	19	7	38-45-(29)-(34)	—
SE	335	LP36	14c	19	7	38-(24)	—
ST火	336	LN34-35	15c前半	25	12	—	—
ST火	337	LA1-LO-LP34-35	15c前半	25	12	—	—
ST火	337B	LP34-35	15c前半	25	12	39-(24)	—
ST火	338A	LP35	15c前半	25	12	—	—
ST火	338B	LP35	15c前半	25	12	—	—
ST火	338C	LO-LP35	15c前半	25	12	—	—
SE	338	LP32	14c前葉～15c前葉	20	8	45-(29)-(34)	—
SK	340	LM31	—	31	20	—	—
SK	341	LK30-31	—	31	20	—	—
SK	342	JK30	—	31	20	—	—
ST火	343	LN30	15c前半?	26	13	—	—
SK	344	LN30	—	31	20	—	—
ST火	346	LO37	15c前半	28	17	—	—
ST火	347	LO37	15c前半	26	13	39-(24)	—
ST火	348	LO37	15c前半	26	13	—	—
ST火	349	LN36-37	15c前半	26	13	—	—
ST火	386	OS36	15c前半	26	14	(30)-(31)	—
ST火	387	LN-L036	15c前半	26	14	—	—
ST火	388	OS35	15c前半	28	17	—	—
ST火	389	OS34-35	15c前半	27	14	—	—
SK	390	LN36	—	31	20	—	—
ST火	392	LO35-36	15c前半	29	17-(18)	38-46-(23)-(30)-(31)	—
ST火	393	LO35	15c前半	27	14	—	—
SO	394	LP36	中世	23	—	—	—
SE	395	MA42	13c前半	20	8	36-38-(23)-(24)	—
ST火	397	LO35	15c前半	27	15	—	—
SK	399	LT-MA43	—	31	20	—	—
SK	400	LN-L041	—	31	20	—	—
SE	401	LO41-42	15c前半	20	8	39-46-(24)-(30)-(34)	—
SK	402	LO40	—	31	20	—	—
SB	403	LN-LQ40-41	19c前葉～中葉?	12	3	—	—
SA	404	LO40, LR39-40	19c前葉～中葉?	14	4	—	—
SA	405	LO-LP40	19c前葉～中葉?	15	—	—	—
SD	406	LN39-40 LO40-41	～近世?	32	19	—	—
SA	467	LN40-41	19c前葉～中葉?	15	—	—	—
SB	468	LO40, LP39-40	19c前葉～中葉?	11	4	—	—
SA	469	MA39, MB38-39	—	15	2	—	—
SA	470	LT37-38	—	15	2	—	—
SA	471	LR43, LS-LT44	19c前葉～中葉?	15	4	—	—

を茶毘に付し、そのまま埋葬を行っている。土坑墓・火葬墓は規模・形態・分布範囲等がほぼ共通しており、時期・性格をほぼ同じくするものと考えられる。時期を特定できる遺物に乏しいが、ST392火葬墓で15世紀前半の珠洲系陶器が出土しており、他からも14世紀後半～15世紀代と推定される遺物が散見されることから、概ね15世紀前半に帰属すると考えられる。調査区南東部に重複しながら集中しており、調査区南半西側にも散漫に分布する。

木棺墓は4基とも出土遺物から近世(18世紀中葉以降)と推定される。木棺はいずれも小径の円形ないしは方形と推定され、幼児の墓と考えられる。調査区中央北寄りに分布する。

土坑は上記の墓とした遺構と規模・形態及び分布範囲等が異なるものである。出土遺物に乏しく、時期・性格を推定できるものはわずかである。

溝跡は2条とも出土遺物がなく時期の断定はできないが、調査区中央北側に位置するSD92は溝の方向から近世の区画溝の可能性がある。調査区中央南東に位置するSD406は時期・性格ともに不明である。

土器溜まりは調査区中央西側に2か所分布する。出土した珠洲系陶器(大烟・桧山腰窓製品)から13世紀前半と推定される。出土陶器は複数の井戸跡出土破片と接合することから、同遺構内または周辺で打ち割った陶器片を各井戸の埋め戻し時に混入させたと考えられ、井戸の廃絶儀礼に関わる遺構と推定される。

以上から推定される、遺跡の変遷の概略は以下のとおりである。

13世紀前半に、調査区中央西側を中心として井戸及びカマド状遺構が造られ、集落が形成されたと考えられる。同時に居住施設として周辺に掘立柱建物も造られた可能性があるが、本時期に特定できる建物跡はなく、様相は不明である。また、本時期の井戸跡及び土器溜まり出土の珠洲系陶器には遺構間接合が確認できる。土器溜まりまたはその周辺で陶器を打ち割り、その破片を各井戸の埋め戻し時に分配・遺棄したと推定され、本時期に属する井戸跡は同時廃絶の可能性が高い。この場合、一時的に集落が途絶えたのか、集落内の調査区外の別地点に新たに井戸を掘削したのか、さらにはそれらの原因などについては不明である。

14世紀代にも井戸跡及びカマド状遺構がわずかに認められ、集落は断続的に続いたものと考えられる。ただし、同時期と特定できる遺構・遺物が少なく、具体的な様相は不明である。

15世紀前半になると、調査区南東部を中心として土坑墓及び火葬墓から成る墓域が形成される。ただし、同時期の井戸跡及びカマド状遺構も調査区南半東側に分布することから、集落としての機能も失われることなく継続していたようである。

近世において、遺跡地周辺に集落が存在したことは明らかだが(第5章)、同時期の居住施設と特定できる遺構は確認されなかった。また、居住施設に伴う井戸跡も未確認である。このほか18世紀中葉以降には、調査区中央北寄りに墓域が形成される。木棺墓4基のみの検出であり、存続は短期間と考えられる。その後、遅くとも19世紀には遺跡内に倉庫と推定される竪穴状遺構が出現する。同時期には倉庫あるいは馬屋と推定される建物(SB281・403)も出現する可能性が高く、これらの遺構は遺跡北側に隣接する近世船着場との関連が想定される。

2 挖立柱建物跡(第3表)

SB273(第8図、図版2)

【位置】 LR37・38、LS37・38区に位置する。【確認状況】 Ⅲ層上面で柱穴群を確認、柱穴配置を検討し掘立柱建物跡と判断した。【重複】 遺構の範囲内にSB274掘立柱建物跡、SO89カマド状遺構、SKP132・142柱穴様ピットが存在するが、直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。【規模・形態】 桁行方向(東西)総長2.68m、梁行方向(南北)総長2.44m、1×1間の建物跡と考えられる。棟方位はN-86°-Wである。柱間距離の長い東西方向を棟方位と仮定したが、わずか1×1間の検出のため確実ではない。平均柱間距離(芯々)は桁行方向で 2.42 ± 0.02 m(±は標準偏差、以下同)、梁行方向で 2.18 ± 0.06 mであり、どちらもほぼ等間隔である。【柱穴】 平面形は楕円形で、柱掘方の平均径(長径)は0.26mである。柱痕跡は検出していない。平均底面標高は 19.68 ± 0.09 mである。埋土は単層でⅡ層土由来の灰黄褐色シルトを主体にⅢ層土塊・炭化物・焼土が微量に混入する。柱痕跡あるいは埋め戻し土と考えられる。【出土遺物】 なし。

【所見】 時期・性格ともに不明である。

SB274(第8図、図版2)

【位置】 LR37・38、LS37・38、LT37区に位置する。

【確認状況】 Ⅲ層上面で柱穴群を確認、柱穴配置を検討し掘立柱建物跡と判断した。【重複】 遺構の範囲内にSB273・275掘立柱建物跡、SKP119・233柱穴様ピットが存在するが、直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。【規模・形態】 桁行方向(東西)総長5.72m、梁行方向(南北)総長290m、2×1間の建物跡と考えられる。棟方位はN-87°-Eである。総長の長い東西方向を棟方位と仮定したが、東西方向・南北方向の柱間距離がほぼ同じであることや、北西隅の柱穴が未検出であり、他にも未検出の柱穴が存在する可能性もあることから確実ではない。平均柱間距離(芯々)は桁行方向で 2.74 ± 0.05 m、梁行方向で 2.64 ± 0.04 mであり、どちらもほぼ等間隔である。【柱穴】 平面形は円形及び楕円形で、柱掘方の平均径(長径)は0.23mである。P1・P4で柱痕跡を検出しており、平均径は0.18mである。平均底面標高は 19.76 ± 0.07 mである。埋土は単層でⅡ層土由来の灰黄褐色シルトを主体にⅢ層土塊が少量、炭化物・焼土が微量に混入する。埋め戻し土と考えられる。【出土遺物】 なし。

【所見】 時期・性格ともに不明である。

SB275(第8図、図版2)

【位置】 LR36・37、LS36・37区に位置する。【確認状況】 Ⅲ層上面で柱穴群を確認、柱穴配置を検討し掘立柱建物跡と判断した。【重複】 遺構の範囲内にSB274掘立柱建物跡、SKP93・96・106・108・113・114・129・130・135～139・145・234・245柱穴様ピットが存在するが、直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。【規模・形態】 桁行方向(南北)総長5.80m、梁行方向(東西)総長5.76m、身舎1×2間で北面に下屋が付く建物跡と考えられる。棟方位はN-8°-Eである。平均柱間距離(芯々)は身舎桁行方向で 4.14 ± 0.21 m、同梁行方向で 2.66 ± 0.10 mとばらつきがあるが、梁行方向の柱筋の通りが悪いP2を除くとほぼ等間隔である。身舎桁行方向の柱間距離が長いことから、本来は間に柱穴

が存在した可能性もあるが検出されなかった。下屋の出は、P8・P9がそれぞれ0.96m・0.94mとほぼ同じだが、P7は0.80mと短い。下屋の東西方向の柱間距離もP7-P8間で2.58m、P8-P9間で2.84mとばらつきがある。【柱穴】柱穴の平面形は円形及び楕円形、隅丸方形であり、柱掘方の平均径(長径)は身舎で0.38m、下屋で0.24mである。P3で柱痕跡を、P4で柱アタリを検出しており、推定される柱の平均径は0.17mである。平均底面標高は身舎で 19.63 ± 0.10 m、下屋で 19.68 ± 0.09 mである。埋土はⅡ層土由来の灰黄褐色～褐色シルトを主体にⅢ層土塊が中～少量、炭化物が少～微量混入するものが大半であり、埋め戻し土と考えられる。P3の柱痕跡はⅡ層土類似の灰黄褐色シルトを主体とし、柱掘方埋土(根固め土)はⅢ層土由来の黄褐色シルトを主体としている。【出土遺物】P1底面から珠洲系陶器破片1点(5.3g)が出土した。小破片であり、柱根抜き取り後の埋め戻し時の混入と推定される。

【所見】隅丸方形の柱掘方はSB281やSB403など近世の可能性がある掘立柱建物跡に見られることから、近世に帰属する可能性もあるが断定できない。P1出土の陶器から、帰属時期の上限は13世紀である。

SB279(第9図、図版3)

【位置】MA50・51、MB50～52、MC50～52区に位置する。【確認状況】IV層上面で柱穴群を確認、柱穴配置を検討し掘立柱建物跡と判断した。【重複】SKI08竪穴状遺構に切られる。また、遺構の範囲内にSKP149・278柱穴様ピットが存在するが、直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。なお、北側の一部を1・6トレンチに削平され、北東隅は調査区東端斜面となるため柱穴の検出ができなかった。【規模・形態】削平等により不明な点はあるが、桁行方向(東西)総長6.20m、梁行方向(南北)総長4.68m、身舎2×2間で北と東の2面に廟が付く建物跡と考えられる。棟方位はN-78°-Wである。平均柱間距離(芯々)は桁行方向で 3.02 ± 0.07 m、梁行方向で 2.21 ± 0.05 mであり、概ね等間隔である。廟の出は、桁行方向(東面)で 2.20 ± 0.04 m、梁行方向(北面、P3-P4間のみ)で1.74mである。

【柱穴】柱穴の平面形は円形及び楕円形であり、柱掘方の平均径(長径)は身舎で0.27m、廟で0.24mである。P3で柱痕跡を、P10で柱アタリを検出しており、柱径は身舎で0.24m、廟で推定0.16mである。平均底面標高は身舎で 19.43 ± 0.05 m、廟で 19.19 ± 0.08 mであり、廟の方が深い。埋土は4層に分けた。1層は柱痕跡で、P3でのみ確認している。2・3層はⅢ層土由来の黄褐色シルトを主体にⅣ層土塊が少量、炭化物・焼土が微量に混入し、埋め戻し土と考えられる。4層はⅣ層由来の暗褐色シルト主体で、柱の根固め土と考えられる。【出土遺物】なし。

【所見】近世の竪穴状遺構SKI08に切られることから、時期は近世以前と推定される。SB281やSB403など近世の可能性がある掘立柱建物跡に比べ、柱間距離が長いこと、明確な廟を持つことなど相違が認められ、断定はできないものの本遺構は中世に帰属する可能性が高い。推測の域を出ないが、総柱から中柱を省略する柱穴構成から、とりわけ中世後期に属する可能性がある。西側に隣接するSA17柱穴列は主軸方位が本遺構の棟方位とほぼ直交することから、本遺構に付属する区画施設と考えられる。

SB281(第10図、図版3)

【位置】LS47・48、LT46・47、MA47区に位置する。【確認状況】IV層上面で柱穴群を確認、柱穴配置を検討し掘立柱建物跡と判断した。【重複】遺構の範囲内にST284木棺墓、SKP157・165・173柱穴

様ピットが存在するが、直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。【規模・形態】桁行方向(東西)総長7.64m、梁行方向(南北)総長4.16m、中央部分を1トレンチにより欠失するが、本来は 4×2 間の総柱建物であったと推定される。棟方位はN-63°-Eである。平均柱間距離(芯々)は桁行方向で 1.88 ± 0.12 m、梁行方向で 1.84 ± 0.07 mとばらつきがある。ただし、梁行方向については北側と南側で分けると、北側の平均柱間距離(芯々)は 1.90 ± 0.02 m、南側は 1.78 ± 0.02 mと、それぞれ等間隔であり、柱間は北側の方が長い。【柱穴】柱穴の平面形は円形及び楕円形、隅丸方形である。柱掘方の平均径(長径)は0.36mである。多くの柱穴で柱痕跡を検出しており、平均径は0.16mである。平均底面標高は 19.20 ± 0.08 mである。柱痕跡の大半には荷重によると推定される沈下が認められる。埋土は4層に分けた。1層は柱痕跡である。2層はVI層土由来の明黄褐色粘土質シルトを主体にII層土塊が混入しており、柱抜き取り後の埋め戻し土と考えられる。P7・P8でのみ確認している。3・4層は柱の根固め土と考えられ、主体土はそれぞれII・III層の混合土及びIV層土を由来とする。【出土遺物】P10の1層から磁器破片が1点(0.7g)、P11の1層から土師質土器破片が1点(22g)、鉄釘がP7の2層から2点、P9の3層から1点、P10の1層から5点(第46図97)、P11の1層から4点、P13の確認面から1点、同3層から1点の計14点(41.7g)、P4の1層から不明鉄製品が6点(2.0g)出土した。いずれも小片である。P10出土の磁器(第33図1)は、胎土から瀬戸美濃産の染付端反碗(19世紀前葉～中葉)と推定される。

【所見】柱痕跡出土磁器から19世紀前葉～中葉に帰属する可能性がある。後世に混入した可能性もあるものの、少なくとも同磁器が帰属時期の下限を示すものと考えられる。また、遺構の範囲内に18世紀中葉以降と推定される近世の木棺墓ST284が存在することを勘案すると、同木棺墓の廃絶後、18世紀中葉以降の時期が本遺構の上限となる可能性が高い。遺構の性格としては、総柱であること、柱痕跡に荷重による沈下が認められることから、倉庫であったと推定される。遺跡の北側に存在した近世船着場に伴う遺構の可能性が高い。

SB301(第11図、図版2)

【位置】MB・MC38区に位置する。【確認状況】III層上面で柱穴群を確認、柱穴配置を検討し掘立柱建物跡と判断した。【重複】遺構の範囲内にSU280土器溜まり、SKP74～76・452柱穴様ピットが存在するが、直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。【規模・形態】桁行方向(東西)総長3.38m、梁行方向(南北)総長2.52m、 2×1 間の建物跡とした。棟方位はN-71°-Eである。総長の長い東西方向を棟方位とし、 2×1 間と仮定したが、遺構南側及び西側の調査区外に遺構が伸びる可能性が高い。平均柱間距離(芯々)は桁行方向で 1.58 ± 0.21 m、梁行方向で 2.03 ± 0.22 mとばらつきが大きく、桁行方向東側の1間は西側に比べて距離が短い。柱筋の通りも悪く、特にP3が南に振れる。【柱穴】柱穴の平面形は円形及び楕円形である。柱掘方の平均径(長径)は0.22mである。P2・P5で柱アタリを検出しており、推定される柱穴の平均径は0.12mである。平均底面標高は 19.59 ± 0.07 mである。埋土はII層土由来の灰黄褐色シルトを主体にIII層土塊が少量～多量に混入しており、埋め戻し土と考えられる。【出土遺物】P4から珠洲系陶器破片2点(9.9g、第33図2)、P5から珠洲系陶器破片1点(8.7g、第33図3)、土師質土器破片1点(0.7g)、P6から珠洲系陶器破片1点(6.4g)が出土した。出土陶器は胎土や焼成等から、いずれも大畑・桧山腰窯産の可能性が高いが小片のため断定はできない。土師質

土器は小片のため時期不明である。

【所見】出土陶器から廃絶時期の上限は13世紀前半と推定される。北側に隣接する13世紀前半の井戸跡SE65の井戸枠方向と本遺構の棟方位がほぼ一致しており、同遺構と併存した可能性も想定される。しかし、SE65と同時期のSU280土器溜まりが本遺構と重複(新旧関係は不明)しており、時期の推定は難しい。柱間から判断すれば、ばらつきはあるものの概ね6尺前後と短いことから近世に属する可能性も想定できるかもしれない。

SB302(第11図、図版2)

【位置】MB41・42、MC41・42区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で柱穴群を確認、柱穴配置を検討し掘立柱建物跡と判断した。【重複】P1がSKP267柱穴様ピットに切られる。SKP267は本遺構の柱穴の可能性もあるが、柱穴の深さが浅いことから別遺構と判断した。また、遺構の範囲内にSKP211・248・272・295・297が存在するが、直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。【規模・形態】現状で桁行方向(南北)総長5.60m、梁行方向(東西)総長4.92m、2×2間の建物跡と考えられる。棟方位はN-7°-Eである。平均柱間距離(芯々)は桁行方向で 2.64 ± 0.13 m、梁行方向で 2.22 ± 0.21 mであり、ばらつきがある。P5は浅く、柱筋もずれることから束柱と推定される。現状から南北棟2×2間の建物跡としたが、東西棟で調査区外の西側に広がる可能性もある。【柱穴】柱穴の平面形は円形及び梢円形である。柱掘方の平均径(長径)は0.27mである。P2で柱アタリを検出しており、推定される柱根径は0.18mである。平均底面標高は 19.64 ± 0.09 mである。束柱のP5は、底面標高が19.82mと浅い。埋土はⅡ層土由来の灰黄褐色シルトを主体にⅢ層土塊が少量～多量に混入しており、埋め戻し土と考えられる。【出土遺物】なし。

【所見】時期・性格ともに不明である。柱間から判断すれば、桁行方向で9尺程度と広いことから、中世に属する可能性も推測される。

SB403(第12図、図版3)

【位置】LN～LQ40・LN～LQ41区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で柱穴群を確認し、当初は複数の柱穴列を想定して検出作業を進めた。Ⅲ層上面で全ての柱穴を確認できなかったためⅣ層上面まで掘り下げて全ての柱穴を確認、柱穴配置を検討し掘立柱建物跡とした。【重複】P5がSD406溝跡を切る。

【規模・形態】桁行方向(東西)総長11.04m、梁行方向(南北)総長3.16m、4×2間の総柱建物跡と考えられる。棟方位はN-78°-Wである。平均柱間距離(芯々)は、桁行方向では 2.63 ± 0.10 mと概ね等間隔である。梁行方向では北側と南側で差が大きく、北側は 1.09 ± 0.11 m、南側は 1.52 ± 0.04 mで、南側の柱間の方が長い。また、桁行方向北側の柱穴は、柱筋が西側に振れる。柱間の短さと柱筋のずれから、北側1間は下屋の可能性も想定できるが、桁行方向北側と南側で柱穴の規模に大きな違いはなく、断定はできない。【柱穴】柱穴の平面形は円形及び梢円形、隅丸形である。桁行方向中央列の柱穴は同北列・南列に比べて規模が大きく、棟持柱と推定される。柱掘方の平均径(長径)は桁行方向中央列で0.42m、同北・南列で0.28mである。P2・8・10・12・14で柱痕跡を検出しており、平均径は中央列で0.22m、北・南列で0.20mである。平均底面標高は中央列で 19.05 ± 0.17 m、北・南列で 19.36 ± 0.09 mである。埋土はⅡ層に分けた。1層は柱痕跡である。2・3層はP10にのみ見られ、2層はⅡ層由來の自然流入土、

3層はⅢ層由来土主体の柱抜き取り後の埋め戻し土と考えられる。4～7層はⅡ及びⅢ層由来土を主体に混入物を多く含む土であり、埋め戻し土と考えられる。8～11層は混入物が比較的少なく、堆積状況から柱の根固め土と考えられる。これら根固め土にはⅣ層主体土が比較的多く認められるが、Ⅲ層主体土も用いられており一様ではない。一部の埋土の下位には荷重によると思われる変成(グラライ化)箇所が認められる。【出土遺物】P9の7層から鉄滓1点(88g)が出土している。

【所見】4×2間の総柱状の形態がSB281掘立柱建物跡と類似し、SB281と同時期の近世(19世紀前葉～中葉?)に属する可能性が想定される。遺構の性格としては、SB281同様、倉庫であった可能性のほか、柱筋が不整であること、梁行方向の総長が非常に短いことなどから、馬屋、あるいは床や壁を持たず屋根のみからなる作業用施設の可能性も考えられる。

SB468(第11図、図版4)

【位置】LO40、LP39・40区に位置する。【確認状況】Ⅳ層上面で柱穴群を検出し、当初は西側に隣接するSA404柱穴列と本遺構のP1～3から構成される掘立柱建物跡として精査したが、整理作業段階で柱穴配置等を見直し、本遺構に再構成した。【重複】遺構の範囲内にSE161井戸跡、SK402土坑、SKP455柱穴様ピットが存在するほか、SA405柱穴列と重複し、柱間の軸線が重なるが、いずれも直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。また、P1が3基重複しており、新しいものから順にP1A、P1B、P1Cとした。柱穴配置及び深さからP1Cが本遺構を構成する柱穴として最も妥当であるが、P1A・Bは同Cの抜き取り穴または建て替えの可能性もあるため、併せて記載した。

【規模・形態】桁行方向(東西)総長5.50m、梁行方向(南北)総長5.26m、2×2間の建物跡と考えられるが、南東側の柱穴は確認できなかった。棟方位はN-76°-Wである。総長の長い東西方向を棟方位と仮定したが、南東側の柱穴が未検出であるなど判断材料が少ないと認められる。平均柱間距離(芯々)は桁行方向で 2.45 ± 0.05 m、梁行方向で 2.35 ± 0.12 mであり、梁行方向ではらつきがある。【柱穴】柱穴の平面形は楕円形及び隅丸方形である。柱掘方の平均径(長径)は0.34mである。P2・P5で柱痕跡を検出しており、平均径は0.19mである。平均底面標高は 19.35 ± 0.05 mである。埋土は6層に分けた。1層は柱痕跡である。2～4層はⅡ層由來の灰黄褐色シルトを主体とする埋め戻し土と考えられる。5・6層は柱の根固め土と考えられる。1層(柱痕跡)の直下及び5層には荷重によると思われる変成(グラライ化)が認められる。【出土遺物】なし。

【所見】遺物は出土していないが、棟方位や柱掘方・埋土の特徴が北側0.4mに位置する掘立柱建物跡SB403と一致しており、同遺構と同じく近世(19世紀前葉～中葉?)に属する可能性がある。西側4.6mに位置するSA404柱穴列は主軸方位が本遺構の棟方位と直交することから、本遺構に付属する区画施設の可能性がある。なお、SA405とは併存しない。

3 竪穴状遺構

SKI08(第13図、図版4)

【位置】MC50・51区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で灰黄褐色土の広がりを確認、精査により竪穴状遺構と判断した。【重複】SB279掘立柱建物跡を切る。【規模・形態】平面形は、長軸3.26m、短

軸2.34mの隅丸方形で、主軸方位はN-23°-Wである。確認面からの深さは0.24mである。壁の立ち上がりは東側を除いて急である。立ち上がりの緩やかな東側は出入り口の可能性がある。柱穴は確認されなかった。【埋土】1層はⅡ層由來の灰黄褐色シルトを主体に炭化物・焼土が少量混入しており、埋め戻し土と考えられる。2層は黒褐色の粘土質シルトを主体とする。類似形態のSKI210竪穴状遺構が板敷であったと推定されることを勘案すると、本来床材等であったものが土壤化した層と推定される。本層直上からは長さ1.2mほどの柱状の炭化材が出土している。【出土遺物】近世磁器が1層から2点、2層から1点の計3点(5.0g)、近世陶器が1層から3点(35.3g)、土師質土器が1層から22点(179.5g、第33図4~7)、鉄釘が1層から12点、2層から1点の計13点(55.7g、第46図98)、不明鉄製品が1層から4点(50.7g)、1層から剝片1点(0.7g)が出土している。

【所見】出土遺物から近世の遺構と考えられる。遺構形態や出土遺物がSKI210竪穴状遺構と共通することから、帰属時期は19世紀前葉～中葉の可能性が高い。遺構の性格としては、SKI210同様、倉庫の可能性が想定されるが、SKI210と比べ規模が小さく、主軸方位や推定される出入り口の方向も異なる。機能または時期等の違いに起因する可能性も想定されるが、断定はできない。

SKI210(第13図、図版4)

【位置】LS42・43・44、LT42・43・44、MA43・44区に位置する。【確認状況】水道管による擾乱部分の断面で灰黄褐色土の立ち上がりを確認、その後Ⅲ層上面で検出作業を行い竪穴状遺構と判断した。【重複】遺構の重複はないが、中央部を現代の水道管により削平されている。【規模・形態】平面形は、長軸6.70m、短軸4.80mの隅丸方形で、主軸方位はN-51°-Wである。確認面からの深さは0.46mである。底面は平坦であり、壁の立ち上がりは南西部を除いて急である。南西部は立ち上がりが緩やかでやや張り出すことから出入り口と想定される。底面直上で炭化材を広範囲に検出しており、板張り等による床材が敷かれていた可能性がある。柱穴は確認されていない。【埋土】1～4層はⅡ・Ⅲ層土から成る廃絶後の埋め戻し土である。底面直上で広範囲に検出された炭化材は、本遺構の床材及び廃棄されたその他構築材と推定される。5層を主体とする構築時の壁際の埋め戻し土と見られるが、詳細不明である。【出土遺物】近世磁器破片が確認面から2点、2層から4点、4層から4点の計10点(141.0g、第33図8~11)、近世陶器破片が1層から1点、2層から6点(第33図13)、4層から3点(第33図12)、5層から1点の計11点(114.5g)、土師質土器破片が確認面から7点、2層から10点、3層から2点、4層から5点(第33図14)の計24点(521.4g)、鉄釘が確認面から15点、2層から2点、3層から1点、4層から2点の計20点(150.1g)、不明鉄製品が1層から1点、2層から4点、4層から2点の計7点(28.0g)がそれぞれ出土した。また、モモ核破片が3層から2点、埋め戻し土への混入と見られる珠洲系陶器破片が2～4層から計8点(172.4g)出土した。床材と見られる炭化材の直上で出土した染付皿(第33図10)は、肥前産の同類系の製品と比べると器厚が厚く、山水の絵付にも省略が見られることから、在地の窯で生産されたものと考えられる。青森県の悪戸焼に類例があり、時期は19世紀前葉～中葉と推定される。

【所見】出土磁器より遺構の帰属時期は19世紀前葉～中葉と推定される。遺構の類例に乏しく、性格は不明な点が多いが、遺跡地が近世船着場に隣接していること(第2章第2節)、遺構が非常に大型であることを勘案すると、上部構造は不明だが、倉庫状の施設であった可能性が想定される。

4 柱穴列(第4表)

SA17(第14図、図版4)

【位置】MC53、MD51・52区に位置する。【確認状況】IV層上面で北東－南西に並ぶ4基の柱穴(P2～P5)を確認、柱穴配置を検討し柱穴列と判断した。P1は当初、仮設道路が敷設されていたため確認できなかったが、仮設道路を切り回し撤去後に確認、柱穴列を構成する柱穴として追加した。【重複】P2の過半を6トレンチに削平される。【規模・形態】現状で主軸方位N-16°-E、総長11.80m、4間の柱穴列である。平均柱間距離(芯々)は 2.03 ± 0.23 mとばらつきがあり、P2-P3及びP3-P4間は2.08mと等間隔だが、P1-P2間は2.28mと長く、P4-P5間は1.66mと短い。南西方向は調査区外に続く可能性がある。【柱穴】柱穴の平面形は円形及び橢円形である。柱掘方の平均径(長径)は0.31mである。P1・P2では柱痕跡らしき埋土を確認しているが、残存状態が悪く平面的には捉えられなかつた。平均底面標高は 19.44 ± 0.08 mである。埋土は3層に分けた。1層はII層土類似の灰黄褐色シルトを主体に、III・IV層土粒が少量混入する。P1・P2に存在するが、P2で柱状の堆積状況を確認しており、柱痕跡である可能性が高い。2層はII・III層由来土の混合土であり、埋め戻し土と考えられる。3層はIII層由来の黄褐色シルトにIV層土塊が少量混入しており、根固め土と考えられる。【出土遺物】なし。【所見】東側に隣接するSB279掘立柱建物跡と主軸方位がほぼ直交することから、同建物跡の区画施設と推測される。よってSB279同様、中世に帰属する可能性が高い。

SA320(第14図、付図2、図版4)

【位置】LP43、LQ43・44、LR44、LS44・45、LT45、MA46区に位置する。

【確認状況】IV層上面で北西－南東に並ぶ10基の柱穴を確認、柱穴配置を検討し柱穴列と判断した。

【重複】P2・P4～7に新旧の柱穴がある。ほぼ同位置のため同一遺構の柱穴の建て替えと判断した。柱穴はそれぞれ新しいものから順にA・Bとした。【規模・形態】主軸方位N-59°-W、総長23.74m、9間の柱穴列である。平均柱間距離(芯々)は 2.61 ± 0.16 mだが、P1-P2間、P3-P4間、P5-P6間、P7-P8間、P9-P10間の平均が 2.74 ± 0.07 m、P2-P3間、P4-P5間、P6-P7間、P8-P9間の平均が 2.45 ± 0.08 mと、概ね9尺基準と8尺基準の柱間が交互になっている。【柱穴】柱穴の平面形は円形及び橢円形である。柱掘方の平均径(長径)は0.34mである。P1を除く全ての柱穴で柱痕跡を検出しており、平均径は0.14mである。平均底面標高は 19.41 ± 0.11 mである。埋土は3層に分けた。1層は柱痕跡であり、II層土類似の灰黄褐色シルトを主体とし、しまりが弱い。2・3層は根固め土であり、II層由来の灰黄褐色シルト及びIII層由来の黄褐色シルトを主体とする。4層はP2Bの埋土で、II層由来と思しき褐色シルトを主体にIII層土が少量混入しており、埋め戻し土と考えられる。【出土遺物】P7の2層から磁器破片が1点(0.9g)、P8の1層から鉄釘が1点(2.0g、第46図99)出土した。磁器は黒色釉がかかるが、小片のため産地・時期を特定できなかつた。

【所見】出土遺物から時期の特定はできないが、SKI210堅穴建物跡と主軸方位をほぼ同じくすることから、同遺構と併存した近世(19世紀前葉～中葉)の区画施設と考えられる。後述のSA471柱穴列が、本遺構の南西、SKI210との間に主軸方位をほぼ同じくして存在しており、本遺構同様、SKI210と併存した区画施設と考えられる。本遺構と併存したのか、本遺構の前身または建て替えなのかは不

明である。

SA404(第14図、図版4)

【位置】 LQ40、LR39・40区に位置する。

【確認状況】 IV層上面で柱穴群を確認、当初SB468-P1~3の柱穴と組み合わせ、掘立柱建物跡として精査したが、整理作業段階で柱穴配置等を見直し、本遺構に再構成した。【重複】なし。【規模・形態】 主軸方位N-17°-E、総長5.42m、2間の柱穴列である。平均柱間距離(芯々)は 2.56 ± 0.01 mであり、等間隔である。【柱穴】 柱穴の平面形は楕円形である。柱掘方の平均径(長径)は0.31mである。柱痕跡は平面的には検出されなかったが、後述するように断面で柱痕跡らしき埋土が確認されている。平均底面標高は 19.29 ± 0.08 mである。埋土は5層に分けた。1・2・4層はII・III層由来のにぶい黄褐色シルトを主体にIV層土塊が少量、炭化物が微量に混入しており埋め戻し土と考えられる。2・4層はII層類似の灰黄褐色シルトを主体にIII層土塊等が混入するが、2層直下には柱当たりに由来する可能性がある酸化鉄の沈着が、4層は柱状の堆積が認められ、いずれも柱痕跡の可能性がある。3層はIV層由来の黒褐色シルトを主体とし、5層はIII層由来の黄褐色シルトを主体としており、いずれもII層土塊が少量混入する。どちらも根固め土と考えられる。【出土遺物】なし。

【所見】 近在する掘立柱建物跡SB403・SB468と主軸方位及び埋土の特徴が類似することから、それら建物跡に伴う近世の区画施設の可能性がある。

SA405(第15図)

【位置】 LN40、LO・LP40区に位置する。

【確認状況】 IV層上面で東西方向に並ぶ4基の柱穴群を確認、柱穴配置を検討し柱穴列と判断した。

【重複】 SB468掘立柱建物跡と重複し、柱間の軸線が重なる。新旧関係は不明である。【規模・形態】 主軸方位N-74°-W、総長7.84m、3間の柱穴列である。平均柱間距離(芯々)は 2.52 ± 0.04 mとほぼ等間隔である。P1-P2間とP2-P3間が2.49mで等しく、P3-P4間が2.57mでわずかに長い。【柱穴】 柱穴の平面形は楕円形及び隅丸方形である。柱掘方の平均径(長径)は0.28mである。柱痕跡は検出していない。平均底面標高は 19.36 ± 0.09 mである。埋土はII層由来の灰黄褐色シルトとIII層由来の黄褐色シルトの混合土にIV層土塊が少量混入しており、人為的な埋戻し土と考えられる。【出土遺物】なし。

【所見】 近在する掘立柱建物跡SB403と主軸方位及び埋土の特徴が類似することから、同遺構に伴う近世の区画施設の可能性がある。SB468とは併存しない。

SA467(第15図)

【位置】 LN40・41区に位置する。【確認状況】 IV層上面で柱穴群を確認、当初SB403掘立柱建物跡を構成する柱穴として精査したが、整理作業段階で柱穴配置等を見直し、本遺構に再構成した。【重複】なし。

【規模・形態】 主軸方位N-2°-W、総長3.28m、2間の柱穴列である。柱間距離にはばらつきがあり、P1-P2間で1.22m、P2-P3間で1.87mである。【柱穴】 柱穴の平面形は円形及び隅丸方形である。柱掘方の平均径(長径)は0.27mである。柱痕跡は検出していない。平均底面標高は 19.35 ± 0.05 mである。埋土は単層で、II及びIII層由来土の混合土から成るにぶい黄褐色シルトで、埋め戻し土と考えられる。【出

土遺物】なし。

【所見】西側に隣接するSB403と主軸方位がほぼ直交することから、同遺構に伴う近世の区画施設の可能性がある。また、P2を除いて柱筋の通りは悪いが、SB403の東側に取り付く下屋柱の可能性も想定できる。

SA469(第15図、図版2)

【位置】MA39、MB38・39区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で柱穴群を確認し個々に精査を行った後、整理作業段階で柱穴配置を検討し柱穴列と判断した。【重複】なし。【規模・形態】主軸方位N-46°-E、総長7.40m、4間の柱穴列である。平均柱間距離(芯々)は 1.80 ± 0.07 mであるが、P1-P2間、P3-P4間、P4-P5間がそれぞれ1.78m、1.75m、1.75mと等間隔であるのに対して、P2-P3間のみ1.91mと長い。【柱穴】柱穴の平面形は円形及び楕円形である。柱掘方の平均径(長径)は0.22mである。柱痕跡は検出していない。平均底面標高は 19.52 ± 0.08 mである。埋土は2層に分けた。1層はⅡ層由来のにぶい黄褐色シルトを主体にⅢ層土塊が少量混入しており、埋め戻し土と考えられる。2層はⅣ層由来の暗褐色シルトを主体として混入物は少なく、根固め土の可能性がある。【出土遺物】P4の1層から珠洲系陶器破片が1点(6.4g)出土した。

【所見】出土陶器から帰属時期は中世の可能性があるが、小片であり後世の混入の可能性もある。柱間から判断すると、6尺前後と短く近世の可能性が高いが、周辺に主軸方位等を同じくする遺構も存在せず、時期は特定できなかった。

SA470(第15図、図版2)

【位置】LT37・38区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で柱穴群を確認し個々に精査を行った後、整理作業段階で柱穴配置を検討し柱穴列と判断した。【重複】なし。【規模・形態】主軸方位N-14°-W、総長7.67m、3間の柱穴列である。平均柱間距離(芯々)は 2.49 ± 0.09 mであり、ややばらつきがある。

【柱穴】柱穴の平面形は円形及び楕円形、隅丸方形である。柱掘方の平均径(長径)は0.26mである。P1・P2で柱痕跡を検出しており、平均径は0.15mである。平均底面標高は 19.65 ± 0.06 mである。埋土は7層に分けた。1・3層は柱痕跡であり、Ⅱ層類似の灰黄褐色シルトを主体とする。2・4層は根固め土であり、Ⅱ層及びⅢ層由来土を主体とする。5・6層はⅡ層由来のにぶい黄褐色シルト及び黄褐色シルトが主体、7層はⅢ層由来の黄褐色シルトを主体とし、いずれも偽礫・炭化物が少量～中量混入することから、埋め戻し土と考えられる。【出土遺物】なし。

【所見】出土遺物がなく、時期は不明である。

SA471(第15図、付図2、図版4)

【位置】LR43、LS・LT44、MA45、MB46区に位置する。【確認状況】Ⅳ層上面で柱穴を確認し個々に精査を行った後、整理作業段階で柱穴配置を検討し柱穴列と判断した。【重複】なし。【規模・形態】主軸方位N-52°-W、総長18.72m、4間の柱穴列である。平均柱間距離(芯々)は 4.60 ± 0.10 mと長く、ややばらつきがある。【柱穴】柱穴の平面形は円形及び隅丸方形である。柱掘方の平均径(長径)は0.22mである。P2で柱痕跡を検出しており、径は0.12mである。平均底面標高は 19.44 ± 0.07 mである。

埋土はP2を除き単層であり、Ⅱ層由来の灰黄褐色シルト及びⅢ層由来の黄褐色シルト、もしくはその両方の混合土を主体に偽礫・炭化物等が混入する。いずれも埋め戻し土と考えられる。P2ではⅡ層類似の灰黄褐色シルトを主体とする柱痕跡と、Ⅲ層由来の黄褐色シルトを主体とする根固め土が確認された。【出土遺物】なし。

【所見】南西に隣接するSKI210豎穴建物跡と主軸方位をほぼ同じくすることから、同遺構に伴う近世（19世紀前葉～中葉）の区画施設と考えられる。先述のSA320柱穴列が、本遺構の北東に主軸方位をほぼ同じくして存在しており、本遺構同様、SKI210と併存した区画施設と考えられる。本遺構と併存したのか、本遺構の前身または建て替えたのかは不明である。

5 井戸跡

SE19(第16図、図版4)

【位置】MB・MC54区に位置する。【確認状況】Ⅳ層上面で灰黄褐色土の広がりを確認、精査により井戸跡と判断した。【重複】なし。【規模・形態】平面形は直径1.05mの円形で、確認面からの深さは1.34mである。底面は丸底気味で、壁は急傾斜で立ち上がる。底面付近はすぼまっており、水溜め部であった可能性がある。【埋土】5層は褐色粘土質シルトを主体に大径の偽礫（Ⅳ層土塊）が混入している。上層の埋土と基質が異なることから井戸使用時の堆積土と考えられる。1～4層はⅡ・Ⅲ層土を主体とするにぶい黄褐色シルトを主体とし、偽礫（Ⅲ・Ⅳ層土塊）・焼土・炭化物が中量混入する。いずれも基質は似るため人為的な一括埋め戻し土と推定される。【出土遺物】なし。

【所見】出土遺物がなく、時期は不明である。他の井戸跡と分布が異なり、調査区北側に単独で存在することから他の井戸跡と時期または性格等が異なる可能性がある。井戸枠材は検出されておらず、土層断面に痕跡も見られないため、素掘り井戸の可能性がある。周辺の遺構にSB279掘立柱建物跡があるため、同時期に併存した可能性がある。

SE65(第16図、図版5)

【位置】MC38・39区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で灰黄褐色土の広がりとして遺構を確認、精査により井戸跡と判断した。【重複】なし。【規模・形態】平面形は長軸1.62m、短軸1.44mの橢円形で、確認面からの深さは2.06mである。底面は平坦で、壁は急傾斜で立ち上がり外側に広がる。深さ0.9mの南半側で77cm×3.6cmの方形の木枠の井戸枠が一部残存する。横板を固定したと考えられる井戸枠の主軸方位を南側で計測するとN-77°-Eである。北側の井戸枠は掘削時の半截により、原位置で確認することはできなかった。【埋土】底面直上に堆積する9層は褐色シルトを主体としており、井戸底の集水部における井戸使用時の堆積土と考えられる。井戸枠が7層から検出されているため一部は井戸枠の裏込めと考えられるが、グライ化が激しく確認できなかった。8層は下層の縁辺部に堆積する灰黄褐色シルトであり、井戸枠の裏込めと考えられる。7層は井戸枠内の埋土で、炭化材・礫・珠洲系陶器が充填された層である。当初は井戸の浄水層と考えたが、本層出土の珠洲系陶器と上層出土の珠洲系陶器が複数接合していることから、井戸の埋め戻し時に充填されたものと考えられる。1～6層はいずれもⅡ層及びⅢ層由来土を主体に偽礫（Ⅱ層土塊）や炭化物・焼土が混入する。各層間

て遺物の接合関係が認められることから、7層も含めた一括の人為的な埋め戻し土と考えられる。なお、5層以下は湧水のためグライ化している。【出土遺物】1～7層から大烟・桧山腰窯産の珠洲系陶器96点(19,179.4g、第34図15～第37図35)が出土した。一部の陶器片はSU54・SU280土器溜まり、SE87・SE324・SE395井戸跡、SKP451柱穴様ピット出土個体と接合した(第34図16・19・20、第35図26、第36図29・31・33)。1・2・7層出土の擂鉢(第37図35)は、口縁部から底部にかけて時計周りに内側から打ち欠かれており、意図的に打ち欠いた破片を各層に遺棄したと推定される。木製品は井戸枠材(第42図82～84)のほか7層からは曲物底板5点(第43図86・87)、曲物側板7点(第43図85)、箸4点(第43図88)、加工材20点以上、井戸枠材1点のほか伐採痕のある自然木数点も出土している。また、9層から加工材1点が出土した。井戸枠材は現状で幅77cmの板材の両端にそれぞれ一つのホゾとホゾ欠きを作出する。

【所見】井戸廃絶時に大烟・桧山腰窯産の珠洲系陶器が大量に投棄されていることから、廃絶時期は13世紀前半である。本遺構採取試料(井戸枠材)の放射性炭素年代測定では11世紀～12世紀中葉の曆年較正結果が出ており、遺物による時期より古いが、その理由は不明である。他の井戸跡(SE87・SE324・SE395)及び土器溜まり出土の珠洲系陶器と本遺構出土の珠洲系陶器が接合しており、本遺構を含む複数の井戸の廃絶・埋め立てが同時に行われたと推測される。

SE85(第16図、図版5)

【位置】LT39区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で灰黄褐色土の広がりとして遺構を確認、精査により井戸跡と判断した。【重複】なし。【規模・形態】平面形は長軸1.18m、短軸1.14mの本整円形で、確認面からの深さは1.32mである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。【埋土】1層は偽礫(Ⅲ層土塊)・炭化物を含む灰黄褐色土の人為埋土で、2～4層は偽礫(Ⅱ・Ⅳ層土塊)・炭化物を含むⅢ層主体の人為埋土と推定される。5層は井戸廃絶時に最初に埋められた炭化物の薄層である。6層は灰黄褐色シルトを主体とする。混入物が少なく、井戸底の集水部における井戸使用時の堆積と推定される。4層以下はグライ化しており、6層では湧水が見られる。【出土遺物】珠洲系陶器破片2点が1層から出土した(280.8g、第37図36)。また、3層からも珠洲系陶器破片が1点出土し、SU54土器溜まり1・2層、SE324井戸跡4層出土個体と接合した(第40図68)。

【所見】出土陶器から時期は13世紀前半と考えられる。他の井戸跡(SE324)及び土器溜まり(SU54)出土の珠洲系陶器と本遺構出土の珠洲系陶器が接合しており、本遺構を含む複数の井戸の廃絶が同時に行われたと推測される。

SE86(第16図、図版5)

【位置】LQ・LR38区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で灰黄褐色土の広がりとして確認、精査により井戸跡と判断した。【重複】なし。【規模・形態】平面形は長軸0.81m、短軸0.74mの梢円形で、確認面からの深さは1.43mである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。【埋土】1層は偽礫(Ⅲ層土塊)・炭化物を含む灰黄褐色土の人為埋土、2～4層は偽礫(Ⅱ・Ⅲ層土塊)・炭化物を含むⅢ層主体の人為埋土と推定される。5層は暗褐色シルトを主体としており、混入物の少なさから使用時堆積と推定される。【出土遺物】鉄滓1点(126.5g、図版30-130)が2層から出土した。

【所見】時期を特定できる遺物はないが、13世紀前半と考えられるSE87が隣接しており、13世紀の可能性がある。

SE87(第17図、図版5)

【位置】LR39区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で灰黄褐色土の広がりとして確認、精査により井戸跡と判断した。【重複】なし。【規模・形態】平面形は長軸1.20m、短軸1.06mの楕円形で、確認面からの深さは1.86mである。底面は平坦で、壁は底面から確認面へ広がるように立ち上がる。【埋土】1・2層は偽礫(Ⅲ層土塊)・炭化物・焼土を含む灰黄褐色土の人為埋土で、3～7層は偽礫(Ⅱ・Ⅲ層土塊)・炭化物を含むⅢ層主体土の人為埋土と推定される。4・5層には拳大～人頭大の礫を多く含む。【出土遺物】2～5層から珠洲系陶器5点(472.5g、第37図38)が出土し、SE65井戸跡3層・SE161井戸跡埋土出土の個体と接合した(第34図19・第36図33・第37図39)。2層から古瀬戸と思しき鉢皿の破片1点(13.1g、第37図37)、不明鉄製品が2層から1点(21.9g、第46図101)、4層から3点(22.4g)、3層から鉄釘1点(31.9g、第46図100)、4層から泥岩製の線刻礫1点(151.3g、第41図75)、2～4層から石器類(磨石2点、剥片1点)3点(534.9g)、2層から鉄滓1点(27g)が出土した。木製品は6層から曲物1点が出土した(第43図89a・b)。井戸廃絶時の埋め戻し埋土に含まれる遺物と考えられる。

【所見】出土遺物から中世の遺構(13世紀前半頃)と考えられる。他の井戸跡(SE65・SE161)の珠洲系陶器と本遺構出土の珠洲系陶器が接合しており、本遺構を含む複数の井戸の廃絶が同時に行われたと推測される。同様に井戸廃絶時に人頭大～拳大の礫を遺棄したと推定される。

SE88(第17図、図版5)

【位置】LQ38・39・LR38・39区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で灰黄褐色土の広がりとして確認、精査により井戸跡と判断した。【重複】なし。【規模・形態】平面形は長軸0.71m、短軸0.60mの楕円形で、確認面からの深さは1.88mである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。【埋土】2～7層は偽礫(Ⅱ層・Ⅲ層・Ⅳ層土塊)・炭化物・焼土を含むⅢ層主体の人為埋土である。1層は埋め戻し後の凹みへ周囲のⅡ層土が自然堆積したものと考えられる。【出土遺物】焼成不良の珠洲系陶器と思しき陶器破片1点(14.8g、第37図40)が5層から出土した。

【所見】出土陶器から中世の遺構と考えられる。詳細な時期不詳であるが、SE87に隣接することから、13世紀前半の可能性も想定される。

SE90(第17図、図版6)

【位置】LQ38区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で灰黄褐色土の広がりとして確認、精査により井戸跡と判断した。【重複】なし。【規模・形態】平面形は長軸1.12m、短軸1.02mの楕円形で、確認面からの深さは1.44mである。底面は平坦で、壁は底面から中央にかけて外側に膨らみ、そのまま垂直に立ち上がる。【埋土】1～3、5、7層は偽礫(Ⅱ層・Ⅲ層土塊・白色粘土塊)・炭化物・焼土を含むⅢ層主体の埋土である。4層は炭化物の薄層である。5層には拳大～人頭大の礫を多く含む。6層は灰黄褐色シルトを主体としており、井戸底の集水部における井戸使用時の堆積土と考えられる。7層は灰褐色シルトで、井戸枠の裏込めと考えられる。【出土遺物】なし。

【所見】埋土に薄い炭化物層が見られる状況が他の中世の井戸跡(SE85・SE161・SE401)と類似するため中世の遺構と考えられるが、詳細な時期は不明である。埋土の特徴から炭化物層を境に上下に2段階に分けて埋められた遺構と考えられる。井戸枠材は見つかっていないが、井戸枠の裏込め土と想定される土層が確認されていることから井戸枠材が抜き取られたと考えられる。

SE161(第17図、図版6)

【位置】LO・LP39区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面でⅡ層主体土の広がりとして確認、精査により井戸跡と判断した。【重複】なし。【規模・形態】平面形は長軸1.48m、短軸1.28mの楕円形で、確認面からの深さは2.02mである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。【埋土】10～12層は湧水の影響によるグライ化が著しく由来土は不明である。12層は褐色シルトを主体としており混入物の少なさから、使用時の堆積と推定される。4～9層は偽礫(Ⅱ層土塊)・炭化物・焼土を含むⅢ層主体土の人为埋土、1～3層は偽礫(Ⅱ層土塊)・炭化物・焼土を含むⅡ層主体土の人为埋土と推定される。5層には薄い炭化物層が堆積し、2～7層は薄層が連続して堆積するため崩落土の可能性がある。

【出土遺物】珠洲系陶器破片が埋土から2点(1点は18g、もう1点は接合して68.3g)、3層から1点(133.4g、第37図42)出土した。埋土出土の1点は、SE87井戸跡4層出土個体と接合した(第37図39)。青磁破片が1層から1点(11.4g、第37図41)、砥石が3層から1点(122.4g、第41図76)、剥片が2層から1点(10.9g)出土、鉄製品は轆が1層から1点(71.1g、第46図102)、鉄釘が3層から1点(15.0g)が出土したほか、鉄滓が2～3層から3点(26.1g)が出土した。木製品は、10層から曲物側板1点、箸1点、加工材23点、樹皮材1点、自然木数点、埋土から井戸枠材1点出土した。これらは、井戸廃絶時の埋め戻し土に含まれる遺物と考えられる。また、11層から大形植物纖維束が出土した。素材は單子葉類の葉が重なり、枝や板材が斜めに突き刺さり植物纖維束を固定していた。草壁などの建築部材を転用した井戸の浄水装置の可能性が考えられる(図版6～4)。また、大形植物纖維束の中には、糞殻やアサ、スマモ等の種子が混入していた(第4章第2節)。

【所見】出土陶器から時期は13世紀前半と考えられる。他の井戸跡(SE87)の珠洲系陶器と本遺構出土の珠洲系陶器が接合しており、本遺構を含む複数の井戸の廃絶が同時に行われたと推測される。

SE243(第18図、図版6・7)

【位置】LL・LM31区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で灰黄褐色土の広がりとして確認、精査により井戸跡と判断した。【重複】なし。【規模・形態】平面形は長軸0.98m、短軸0.96mの円形で、確認面からの深さは1.74mである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。【埋土】2～6層は偽礫(Ⅲ層・Ⅳ層土塊)・炭化物を含むⅢ層主体の人为埋土である。1層は偽礫(Ⅲ層土塊)・炭化物を含むⅡ層主体の人为埋土である。7層は黒褐色シルトを主体としており、混入物が少なく井戸底の集水部における井戸使用時の堆積と考えられる。【出土遺物】1層から鉄滓1点(23.6g、図版30-131)、不明鉄製品3点(13.1g、第46図103)が出土した。木製品は6層から曲物底板1点(第44図92)、曲物側板7点、折敷2点(第44図90・91)、燃えさし1点(第44図93)、加工材2点、井戸枠のホゾを有する末端部分や板状に平坦加工された井戸枠材3点、自然木3点、埋土から箸2点が出土した。井戸枠材は原位置を留めておらず、井戸枠の構造は推定できなかった。

【所見】時期を特定できる遺物は出土していないが、6層出土井戸枠材の放射性炭素年代測定では、15世紀前葉～中葉の暦年較正結果が出ており、同時期に帰属する遺構と考えられる。井戸枠材は原位置を留めておらず、井戸廃絶時に抜き取られたものの可能性がある。

SE289(第18図、図版7)

【位置】LP44、LQ43・44区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で灰黄褐色土の広がりとして確認、精査により井戸跡と判断した。【重複】なし。【規模・形態】平面形は長軸1.38m、短軸1.22mの楕円形で、確認面からの深さは1.33mである。底面は丸く中央がやや陥り、壁は底面から中央にかけて垂直に立ち上がり、中央から確認面にかけて外側に広がるように立ち上がる。【埋土】2・4層は偽礫(Ⅱ層土塊)・炭化物を含むⅢ層主体土の人為埋土である。1・3層は偽礫(Ⅱ層土塊)・炭化物を含むⅡ層主体土の人為埋土である。5層は暗褐色シルトを主体としており、混入物が少なく井戸底の集水部における井戸使用時の堆積と考えられる。2・3層にかけて拳大～人頭大の礫の廃棄が見られる。これらは井戸廃絶時の人為埋土に含まれる遺物と考えられる。【出土遺物】珠洲系陶器が2層から3点(403.6g、第38図43～45)出土した。ST392火葬墓5層出土個体と接合する珠洲編年V期の擂鉢を含む(第38図45)。石製品は2層から珪藻質泥岩製の線刻礫、安山岩製の有孔石製品を含む3点(1,769.5g、第41図77～79)が出土した。

【所見】出土陶器から15世紀前半に帰属すると考えられる。井戸廃絶時に陶器、線刻礫、有孔石製品及び拳大～人頭大の礫を遺棄したと推定される。

SE292(第18図、図版7)

【位置】LO・LP42区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で灰黄褐色土の広がりとして確認、精査により井戸跡と判断した。【重複】なし。【規模・形態】平面形は長軸1.74m、短軸1.64mの不整円形で、確認面からの深さは1.79mである。底面は平坦で、壁は底面から確認面にかけて外側に広がるように立ち上がる。【埋土】1～5層は偽礫(Ⅱ層・Ⅳ層土塊)・炭化物・焼土を含む灰黄褐色土の人為埋土である。6層は暗褐色シルトを主体としており、混入物が少なく井戸底の集水部における井戸使用時の堆積と考えられる。【出土遺物】珠洲系陶器は1～3層から珠洲編年V期の擂鉢(第38図47)を含む4点(83.9g)、青磁は1層から1点(6.2g、第38図46)、須恵器は2層から1点(26.5g、第38図48)、砂岩製の不明石製品は4層から1点(25.7g、第41図80)が出土した。木製品は、6層から曲物側板1点が出土した。これらは井戸廃絶時の埋め戻し土に含まれる遺物と考えられる。また、本遺構の土壤サンプルからモモ、アサ、ヒエ、イネ、アワ等の種子が出土した(第4章第2節)。

【所見】出土陶器から15世紀前半に帰属すると考えられる。

SE324(第19図、図版7)

【位置】LT42・MA41・42区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面でぶい黄褐色土の広がりとして確認、精査により井戸跡と判断した。【重複】確認調査の2トレンチに削平されている。【規模・形態】確認調査時に南側上位が大きく削平されている。現状からは、長軸(2.17)m、短軸1.43mの楕円形平面と推定される。確認面からの深さは2.12mである。底面は平坦で、壁は底面から確認面にかけて外側に

広がるように立ち上がる。【埋土】5～7層は湧水の影響によるグライ化のため由来土不明だが、偽礫(Ⅲ層土塊)・炭化物が含まれることから人為埋土と推定される。3～4層は偽礫(Ⅲ・Ⅳ層土塊)・炭化物を含むⅢ層主体の人為埋土で、1～2層は偽礫(Ⅲ・Ⅳ層土塊)・炭化物を含むⅡ層主体の人為埋土である。【出土遺物】珠洲系陶器破片が1・4層から5点(279.1g、第38図49・50・51)が出土した。また、4層から出土した珠洲系陶器1点は、SU54土器溜まり1・2層出土個体、SE85井戸跡3層出土個体と接合し(第40図68)、1・4層から出土した珠洲系陶器2点は、SE65井戸跡2・3層出土個体と接合した(第35図26、第36図31)。木製品は、5層から曲物側板3点、加工材1点、板状に平坦加工された井戸枠材4点、伐採痕のある自然木2点、6・7層から樹皮材2点が出土した。本遺構の6層の土壤サンプルからアサ、モモの種子が出土した。井戸枠材は原位置を留めておらず、井戸枠の構造は推定できなかった。

【所見】出土陶器から13世紀前半に帰属すると考えられる。5層から出土した井戸枠材は、廃絶時に抜き取られたものの可能性がある。他の井戸跡(SE65・SE85)及び土器溜まり(SU54)出土の珠洲系陶器と本遺構出土の珠洲系陶器が接合しており、本遺構を含む複数の井戸の廃絶が同時に行われたと推測される。

SE334(第19図、図版7)

【位置】LQ35区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面でにぶい黄褐色土の広がりとして確認、精査により井戸跡と判断した。【重複】SO333、SKP376・385に切られている。【規模・形態】平面形は長軸2.46m、短軸1.84mの梢円形で、確認面からの深さは1.76mである。底面は平坦で、壁は底面から確認面にかけて外側に広がるように立ち上がる。【埋土】8～10層はⅣ層を主体とする埋土で、11層は湧水が見られる。4～7層は偽礫(Ⅳ層土塊)・炭化物を含むⅢ層主体土を埋土とし、1～3層は偽礫(Ⅲ・Ⅳ層土塊)・炭化物を含むⅡ層主体の人為埋土である。【出土遺物】14世紀末～15世紀前葉と推定される青磁が2層から1点(12.1g、第38図52)出土した。埋土と3層から剥片2点(59.2g)が出土した。木製品は7層から曲物底板1点(第45図94)、加工木1点、10層から曲物側板2点、節抜竹3点、板状に平坦加工された井戸枠材1点、自然木3点、加工木1点(第45図95)が出土した。本遺構の土壤サンプルからモモ等の種子が出土している(第4章第2節)。井戸枠材は原位置を留めておらず、井戸枠の構造は推定できなかった。

【所見】井戸枠材が覆土中から出土したため、井戸枠が井戸廃絶時に抜き取られた可能性がある。2層出土磁器は14世紀末～15世紀前半頃であり、7層出土曲物底板の放射性炭素年代測定では、13世紀後葉～14世紀初頭もしくは14世紀後半の曆年較正結果となっている。これらを勘案すると、帰属時期は14世紀末と推定される。10層出土の節抜竹は井戸廃絶儀礼に用いられた可能性がある。

SE335(第19図、図版7)

【位置】LP36区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面でにぶい黄褐色土の広がりとして確認、精査により井戸跡と判断した。【重複】3トレンチに削平されている。【規模・形態】東端側は確認調査の3トレンチによって削平されている。本来形状は不明だが、現状から平面形は長軸0.84m、短軸(0.70)mの梢円形と推定される。確認面からの深さは1.96mである。底面は平坦で、壁は底面から確認面にか

けてほぼ垂直に立ち上がる。【埋土】3～9層は偽礫(Ⅲ層土塊・白色粘土塊)・炭化物を含むⅢ層主体土の埋土で、1～2層は偽礫(Ⅲ層土塊)・炭化物を含むⅡ層主体の人为埋土である。

【出土遺物】珠洲編年IV期の珠洲系陶器が7層から1点(1,105.1g、第38図53)が出土した。9層からは曲物側板1点が出土した。本遺構の9層の土壤サンプルからアサの種子が出土している(第4章第2節)。

【所見】出土陶器から14世紀に帰属すると考えられる。

SE339(第20図、図版8)

【位置】LP32区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で灰黄褐色土の広がりとして確認、精査により井戸跡と判断した。【重複】8トレンチに削平されている。【規模・形態】確認調査トレンチによって削平されているため、本来形状は不明だが、現状の平面形は長軸1.30m、短軸(1.06)mの楕円形で、確認面からの深さは1.86mである。底面は平坦で、壁は底面から確認面にかけてほぼ垂直に立ち上がる。

【埋土】底面直上に堆積する23層は褐灰色シルトを主体とし、混入物は少なく、井戸底の集水部における井戸使用時の堆積と考えられる。20層は偽礫(青灰色粘土塊)・炭化物を含む灰黄褐色土の人为埋土で、18、19、21、22層は偽礫(Ⅲ層土塊・白色粘土塊)・炭化物を含むⅣ層主体土の人为埋土である。22、23層は湧水が見られる。12、13、17層は褐灰色土の人为埋土、14、16層は偽礫(Ⅳ層土塊・白色粘土塊)・炭化物を含む灰黄褐色土の人为埋土、4～11、15層は偽礫(Ⅱ・Ⅲ層土塊・白色粘土塊)・炭化物を含むⅢ層主体土の人为埋土である。1～3層は偽礫(Ⅱ・Ⅲ層土塊)・炭化物・焼土を含むⅡ層主体の人为埋土である。【出土遺物】木製品は21層から自然木数点、23層から建築部材かと考えられる不明木製品1点(第45図96)、加工材1点が出土した。本遺構の土壤サンプルからヤナギタデとエゴマの種子が出土している。

【所見】時期を特定できる遺物は出土していないが、23層出土不明木製品の放射性炭素年代測定では、14世紀前葉～中葉もしくは14世紀後葉～15世紀前葉の暦年較正結果が示されており、中世の遺構と考えられる。

SE395(第20図、図版8)

【位置】MA42区に位置する。【確認状況】Ⅳ層上面で灰黄褐色土の広がりとして確認、精査により井戸跡と判断した。【重複】なし。【規模・形態】平面形は長軸1.92m、短軸1.47mの南側が張り出す不整楕円形で、確認面からの深さは1.66mである。底面は丸く中央がやや窪み、壁は底面から中央にかけて垂直に立ち上がり、中央から確認面にかけて外側に広がるように立ち上がる。【埋土】

底面直上に堆積する6層は褐灰色シルトを主体とし、混入物は少なく、井戸底の集水部における井戸使用時の堆積と考えられる。5層は偽礫(Ⅳ層土塊・白色粘土塊)を含む灰黄褐色土、3・4層は偽礫(Ⅲ・Ⅳ層土塊・青灰色粘土塊)を含む暗褐色・褐灰色土、3層はⅢ層主体土、1～2層は灰黄褐色土の人为埋土である。【出土遺物】1・3層から珠洲系陶器破片3点が出土した(25.2g、第38図54)。また、3層から出土した珠洲系陶器破片1点はSE65井戸跡3層出土個体と接合する(211.0g、第36図29)。木製品は5層から曲物底板3点、曲物側板1点、加工材5点以上、自然木1点、6層から曲物側板2点、加工材5点以上、箸1点が出土した。

【所見】出土陶器から13世紀前半に帰属すると考えられる。他の井戸跡(SE65)出土の珠洲系陶器と本

遺構出土の珠洲系陶器が接合しており、本遺構を含む複数の井戸の廃絶が同時に行われたと推測される。

SE401(第20図、図版8)

【位置】LO41・42区に位置する。【確認状況】IV層上面でぶい黄褐色土の広がりとして確認、精査により井戸跡と判断した。【重複】なし。【規模・形態】平面形は長軸1.80m、短軸1.46mの楕円形で、確認面からの深さは1.64mである。底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がる。【埋土】1～7層は偽礫(Ⅲ層・IV・VI層土塊)・炭化物・焼土を含むぶい黄褐色土の人為埋土で、8・10層は偽礫(VI層土塊)・炭化物・焼土を含むⅢ層由来の人為埋土と考えられる。うち3・6・9・11層は炭化物の薄層である。これらの炭化物の薄層を境として、井戸は4段階に分けて埋められたと考えられる。12層は褐色を呈する粘土質シルトであり、井戸使用時の堆積土と推定される。【出土遺物】2・4層から珠洲系陶器6点(161.0g、第39図55・56)、10層から青磁1点(2.3g)、2層から白磁1点(5.3g、第39図57)、1層からかわらけ様の白色土師質土器1点(1.7g)、2層から砥石1点(5.2g)、10層から轡石?1点(3.6g)、7層から鉄釘1点(28.4g、第46図104)、11層から曲物側板2点、箸2点、10層から曲物底板1点、井戸枠の横桟と思しき部材の破片1点、炭化材1点、11層から曲物側板2点、箸2点が出土した。その他に加工材の破片が10～11層から9点出土しているが原形は不明である。本遺構の土壤サンプルの12・13層からアサ、イネ、ナス、ヒエ、アワ等の種子が出土した(第4章第2節)。

【所見】4層出土の珠洲系陶器擂鉢(第39図55)から、時期は15世紀前半と推定される。10層出土加工材の放射性炭素年代測定では、13世紀末葉～14世紀末葉の曆年較正の結果が出ており(第4章第1節)、遺物による時期より古いが、その理由は不明である。2層出土の白磁小片の推定時期は12世紀後半と古いが、井戸廃絶時に意図的に遺棄された伝世品あるいは混入と考えられる。10層中から出土した部材は、井戸枠の可能性があるが、原位置は留めていなかった。井戸の廃絶時に抜き取られ廃棄された可能性がある。

6 カマド状遺構

SO53(第21図、図版8)

【位置】LT40・41区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で焼土・炭化物の広がりを確認し、精査によりカマド状遺構と判断した。【重複】なし。【規模・形態】全長2.04m、最大幅0.92m、確認面からの深さは0.28mである。底面は燃焼部で最大深をとり、煙道部及び焚口部へ向かって緩やかに立ち上がる。焚口部は平坦であり、末端の立ち上がりは急である。煙道の向きはN-69°-Wである。上部を削平されており、地下式・半地下式の区別は不明である。【埋土】1・2層はⅡ層由来の灰黄褐色シルト及びぶい黄褐色シルトを主体に焼土・炭化物が混入しており、埋め戻し土と考えられる。3・4層は焼土を主体とする天井崩落土、5層は使用時に堆積した炭化物及び灰の層である。【出土遺物】埋土からモモ炭化核が1点出土した。

【所見】使用時の燃料材と考えられる5層出土炭化材の放射性炭素年代測定の曆年較正結果から(第4章第1節)、13世紀後葉の遺構と推定される。

SO55(第21図、図版8)

【位置】LS39・40区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で焼土・炭化物の広がりを確認し、精査によりカマド状遺構と判断した。【重複】SO56カマド状遺構を切る。現代の水道管に搅乱されている。【規模・形態】焚口部の末端が搅乱されているが、全長2.42m以上、最大幅1.34m、確認面からの深さは0.28mである。底面は燃焼部(掛口付近)で最大深をとり、煙道部及び焚口部へ向かって緩やかに立ち上がる。焚口部底面は平坦であり、立ち上がりは搅乱により不明である。煙道の向きはN-64°-Wである。上部を削平されており、地下式・半地下式の区別は不明である。【埋土】7層に分けた。1層はⅢ層由来の褐色シルトを主体にⅢ層土塊が混入しており、埋め戻し土と考えられる。2・3層は焼土を主体とする天井崩落土で、4～7層は使用時に堆積した灰混じりシルトや炭化物・灰の層である。【出土遺物】5層から珠洲系陶器破片が1点(0.6g)出土したほか、同層からオオムギの種子が出土している。

【所見】使用時の燃料材と考えられる5層出土炭化材の放射性炭素年代測定では、13世紀後葉～14世紀初頭あるいは14世紀後葉の暦年較正結果となっている(第4章第1節)。本遺構の煙道はほぼ西に向くことから帰属時期は概ね13世紀代と考えられ(本節第1項)、放射性炭素年代測定の結果も勘案すると、13世紀後葉～14世紀初頭の帰属と推定される。

SO56(第21図、図版8)

【位置】LS39区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で焼土・炭化物の広がりを確認し、精査によりカマド状遺構と判断した。【重複】SO55カマド状遺構及び現代の水道管搅乱に切られる。【規模・形態】SO55に焚口部の大半を切られるため規模は不明だが、煙道部・燃焼部の規模及び形状はSO55とほぼ同様である。確認面からの深さは0.27mである。底面は燃焼部で最大深をとり、煙道部及び焚口部に向かって緩やかに立ち上がる。煙道の向きはS-59°-Wである。上部を削平されており、地下式・半地下式の区別は不明である。【埋土】1層はⅢ層由来の褐色シルトで、混入物が少なく、遺構廃絶後の自然流入土と考えられる。2・3層は焼土を主体とする天井崩落土である。4層はⅢ層由来のにぶい黄褐色シルトを主体としており、埋め戻し土と見られる。5・6層は使用時に堆積した灰混じりシルト及び炭化物の層である。【出土遺物】4層から珠洲系陶器破片が1点(1.0g)出土している。

【所見】SO55より古いが、煙道部・燃焼部の規模及び形状がSO55に似るため、その直前の同時期と考えられる。SO55の時期より、13世紀後葉～14世紀初頭の遺構と推定される。

SO59(第21図、図版9)

【位置】LS40区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で焼土・炭化物の広がりを確認し、精査によりカマド状遺構と判断した。【重複】現代の耕作痕と思しき搅乱及び現代の水道管搅乱に壊される。【規模・形態】煙道部分を搅乱に削平されるが、全長3m程度と推定される。最大幅0.92m、確認面からの深さは0.28mである。底面は燃焼部(掛口付近)で最大深をとり、煙道部へ向かって緩やかに立ち上がる。燃焼部～焚口部底面はほぼ平坦である。焚口部末端は緩やかに立ち上がり、煙道の向きはN-48°-Wである。遺構は地面を掘り抜いた地下式の形態である。【埋土】1層はⅢ層由来の褐色シルトを主体に焼土塊が少量混入しており、人為的な埋め戻しと考えられる。2層は焼土を主体とする天井崩落土である。3～6層は使用時に堆積した灰を主体とする層である。7・8層は崩落した燃焼部の天井部

分である。【出土遺物】なし。

【所見】出土遺物がなく詳細な時期は不明だが、煙道が西方向を向くことから帰属時期は概ね13世紀代と考えられる(本節第1項)。同時期と考えられるSO53・55・56カマド状遺構も近在している。

SO60(第22図、図版9)

【位置】LP・LQ42区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で焼土・炭化物の広がりを確認し、精査によりカマド状遺構と判断した。【重複】なし。【規模・形態】全長254m、最大幅1.00m、確認面からの深さは0.20mである。焚口部から燃焼部の底面は平坦で、煙道部に向かって緩やかに立ち上がる。遺構の立ち上がりは緩やかである。煙道の向きはN-31°-Eである。貼床が伴う。上部を削平されており、地下式・半地下式の区別は不明である。【埋土】1・3層は灰混じりシルト層で、燃焼による堆積土と考えられる。2層は5層貼床に類似し、焼土塊を多量に含む。操業中の焼き出し土、ないしは新しい時期の貼床と考えられる。4層は使用時に堆積した炭化物層で、5層は焼土塊を床材に用いた貼床と考えられる。【出土遺物】5層直上から磁器破片1点(0.6g)、1層から鉄滓1点(13.7g)が出土した。磁器は染付と見られるが、小片のため時期・産地を特定できなかった。

【所見】使用時の燃料材と考えられる4層出土炭化材の放射性炭素年代測定では、15世紀前葉～中葉の曆年較正結果となっており(第4章第1節)、同時期を本遺構の帰属時期と判断する。

SO84(第22図)

【位置】MA39区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で焼土及び灰黄褐色土の広がりを確認し、精査によりカマド状遺構と判断した。【重複】なし。【規模・形態】北東-南西0.84m、北西-南東0.44mの範囲に焼土・炭化物を含む灰混じりシルトが分布する。南側のごく一部に被熱範囲も存在する。確認面からの深さは0.08mとごく浅い。【埋土】焼土・炭化物を少量含む灰混じりシルトであり、使用時の堆積土と考えられる。【出土遺物】なし。

【所見】上部を大きく削平されたカマド状遺構と推定される。

SO89(第22図、図版9)

【位置】LR38区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で焼土・炭化物の広がりを確認し、精査によりカマド状遺構と判断した。【重複】なし。【規模・形態】全長1.00m、最大幅0.68m、確認面からの深さは0.12mである。底面は丸底で緩やかに立ち上がる。上部を削平されたカマド状遺構と考えられ、被熱面の状況から煙道の向きはN-19°-Eと推測される。地下式・半地下式の区別は不明である。【埋土】1層はⅡ層由来の褐色シルトを主体に焼土塊が少量混入しており、埋め戻し土と考えられる。2層は焼土を主体とする天井崩落土である。3層は使用時に堆積した灰・炭化物の層である。【出土遺物】なし。【所見】使用時の燃料材と考えられる3層出土炭化材の放射性炭素年代測定では、15世紀前葉の曆年較正結果となっており(第4章第1節)、同時期を本遺構の帰属時期と判断する。

SO111(第22図、図版10)

【位置】LO30区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で焼土・炭化物の広がりを確認し、精査によりカ

マド状遺構と判断した。【重複】南端を搅乱により削平される。【規模・形態】確認できた範囲では全長1.74m、最大幅0.74m、確認面からの深さ0.33mである。検出範囲は燃焼部及び焚口部の一部が主体であり、煙道先端部は削平されている。焚口部は調査区外へと続く。底面はほぼ平坦で燃焼部から緩やかに立ち上がる。煙道の向きはN-20°-Eである。遺存状態が悪く、形態は不明な点が多いが、天井崩落土に被熱した大径の粘土塊が含まれることから、煙道部～燃焼部の上部を粘土等で構築した半地下式の形態であった可能性が高い。【埋土】1層はⅢ層由来の褐色シルトを主体に焼土・炭化物が混入しており、埋め戻し土と考えられる。2層は特大径の焼土塊が混入する褐色シルトであり、天井崩落土と考えられる。3・4層は使用時に堆積した灰混じりシルト及び炭化物の層である。5層は燃焼部の天井部分と考えられる。【出土遺物】なし。

【所見】使用時の燃料材と考えられる4層出土炭化材の放射性炭素年代測定では、概ね14世紀代の曆年較正結果となっており(第4章第1節)、同時期を本遺構の帰属時期と判断する。

SO309(第22図、図版10)

【位置】LO37・38、LP37・38区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で焼土・炭化物の広がりを確認し、精査によりカマド状遺構と判断した。【重複】SKP396に切られる。【規模・形態】平面形は長軸3.25m、短軸1.24mの不整な長楕円形。確認面からの深さは0.14m。底面はほぼ平坦で焚口部から燃焼部へ緩やかに傾斜し、燃焼部はやや窪んでいる。燃焼部の上部は削平されている。煙道の向きは不明である。遺存状態が悪く、形態は不明な点が多いが、天井崩落土に被熱した大径の粘土塊が含まれることから、煙道部～燃焼部の上部を粘土等で構築した半地下式の形態であった可能性が高い。【埋土】1層は大径のVI層土塊が混入するにぶい黄橙色シルトであり、2層は焼土塊が中量混入する灰褐色シルトである。両層とも天井崩落土と推定される。3層は炭化物・焼土等が少量混入する灰混じりシルトであり、炭化物が底面に薄く層状に堆積している。焚口部の埋土であり、使用時の燃料材・灰等から成る掻き出し土と考えられる。4・5層は灰・炭化物等を主体としており、煙道部及び燃焼部の使用時の堆積土である。6層は3層に似た灰混じりシルトであり、古い段階の掻き出し土と考えられる。【出土遺物】なし。

【所見】使用時の燃料材と考えられる3層出土炭化材の放射性炭素年代測定では、概ね14世紀の曆年較正結果となっており(第4章第1節)、同時期を本遺構の帰属時期と判断する。

SO319(第23図、図版10)

【位置】MA35区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で焼土・炭化物の広がりを確認し、精査によりカマド状遺構と判断した。【重複】なし。【規模・形態】西側は調査区外となり全体の規模は不明だが、確認できた範囲では全長0.69m、最大幅0.72m、確認面からの深さは0.17mである。検出範囲は燃焼部及び焚口部の一部である。調査区外と接する燃焼部西端で最大深をとり、焚口部に向かって緩やかに立ち上がる。被熱面の状況から煙道の向きは概ね西方方向と推定される。上部を削平されており、地下式・半地下式の区別は不明である。【埋土】1層はⅡ層由来の褐色シルトを主体にⅢ層土塊・炭化物・焼土が少量混入しており、埋め戻し土と考えられる。2層は焼土を主体とする天井崩落土である。3・4層は燃焼により堆積した灰・炭化物の層である。【出土遺物】なし。

【所見】煙道が西方向を向くと推定されることから、帰属時期は概ね13世紀代の可能性がある(本節第1項)。

SO321(第23図)

【位置】LR41区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で焼土・炭化物の広がりを確認し、精査によりカマド状遺構と判断した。【重複】なし。【規模・形態】長軸0.62m、短軸0.48mの楕円形で、確認面からの深さは0.06mである。底面は丸底で緩やか立ち上がる。上部を大きく削平されたカマド状遺構の燃焼部と推定される。残存する平面形から推定される主軸は概ね北東-南西方向である。地下式・半地下式の区別は不明である。【埋土】1層はⅡ層由来のにぶい黄褐色シルトを主体にⅢ層土塊・焼土が中量混入しており、埋め戻し土または天井崩落土と考えられる。2層は使用時に堆積した炭化物層と考えられる。【出土遺物】なし。

【所見】上部を削平され本来の平面形は不明であるが、煙道が燃焼部主軸線上(北東-南西方向)を向くと仮定すれば、SO56カマド状遺構と煙道の向きがほぼ同一となる可能性があり、同遺構の推定時期である13世紀後葉～14世紀初頭に帰属する可能性も想定できる。

SO322(第23図)

【位置】LS38区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で焼土・炭化物の広がりを確認し、精査によりカマド状遺構と判断した。【重複】なし。【規模・形態】平面形は長軸0.42m、短軸0.32mの楕円形で、確認面からの深さは0.12mである。底面は丸底で、緩やかに立ち上がる。上部を大きく削平されたカマド状遺構の燃焼部と推定される。残存する平面形から推定される主軸は概ね南北方向である。地下式・半地下式の区別は不明である。【埋土】灰混じりシルトを主体としており、使用時の堆積土と考えられる。【出土遺物】なし。

【所見】上部を削平され本来の平面形は不明であるが、煙道が燃焼部主軸線上(南北方向)を向くと仮定すれば、14世紀～15世紀に帰属する可能性がある(本節第1項)。

SO333(第23図、図版10)

【位置】LQ35区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で焼土・炭化物の広がりを確認した。遺構中央部の埋土が確認できなかったため、当初燃焼部と焚口部を別個の遺構として精査したが、精査終了後、埋土の特徴が同じことから同一の遺構と判断した。【重複】SE334井戸跡を切る。SKP376柱穴様ピットに切られる。また、煙道部を7トレンチにより削平される。【規模・形態】全長2.5m以上、最大幅1.55m、確認面からの深さは0.24mである。燃焼部で最大深をとり、焚口部に向かって一度立ち上がり、焚口の末端にかけて再度深くなる。壁の立ち上がりは緩やかである。煙道はトレンチに削平されているが、残存している遺構の主軸方位から真南を向くと推定される。Ⅲ層土主体の貼床が遺構全体に存在していたと推定されるが、遺構中央部では掘り込みが浅いためか堆積状況を確認できなかった。また、焚口部においては、下位のSE334井戸跡の埋土と混同したため、貼床部分の堆積状況を記録することができなかつたが、記録写真から貼床の範囲を復元し、断面図上に破線で示した。【埋土】1層はⅡ層由来のにぶい黄褐色シルトであり、Ⅲ層土塊が少量、炭化物・焼土が微量に混入しており、埋

め戻し土と考えられる。2層は焼土主体の天井崩落土である。3・4層は灰及び炭化物等から成る層で、使用時の堆積土と考えられる。5層はⅢ層土主体の貼床である。【出土遺物】鉄滓が確認面から1点、5層から2点の計3点(13.4g)出土した。

【所見】使用時の燃料材と考えられる4層出土炭化材の放射性炭素年代測定では、概ね14世紀前半または14世紀末～15世紀前葉の曆年較正結果となっている(第4章第1節)。本遺構に切られるSE334井戸跡は14世紀末と推定されることから、本遺構の帰属時期は14世紀末～15世紀前葉と推定される。

SO394(第23図)

【位置】LP36区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で焼土の広がりを確認し、精査によりカマド状遺構と判断した。【重複】遺構の大部分が3トレンチ及び搅乱に削平される。【規模・形態】トレンチ・搅乱に削平され規模は不明である。確認面からの深さは0.08mである。【埋土】1層は灰混じりシルトであり、使用時の堆積土と考えられる。2層は青灰色の粘土塊を主体とするシルトであり、貼床の可能性がある。【出土遺物】なし。

【所見】遺構の大部分を欠失しており不明な点が多いが、焼土範囲および埋土の特徴からカマド状遺構と推定される。

7 墓

(1) 土坑墓

ST244(第24図、図版11)

【位置】MA39区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で灰黄褐色土の広がりを確認し、精査により土坑墓と判断した。【重複】なし。【規模・形態】平面形は長軸1.08m、短軸0.86mの隅丸方形で、確認面からの深さは0.19mである。底面は丸底気味で、南西部の壁は急に、他は緩やかに立ち上がる。南側がやや深い。調査区南東部に分布する土坑墓と形態が類似する。主軸方位はN-7°-Eである。【埋土】1・2層ともⅡ層由来土を主体にⅢ層土塊等が混入しており、埋め戻し土と考えられる。底面付近はグライ化している。【出土遺物】なし。

【所見】土坑形態及び埋土の推定成因から土坑墓と推定される。調査区南東部の土坑墓同様、15世紀前半に属する可能性が高いが、調査区中央南西寄りに単独立地しており、被葬者の性格等が調査区南東部に分布する土坑墓と相違する可能性も考えられる。

ST327(第24図、図版11)

【位置】LP35区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面でぶい黄褐色土の広がりを確認し、精査により土坑墓と判断した。【重複】なし。【規模・形態】平面形は長軸1.47m、短軸1.23mの楕円形で、確認面からの深さは0.46mである。底面は平坦であり、壁の立ち上がりは急である。主軸方位はN-77°-Wである。【埋土】いずれの層もⅡ層由来土を主体にⅢ・Ⅳ・Ⅵ層土塊等が混入しており埋め戻し土と考えられる。2・5層はグライ化している。【出土遺物】なし。

【所見】土坑形態と埋土の推定成因及び調査区南東部の墓域に分布することから15世紀前半の土坑墓

と推定される(本節第1項)。

ST328(第24図、図版11)

【位置】LP・LQ35区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面でぶい黄褐色土の広がりを確認し、精査により土坑墓と判断した。【重複】なし。【規模・形態】平面形は直径1.07mの円形で、確認面からの深さは0.28mである。底面はほぼ平坦であり、壁の立ち上がりは急である。【埋土】いずれの層もⅡ層またはⅢ層由来土を主体にⅢ・Ⅳ層土等が混入しており、埋め戻し土と考えられる。【出土遺物】なし。【所見】土坑形態と埋土の推定成因及び調査区南東部の墓域に分布することから15世紀前半の土坑墓と推定される(本節第1項)。

ST330(第24図、図版11)

【位置】LQ35・36区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で灰黄褐色土の広がりを確認し、精査により土坑墓と判断した。【重複】なし。【規模・形態】平面形は長軸1.12m、短軸0.98mの楕円形で、確認面からの深さは0.28mである。底面はやや凹凸が見られ、壁の立ち上がりは急である。西側がやや深い。主軸方位はN-75°-Wである。【埋土】1・2層ともⅡ層由来土を主体に炭化物・焼土、Ⅲ層土塊等が混入しており、埋め戻し土と考えられる。2層には拳大の礫が少量混入する。【出土遺物】なし。【所見】土坑形態と埋土の推定成因及び調査区南東部の墓域に分布することから15世紀前半の土坑墓と推定される(本節第1項)。

ST336(第25図、図版12)

【位置】LP34・35区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で灰黄褐色土の広がりを確認し、精査により土坑墓と判断した。【重複】ST337B・338B土坑墓に切られる。また、北端を7トレンチに削平される。【規模・形態】平面形は残存値で長軸1.92m、短軸1.26mの楕円形で、確認面からの深さは0.55mである。底面は平坦で、壁は丸みを持って立ち上がり、外傾して開口部へ至る。主軸方位はN-24°-Wである。【埋土】1～2・4層はⅣ層主体土の埋土、3層はⅢ層主体土の埋土である。【出土遺物】なし。【所見】土坑形態と埋土の推定成因及び調査区南東部の墓域に分布することから15世紀前半の土坑墓と推定される(本節第1項)。

ST337A(第25図、図版12)

【位置】LO34・35、LP34・35区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で明黄褐色土の広がりを確認し、精査により土坑墓と判断した。【重複】ST337B・338C土坑墓を切る。東側を3トレンチに削平される。【規模・形態】平面形はトレンチによる削平のため不明な点はあるが、残存部分で長軸1.78m、短軸不明の楕円形である。確認面からの深さは0.59mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。主軸方位はN-39°-Wである。【埋土】いずれの層もⅡ層またはⅢ層由来土を主体にⅢ層土塊等が混入しており、埋め戻し土と考えられる。【出土遺物】1層から珠洲系陶器破片1点(15g)が出土した。小片のため時期・産地等は不明である。小片であり、埋土上層からの出土のため、副葬品ではなく混入と考えられる。

【所見】土坑形態と埋土の推定成因及び調査区南東部の墓域に分布することから15世紀前半の土坑墓と推定される(本節第1項)。

ST337B(第25図、図版12)

【位置】LP34・35区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面でぶい黄褐色土の広がりを確認し、精査により土坑墓と判断した。【重複】ST337A・338B土坑墓に切られ、ST336・ST338C土坑墓を切る。【規模・形態】遺構重複により平面形は不明な点があるが、残存値で長軸1.90m、短軸1.72mの楕円形で、確認面からの深さは0.36mである。底面は平坦で、西側の壁は急に、東側は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-9°-Wである。【埋土】1・2層はⅡ層由来土を主体とし、Ⅲ層土塊等が混入しており、埋め戻し土と考えられる。3層はグライ化した2層である。【出土遺物】1層から青磁破片1点(31.2g、第39図58)が出土した。無文の端反碗で、14世紀中葉～15世紀前半と推定される。付近の遺構外出土(LP34Ⅲ層)の破片と接合するが、同破片は後世の削平により本遺構内から移動したものと考えられる。青磁は破片だが副葬品の可能性がある。

【所見】土坑形態と埋土の推定成因及び調査区南東部の墓域に分布することから15世紀前半の土坑墓と推定される(本節第1項)。出土した青磁碗の推定時期とも調和的である。

ST338A(第25図、図版12)

【位置】LP35区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面でぶい黄褐色土の広がりを確認し、精査により土坑墓と判断した。【重複】ST338B土坑墓を切る。遺構の大半が3・7トレンチに削平される。【規模・形態】平面形はトレンチによる削平のため不明だが、残存部分及び周辺遺構から円形または楕円形と推定される。確認面からの深さは0.20mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。【埋土】Ⅱ層由来土を主体にⅢ層土塊等が混入しており、埋め戻し土と考えられる。【出土遺物】なし。

【所見】埋土の推定成因及び調査区南東部の墓域に分布することから15世紀前半の土坑墓と推定される(本節第1項)。

ST338B(第25図、図版12)

【位置】LP35区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で灰黄褐色土の広がりを確認し、精査により土坑墓と判断した。【重複】ST338A土坑墓に切られ、ST336・337B・338C土坑墓を切る。北及び東側を3・7トレンチに削平される。【規模・形態】トレンチによる削平のため平面形は不明な点があるが、残存値で長軸1.71m、短軸不明の楕円形と推定され、確認面からの深さは0.22mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-71°-Eである。【埋土】1・2層ともⅡ層由来土を主体にⅢ層土塊等が混入しており、埋め戻し土と考えられる。【出土遺物】なし。

【所見】土坑形態と埋土の推定成因及び調査区南東部の墓域に分布することから15世紀前半の土坑墓と推定される(本節第1項)。

ST338C(第25図、図版12)

【位置】LO・LP35区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で灰黄褐色土の広がりを確認し、精査により

土坑墓と判断した。【重複】ST337A・ST338B土坑墓に切られる。【規模・形態】平面形はトレンチによる削平のため不明だが、残存部分及び周辺遺構から円形または楕円形と推定される。確認面からの深さは0.13mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。【埋土】1・2層ともⅡ層由来土を主体に焼土・炭化物、Ⅲ層土塊等が混入しており、埋め戻し土と考えられる。【出土遺物】なし。【所見】埋土の推定成因及び調査区南東部の墓域に分布することから15世紀前半の土坑墓と推定される(本節第1項)。

ST343(第26図、図版13)

【位置】LN30区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で褐色土の広がりを確認し、精査により土坑墓と判断した。【重複】ST107火葬墓に切られる。【規模・形態】平面形は長軸1.4m程度(ST107に切られるため不明)、短軸1.24mの楕円形で、確認面からの深さは0.14mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。主軸方位はN-10°-Eである。調査区南東部の墓域に分布する土坑墓と形態が類似する。【埋土】1層はⅢ層由来土を主体に炭化物・焼土、Ⅲ層土塊が混入しており、埋め戻し土と考えられる。2層の主体土は色調が違うが、グライ化したⅢ層由来土と考えられ、グライ化した土塊等が混入することから1層同様に埋め戻し土と考えられる。【出土遺物】なし。

【所見】土坑形態と埋土の推定成因から土坑墓と推定される。調査区南東部の土坑墓同様、15世紀前半に属する可能性が高いが、調査区南端に立地しており、被葬者の性格等が調査区南東部に分布する土坑墓と相違する可能性も考えられる。

ST347(第26図、図版13)

【位置】LO37区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面でぶい黄褐色土の広がりを確認し、精査により土坑墓と判断した。【重複】ST348土坑墓に切られる。【規模・形態】平面形は直径1.52mの円形であり、確認面からの深さは0.54mである。底面は平坦であり、壁は急に立ち上がる。【埋土】いずれの層もⅡ層及びⅢ層由来土を主体に焼土塊等が混入しており、埋め戻し土と考えられる。【出土遺物】1層から株洲系陶器破片1点(83.1g、第39図59)が出土した。擂鉢の底部破片である。株洲V期相当(15世紀前半)と見られるが、表面の摩滅が激しく確實ではない。ST392火葬墓では擂鉢破片の副葬が確認されており、本個体も副葬品の可能性がある。

【所見】土坑形態と埋土の推定成因及び調査区南東部の墓域に分布することから15世紀前半の土坑墓と推定される(本節第1項)。15世紀前半と見られる遺物も出土しており、調和的である。

ST348(第26図、図版13)

【位置】LO37区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面でぶい黄褐色土の広がりを確認し、精査により土坑墓と判断した。【重複】ST347・349土坑墓を切る。東側は攪乱を受ける。【規模・形態】平面形は直径1.02mの円形であり、確認面からの深さは0.54mである。底面は平坦であり、壁は急に立ち上がる。【埋土】Ⅱ層由来土を主体とし、Ⅲ層土、焼土・炭化物が混入することから埋め戻し土と考えられる。【出土遺物】なし。

【所見】土坑形態と埋土の推定成因及び調査区南東部の墓域に分布することから15世紀前半の土坑墓

と推定される(本節第1項)。

ST349(第26図、図版13)

【位置】 LO36・37区に位置する。【確認状況】 Ⅲ層上面でぶい黄褐色土の広がりを確認し、精査により土坑墓と判断した。【重複】 ST348・386土坑墓に切られる。【規模・形態】 平面形は直径1.62mの円形であり、確認面からの深さは0.44mである。底面は平坦であり、壁は急に立ち上がる。【埋土】 いずれの層もⅡ層由来土を主体とし、Ⅲ層土塊等が混入することから埋め戻し土と考えられる。【出土遺物】 埋土から珠洲系陶器1点(8.7g)が出土した。小片のため時期・産地等は不明である。出土層位不明であり小片のため、副葬品かどうかは不明である。

【所見】 土坑形態と埋土の推定成因及び調査区南東部の墓域に分布することから15世紀前半の土坑墓と推定される(本節第1項)。

ST386(第26図、図版14)

【位置】 LO36区に位置する。【確認状況】 Ⅲ層上面で灰黄褐色土の広がりを確認し、精査により土坑墓と判断した。【重複】 ST348・387土坑墓を切る。【規模・形態】 平面形は長軸1.66m、短軸1.12mの楕円形であり、確認面からの深さは0.68mである。底面は平坦であり、壁は急に立ち上がる。主軸方位はN-8°-Wである。【埋土】 いずれの層もⅡ層由来土を主体とし、Ⅲ層土塊等が混入することから埋め戻し土と考えられる。【出土遺物】 3層から銭貨1点(1.9g、図版31-134)、1層から楕形滓1点(98.8g、図版30-133)が出土した。銭貨は洪武通宝(初鑄1368年)である。埋土下層からの出土であり、副葬された六道錢と考えられる。

【所見】 六道錢と判断される銭貨が出土したことから、中世の土坑墓と判断した。帰属時期は、調査区南東部の墓域に分布することから15世紀前半と推定される(本節第1項)。

ST387(第26図、図版14)

【位置】 LN・LO36区に位置する。【確認状況】 Ⅲ層上面でⅢ層由来土の広がりを確認し、精査により土坑墓と判断した。【重複】 ST386土坑墓に切られ、ST392火葬墓を切る。【規模・形態】 平面形は長軸1.50m、短軸1.32mの楕円形であり、確認面からの深さは0.40mである。底面は平坦であり、壁は急に立ち上がる。主軸方位はN-48°-Eである。【埋土】 いずれの層もⅡ層由来土を主体とし、Ⅲ層土塊等が混入することから埋め戻し土と考えられる。【出土遺物】 なし。

【所見】 土坑形態と埋土の推定成因及び調査区南東部の墓域に分布することから15世紀前半の土坑墓と推定される(本節第1項)。

ST389(第27図、図版14)

【位置】 LO34・35区に位置する。【確認状況】 Ⅲ層上面でぶい黄褐色土の広がりを確認し、精査により土坑墓と判断した。【重複】 ST397土坑墓に切られる。西側を3トレンチに削平される。【規模・形態】 トレンチに削平される。現状から平面形は長軸1.60m以上の楕円形と推定され、確認面からの深さは0.54mである。底面は平坦であり、壁は急に立ち上がる。主軸方位はN-23°-Wである。【埋土】 いずれの層もⅡ層由来土を主体とし、Ⅲ層土塊等が混入することから埋め戻し土と考えられる。【出

土遺物】なし。

【所見】土坑形態及び埋土の推定成因及び分布域より15世紀前半の土坑墓と推定される(本節第1項)。

ST393(第27図、図版14)

【位置】LO35区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で灰黄褐色土の広がりを確認し、精査により土坑墓と判断した。【重複】西側を3トレンチに、南北を搅乱に削平される。【規模・形態】削平のため、規模は不明だが、平面形は直径1m以上の円形もしくは稍円形と推定される。確認面からの深さは0.37mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。【埋土】Ⅱ層由来土を主体とし、炭化物・焼土等が混入することから埋め戻し土と考えられる。【出土遺物】なし。

【所見】土坑形態と埋土の推定成因及び調査区南東部の墓域に分布することから15世紀前半の土坑墓と推定される(本節第1項)。

ST397(第27図、図版15)

【位置】LO35区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面でぶい黄褐色土の広がりを確認し、精査により土坑墓と判断した。【重複】ST389土坑墓を切る。また、遺構の大部分を3トレンチに削平される。【規模・形態】大部分をトレンチに削平されており、規模・平面形は不明である。残存部の確認面からの深さは0.25mである。底面はやや凹凸が見られ、壁は急に立ち上がる。【埋土】Ⅲ層由来土を主体とし、焼土等が中量混入することから埋め戻し土と考えられる。【出土遺物】なし。

【所見】埋土の推定成因及び調査区南東部の墓域に分布することから15世紀前半の土坑墓と推定される(本節第1項)。

(2)火葬墓

ST63A(第27図、図版15)

【位置】MC40区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で褐色土の広がりを確認し、精査により火葬墓と判断した。【重複】ST63Bを切る。【規模・形態】平面形は長軸1.10m、短軸0.78mの長楕円形で、確認面からの深さは0.21mである。底面はやや凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。調査区南東部の墓域に分布する火葬墓と形態が類似する。主軸方位はN-29°-Eである。【埋土】1・3層はⅢ層由来土を主体とし、炭化物が混入することから埋め戻し土と考えられる。2層は炭化物の薄層であり、別地点で火葬した焼骨等を埋葬した痕跡と推定される。焼骨は確認されなかった。【出土遺物】1層から土師質土器1点(3.0g)が出土した。小片のため時期・産地等は不明である。

【所見】土坑形態及び埋土の特徴から火葬墓と推定される。調査区南東部の火葬墓同様、15世紀前半に属する可能性が高いが、調査区中央西端に立地しており、被葬者の性格等が調査区南東部に分布する火葬墓と相違する可能性も考えられる。重複するST63B火葬墓とは土坑形態及び埋土の特徴、主軸方位がほぼ同一であり、本遺構はST63Bの直後の時期と推定される。

ST63B(第27図、図版15)

【位置】MC40区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で褐色土の広がりを確認し、精査により火葬墓と

判断した。【重複】ST63Aに切られる。【規模・形態】平面形は長軸0.90m以上、短軸0.65mの長楕円形で、確認面からの深さは0.23mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。調査区南東部の墓域に分布する火葬墓と形態が類似する。主軸方位はN-29°-Eである。【埋土】3層は炭化物混じりシルトであり、別地点で火葬した焼骨等を埋葬した痕跡と推定される。焼骨は確認されなかった。1・2層はⅢ層由来土を主体とする埋土で混入物は少ないが、下位の3層が焼骨を埋葬した層と考えられることから、その埋め戻し土と推定される。【出土遺物】なし。

【所見】土坑形態及び埋土の特徴から火葬墓と推定される。調査区南東部の火葬墓同様、15世紀前半に属する可能性が高いが、調査区中央西端に立地しており、被葬者の性格等が調査区南東部に分布する火葬墓と相違する可能性も考えられる。重複するST63A火葬墓とは土坑形態及び埋土特徴、主軸方位がほぼ同一であり、本遺構がST63Aの直前の時期と推定される。

ST107(第26図、図版15)

【位置】LN30・31区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面でにぶい黄褐色土の広がりを確認し、精査により火葬墓と判断した。【重複】ST343土坑墓を切る。【規模・形態】平面形は直径1.38mの円形で、確認面からの深さは0.38mである。底面は凹凸が見られ、壁は急に立ち上がる。調査区南東部の墓域に分布する火葬墓と形態が類似する。【埋土】いずれの層もⅡ層またはⅢ層由来土を主体に焼土・炭化物等が混入することから、埋め戻し土と考えられる。3層の下位に炭化物が層状に堆積する。別地点で火葬した焼骨等を埋葬した痕跡と推定される。焼骨は確認されなかった。【出土遺物】なし。

【所見】土坑形態及び埋土の特徴から火葬墓と推定される。調査区南東部の火葬墓同様、15世紀前半に属する可能性が高いが、調査区南端に立地しており、被葬者の性格等が調査区南東部に分布する火葬墓と相違する可能性も考えられる。

ST310(第27図、図版15)

【位置】LO36区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で灰黄褐色土の広がりを確認し、精査により火葬墓と判断した。【重複】なし。【規模・形態】平面形は直径1.24mの円形であり、確認面からの深さは0.30mである。底面は丸底で、壁は緩やかに立ち上がる。【埋土】1・2層はⅡ層由来土を主体とし、焼土等が混入することから埋め戻し土と考えられる。3層は灰・炭化物混じりシルトであり、焼骨片と見られる白色粉末状の混入物が認められる。別地点で火葬した焼骨等を埋葬した痕跡と推定される。【出土遺物】なし。

【所見】土坑形態と埋土の特徴及び調査区南東部の墓域に分布することから15世紀前半の火葬墓と推定される(本節第1項)。

ST315(第27図、図版16)

【位置】LN35・36、LO35・36区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面での灰黄褐色土の広がりを確認し、精査により火葬墓と判断した。【重複】ST392火葬墓を切る。【規模・形態】平面形は長軸1.71m、短軸1.58mの楕円形で、確認面からの深さは0.51mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-72°-Eである。【埋土】1層は焼土・炭化物等を含む灰混じりシルトの層である。

2層との層境に炭化物が層状に堆積しており、別地点で火葬した焼骨等を埋葬した痕跡と推定される。焼骨は確認されなかった。2層はⅢ層主体土とⅣ層主体土の互層であり、埋め戻し土と考えられる。【出土遺物】1層から珠洲系陶器1点(10.8g、第39図60)、不明鉄製品2点(48.8g、第46図105)が出土している。珠洲系陶器は小片のため時期・産地等を特定できなかった。遺物は副葬品かどうかは不明である。

【所見】土坑形態と埋土の特徴及び調査区南東部の墓域に分布することから15世紀前半の火葬墓と推定される(本節第1項)。

ST325(第28図、図版16)

【位置】LT・MA34区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面でにぶい黄褐色土の広がりを確認し、精査により火葬墓と判断した。【重複】SKP345柱穴様ピットに切られる。【規模・形態】平面形は長軸1.04m以上、短軸0.62mの楕円形で、確認面からの深さは0.40mである。底面は平坦であり、壁は急に立ち上がる。調査区南東部の墓域に分布する火葬墓と形態が類似する。主軸方位はN-69°-Wである。【埋土】いずれの層も灰混じりシルトを主体とする埋め戻し土であり、別地点で火葬した焼骨等を埋葬した痕跡と推定される。焼骨は確認されなかった。【出土遺物】なし。

【所見】土坑形態及び埋土の特徴から火葬墓と推定される。調査区南東部の火葬墓同様、15世紀前半に属する可能性が高いが、調査区南西端に立地しており、被葬者の性格等が調査区南東部に分布する火葬墓と相違する可能性も考えられる。

ST326(第28図、図版16)

【位置】LT34区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面でにぶい黄褐色土の広がりを確認し、精査により火葬墓と判断した。【重複】現代の水道管搅乱に東側を削平されている。【規模・形態】平面形は長軸0.94m以上、短軸0.80mの楕円形で、確認面からの深さは0.43mである。底面は丸底気味で、壁は急に立ち上がる。調査区南東部の墓域に分布する火葬墓と形態が類似する。主軸方位はN-12°-Wである。【埋土】1・2層はⅡ層由来土を、3層はⅢ層由来土を主体とする層である。4層は褐灰色シルトを主体とし、焼骨片らしき白色粉状の混入物が認められる。別地点で火葬した焼骨等を埋葬した痕跡と推定される。5層はⅢ層由来土を、6層はⅣ層由来土を主体とする層である。いずれの層もⅢ層土塊等の混入物があることから、埋め戻し土と考えられる。【出土遺物】なし。

【所見】土坑形態及び埋土の特徴から火葬墓と推定される。調査区南東部の火葬墓同様、15世紀前半に属する可能性が高いが、調査区南西端に立地しており、被葬者の性格等が調査区南東部に分布する火葬墓と相違する可能性も考えられる。

ST331(第28図、図版16)

【位置】LP・LQ36区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で灰黄褐色土の広がりを確認し、精査により火葬墓と判断した。【重複】ST332火葬墓を切る。【規模・形態】平面形は直径1.32mの円形で、確認面からの深さは0.38mである。底面はわずかに凹凸があり、壁は急に立ち上がる。【埋土】いずれの層もⅡ層由来土を主体にⅢ層土塊等が混入することから、埋め戻し土と考えられる。2層中で焼礫や

炭化材、炭化物範囲を検出しており、別地点で火葬した焼骨等を埋葬した痕跡と考えられる。焼骨は確認されなかった。【出土遺物】中世陶器(古瀬戸)破片が2層から1点(11.7g、第39図61)、鉄滓(楕円形1点含む)が埋土から3点、1層から3点、2層から1点の計7点(197.4g、図版30-132)出土した。また、2層から混入と見られる残核1点(98.0g)が出土した。出土した古瀬戸は口縁部の形状から古瀬戸後期(15世紀前半)の平碗の可能性があるが、小片のため確実ではない。小片だが焼骨が埋葬されたと推定される2層からの出土であり、副葬品の可能性も考えられる。

【所見】土坑形態と埋土の特徴及び調査区南東部の墓域に分布することから15世紀前半の火葬墓と推定される(本節第1項)。出土陶器も15世紀前半の可能性があり、遺構の推定時期と調和的である。

ST332(第28図、図版17)

【位置】LP・LQ36区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面でぶい黄褐色土の広がりを確認し、精査により火葬墓と判断した。【重複】ST331火葬墓に切られる。【規模・形態】平面形は長軸1.66m、短軸1.40mの楕円形で、確認面からの深さは0.62mである。底面は平坦であり、壁は急に立ち上がる。主軸方位はN-38°-Eである。【埋土】いずれの層もⅡ層及びⅢ層由来土を主体にⅢ層土塊等が混入することから、埋め戻し土と考えられる。底面付近で炭化物範囲を検出しており、別地点で火葬した焼骨等を埋葬した痕跡と考えられる。焼骨は確認されなかった。【出土遺物】1層から珠洲系陶器1点(13.5g)、不明鉄製品1点(6.2g)が出土した。珠洲系陶器は小片であり、時期・産地等は不明である。遺物は小片でいずれも上層からの出土であり、副葬品かどうかは不明である。

【所見】土坑形態と埋土の特徴及び調査区南東部の墓域に分布することから15世紀前半の火葬墓と推定される(本節第1項)。

ST346(第28図、図版17)

【位置】LO37区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で褐色土の広がりを確認し、精査により火葬墓と判断した。【重複】西端をわずかに撹乱により壊される。【規模・形態】平面形は長軸1.31m、短軸1.16mの楕円形で、確認面からの深さは0.38mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。主軸方位はN-61°-Wである。【埋土】Ⅱ層由来土主体層(1・3・5・7・8層)と灰混じりシルト主体層(2・4・6層)から成る埋め戻し土である。灰混じりシルト層は別地点で火葬した焼骨を埋葬した痕跡と考えられる。焼骨は確認されなかった。【出土遺物】鉄滓が埋土から1点、5層から2点の計3点(1.7g)が出土した。いずれも小片であり、混入と判断される。

【所見】土坑形態と埋土の特徴及び調査区南東部の墓域に分布することから15世紀前半の火葬墓と推定される(本節第1項)。

ST388(第28図、図版17)

【位置】LO35区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面でぶい黄褐色土の広がりを確認し、精査により火葬墓と判断した。【重複】なし。【規模・形態】平面形は長軸1.38m、短軸1.12mの楕円形で、確認面からの深さは0.34mである。底面は丸底であり、壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-56°-Eである。【埋土】1・3層はⅡ層及びⅣ層由来土を主体とし、Ⅲ層土塊等が混入することから埋め戻し土と考え

られる。2層は灰混じりシルトの層であり、別地点で火葬した焼骨を埋葬した痕跡と考えられる。焼骨は確認されなかった。【出土遺物】3層から鉄滓3点(44.8g)が出土した。

【所見】土坑形態と埋土の特徴及び調査区南東部の墓域に分布することから15世紀前半の火葬墓と推定される(本節第1項)。

ST392(第29図、図版17・18)

【位置】LO35・36区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面でびい黄褐色土の広がりを確認し、精査により火葬墓と判断した。【重複】ST315火葬墓、ST387土坑墓に切られる。【規模・形態】平面形は長軸1.84m、短軸1.60mの楕円形で、確認面からの深さは0.52mである。底面は平坦であり、壁は急に立ち上がる。主軸方位はN-79°-Eである。【埋土】1~3・7層はⅡ層由来土を、8層はⅣ層由来土を主体とし、いずれもⅢ層土塊等が混入することから埋め戻し土と考えられる。5層は強く被熱した焼土層で微細な焼骨片を含むことから、遺体を火葬した層であり、上下の4・6層は5層の火葬に用いた燃料材等の層と考えられる。【出土遺物】5層から集中して出土している。同層から珠洲系陶器破片1点(48.3g、第38図45)、銭貨4点(6.0g、図版31-135~138)、短刀1点(174.5g、第46図106)、鎌1点(101.7g、第46図107)、不明鉄製品3点(40.4g、第46図108~110a・b)が、鉄滓6点(59.9g)が出土した。また、8層から不明鉄製品が1点(19.7g)、鉄滓が1層から4点、2層から1点、3層から1点の計6点(59.9g)出土した(いずれも重量は取り上げ時のもの)。いずれも強く被熱しており、遺体とともに火葬に供された副葬品と推定される。出土陶器は珠洲V期相当(15世紀前半)の擂鉢破片で、SE289井戸跡の埋め戻し土(2層)から出土した個体と接合する。

【所見】土坑内で遺体を茶毬に付し、そのまま現地に埋葬した中世の火葬墓である。出土陶器から時期は15世紀前半と考えられ、本遺構への埋葬行為は、SE289井戸跡廃絶後の埋め立てと併行した可能性が高い。

(3)木棺墓

ST222(第29図、図版18・19)

【位置】MA46区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で褐色土の広がりを確認し、精査により木棺墓と判断した。【重複】ST224木棺墓に切られ、ST223木棺墓を切る。【規模・形態】平面形は長軸0.70m、短軸0.62mの楕円形であり、確認面からの深さは0.28mである。底面は平坦であり、壁は急に立ち上がる。土層断面及び底面で検出した木棺痕跡から、木棺は直径40cmほどの円形木棺(早桶)と推定される。底面にわずかに木棺底板が残存する。主軸方位はN-55°-Eである。【埋土】1層はⅡ層及びⅢ層由來の褐色シルトを主体にⅢ・Ⅳ層土塊等が混入する。堆積状況から棺蓋腐朽後の木棺内への流入土と考えられる。2層はⅢ層由來の黄褐色シルトを主体にⅣ層土塊等が混入する。堆積状況から埋設した木棺周囲への埋め戻し土と考えられる。【出土遺物】1層底面から土人形4点(148.5g、第41図69~72)、銭貨(縉銭)1点(113.7g、図版31-139)、漆器1点が出土した。漆器は椀ないしは皿と思われるが腐食が激しく漆膜しか残存していなかった。また、2層から数珠玉1点(0.1g未満、図版26~81)が出土した。土人形は型合わせ成形、中空のものが認められ、その特徴から時期は18世紀前葉以降と推定される。縉銭は銹により文字面の判読ができないが磁性を帯びることから寛永通宝銭

(初鉄1739年)が含まれると推定される。

【所見】近世の木棺墓である。円形木棺(早桶)が用いられている。土人形は幼児の墓からの出土が多く報告されており、木棺の推定径も小さいことから、被葬者は幼児と推定される。出土した銭貨から、18世紀中葉以降(1739年～)に属すると推定される。重複するST222・223木棺墓と遺構形態及び出土遺物が類似することからほぼ同時期と考えられる。

ST223(第29図、図版18・19)

【位置】LT・MA46区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で褐色土の広がりを確認し、精査により木棺墓と判断した。【重複】ST222・224木棺墓に切られる。【規模・形態】平面形は推定長軸0.80mの隅丸方形であり、確認面からの深さは0.38mである。底面は平坦であり、壁は急に立ち上がる。土層断面及び底面で検出した木棺痕跡から、木棺は1辺40cm程度の方形木棺と推定される。底面にわずかに木棺底板が残存する。主軸方位はN-52°-Eである。【埋土】1層はⅡ層及びⅢ層土由来の褐色シルトを主体にⅢ・Ⅳ層土塊が混入する。堆積状況から棺蓋腐朽後の木棺内への流入土と考えられる。2層は1層に類似するが、堆積状況から埋設した木棺周囲への埋め戻し土と考えられる。【出土遺物】1層から磁器破片1点(1.1g)、同層底面から銭貨数枚(37.3g、図版31-140・141)が出土した。磁器は肥前系の染付であるが、小片のため時期は不明である。銭貨は底面に分散した状態で出土したが、一部(図版31-140・141)は縦錢の状態を留めており、本来は一括の縦錢として副葬されたと考えられる。銭貨の大半は銹により錢種不明だが、錢種を確認できたものには古寛永(初鉄1636年)及び新寛永(初鉄1668年)、寛永通宝銅錢(初鉄1739年)がある。

【所見】近世の木棺墓である。方形木棺が用いられている。出土銭貨から18世紀中葉以降(1739年～)に属すると推定される。重複するST222・224木棺墓と遺構形態及び出土遺物が類似することから時期・性格を同じくする遺構と考えられ、本遺構の被葬者は幼児と推定される。

ST224(第29図、図版18・19)

【位置】LT・MA46区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で褐色土の広がりを確認し、精査により木棺墓と判断した。【重複】ST222・223木棺墓を切る。【規模・形態】平面形は長軸0.82m、短軸0.66mの隅丸方形であり、確認面からの深さは0.48mである。底面は平坦であり、壁は急に立ち上がる。掘方の形状及び土層断面の木棺埋土から、木棺は1辺40cm程度の方形木棺と推定される。底面にわずかに木棺底板が残存する。主軸方位はN-48°-Eである。【埋土】1・2層はⅡ層またはⅢ層及びⅣ層土由来土を主体とし、Ⅲ層土塊等が混入する。堆積状況から棺内埋没後の凹みへの流入土と考えられる。3層はⅢ層土由来のにぶい黄褐色シルトを主体にⅢ・Ⅳ層土塊が混入する。堆積状況から棺蓋腐朽後の木棺内への流入土と考えられる。4～6層はⅢ層及びⅣ層土由来土を主体としており、堆積状況から埋設した木棺周囲への埋め戻し土と考えられる。【出土遺物】3層底面から土人形1点(157.7g、第41図73)、銭貨(縦錢含む)6点(132.0g、図版31-142～147)が出土した。銭種の判明した銭貨はいずれも寛永通宝で、秋田川尻錢(初鉄1738年)、寛永通宝銅錢(初鉄1739年)が含まれる。同層からは漆器の漆膜が出土しており、本来はST222同様、漆器が副葬されていたと推定される。また、埋土から木棺の接合に使われたと思しき鉄釘が木棺材と一体化した状態で数点出土しているが、いず

れも原形を留めていないため図示しなかった。

【所見】近世の木棺墓である。木棺痕跡は明確に残っていないが、掘方から方形木棺が用いられたと推測される。ST222同様、被葬者は幼児と考えられ、時期は出土銭貨から18世紀中葉以降と推定される。

ST284(第29図、図版19)

【位置】LT47区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で銭貨・土人形を確認し、精査により木棺墓と判断した。【重複】SB281掘立柱建物跡が重複する。直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。【規模・形態】平面形は直径0.45mの円形であり、確認面からの深さは0.04mである。底面は平坦である。上部を削平されており、底面のみわずかに残る。木棺底板が部分的に残存するが、本来の木棺の規模は不明である。【埋土】Ⅳ層由来の黒褐色シルトを主体とし、Ⅲ層土塊が多い量に混入する。確認面で木棺底板が検出されていることから、木棺納置の際にわずかに盛られた埋め戻し土と考えられる。【出土遺物】確認面から土人形1点(31.7g、第41図74)、銭貨11点以上(23.4g、図版31-148～155)が出土した。確認面での出土である。銭貨の大半は細片となっており、本来の枚数は不明である。銭貨が著しく破損し、土人形も遺構の縁辺での出土であることから、遺物は削平により原位置から若干移動しているものと考えられる。

【所見】上部を削平され本来の形状は不明であるが、出土遺物から近世の木棺墓とした。平面形から円形木棺(早桶)が用いられたと推定される。ST222～224木棺墓と出土遺物の組成が同様で検出位置も近いことから、被葬者は幼児であり、時期は18世紀中葉以降と推定される。重複するSB281は19世紀前葉～中葉に属する可能性があることを勘案すると、本遺構はSB281より古く、18世紀中葉～末葉に属する可能性が高い。

8 土坑

SK26(第30図、図版20)

【位置】MA43区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で褐色土の広がりを確認し、精査により土坑と判断した。【重複】なし。【規模・形態】平面形は直径0.72mの円形で、確認面からの深さは0.28mである。底面は丸底で、壁は緩やかに立ち上がる。【埋土】1・2層ともⅡ層由来土を主体とする層である。混入物は少なく、人為的な埋め戻しか自然堆積かは不明である。【出土遺物】なし。

【所見】時期・性格ともに不明である。

SK27(第30図、図版20)

【位置】MA42・43区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で褐色土の広がりを確認し、精査により土坑と判断した。【重複】なし。【規模・形態】平面形は長軸0.90m、短軸0.80mの楕円形で、確認面からの深さは0.19mである。底面は丸底で、壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-24°-Eである。【埋土】Ⅱ層由来土を主体とする。混入物は少なく、埋め戻し土か自然堆積かは不明である。【出土遺物】なし。

【所見】時期・性格ともに不明である。

SK29(第30図、図版20)

【位置】 MA42区に位置する。【確認状況】 Ⅲ層上面で灰黄褐色土の広がりを確認し、精査により土坑と判断した。【重複】 なし。【規模・形態】 平面形は長軸0.74m、短軸0.60mの楕円形で、確認面からの深さは0.28mである。底面は丸底で、壁は急に立ち上がる。主軸方位はN-65°-Wである。【埋土】 1・2層ともⅡ層由来土を主体とする。混入物は少なく、人為的な埋め戻しか自然堆積かは不明である。【出土遺物】 なし。

【所見】 時期・性格ともに不明である。

SK32(第30図、図版20)

【位置】 MB41・42区に位置する。【確認状況】 Ⅲ層上面で灰黄褐色土の広がりを確認し、精査により土坑と判断した。【重複】 なし。【規模・形態】 平面形は直径0.56mの円形で、確認面からの深さは0.39mである。底面は丸みがあり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。【埋土】 Ⅱ層主体土に偽縛を含む人為埋土と推定される。【出土遺物】 なし。

【所見】 時期・性格ともに不明である。

SK33(第30図、図版20)

【位置】 MB42区に位置する。【確認状況】 Ⅲ層上面で灰黄褐色土の広がりを確認し、精査により土坑と判断した。主軸方位はN-69°-Eである。【重複】 SKP299柱穴様ピットを切る。【規模・形態】 平面形は長軸0.68m、短軸0.58mの楕円形で、確認面からの深さは0.40mである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。【埋土】 1層はⅡ層由来土を、2層はⅢ層由来土を、3層はⅣ層由来土をそれぞれ主体とする。いずれの層もⅣ層土塊等が混入することから埋め戻し土と考えられる。【出土遺物】 なし。

【所見】 時期・性格ともに不明である。

SK34(第30図、図版20)

【位置】 MA・MB42区に位置する。【確認状況】 Ⅲ層上面で灰黄褐色土の広がりを確認し、精査により土坑と判断した。【重複】 なし。【規模・形態】 平面形は長軸0.45m、短軸0.34mの楕円形で、確認面からの深さは0.26mである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-72°-Wである。【埋土】 1層はⅡ層由来土を、2層はⅣ層由来土を、3層はⅢ層由来土をそれぞれ主体とする。いずれの層もⅣ層土塊等が混入することから埋め戻し土と考えられる。【出土遺物】 1層から土師質土器1点(34g)が出土した。小片だが胎土から近世の土器と推定される。

【所見】 出土遺物から近世以降の土坑と考えられる。柱痕跡、抜き取り穴などは未確認だが、大径の柱穴の可能性もある。

SK61(第30図、図版20)

【位置】 MB40区に位置する。【確認状況】 Ⅲ層上面で灰黄褐色土の広がりを確認し、精査により土坑と判断した。【重複】 なし。【規模・形態】 平面形は長軸0.88m、短軸0.62mの楕円形で、確認面から

の深さは0.30mである。底面は平坦で、壁は北側は緩やかで、南側は急に立ち上がる。主軸方位はN-11°-Eである。【埋土】1・2層ともⅡ層由来土を主体とし、Ⅱ・Ⅲ層土塊等が混入することから埋め戻し土と考えられる。【出土遺物】なし。

【所見】時期・性格ともに不明である。

SK62(第30図、図版20)

【位置】MB40区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で灰黄褐色土の広がりを確認し、精査により土坑と判断した。【重複】なし。【規模・形態】平面形は長軸0.64m、短軸0.56mの楕円形で、確認面からの深さは0.21mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-84°-Wである。【埋土】1・2層ともⅡ層由来土を主体とし、Ⅱ・Ⅲ層土塊等が混入することから埋め戻し土と考えられる。【出土遺物】なし。

【所見】時期・性格ともに不明である。

SK240(第30図、図版20)

【位置】LO・LP30区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で灰黄褐色土の広がりを確認し、精査により土坑と判断した。【重複】南側を用地境溝に削平される。【規模・形態】南側を削平され全体の規模は不明だが、全長1.08m以上、幅1.06mである。平面形は長楕円形を呈すると推定される。確認面からの深さは0.24mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。主軸方位はN-3°-Eである。【埋土】1・3・4層は灰混じりシルトである。2・5層はⅢ層由来土を、6層はⅣ層由来土を主体とする。いずれの層も混入物が多く、埋め戻し土と推定される。【出土遺物】なし。

【所見】遺構の一部しか検出できおらず、遺物の出土もないことから不明な点が多いが、確認できた平面形及び埋土の特徴からカマド状遺構の焚口部の可能性がある。時期不明。

SK286(第30図、図版20)

【位置】MB43・44区に位置する。【確認状況】Ⅳ層上面で灰黄褐色土の広がりを確認し、精査により土坑と判断した。【重複】なし。【規模・形態】平面形は直径0.93mの円形であり、確認面からの深さは0.38mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。【埋土】1層はⅡ層由来土を、2層はⅢ層由来土を、3層はⅣ層由来土をそれぞれ主体とする。いずれの層も混入物は少ないが、土層断面から見た堆積状況から埋め戻し土と考えられる。【出土遺物】なし。

【所見】時期・性格ともに不明である。現地で平面図を作成できなかったため、掲載した平面図は断面図及び写真から復元したものである。

SK340(第31図、図版20)

【位置】LM31区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で灰黄褐色土の広がりを確認し、精査により土坑と判断した。【重複】なし。【規模・形態】平面形は直径0.88mの円形で、確認面からの深さは0.36mである。底面は丸底で、壁は北側は急に、南側は緩やかに立ち上がる。【埋土】1・4層はⅡ層由来土を、2層はⅥ層由来土を、3層はⅣ層由来土をそれぞれ主体とする。いずれの層も混入物が多く、

埋め戻し土と考えられる。【出土遺物】なし。

【所見】時期・性格ともに不明である。

SK341(第31図、図版20)

【位置】LK30・31区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で灰黄褐色土の広がりを確認し、精査により土坑と判断した。【重複】なし。【規模・形態】平面形は直径0.54mの円形で、確認面からの深さは0.18mである。底面はやや凹凸があり、壁は急に立ち上がる。【埋土】1・2層ともⅡ層由来土を主体とする。いずれの層もⅢ・Ⅳ層土塊等が混入することから埋め戻し土と考えられる。【出土遺物】なし。

【所見】時期・性格ともに不明である。

SK342(第31図、図版20)

【位置】LK30区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で灰黄褐色土の広がりを確認し、精査により土坑と判断した。【重複】なし。【規模・形態】平面形は長軸0.59mの円形で、確認面からの深さは0.24mである。底面は丸底で、壁は急に立ち上がる。【埋土】1・2層ともⅡ層由来土を主体とし、炭化物・Ⅲ層土塊等が混入することから埋め戻し土と考えられる。【出土遺物】なし。

【所見】時期・性格ともに不明である。

SK344(第31図、図版20)

【位置】LN30区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で灰黄褐色土及び炭化物、焼土の広がりを確認し、精査により土坑と判断した。【重複】一部現代の搅乱を受ける。【規模・形態】平面形は長軸1.08m、短軸0.94mの楕円形で、確認面からの深さは0.32mである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-17°-Eである。【埋土】1層はⅢ層由来土を、2層はⅡ層由来土を主体とする。いずれも炭化物・焼土等が混入することから埋め戻し土と考えられる。【出土遺物】なし。

【所見】遺構の平面形から土坑墓あるいは火葬墓の可能性があるが、他の土坑墓・火葬墓とした遺構に比べ掘り込みが浅いことから時期・性格ともに不明とした。

SK390(第31図、図版20)

【位置】LN36区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面でぶい黄褐色土の広がりを確認し、精査により土坑と判断した。【重複】なし。【規模・形態】平面形は長軸0.74m、短軸0.67mの楕円形で、確認面からの深さは0.22mである。底面は丸底気味で、壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-59°-Eである。【埋土】1・2層ともⅡ層またはⅢ層由来土と考えられるにぶい黄褐色シルトを主体とする。いずれもⅢ・Ⅳ層土塊等の混入物が多く、埋め戻し土と考えられる。【出土遺物】なし。

【所見】時期・性格ともに不明である。

SK399(第31図、図版20)

【位置】LT・MA43区に位置する。【確認状況】Ⅳ層上面で黄褐色土の広がりを確認し、精査により土坑と判断した。【重複】なし。【規模・形態】平面形は長軸2.10m、短軸0.90mの隅丸方形で、確認

面からの深さは0.19mである。底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がる。主軸方位はN-89°-Wである。【埋土】Ⅲ層由来土を主体とし、Ⅳ層土塊が少量混入することから埋め戻し土と考えられる。【出土遺物】なし。

【所見】時期・性格ともに不明である。

SK400(第31図、図版20)

【位置】LN・LO41区に位置する。【確認状況】Ⅳ層上面で黄褐色土の広がりを確認し、精査により土坑と判断した。底面はやや凹凸があり、壁は急に立ち上がる。【重複】なし。【規模・形態】平面形は直径0.94mの円形で、確認面からの深さは0.29mである。【埋土】1・3層はⅢ層由来土を、2層はⅡ層由来土を主体とする。いずれの層もⅢ・Ⅳ層土塊等が混入することから埋め戻し土と考えられる。【出土遺物】なし。

【所見】時期・性格ともに不明である。

SK402(第31図、図版20)

【位置】LO40区に位置する。【確認状況】Ⅳ層上面で黄褐色土の広がりを確認し、精査により土坑と判断した。【重複】なし。【規模・形態】平面形は長軸0.84m、短軸0.76mの楕円形で、確認面からの深さは0.09mである。底面は平坦であり、壁は急に立ち上がる。主軸方位はN-46°-Eである。【埋土】Ⅲ層由来土を主体とし、Ⅳ層土塊が中量混入することから埋め戻し土と考えられる。【出土遺物】なし。【所見】時期・性格ともに不明である。

9 溝跡

SD92(第32図、図版19)

【位置】MA47・48、MB46・47区に位置する。【確認状況】Ⅳ層上面で黄褐色土の広がりを確認し、精査により溝跡と判断した。【重複】東側を確認調査トレンチに、西側を現代の水道管に削平される。水道管より西側は現代の耕作痕による搅乱が激しく遺構の有無は確認できなかった。【規模・形態】両端を削平されているが、確認できた範囲では、全長7.46m、最大幅0.50mで、確認面からの深さは0.18mである。底面はやや凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-30°-Eである。【埋土】Ⅲ層由來の黄褐色シルトを主体とし、Ⅳ層土塊が少量混入することから埋め戻し土と考えられる。【出土遺物】なし。

【所見】溝の方向が南側に存在するSKI210堅穴状遺構の主軸方位と直交しており、同遺構に伴うと考えられるSA320・471も本遺構付近で途切れることから、19世紀前葉～中葉の区画溝と推定される。

SD406(第32図、図版19)

【位置】LN39・40、LO40・41区に位置する。【確認状況】Ⅳ層上面で黄褐色土の広がりを確認し、精査により溝跡と判断した。【重複】SB403掘立柱建物跡及びSA405柱穴列に切られる。【規模・形態】全長5.28m、最大幅0.84mで、確認面からの深さは0.05mである。底面は平坦である。浅いため壁の立

立ち上がりは不明である。主軸方位はN-22°-Wである。【埋土】Ⅲ層由来の黄褐色シルトを主体とし、Ⅳ層土塊が少量混入することから埋め戻し土と考えられる。【出土遺物】なし。

【所見】遺構の切り合いから近世以前の可能性が高いが、詳細な時期及び性格は不明である。

10 土器溜まり

SU54(第32図、図版19)

【位置】LT40区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で珠洲系陶器の集中部を確認し、精査により土器溜まりと判断した。【重複】なし。【規模・形態】南北2.24m、東西1.08mの範囲に広がる不整形の落ち込みで、確認面からの深さは最大で0.25mである。底面には凹凸があり、立ち上がりは緩やかである。北側・南側の2か所の落ち込みがある。【埋土】1層はⅡ層またはⅢ層に由来する褐色シルトを主体とする。2層はⅣ層由来の暗褐色シルトを主体とする。いずれの層もⅢ・Ⅳ層土塊等が混入することから、陶器の遺棄に伴う人為的な埋め戻し土と考えられる。【出土遺物】1～2層から珠洲系陶器の破片(15.516.9g)が出土した。全て同一個体の破片であり、接合して大烟・桧山腰窯(13世紀前半)産の大甕1点となる(第40図68)。同個体にはSE65・85・324井戸跡出土個体が接合する。遺物の大半は確認面付近での出土だが、底面付近からの出土も認められる。遺構南側の落ち込みから遺物は出土しており、北側の落ち込みからの出土はない。

【所見】出土遺物から13世紀前半の遺構と考えられる。また、出土遺物が遺構間接合するため、本遺構で打ち削った珠洲系陶器の大甕を同時期に廃絶した井戸に分配、遺棄したと推定される。本遺構に遺棄された大甕は全体の1/2程度が残存していた。遺構の平面形は不整形で底面に凹凸も見られることから、自然の窪地を利用した遺構と考えられる。

SU280(第32図、図版19)

【位置】MC38区に位置する。【確認状況】Ⅲ層上面で珠洲系陶器の集中部を確認し、精査により土器溜まりと判断した。【重複】SB301掘立柱建物跡と重複する。【規模・形態】平面形は長軸0.56m、短軸0.48mの不整な楕円形で、確認面からの深さは0.21mである。底面には凹凸があり、立ち上がりは不明瞭である。【埋土】Ⅱ層主体上の偽礎(Ⅲ層土塊)・炭化物を含む人為埋土と推定される。【出土遺物】1層から珠洲系陶器13点(903.5g)が出土した。いずれも大烟・桧山腰窯(13世紀前半)産の甕と推定され、1個体もしくは2個体と推定される(第39図62・63)。一部の破片はSE65井戸跡出土の破片と接合する(第34図20)。

【所見】出土遺物から13世紀前半の遺構と考えられる。SU54土器溜まり同様、出土遺物が遺構間接合をするため、本遺構で打ち削った珠洲系陶器を井戸跡に分配、廃棄したと推定される。SU54土器溜まり同様、自然の窪地を利用した遺構と考えられる。遺物の出土量がSU54土器溜まりに比べ少なく、落ち込みも浅いことから、上部は削平された可能性がある。遺構の配置と遺物の出土状況からSB301掘立柱建物跡より古い遺構と推定される。

11 柱穴様ピット(第5表)

掘立柱建物跡や柱穴列に属さない単独の柱穴様ピットは127基検出した。これらは調査区中央部に集中している。周辺ではSB273・274・275の中近世の掘立柱建物跡及び柱穴列を複数検出しているため、これら単独の柱穴様ピットも本来は建物等を構成していた可能性が高いが、規則的な柱穴配置を抽出することはできなかった。本報告では柱穴様ピット個々の記述は割愛し、柱穴規模等を一覧表(第5表)に掲載した。

12 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物は、中世では珠洲系陶器・中国産青磁が、近世では陶磁器・土師質土器・銭貨が、その他に時代不明の鉄製品が出土した。大半は小片で、出土量もわずかである。鉄製品は腐食が激しく器種も不明であることから、報告は割愛する。

(1) 土器・陶磁器

珠洲系陶器は、調査区中央西側での出土が目立つ。大畑・桧山腰窯産と推定される破片が大半である。調査区中央西側には同窯製品が多数出土したSE65井戸跡やSU54土器溜まり等が存在し、これらの遺構では確認面で遺物の出土が認められる。よって、遺構外出土の珠洲系陶器の大半は、本来これらの遺構に伴うものであったと推測される。

中国産青磁は、ST337B土坑墓出土個体と接合したLP34区出土破片を除くと、LS31区及びLS42区Ⅲ層から1点ずつ出土している。いずれも時期は15世紀代と推定される。

近世陶磁器は、比較的調査区北側からの出土が多い。調査区北側は、今回檜岡川寄りの狭小な範囲しか調査しなかったため、遺構はほとんど確認できなかった。今回の調査区の北側に隣接して近世の船着場が存在していることから(第2章第2節)、近世の土地利用が船着場に近い調査区北側を中心になされていたことを示している可能性がある。

(2) 銭貨

MA46区Ⅲ層から1点出土した(図版31-157)。縦銭状に5枚固着しており、銭種が確認できた表面の1枚は寛永通宝(新寛永)である。遺物の状態は、周辺の近世木棺墓から出土した銭貨の状態と酷似することから、本来は出土位置付近に存在した近世木棺墓に副葬されていたものと推定される。

註1 秋田県教育委員会「遺跡詳細分布調査報告書」秋田県文化財調査報告書第486集 2013(平成25)年

註2 江戸遺跡研究会「国説江戸考古学研究事典」柏書房 2001(平成13)年、221頁

第3表 挖立柱跡一覧

遺構名	棟方位	平面規模	総長(m)	柱間(m)	柱距方丈(m)	柱径(m)	底面標高(m)	備考
SB273	N - 86° - W	桁行2間 梁行1間	2.68 2.44	2.42±0.02 2.18±0.06		0.26	19.68±0.09	
SB274	N - 87° - E	桁行2間 梁行1間	5.72 2.90	2.74±0.05 2.64±0.04		0.23	0.18	19.76±0.07
SB275	N - 8° - E	桁行1間 梁行2間	5.80 5.76	4.14±0.21 2.66±0.10	(0.90±0.07) (-)は下屋の出	身合0.38 身合0.17	身合19.63±0.10 下屋19.68±0.09	北面に下屋
SB279	N - 78° - W	桁行2間 梁行1間	6.20 4.68	3.02±0.07 2.21±0.05	(2.20±0.04) (1.74±0.10)は通の出	身合0.27 身合0.24	身合0.24 身合0.16	身合19.43±0.05 通19.19±0.08
SB281	N - 63° - E	桁行4間 梁行2間	7.64 4.16	1.88±0.12 1.84±0.07	(北側19.00±0.02) (南側1.78±0.02)	0.36	0.16	19.20±0.08 梁行方向南北で柱間距離に差あり
SB301	N - 71° - E	桁行2間 梁行1間	3.38 2.52	1.58±0.21 2.03±0.22		0.22	0.12	19.59±0.07
SB302	N - 7° - E	桁行2間 梁行2間	5.60 4.92	2.64±0.13 2.22±0.21		0.27	0.18	19.64±0.09 P5は束柱
SB403	N - 78° - W	桁行4間 梁行2間	11.04 3.16	2.63±0.10 2.10±0.11	中央0.42 北・南0.28	中央0.22 中央19.05±0.17	中央19.05±0.17 北・南19.36±0.09	梁行方向南北で柱間距離に差あり
SB468	N - 76° - W	桁行2間 梁行2間	5.50 5.26	2.45±0.05 2.35±0.12		0.34	0.19	19.35±0.05 P1はPICで計測

算出遺構番号	地籍	平面形	直径(cm)	柱径(cm)	底面標高(m)	柱高さ	柱アリ	出土遺物
SD273	P1 LS37-38	円形	20	20	19.18			
SD273	P2 LS37-38	楕円形	27	24	19.56			
SD273	P3 LS28	円形	26	24	18.274			
SD273	P4 LK38	円形	29	28	19.68			
SD274	P1 LT35	円形	29	28	19.70	○		
SD274	P2 LS37	楕円形	25	20	19.81			
SD274	P3 LK37	円形	18	18	19.79			
SD274	P4 LS38	円形	20	19	19.70	○		
SD274	P5 LK38	円形	22	20	19.83			
SD275	P1 LS36	円形	32	32	19.62			中世陶器
SD275	P2 LS36	円形	47	46	19.58			
SD275	P3 LK36	円形	34	34	19.44	○		
SD275	P4 LS37	楕円形	49	26	21	19.72	○	
SD275	P5 LK37	正方形	49	38	23	19.71		
SD275	P6 LK37	楕円形	37	31	13	19.72		
SD275	P7 LS37	円形	24	24	16	19.58		
SD275	P8 LK37	円形	23	23	16	19.80		
SD275	P9 LK37	円形	24	23	16	19.66		
SD279	P1 MC31	正方形	24	22	12	19.68		
SD279	P2 MC36	楕円形	20	22	12	19.48		
SD279	P3 MC36	楕円形	20	21	12	19.62		
SD279	P4 MC36	楕円形	20	21	12	19.62		
SD279	P5 MC36	楕円形	20	21	12	19.62		
SD279	P6 MC36	楕円形	20	21	12	19.62		
SD279	P7 MC36	楕円形	20	21	12	19.62		
SD279	P8 MC36	楕円形	20	21	12	19.62		
SD279	P9 MC36	楕円形	20	21	12	19.62		
SD279	P10 MC36	楕円形	20	21	12	19.62		
SD279	P11 MC36	楕円形	20	21	12	19.62		
SD279	P12 MC36	楕円形	20	21	12	19.62		
SD281	P1 LT46	楕円形	36	32	16	19.22	○	
SD281	P2 LT46-47	正方形	32	30	40	19.22	○	
SD281	P3 LS-LT47	楕円形	49	29	28	19.20		
SD281	P4 LS47	楕円形	36	30	24	19.26	○	平明路製品6
SD281	P5 LS47	円形	20	20	36	19.18	○	
SD281	P6 LT-MAG	円形	40	40	28	19.34	○	
SD281	P7 LT47	正方形	38	38	40	19.22	○	鉄鋤2
SD281	P8 LS47	正方形	40	30	32	19.20	○	
SD281	P9 LS48	円形	30	28	32	19.18	○	鉄鋤1
SD281	P10 MA47	楕円形	44	40	46	19.18	○	鉄鋤5根目1

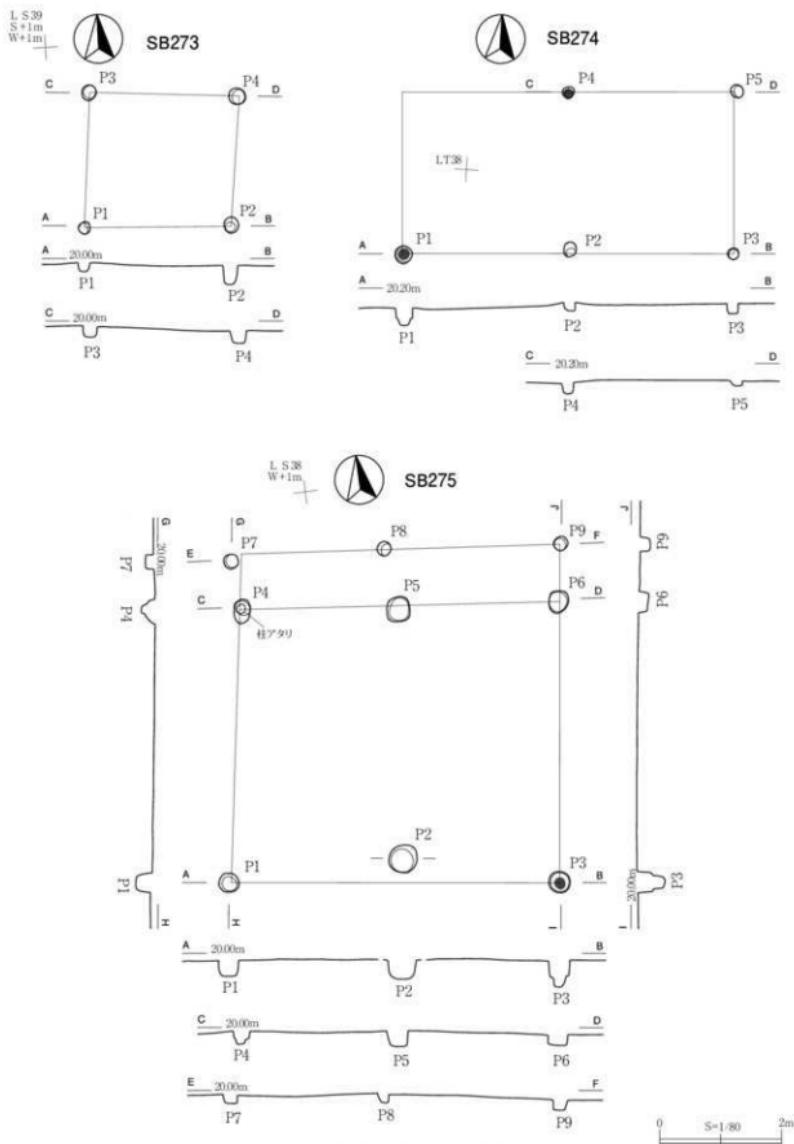
第4表 柱穴列一覧

遺構名	棟方位	平面規模	総長(m)	柱間(m)	柱頭方径(m)	柱径(m)	底面標高(m)	備考
SA17	N - 16° - E	4間	11.80	2.03 ± 0.23	0.31	-	19.44 ± 0.08	
SA330	N - 59° - W	9間	23.74	2.61 ± 0.16	0.34	0.14	19.41 ± 0.11	柱間は 2.74 ± 0.07 m と 2.45 ± 0.08 m が交差
SA404	N - 17° - E	2間	5.42	2.56 ± 0.01	0.31	-	19.29 ± 0.08	
SA405	N - 74° - W	3間	7.84	2.52 ± 0.04	0.28	-	19.36 ± 0.09	
SA467	N - 2° - W	2間	3.28	1.55 ± 0.33	0.27	-	19.35 ± 0.05	SB406 の下層の可能性あり
SA469	N - 46° - E	4間	7.4	1.80 ± 0.07	0.22	-	19.52 ± 0.08	
SA470	N - 14° - W	3間	7.67	2.49 ± 0.09	0.26	0.15	19.65 ± 0.06	
SA471	N - 52° - W	4間	18.72	4.60 ± 0.10	0.22	0.12	19.44 ± 0.07	

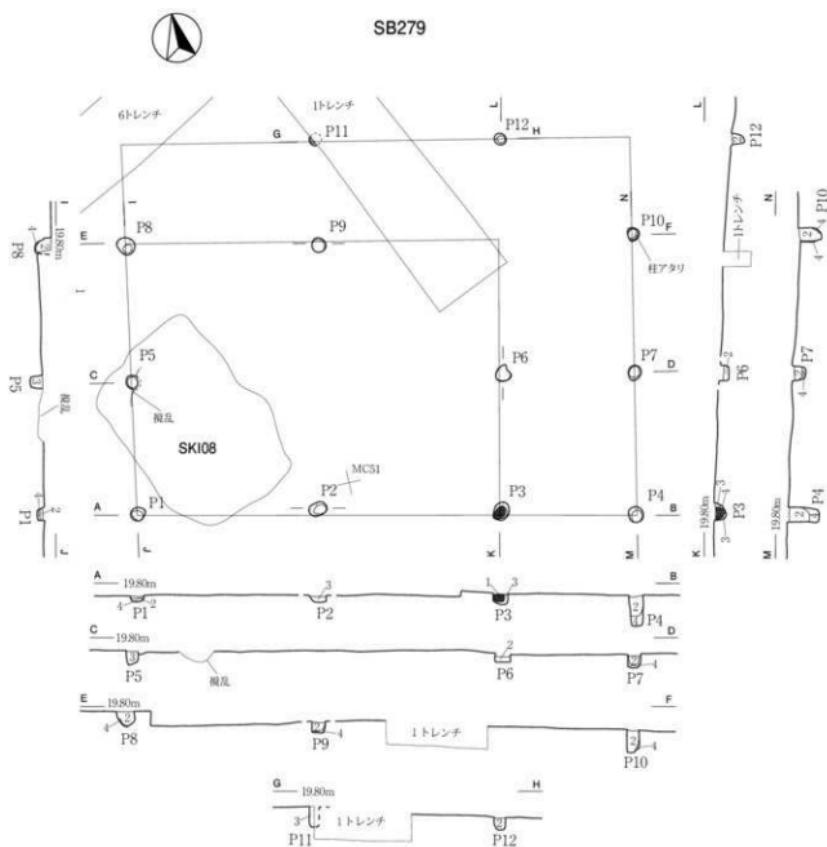
網羅遺構	番号	地区	平面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	柱頭跡	柱アタリ	出土遺物
SA17	P1	MD51	楕円形	25	21	16	19.56			
SA17	P2	MD52	不明	-	-	32	19.32			
SA17	P3	MD52	楕円形	33	29	14	19.50			
SA17	P4	MCS3	楕円形	36	33	16	19.40			
SA17	P5	MCS3	楕円形	29	23	14	19.44			
SA320	P1	MA46	楕円形	28	21	13	19.53			
SA320	P2A	LT45	円形	31	30	12	19.60	○		
SA320	P2B	LT45	円形	30	30	17	19.56		○	
SA320	P3	LT45	円形	36	34	16	19.52	○		
SA320	P4A	LS45	円形	30	28	32	19.36	○		
SA320	P4B	LS45	不明	-	-	13	19.55			
SA320	P5A	LS44・45	円形	34	32	26	19.38	○		
SA320	P5B	LS44・45	不明	30	-	20	19.46			
SA320	P6A	LR44	円形	35	33	24	19.34	○		
SA320	P6B	LR44	不明	28	-	19	19.39			
SA320	P7A	LR44	楕円形	33	28	14	19.44	○	近世?磁器1	
SA320	P7B	LR44	不明	-	-	7	19.51			
SA320	P8	LR43・44	円形	40	40	18	19.44	○	鉄釘1	
SA320	P9	LP43	楕円形	36	31	31	19.33	○		
SA320	P10	LP43	楕円形	33	30	29	19.20	○		
SA404	P1	LR40	楕円形	29	22	40	19.20			
SA404	P2	LR40	円形	26	24	36	19.29			
SA404	P3	LR39	楕円形	37	32	23	19.39			
SA405	P1	LP40	長方形	29	26	37	19.24			
SA405	P2	LP40	正方形	29	29	26	19.37			
SA405	P3	LO40	楕円形	28	21	10	19.50			
SA405	P4	LN40	正方形	26	24	26	19.34			
SA467	P1	LN40	円形	27	25	12	19.42			
SA467	P2	LN40	正方形	30	29	21	19.29			
SA467	P3	LN41	円形	24	22	15	19.33			
SA469	P1	MB38	円形	20	19	41	19.47			
SA469	P2	MB38	円形	19	19	28	19.58			
SA469	P3	MB39	楕円形	29	25	30	19.52			
SA469	P4	MA39	円形	20	18	37	19.40		中世陶器1	
SA469	P5	MA39	楕円形	22	16	20	19.61			
SA470	P1	LT37	円形	25	23	12	19.75	○		
SA470	P2	LT37	円形	23	23	24	19.62	○		
SA470	P3	LT38	正方形	30	30	23	19.63			
SA470	P4	LT38	楕円形	26	22	21	19.58			
SA471	P1	MB46	円形	23	22	24	19.42			
SA471	P2	MA45	正方形	20	20	14	19.57	○		
SA471	P3	LT44	正方形	21	21	26	19.44			
SA471	P4	LS44	長方形	27	21	30	19.39			
SA471	P5	LR43	円形	21	21	21	19.39			

第5表 柱穴様ピット一覧

番号	地区	平面形	孔径 (cm)	孔深 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	柱穴 寸法 (cm)	出土遺物	備考 (前→後)
SKP59	MC39	楕円形	24	20	9	19.76			
SKP10	MA-BB50	楕円形	32	28	18	19.61			
SKP49	MC70	円形	20	18	10	19.55			
SKP41	MA49	楕円形	40	28	21	19.41			
SKP45	MA48	楕円形	22	20	2	19.48			
SKP50	MA-BB49	楕円形	21	18	15	19.47			
SKP52	BB49	正方形	15	14	22	19.38			
SKP64	J-T38	楕円形	26	27	17	19.72	○ 鉄環		
SKP68	MC29	円形	22	21	32	19.62	○		
SKP71	MC29	円形	22	20	27	19.64			
SKP72	MC29	円形	15	14	6	19.78			
SKP74	MC28	楕円形	24	20	32	19.61	○ 鉄鍊系鉄釦		
SKP75	MC28	円形	21	19	26	19.60			
SKP76	BB+MC28	円形	16	15	9	19.84			
SKP79	MC29	円形	22	21	28	19.59			
SKP93	MC40	円形	19	18	9	19.75	○ 鉄鍊系鉄釦		
SKP93	MC38	円形	26	25	24	19.58			
SKP93	J-E37	正方形	27	26	13	19.75	○		
SKP96	J-S37	正方形	26	26	11	19.84	○		
SKP100	J-S-LT37	円形	40	38	13	19.74			
SKP102	J-S-LT38	円形	38	38	20	19.66	○		
SKP106	LS36	円形	17	16	22	19.69			
SKP108	J-E37	円形	20	19	12	19.74			
SKP113	J-S37	円形	24	23	13	19.76			
SKP114	J-S37	円形	25	25	7	19.88			
SKP119	J-S38	円形	23	21	30	19.60			
SKP125	J-T37	円形	29	27	12	19.72			
SKP128	J-S37	円形	34	32	9	19.84			
SKP129	J-S37	円形	27	27	21	19.74			
SKP136	J-E37	楕円形	24	20	9	19.76			
SKP131	J-S37	円形	25	23	5	19.80			
SKP132	J-E38	円形	19	19	16	19.72			
SKP134	J-T37	円形	28	26	32	19.51	○		
SKP135	J-S38	円形	23	23	17	19.70			
SKP136	J-S38	楕円形	20	17	14	19.72			
SKP138	LS36	円形	24	23	19.63	○			
SKP139	J-S38	楕円形	24	20	25	19.62	○ 鉄釘		
SKP140	J-S38	円形	28	27	9	19.81			
SKP141	J-S-LT36	楕円形	34	30	4	19.79	○		
SKP142	J-E38	円形	19	18	10	19.75			
SKP144	J-E38	楕円形	26	23	19	19.66	○		
SKP145	J-E37	円形	16	16	14	19.83			
SKP149	BB51	円形	27	27	11	19.46			
SKP157	J-T-WA47	楕円形	26	26	36	19.29	○ 土師質土器		
SKP165	J-T46	不整形	52	46	17	19.41			
SKP166	MA47	円形	23	23	30	19.34			
SKP167	J-T49	楕円形	19	16	1	19.38			
SKP168	J-T49	楕円形	20	18	1	19.33	○		
SKP173	J-S48	楕円形	22	29	12	19.24	○		
SKP176	J-B-L547	楕円形	26	23	24	19.24			
SKP179	MA48	円形	17	17	25	19.20			
SKP196	MA48	円形	11	10	16	19.41			
SKP203	MA45	長方形	50	44	35	19.38			
SKP205	T-T45	長方形	47	36	35	19.40			
SKP211	MC42	楕円形	31	26	30	19.67			
SKP212	BB42	円形	20	20	6	19.90			
SKP213	BB42	円形	21	20	10	19.82			
SKP216	J-S45	円形	25	33	11	19.55	○		
SKP217	J-S45	正方形	37	37	23	19.43	○		
SKP227	MA44	楕円形	34	22	18	19.62	○ 土師質土器		
SKP232	J-T38	円形	20	19	13	19.72			
SKP233	J-S37	円形	28	24	8	19.86			
SKP234	J-E37	円形	29	18	8	19.80			
SKP236	J-E36	円形	23	22	17	19.68			
SKP238	LS38	長方形	24	21	20	19.70	○ 不明鉄製品		
SKP245	LC36	円形	22	20	13	19.69			
SKP248	MC41	楕円形	23	20	21	19.72	○		
SKP251	MC41	円形	23	22	31	19.63	○		
SKP252	BB-MC40	円形	24	24	37	19.56	○		
SKP253	BB40	円形	21	20	22	19.67			
SKP254	BB40-J-E41	円形	20	19	14	19.72			
SKP256	MC58	円形	21	20	10	19.46			
SKP257	MC58	円形	19	19	16	19.41			
SKP258	MC59	円形	20	16	12	19.47			
SKP259	MC59	正方形	23	-	14	19.37	○		
SKP261	MC51	楕円形	17	14	4	19.50			
SKP262	MC50	楕円形	31	26	21	19.38	○ 鉄環		
SKP264	MC39	円形	15	15	22	19.79			
SKP265	MC39	円形	16	16	30	19.66			
SKP267	BB41	円形	22	20	16	19.72			
SKP271	MC39	円形	28	26	43	19.57	○		
SKP272	BB42	円形	17	14	37	19.59			
SKP278	BB42	楕円形	32	27	7	19.34			
SKP294	MC39	円形	15	15	21	19.75			
SKP295	BB42	楕円形	-	16	37	19.41			
SKP297	MC42	円形	28	26	69	19.23	○		
SKP299	BB42	楕円形	21	18	18	19.46			
SKP305	LB46	楕円形	21	19	18	19.34	○		
SKP306	LB46	円形	21	21	35	19.19	○		
SKP308	J-Q-LR46	円形	26	25	26	19.16	○ 近現代鐵頭		
SKP345	MC34	楕円形	24	20	38	19.49			
SKP350	LB45	楕円形	42	38	11	19.39			
SKP353	LB45	円形	24	24	40	19.96	○		
SKP355	LB46	円形	19	17	22	19.23	○		
SKP357	LT41	円形	20	20	-	-			
SKP358	LS40	円形	18	18	-	-			
SKP359	LT41	円形	18	18	-	-			
SKP360	LT39	円形	16	16	-	-			
SKP365	LT38	楕円形	39	35	25	19.61	○		
SKP368	LS38-39	正方形	36	-	26	19.67			
SKP370	LS38-39	楕円形	24	21	25	19.67			
SKP373	LS45	円形	22	20	24	19.40			
SKP376	LT35	楕円形	16	15	30	19.50			
SKP377	LB-LS43	楕円形	30	27	27	19.37	○		
SKP378	LT43	正方形	28	-	-	-			
SKP382	LS43	楕円形	49	40	49	19.14			
SKP385	LS35	楕円形	22	18	37	19.51			
SKP391	MA-BB42	円形	20	20	26	19.67			
SKP396	LT37	楕円形	11	7	19	19.69			
SKP397	LB41	楕円形	34	20	25	19.40			
SKP437	LS41	長方形	30	26	13	19.54			
SKP439	LT41-42	円形	34	32	26	19.29			
SKP440	LT41	正方形	36	37	20	19.38			
SKP442	D42	円形	22	22	29	19.35			
SKP443	LT43	円形	28	28	22	19.38			
SKP446	LT42	楕円形	46	46	52	19.09			
SKP447	LT43	楕円形	33	26	23	19.32			
SKP451	MC38	楕円形	23	18	32	19.35			
SKP452	MC38	円形	28	25	24	19.48			
SKP453	LT38	円形	22	22	20	19.62			
SKP458	LT39	正方形	19	18	8	19.48			
SKP459	LQ38	正方形	23	21	25	19.33			
SKP460	LT38	楕円形	28	25	31	19.25			
SKP461	LS38	円形	23	22	15	19.38			
SKP462	LS38	円形	22	20	16	19.24			
SKP464	LS37	楕円形	26	20	21	19.30			
SKP466	LN39	円形	23	21	36	19.16			



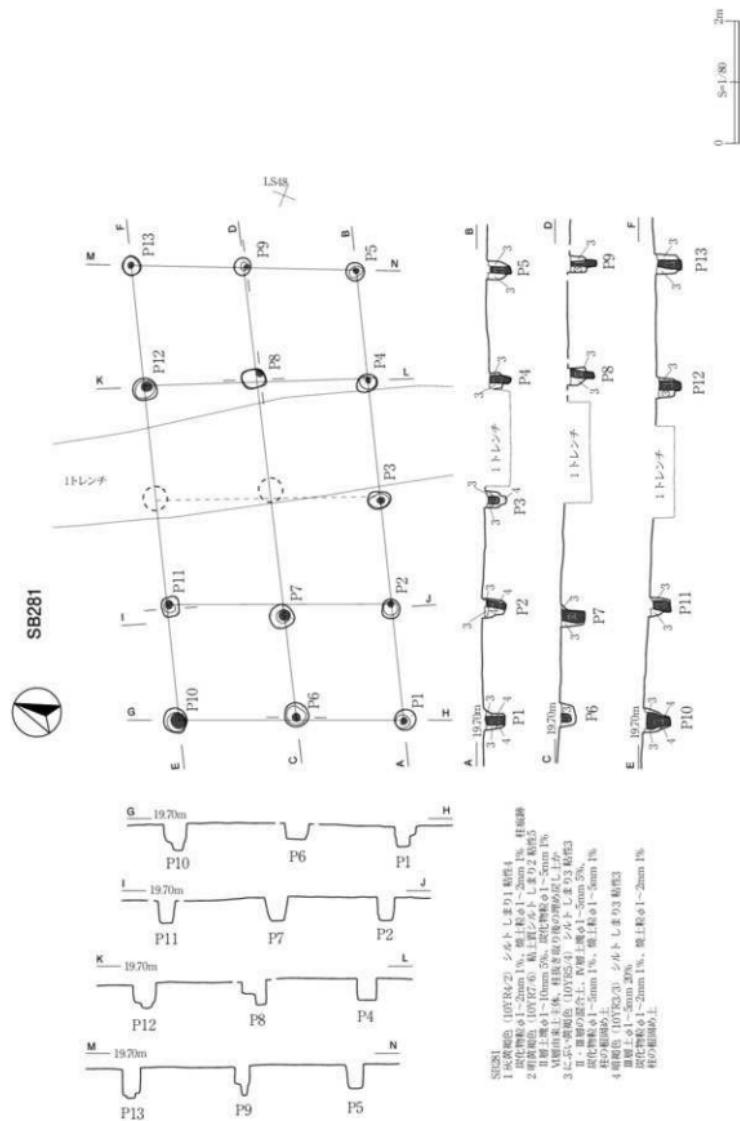
第8図 掘立柱建物跡 (1)



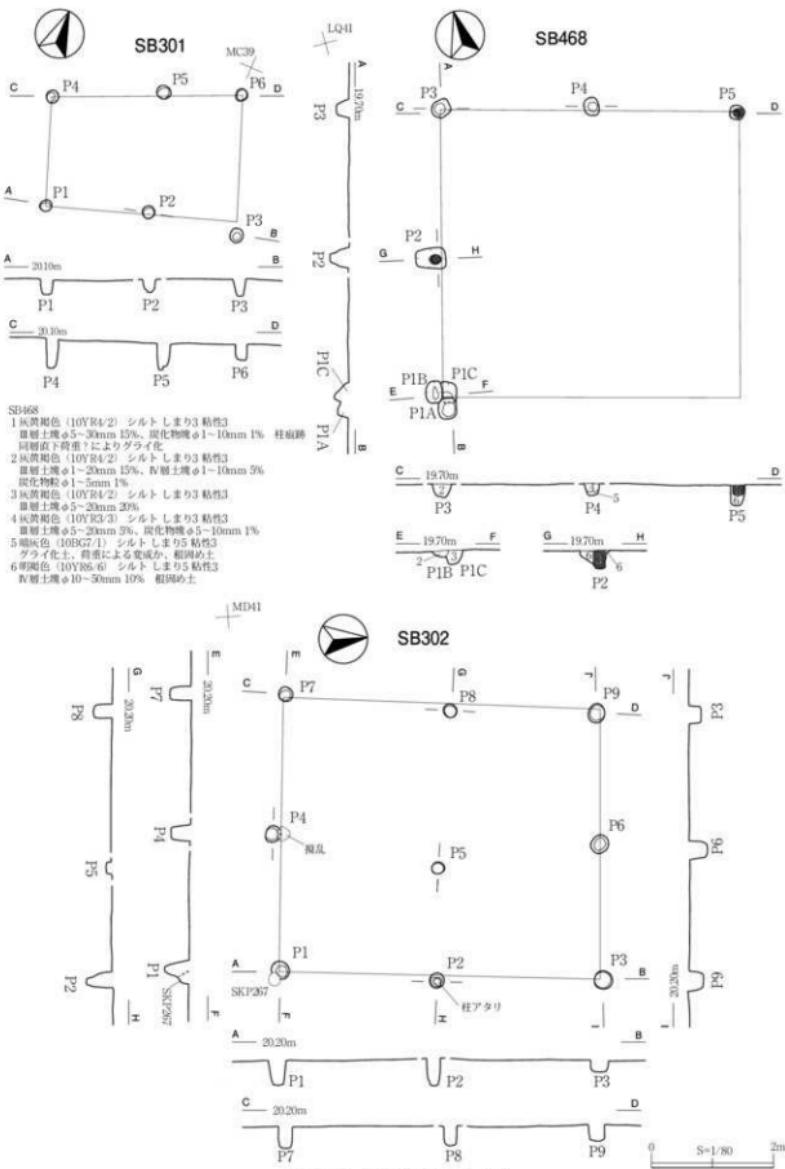
SB279
 1 黄褐色 (10YR4/2) シルト しまり2 粘性3
 漬化物・燒土粒 ϕ 1~2mm 1% 植物残骸
 2 黄褐色 (10YR5/6) シルト しまり3 粘性3
 烧土粒 ϕ 1~5mm 1% 漬化物粒 ϕ 1~2mm 3% 烧土粒 ϕ 1~2mm 3%
 3 黄褐色 (10YR5/6) シルト しまり3 粘性3
 烧土粒 ϕ 1~5mm 5% 漬化物粒 ϕ 1~2mm 1% 烧土粒 ϕ 1~2mm 1%
 4 黄褐色 (10YR3/3) シルト しまり4 粘性4
 烧土粒 ϕ 1~2mm 5%



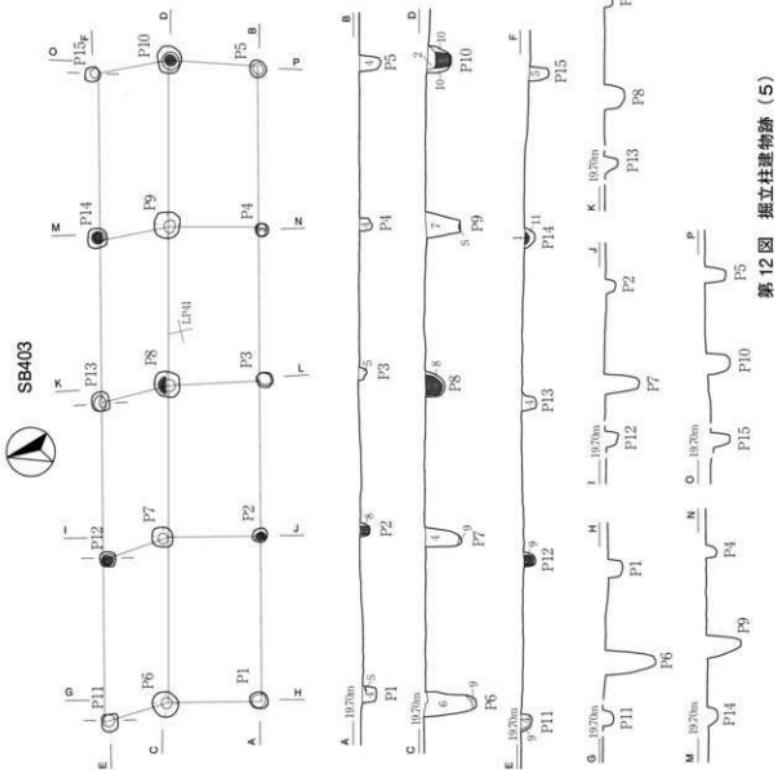
第9図 挖立柱建物跡 (2)

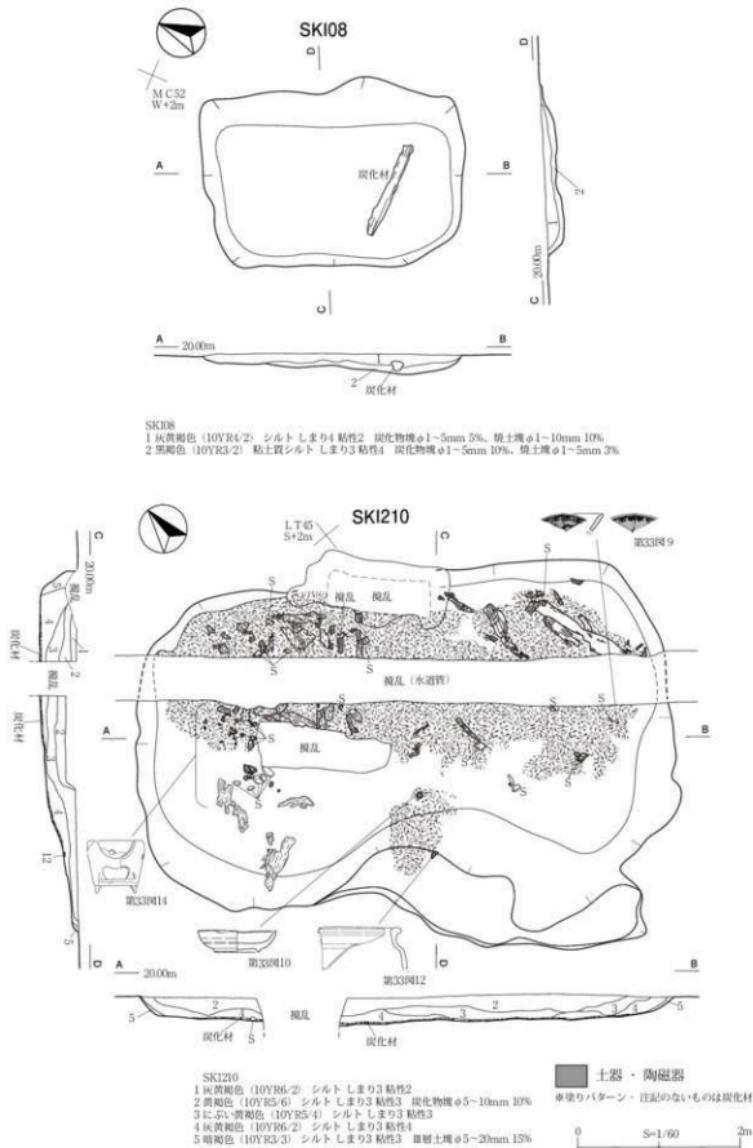


第10図 堀立柱建物跡（3）

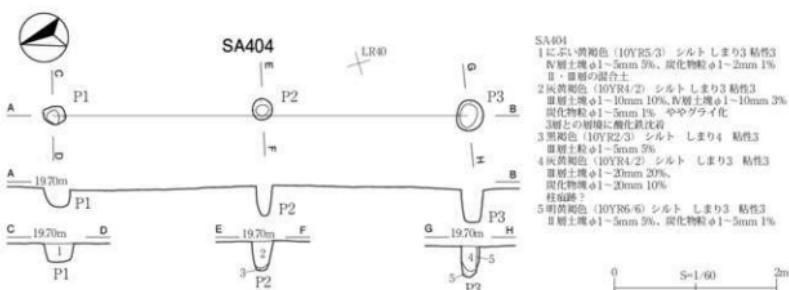
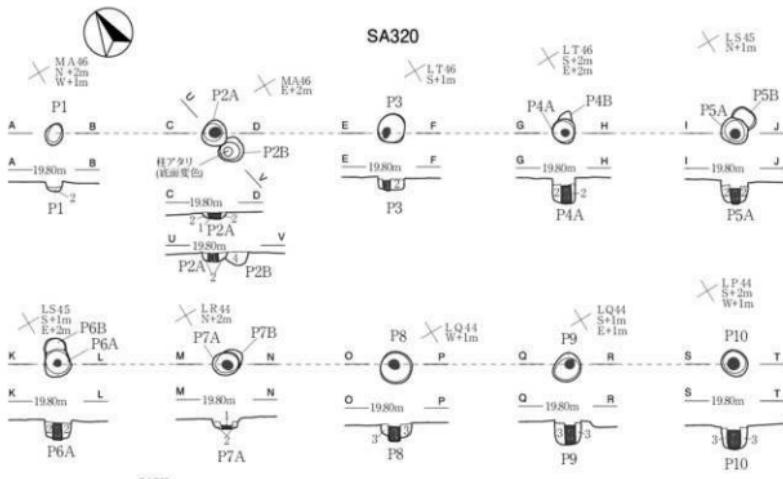
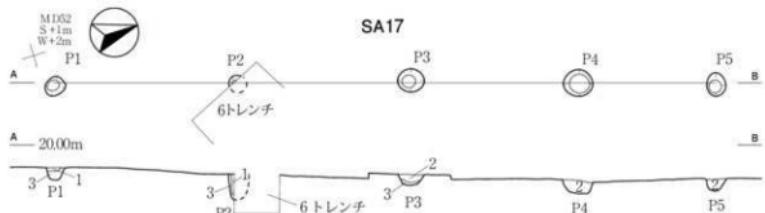


第11図 掘立柱建物跡（4）

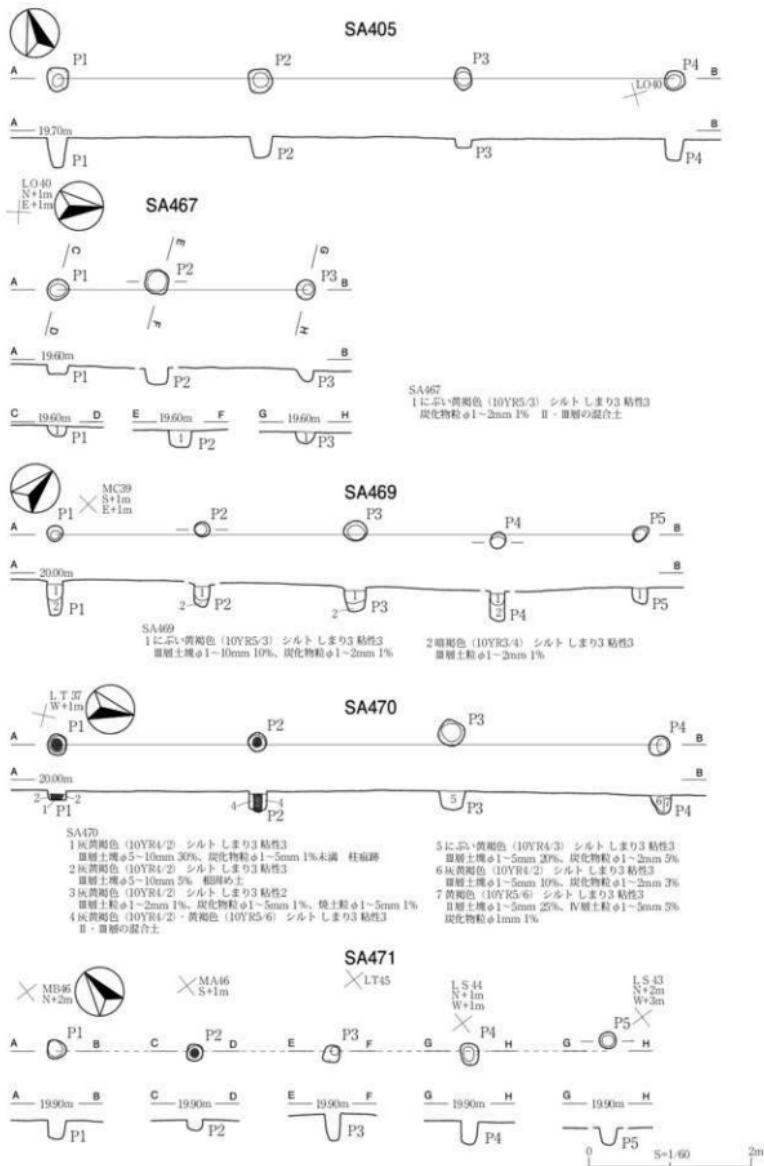


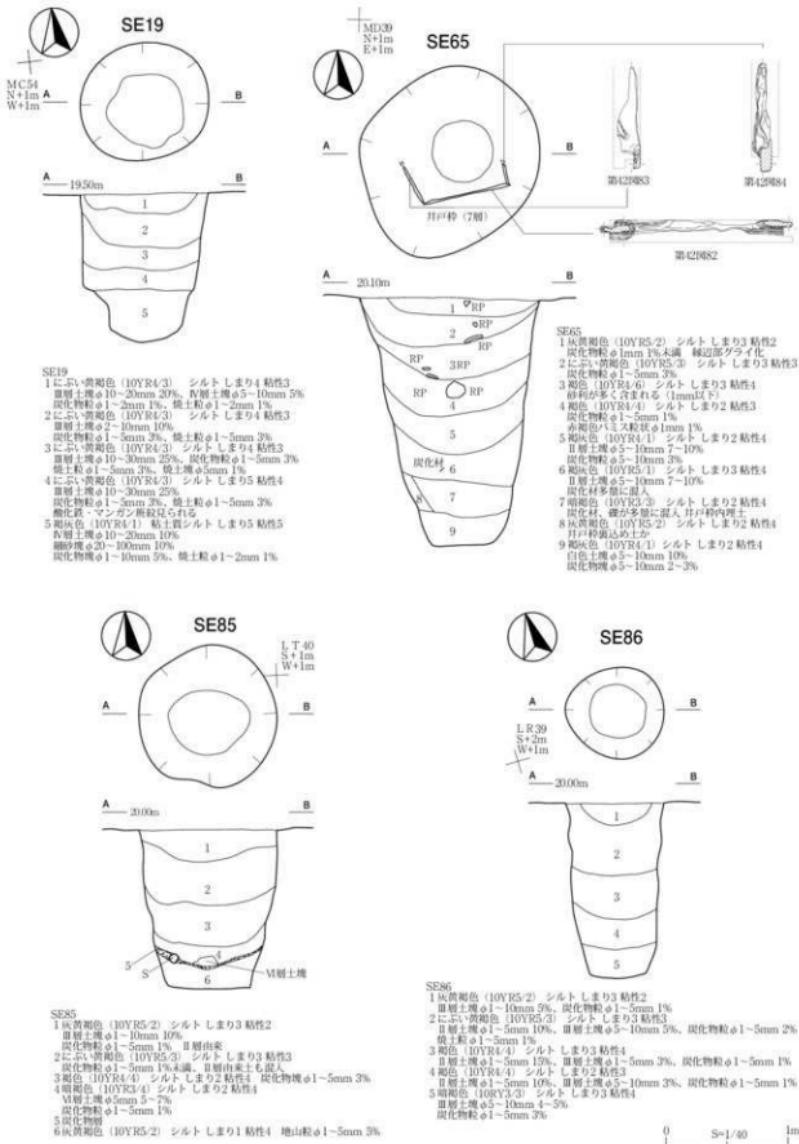


第13図 竪穴状遺構

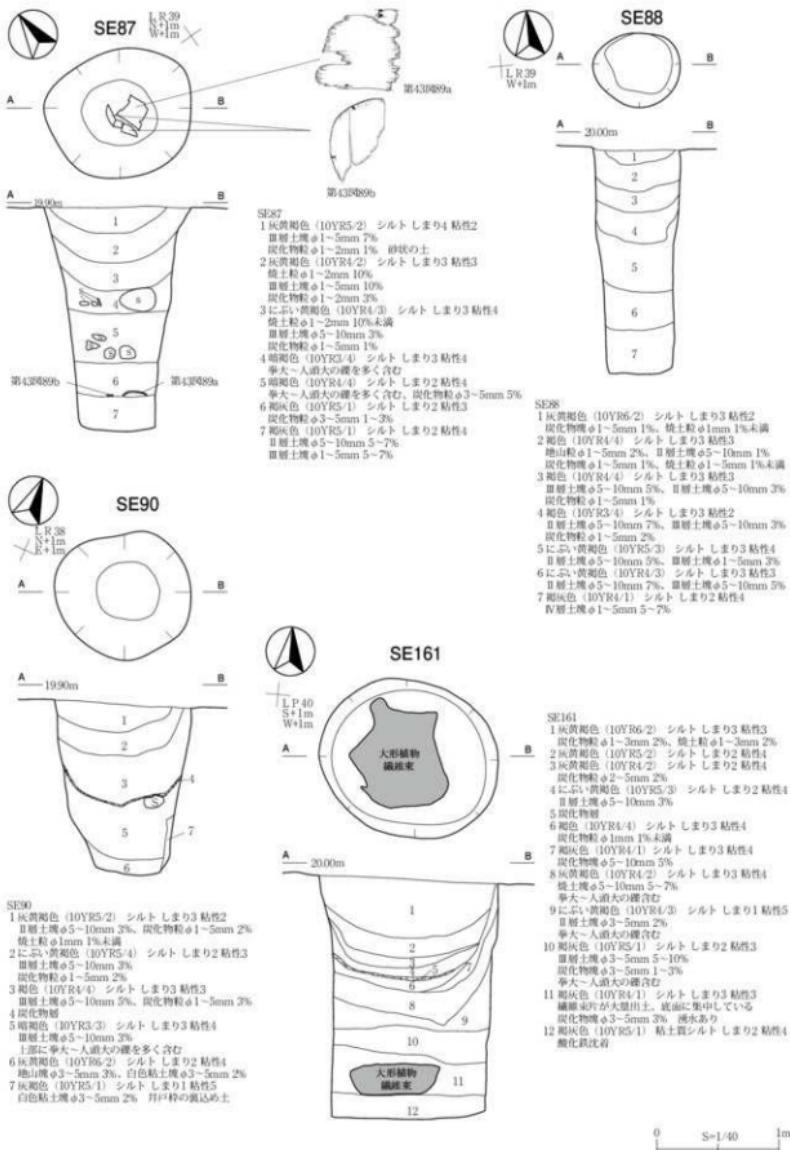


第14図 柱穴列(1)

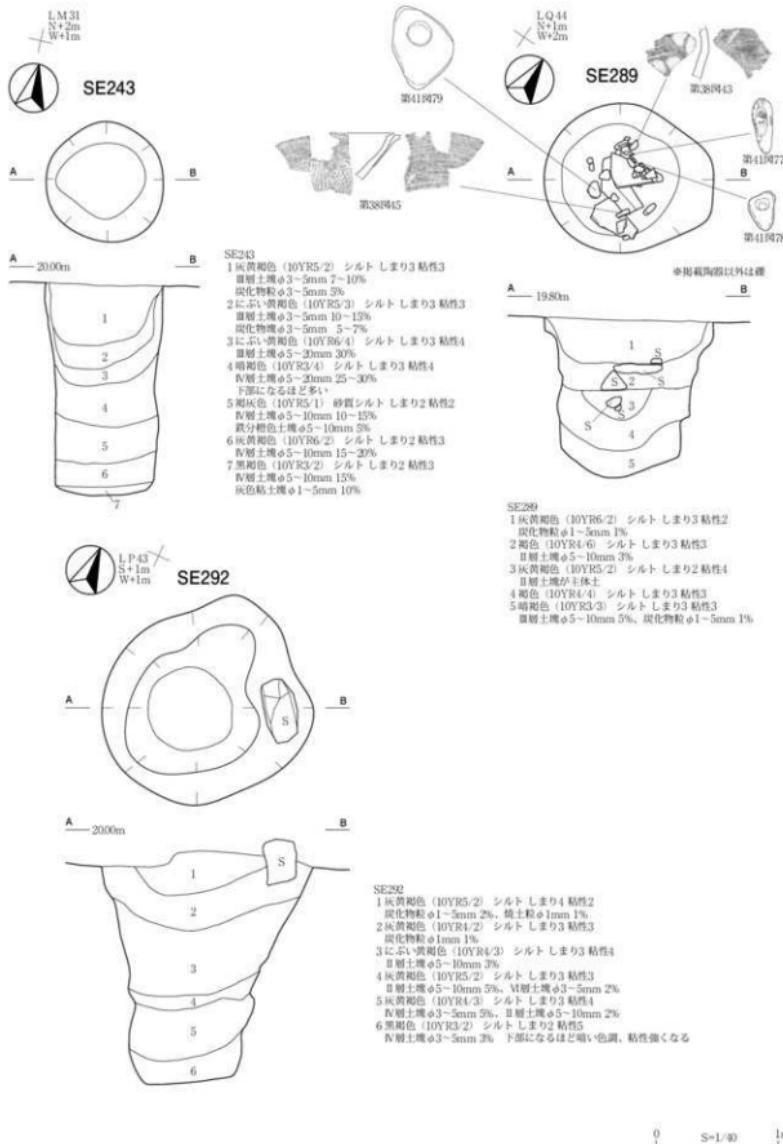




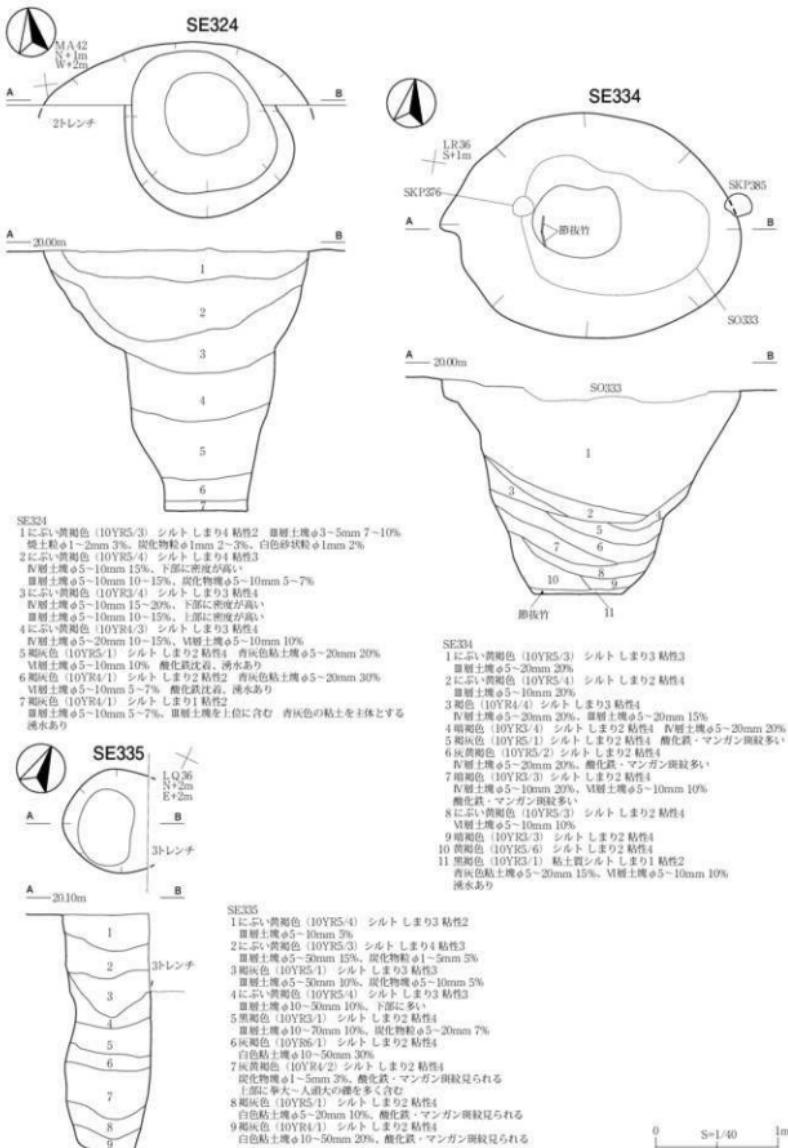
第16図 井戸跡(1)



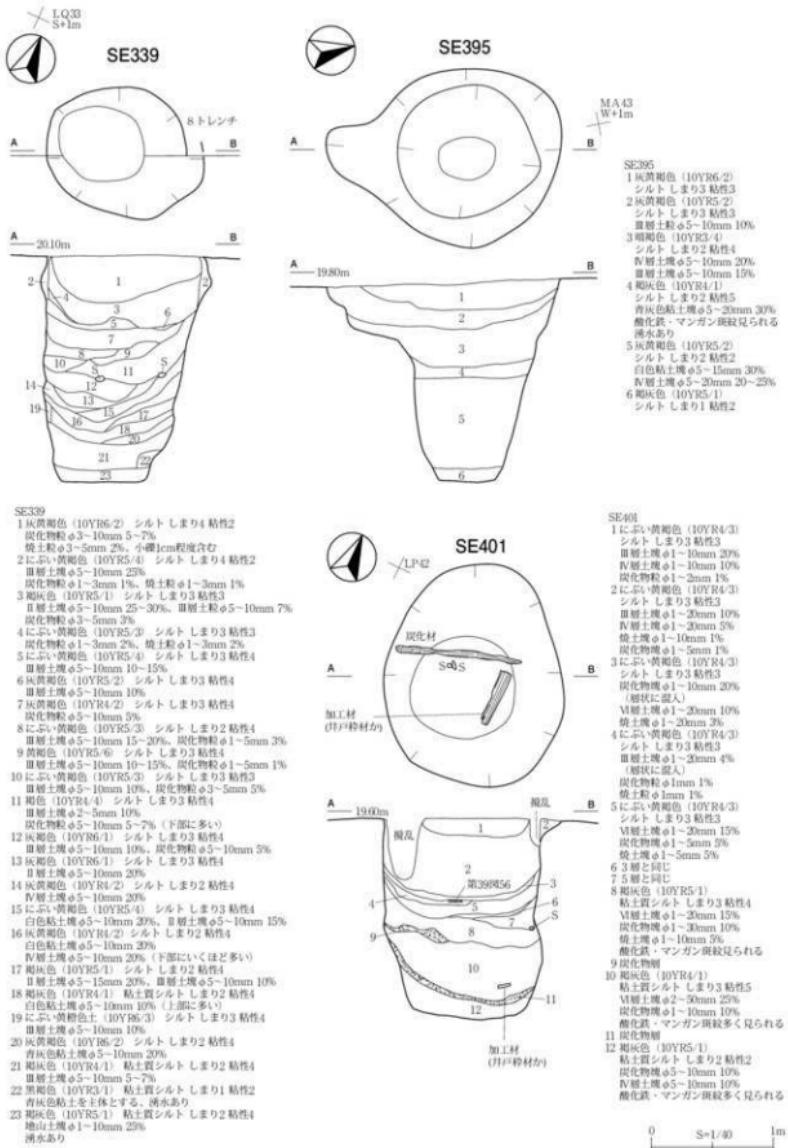
第17図 井戸跡 (2)



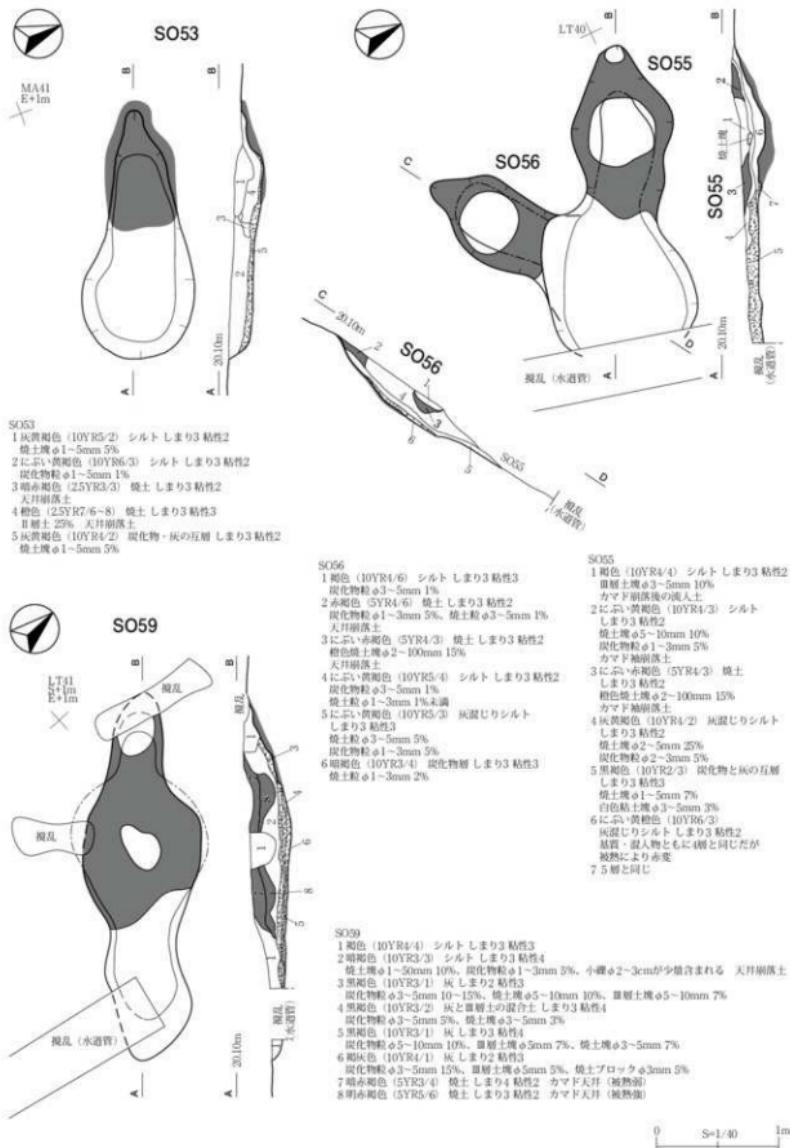
第18図 井戸跡(3)



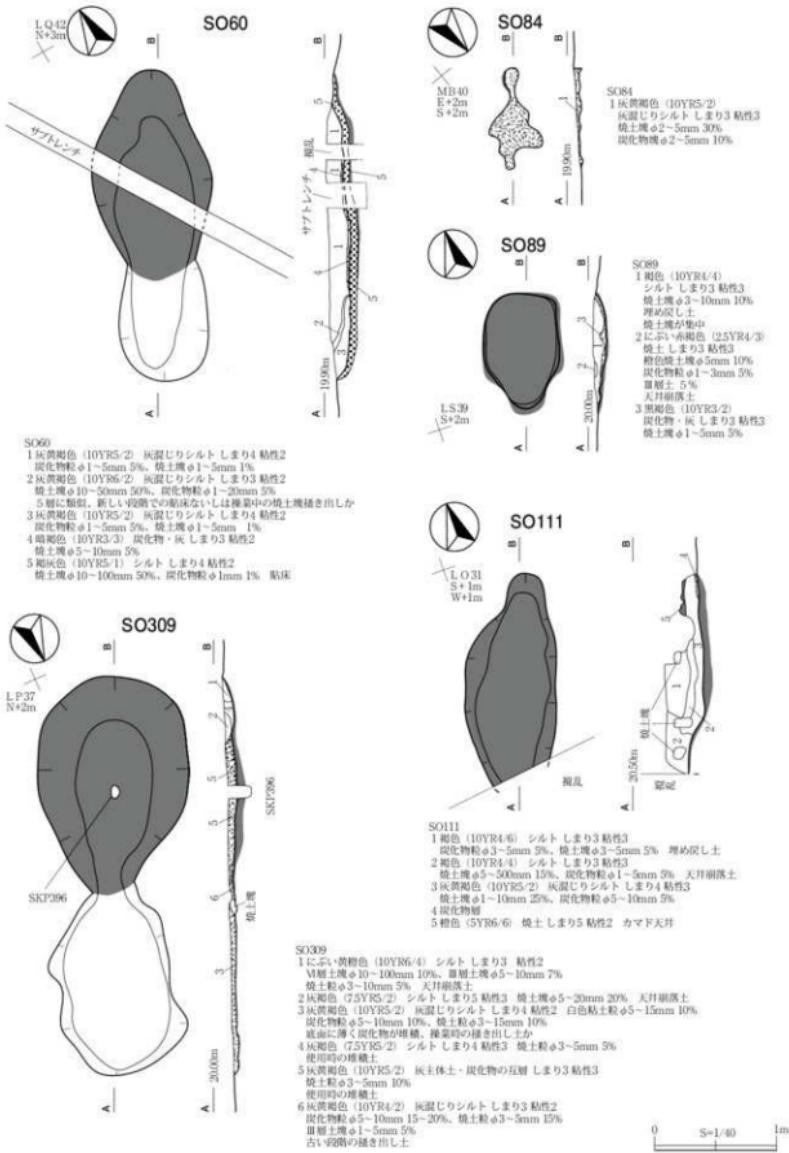
第19図 井戸跡 (4)



第20図 井戸跡 (5)

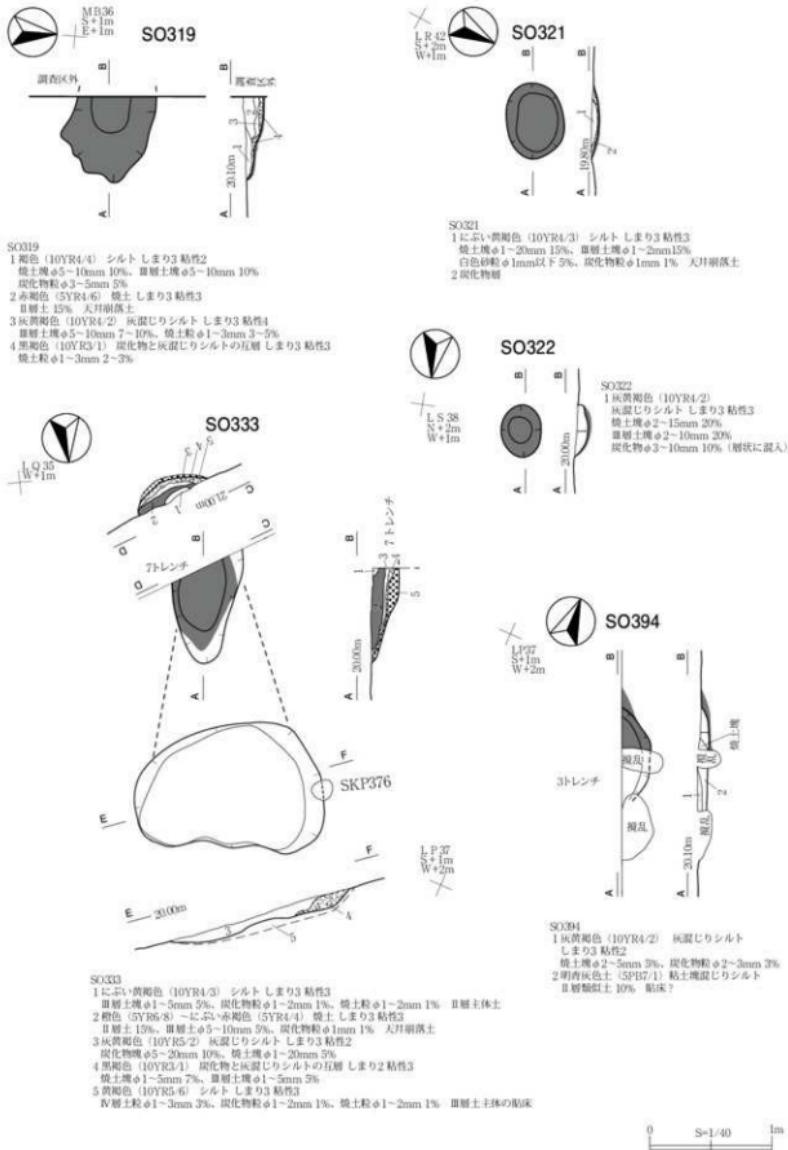


第21図 カマド状遺構（1）

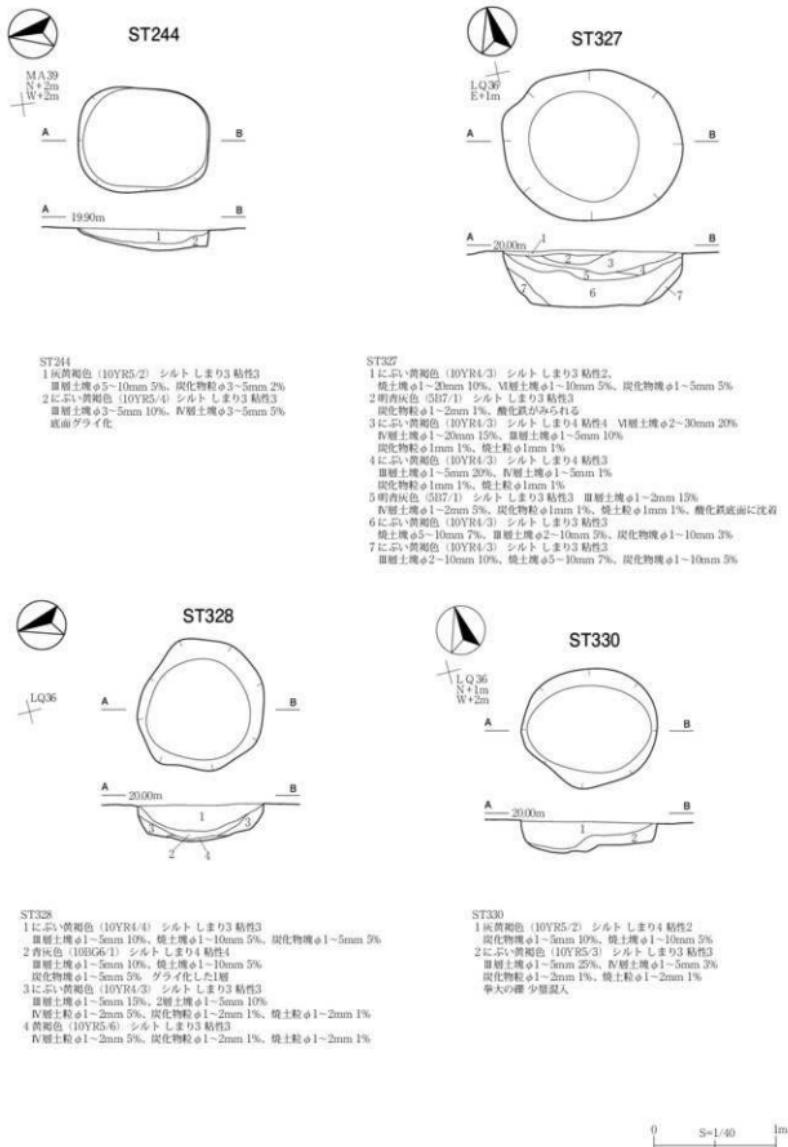


第22図 カマド状遺構（2）

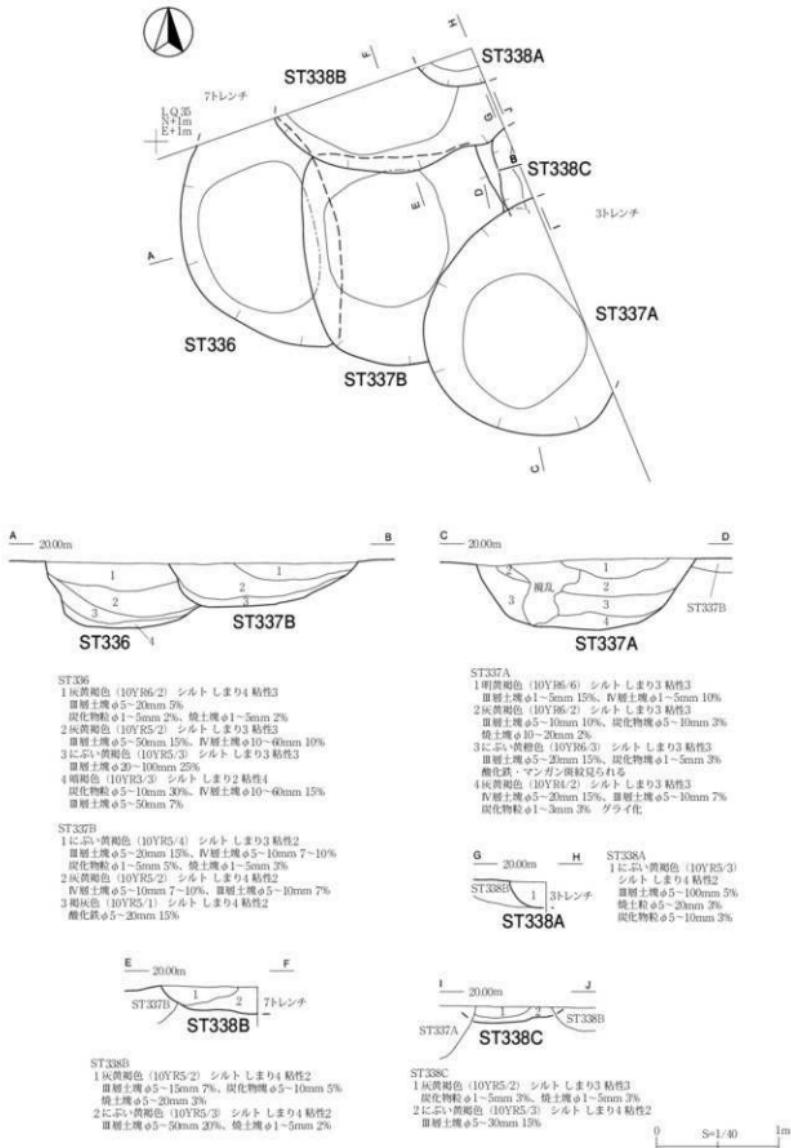
第3節 検出遺構と遺物



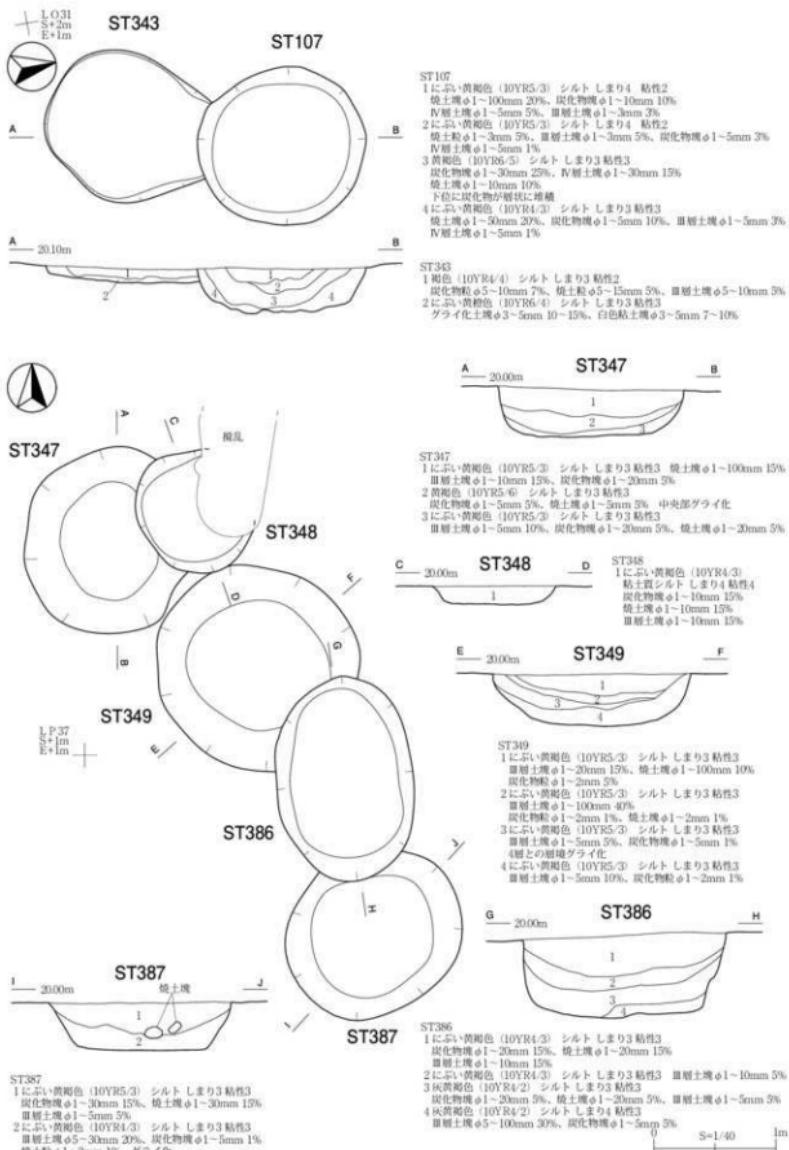
第23図 カマド状遺構(3)



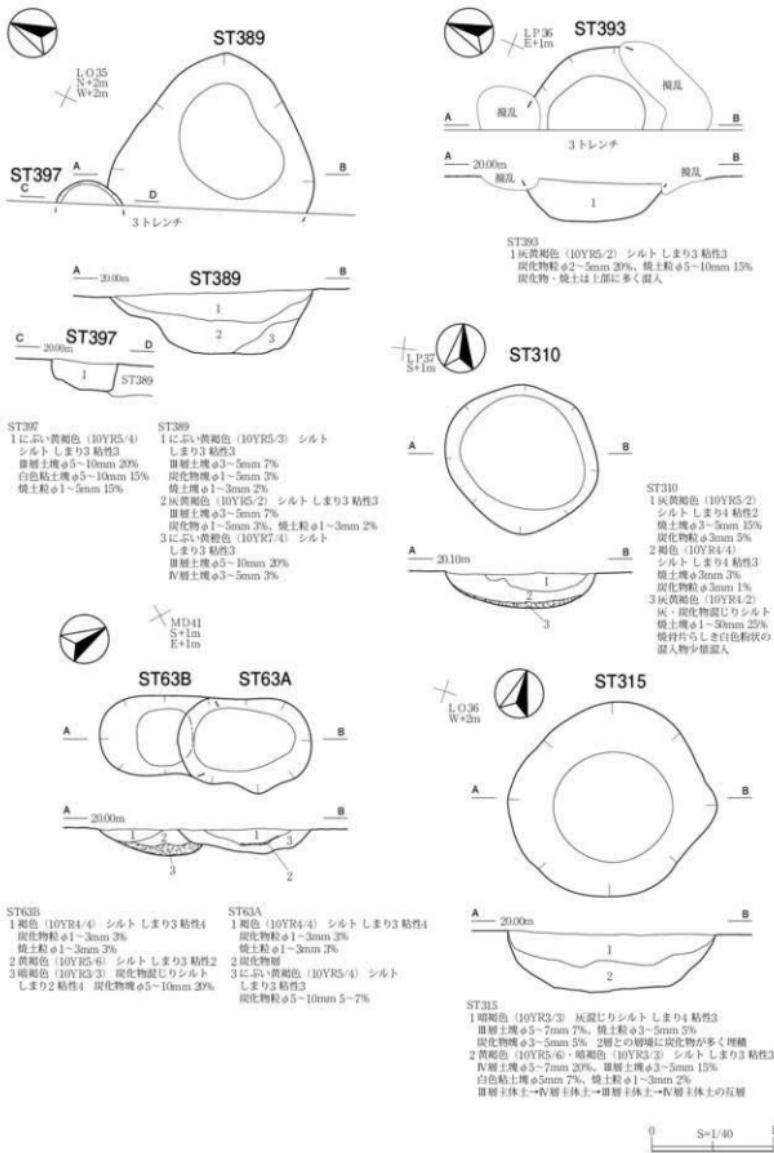
第24図 土坑墓（1）



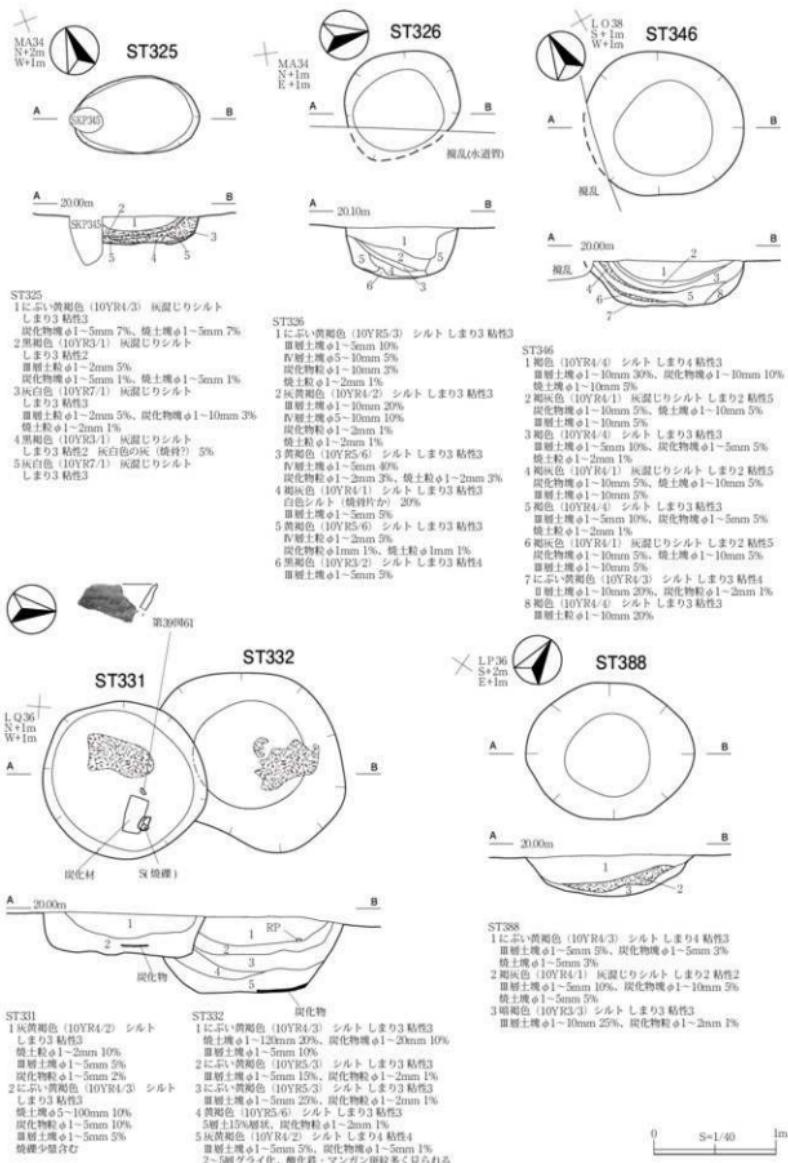
第25図 土坑墓(2)



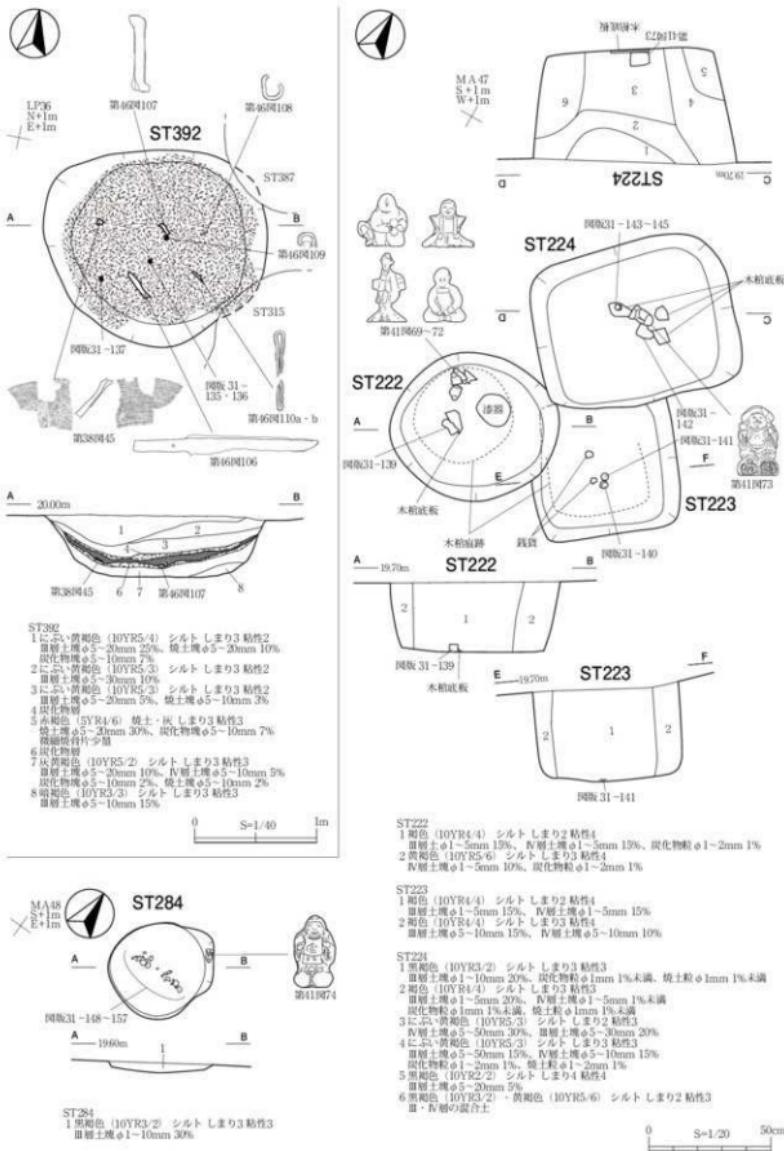
第26図 土坑墓(3)・火葬墓(1)



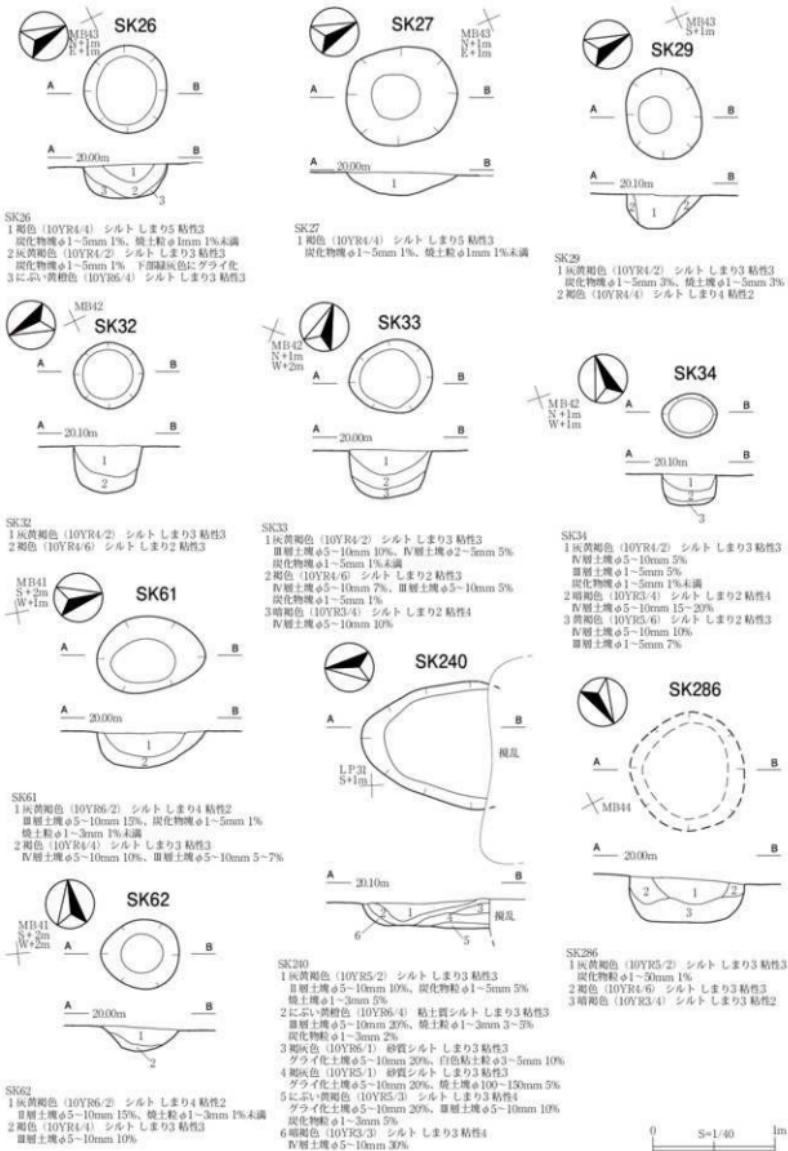
第27図 土坑墓(4)・火葬墓(2)



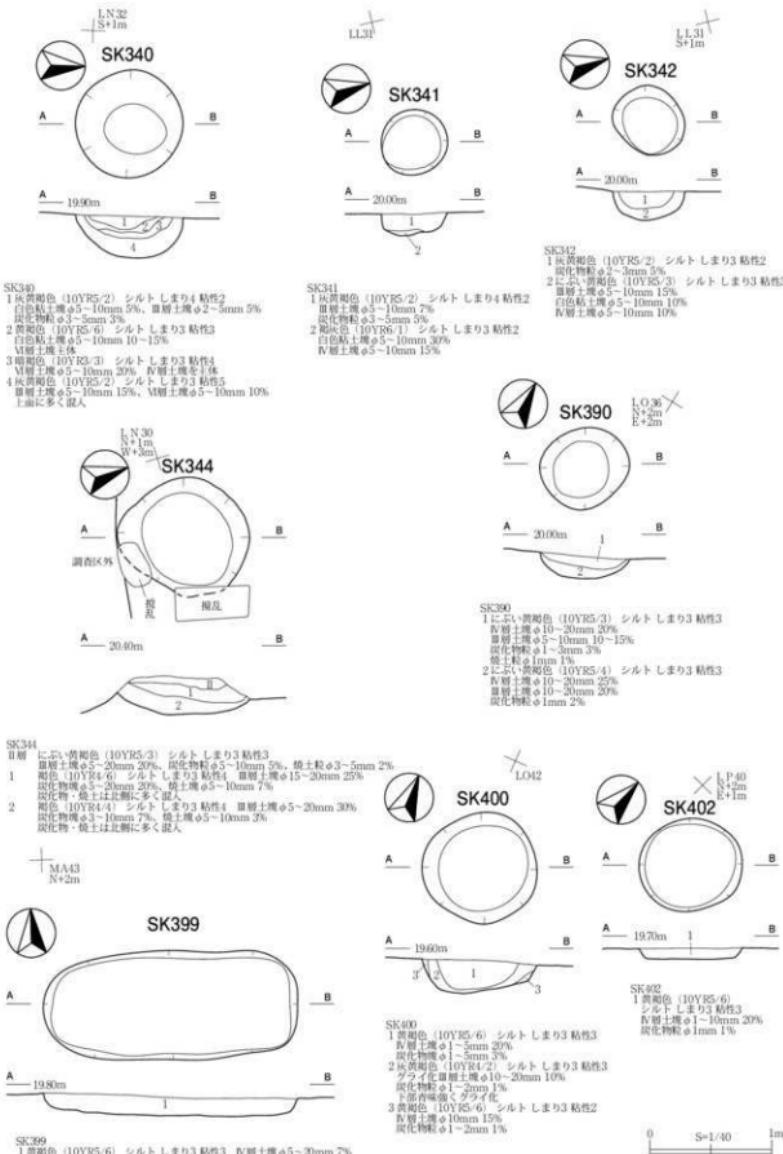
第28図 火葬墓 (3)



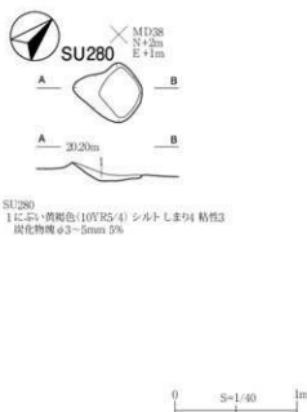
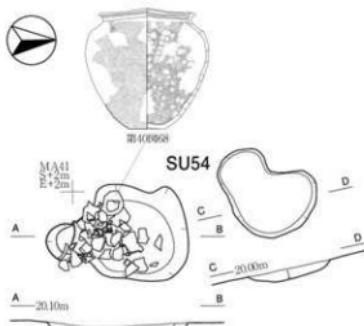
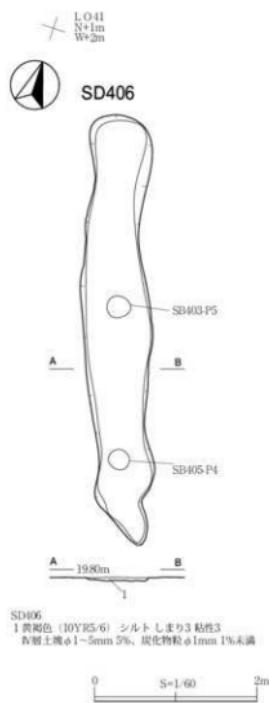
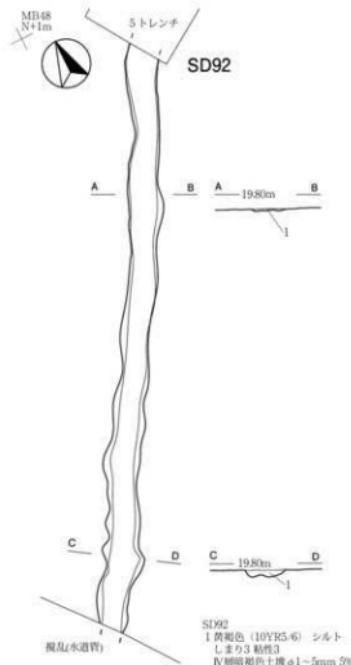
第29図 火葬墓(4)・木棺墓



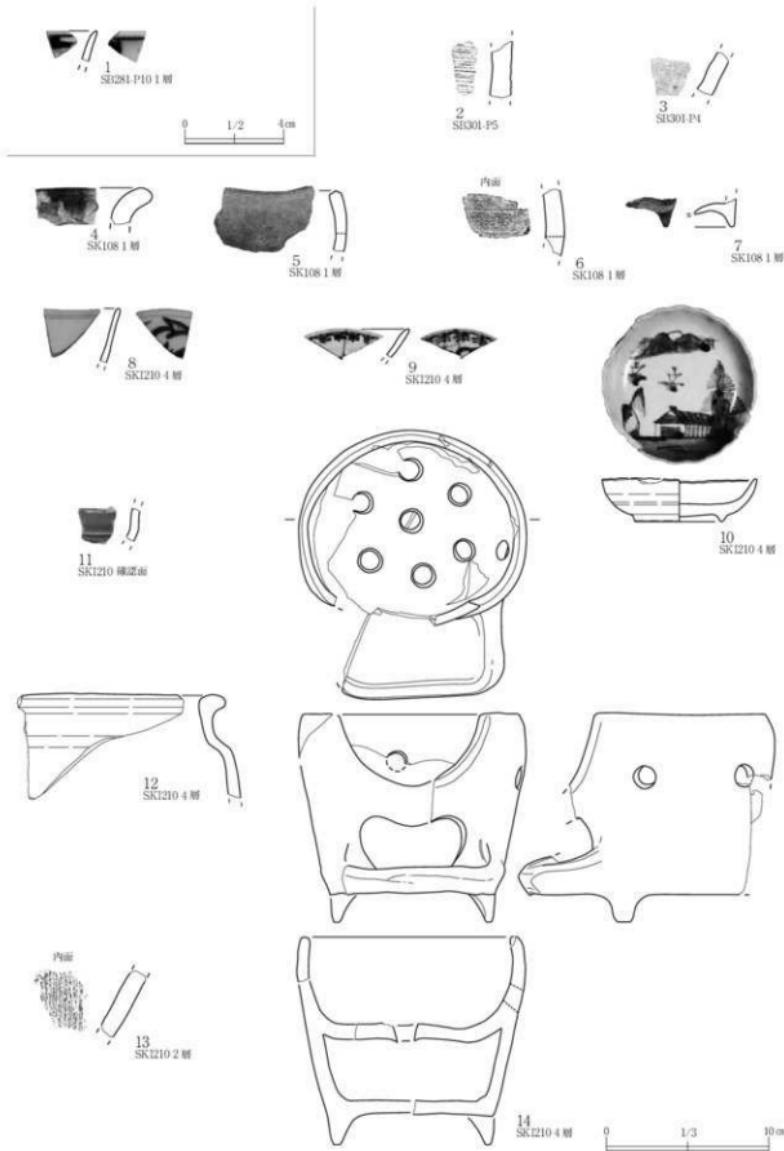
第30図 土坑(1)



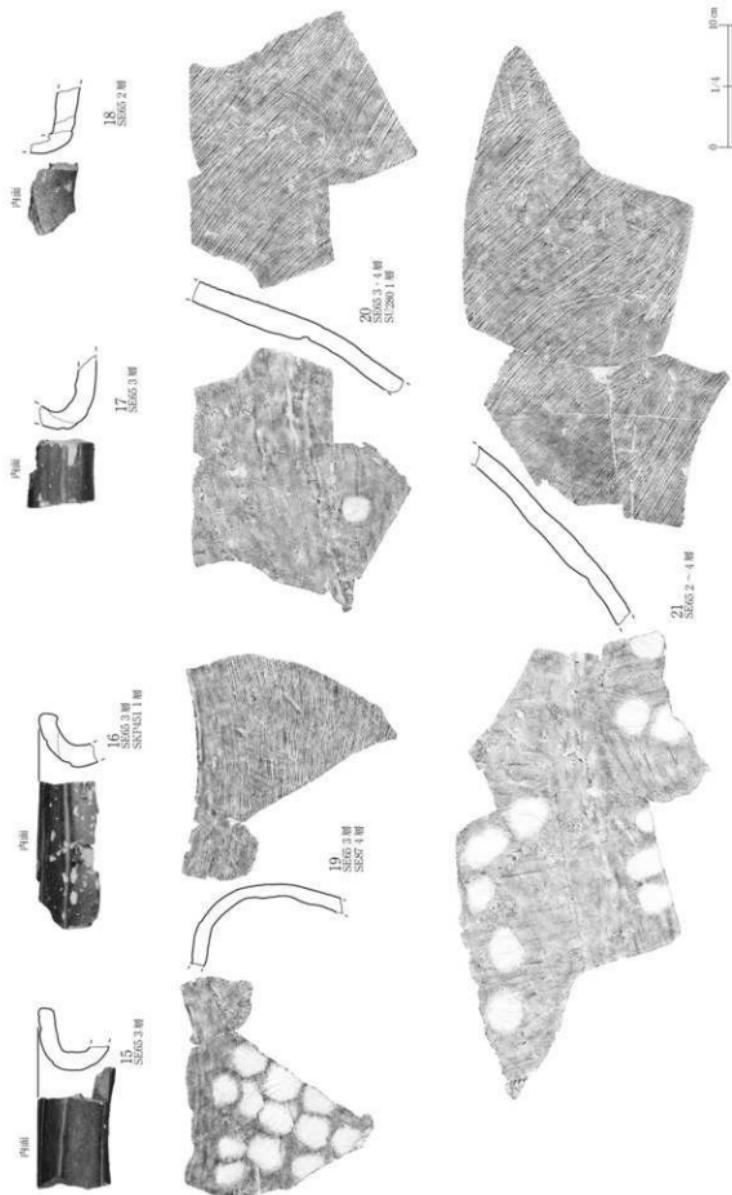
第31図 土坑(2)



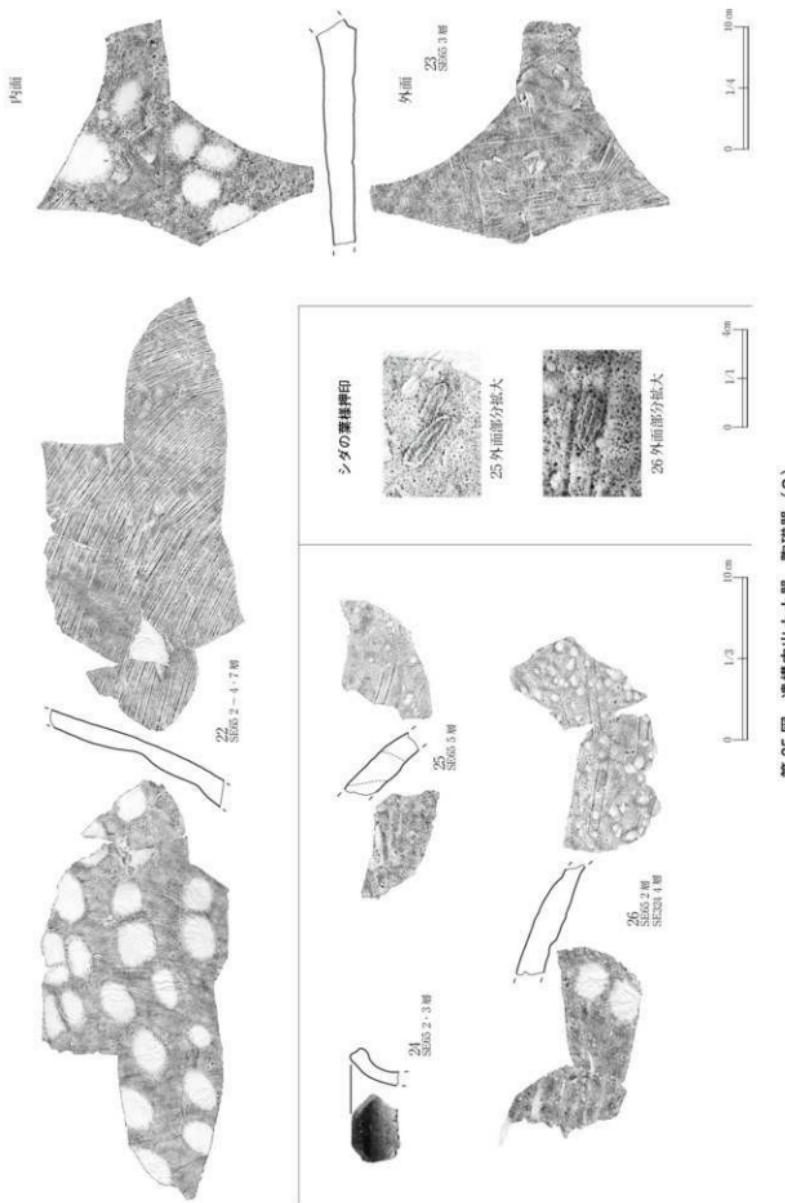
第32図 溝跡・土器溜まり



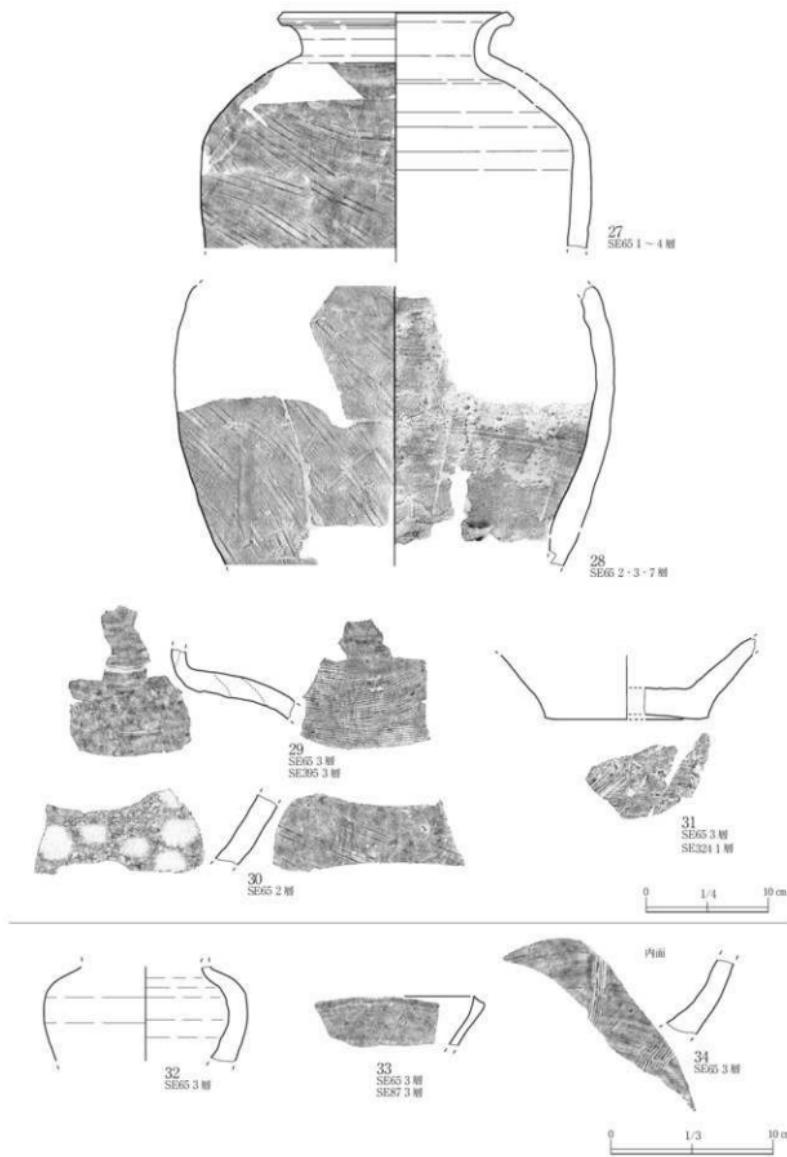
第33図 遺構内出土土器・陶磁器（1）



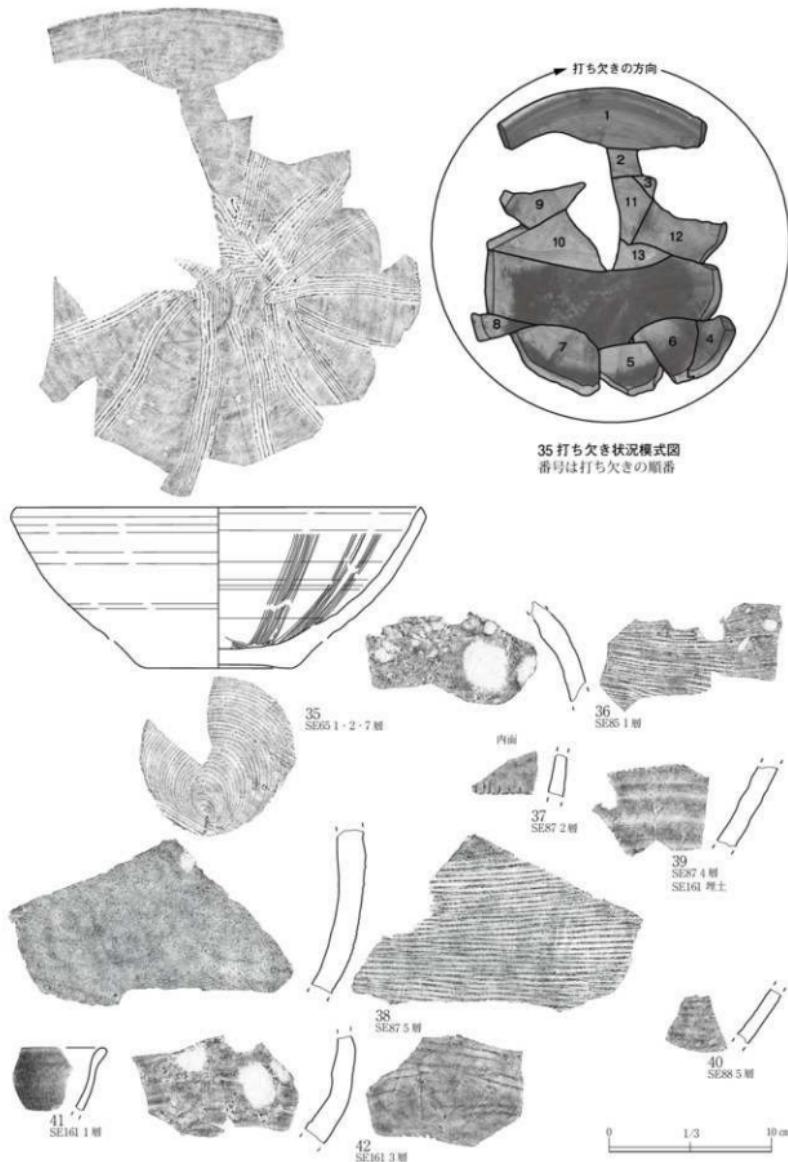
第34図 遺構内出土土器・陶器器 (2)



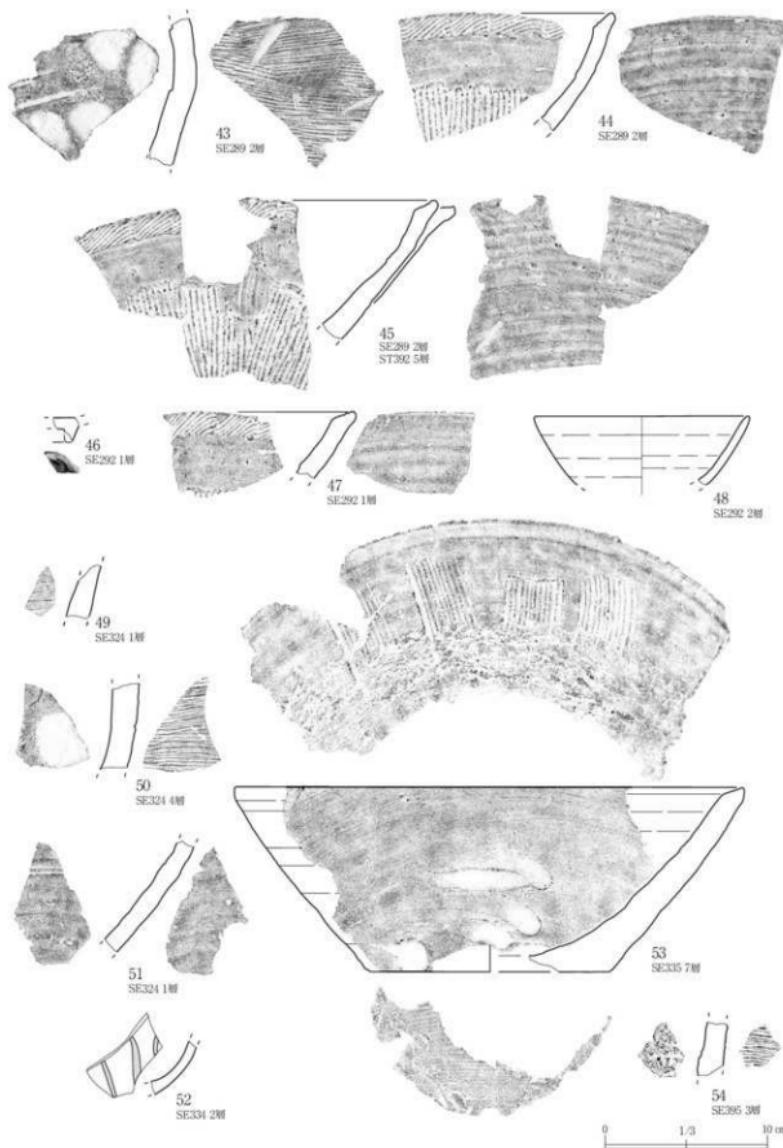
第35図 遺構内出土土器・陶磁器（3）



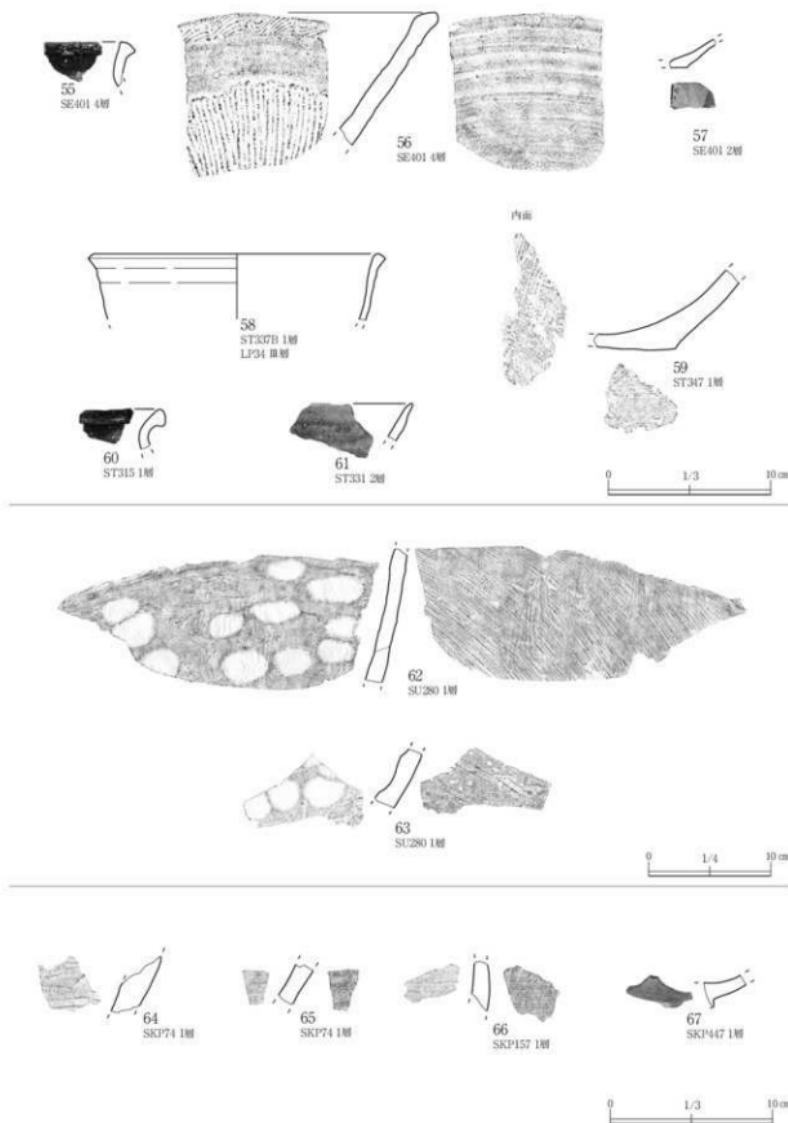
第36図 遺構内出土土器・陶磁器（4）



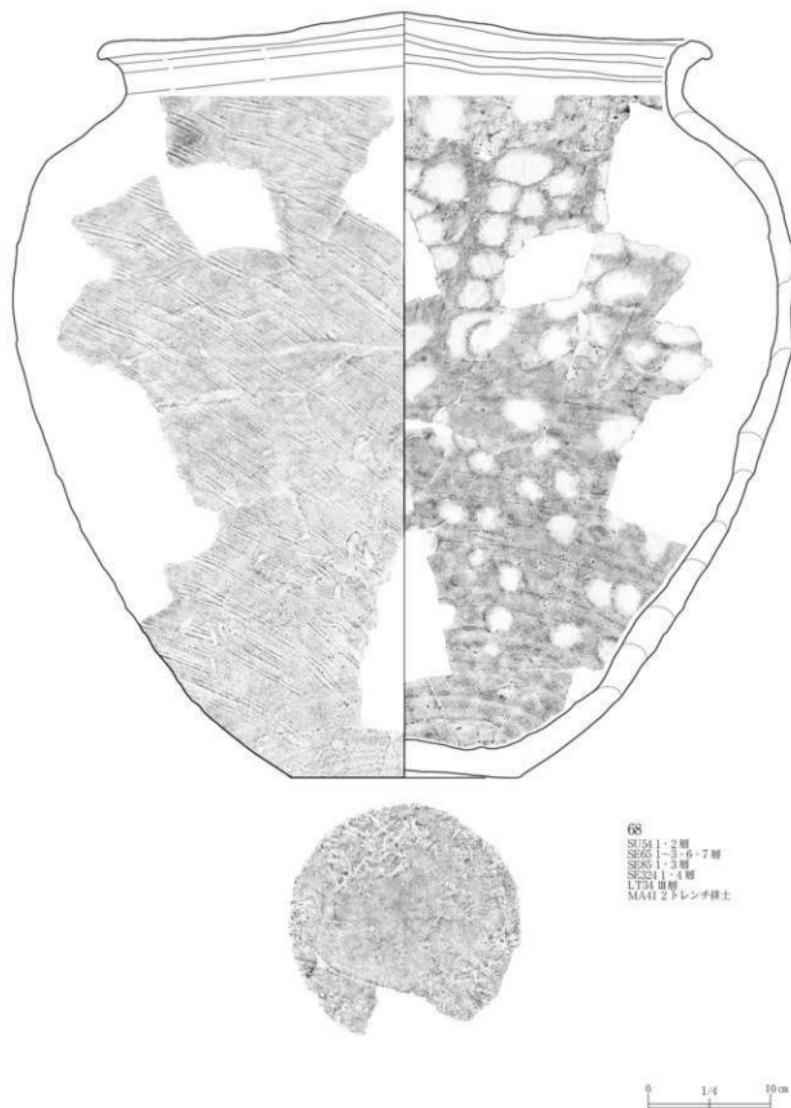
第37図 遺構内出土土器・陶磁器（5）



第38図 遺構内出土土器・陶磁器（6）



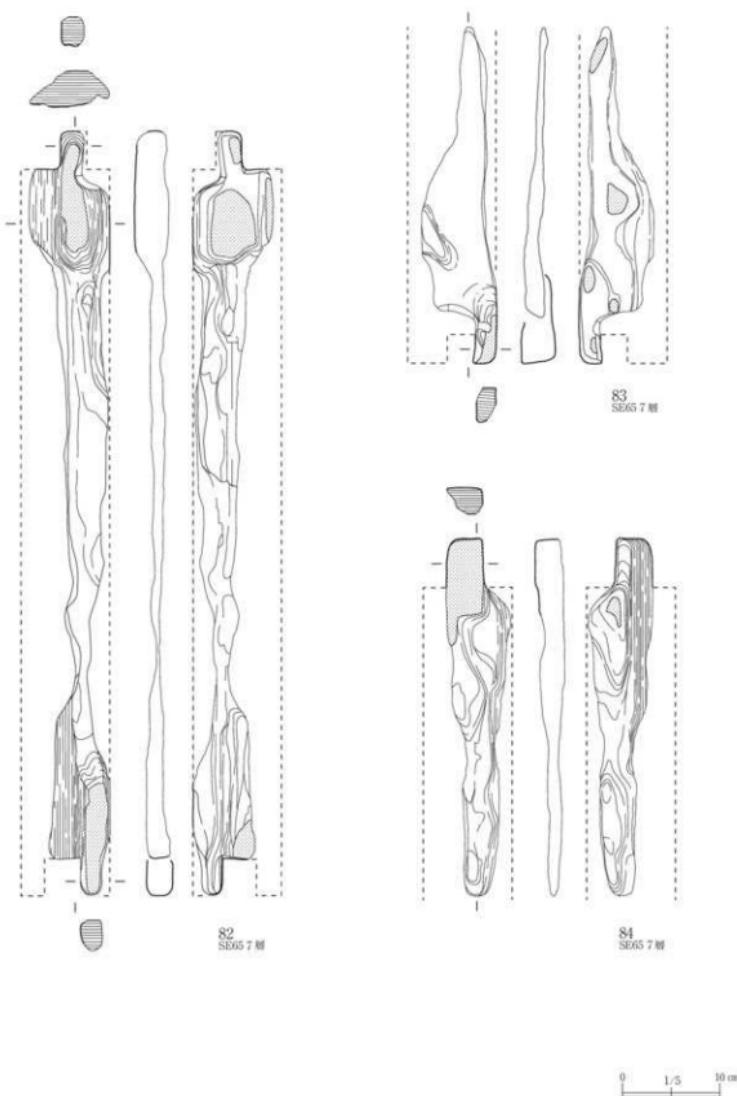
第39図 遺構内出土土器・陶磁器（7）



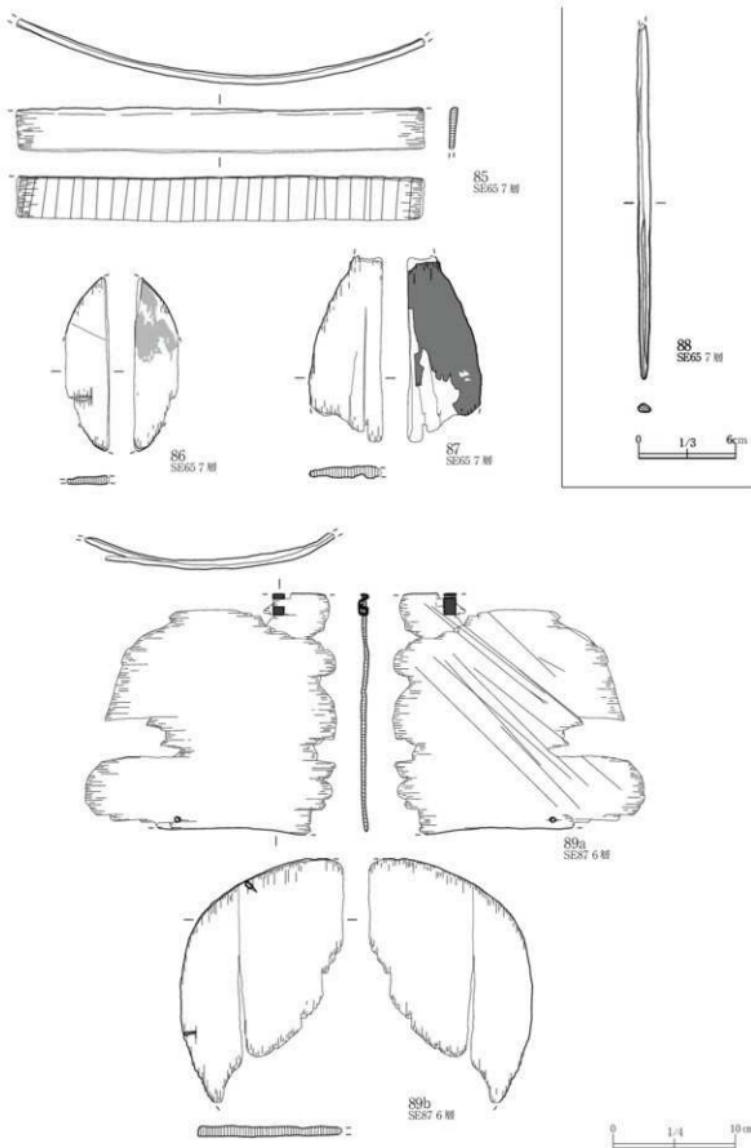
第40図 遺構内出土土器・陶磁器（8）



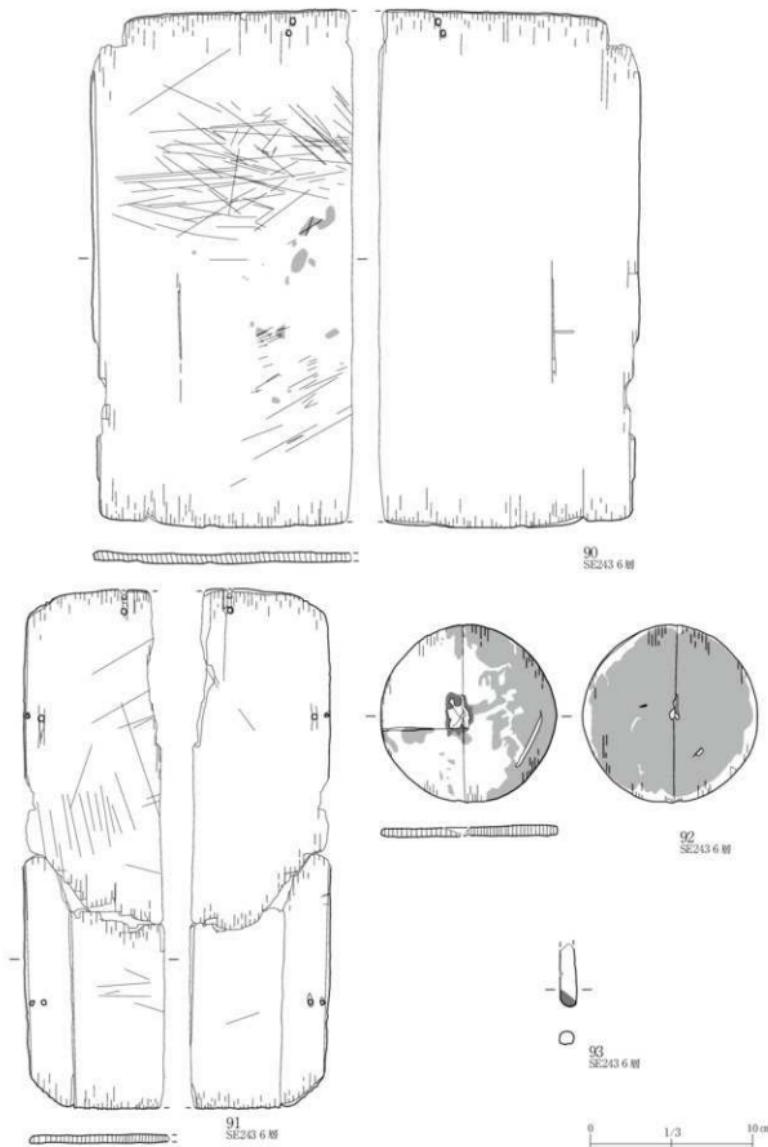
第41図 遺構内出土土製品・石製品



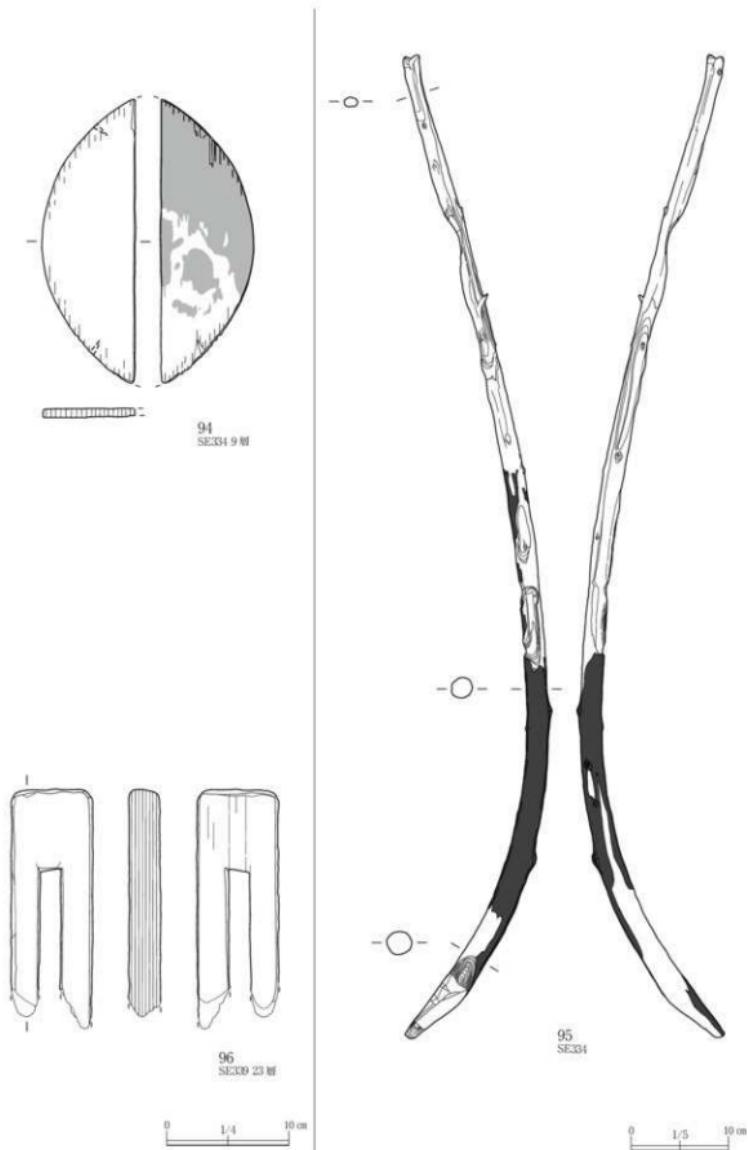
第42図 遺構内出土木製品（1）



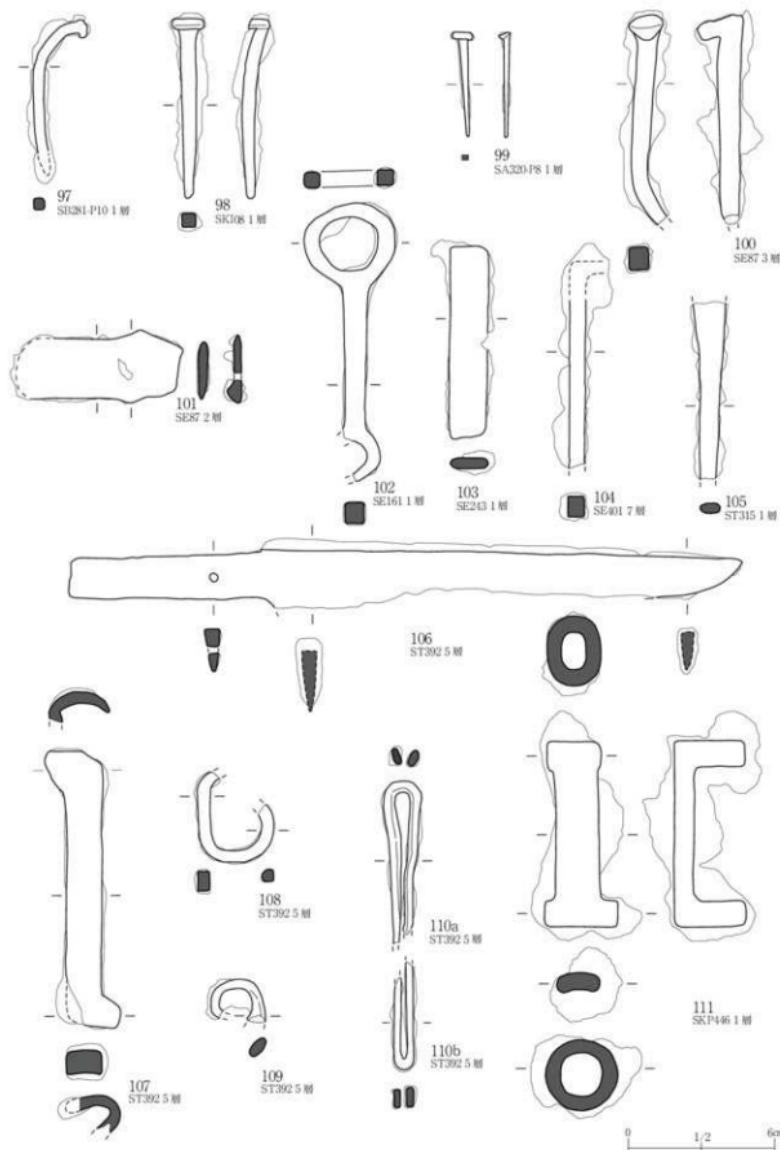
第43図 遺構内出土木製品（2）



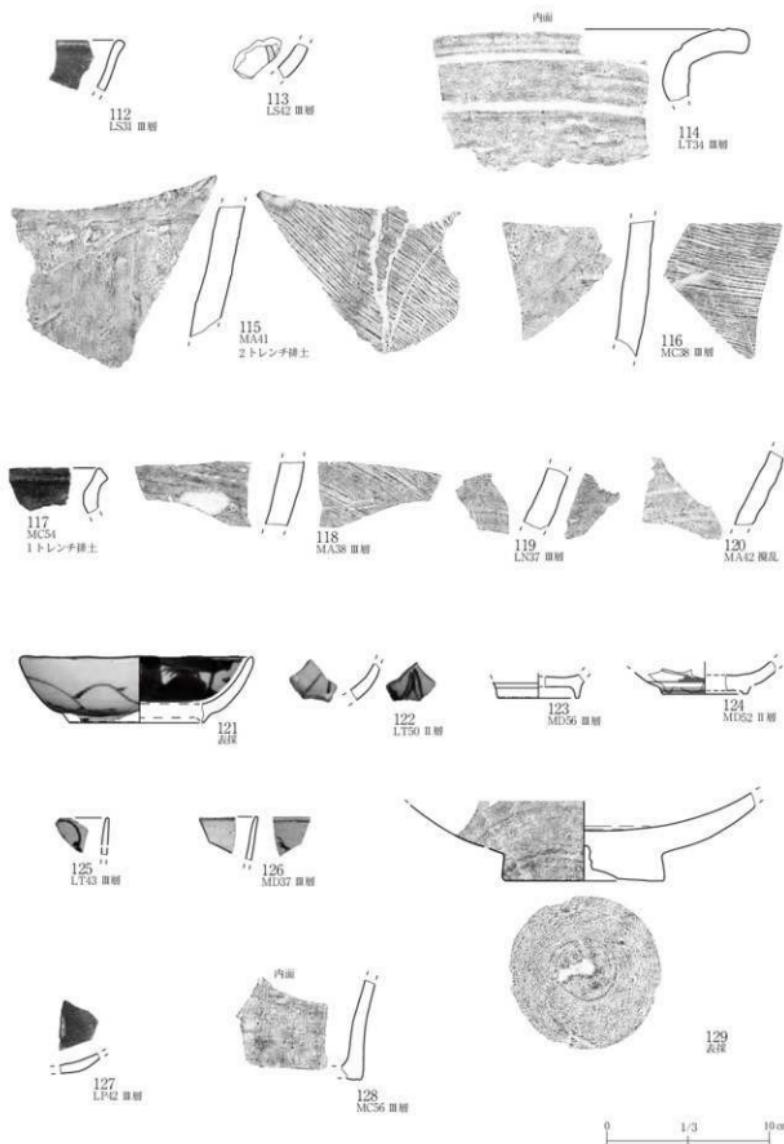
第44図 遺構内出土木製品（3）



第45図 遺構内出土木製品（4）



第46図 遺構内出土鉄製品



第47図 遺構外出土土器・陶磁器

第6表 土器・陶磁器一覧（1）

遺物 博物 番号	出土地位置 番号	層位	時代	種別	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	調査等(外因)	焼成	胎土	色調	特徴・備考	
1	33 21 SB281-P10	1	近世	染付	碗?	口縁部	-	-	-	[1.2] ロクロナード	良	粗・細合	白	織田美濃(19世紀後葉～中葉)?焼成D。	
2	33 21 SB301-F5	1	中世	深鉢形	甕?	身部	-	-	-	[3.5] 不明	タガホ	粗・細合	灰	表面無地・内面有目付・直角底。	
3	33 21 SB301-P4	1	中世	深鉢形	瓶?	身部	-	-	-	[2.7] ロクロナード	良	粗・細合	灰	黒色付地有り・直角底。	
4	33 21 SK208	1	近世	口縁部	甕?	口縁部	-	-	-	[1.3] ロクロナード	良	粗・細合	灰	黒色付地有り・直角底。	
5	33 21 SK208	1	近世	口縁部	甕?	口縁部	-	-	-	[3.8] ヨコナード	良	粗・細合	灰	表面無地・内面有目付・一部焼付。	
6	33 21 SK208	1	近世	口縁部	甕?	口縁部	-	-	-	[4.1] ヨコナード	ミガホ	粗・細合	灰	側面の穿孔・直角底。	
7	33 21 SK208	1	近世	口縁部	甕?	口縁部	-	-	-	[1.8] 不明	ナゲ	粗・細合	灰	表面無地・内面有目付。	
8	33 21 SK210	4	近世	染付	甕	口縁部	-	-	-	[3.3] ロクロナード	良	粗・細合	灰	肥前系・口縁内面二重削頭・外面二重削頭下に草花文。	
9	33 21 SK210	4	近世	染付	甕	口縁部	-	-	-	[1.8] ロクロナード	良	粗・細合	灰	肥前系・口縁内面二重削頭・外面二重削頭下に草花文。	
10	33 21 SK220	4	近世	染付	甕	口縁部	9.6	5.4	2.6	ロクロナード	良	粗・細合	灰	本地系・文政期以前(中葉)?焼成E。	
11	33 21 SK220	4	近世	青釉	甕?	口縁部	-	-	-	[1.0] ロクロナード	良	粗・細合	灰	側面有目付・内面下側黒。	
12	33 21 SK220	4	近世	陶器	甕	口縁部	-	-	-	[6.4] ヨコナード	良	粗・細合	シルバーグリーン	外面・上縁内面削輪。	
13	33 21 SK220	2	近世	陶器	甕	口縁部	-	-	-	[1.4] ヨコナード	良	粗・細合	灰	土手付・伝統型。	
14	33 21 SK220	4	近世	土器	甕	口縁部～口底部	13.4	9.8	13.0 ヨコナード	ヨコナード・ナゲ	良	粗・細合	灰	多層化・内面有目付・体型と面の焼き目付・シモモットト多層化。	
15	34 21 SE65	3	中世	深鉢形	甕?	口縁～肩部	-	-	-	[5.9] ヨコナード	ロクロナード	良	粗・細合	灰	内面横方向に沈線状の整形痕。
16	34 21 SK751	1	中世	深鉢形	甕?	口縁～肩部	-	-	-	[4.9] ヨコナード	ロクロナード	良	粗・細合	灰	内面横方向に沈線状の整形痕。
17	34 21 SE65	3	中世	深鉢形	甕?	口縁～肩部	-	-	-	[4.7] ヨコナード	ロクロナード	良	粗・細合	灰	内面横方向に沈線状の整形痕。
18	34 21 SE65	2	中世	深鉢形	甕?	口縁～肩部	-	-	-	[4.2] ヨコナード	ナゲ	粗・細合	灰	内面横方向に沈線状の整形痕。	
19	34 21 SE65	3	中世	深鉢形	甕?	口縁～肩部	-	-	-	[6.7] ヨコナード	タガホ	良	粗・細合	灰	内面横方向に沈線状の整形痕。
20	34 21 SK280	3	中世	深鉢形	甕?	口縁～肩部	-	-	-	[17.4] ヨコナード	タガホ	良	粗・細合	灰	内面横方向に沈線状の整形痕。
21	34 22 SE65	2～4	中世	深鉢形	甕?	口縁～肩部	-	-	-	[12.8] ヨコナード	タガホ・ナゲ	良	粗・細合	灰	大堀・板戸山腰窯窓・外浦タクチー部に一括平行式窯。
22	35 22 SE65	2～7	中世	深鉢形	甕?	口縁～肩部	-	-	-	[14.4] ヨコナード	タガホ・ナゲ	良	粗・細合	灰	外浦白山窯上部久新断面に黄色付着物あり・清瀬窯。
23	35 22 SE65	3	中世	深鉢形	甕?	底部	-	-	-	[2.5] ヨコナード・ヘイケイズ・底脚	底脚	粗・細合	灰	外浦白山窯上部久新断面に黄色付着物あり・清瀬窯。	
24	35 22 SE65	2～3	中世	深鉢形	甕?	口縁部	-	-	-	[3.0] ヨコナード	ロクロナード	良	粗・細合	灰	外浦白山窯上部久新断面に黄色付着物あり・清瀬窯。
25	35 22 SE65	3	中世	深鉢形	甕?	口縁部	-	-	-	[4.6] ヨコナード	タガホ	良	粗・細合	灰	外浦白山窯上部久新断面に黄色付着物あり・清瀬窯。
26	35 22 SE65	2～4	中世	深鉢形	甕?	口縁部	-	-	-	[4.3] ヨコナード	タガホ	良	粗・細合	灰	外浦白山窯上部久新断面に黄色付着物あり・清瀬窯。
27	36 22 SE65	1～4	中世	深鉢形	甕?	口縁～肩部	-	-	-	[2.5] ヨコナード	タガホ	良	粗・細合	灰	大堀・板戸山腰窓窓・外浦タクチー部平行式窯。
28	36 22 SE65	2～7	中世	深鉢形	甕?	身部	-	-	-	[23.1] ヨコナード	タガホ	不良	粗・細合	灰	大堀・板戸山腰窓窓・外浦タクチー部平行式窯。
29	36 23 SE65	SE65-3	中世	深鉢形	甕?	身部	-	-	-	[5.9] ナゲ	タガホ・ナゲ	不良	粗・細合	灰	大堀・板戸山腰窓窓・外浦タクチー部平行式窯。
30	36 23 SE65	SE65-5	中世	深鉢形	甕?	身部	-	-	-	[15.7] ヨコナード	タガホ	良	粗・細合	灰	大堀・板戸山腰窓窓・外浦タクチー部平行式窯。
31	36 23 SE65	SE65-3	中世	深鉢形	甕?	底部	-	-	-	[13.6] [6.7] ヨコナード	底部・内周部	良	粗・細合	灰	シカゴに於ける調査時に発見。
32	36 23 SE65	SE65-4	中世	深鉢形	甕?	底部	-	-	-	[13.6] [6.7] ヨコナード	底部・内周部	良	粗・細合	灰	シカゴに於ける調査時に発見。

第7表 土器・陶磁器一覧（2）

番号	図版 番号	出土位置	層位	時代	種別	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	測定等 (外側)	測定等 (内側)	焼成	胎土	色調	特徴・備考
32	36	SS65	3	中世	深溝式陶器	小鉢	口縁 - 制多	-	-	(15.9)	ロクロナナ	良	織・織砂合	灰	外部表面自然灰焼地。	
33	36	SE65-3	SE65-3	中世	深溝式陶器	盤?	口縁部	-	-	(3.0)	ロクロナナ	ロクロナナ	良	織・織砂合	灰	外面に纏・向のナラの落葉模様が写る。
34	36	SE65	3	中世	深溝式陶器	器底	器底	-	-	(4.6)	ロクロナナ	ロクロナナ	不良	織・織砂合	相	外面に纏・向の落葉模様が写る。外面下部に擦痕。
35	37	SE65	1-2-7	中世	深溝式陶器	器底	(25.8)	9.6	10.0	ロクロナナ	体高 ロクロナナ 底径 ロクロナナ	良	織・織砂合	灰	大輪・山腹窓?、内外側斜け骨突り、蓋が「萬葉」焼。個人所有。直径11.2cm。底径8.0cm。蓋は後元した。模式参考。重さ1.1kg。	
36	37	SE65	1	中世	深溝式陶器	口縁部	口縁部	-	-	(6.1)	ロクロナナ	ロクロナナ	良	織・織砂合	灰	外面に纏・向の落葉模様が写る。内縫目ハゲ。
37	37	SE67	2	中世	古墳前	制多	制多	-	-	(2.7)	ロクロナナ	ロクロナナ	良	織・織砂合	灰	古墳前削平部。重さ0.4kg。
38	37	SE67	5	中世	深溝式陶器	盤?	盤?	-	-	(10.1)	ナナ	ナナ	良	織・織砂合	灰	地成不良により外表面白色を呈する。
39	37	SE67-4	SE65-4	中世	深溝式陶器	盤?	盤?	-	-	(4.9)	ロクロナナ	ロクロナナ	不良	織・織砂合	灰	地成不良により外表面白色を呈する。
40	37	SE88	5	中世	深溝式陶器	不明?	制底	-	-	(3.2)	ロクロナナ	ロクロナナ	不良	織・織砂合	灰	地成不良の爲、表面無釉。
41	37	SE96	1	中世	青磁	圓	口縁部	-	-	(3.9)	ロクロナナ	ロクロナナ	良	織・織砂合	灰	タキ・塗装焼地。
42	37	SE96	3	中世	深溝式陶器	盤?	盤?	-	-	(6.6)	ロクロナナ	ロクロナナ	良	織・織砂合	灰	大輪・松山窓?、外面に纏・向の落葉模様。外縫目。
43	38	SE89	2	中世	深溝式陶器	盤?	盤?	-	-	(9.1)	ロクロナナ	ロクロナナ	良	織・織砂合	灰	大輪・松山窓?、相当。口縁部削平部直角丸。
44	38	SE89	2	中世	深溝式陶器	器底	口縁部	-	-	(7.4)	ロクロナナ	ロクロナナ	良	織・織砂合	灰	大輪・松山窓?、自然落葉模様。口縁部削平部直角丸。
45	38	SE289-2	SE289-2	中世	深溝式陶器	器底	口縁部	-	-	(8.7)	ロクロナナ	ロクロナナ	良	織・織砂合	灰	大輪・松山窓?、自然落葉模様。口縁部削平部直角丸。
46	38	SE1392	1	中世	青磁	圓	口縁部	-	-	(1.4)	ロクロナナ	ロクロナナ	良	織・織砂合	灰	大輪・松山窓?、自然落葉模様。口縁部削平部直角丸。
47	38	SE392	1	中世	深溝式陶器	器底	口縁部	-	-	(4.1)	ロクロナナ	ロクロナナ	良	織・織砂合	灰	大輪・松山窓?、自然落葉模様。口縁部削平部直角丸。
48	38	SE392	2	古代	須恵器	环	口縁 - 鋼鉢	(13.4)	-	(4.3)	ロクロナナ	ロクロナナ	良	織・織砂合	灰白	大輪・松山窓?、自然落葉模様。口縁部削平部直角丸。
49	38	SE24	1	中世	深溝式陶器	盤?	盤?	-	-	(3.3)	ナナ	ナナ	良	織・織砂合	灰	大輪・松山窓?、外縫目タキ二階行改継文。
50	38	SE24	4	中世	深溝式陶器	盤?	盤?	-	-	(5.3)	ロクロナナ	ロクロナナ	良	織・織砂合	灰	大輪・松山窓?、自然落葉模様。口縁部削平部直角丸。
51	38	SE24	1	中世	深溝式陶器	盤?	盤?	-	-	(6.8)	ロクロナナ	ロクロナナ	不良	織・織砂合	灰	地成不良により器面彩色を呈する。
52	38	SE34	2	中世	青磁	圓	口縁部	-	-	(3.3)	ロクロナナ	ロクロナナ	相	織・織砂合	灰	地成不良。14世紀後半相当。口縁部削平部直角丸。
53	38	SE35	7	中世	深溝式陶器	器底	口縁部	(31.8)	11.5	ロクロナナ	体高 ロクロナナ 底径 ロクロナナ	不良好	織・織砂合	灰白	須恵器。14世紀後半相当。口縁部削平部直角丸。	
54	38	SE95	3	中世	深溝式陶器	盤?	盤?	-	-	(3.3)	ナナ	ナナ	良	織・織砂合	灰	自然落葉模様。
55	39	SE601	4	中世	深溝式陶器	口縁部	口縁部	-	-	(2.7)	ロクロナナ	ロクロナナ	不良	織・織砂合	灰	自然落葉模様。
56	39	SE601	4	中世	深溝式陶器	器底	口縁部	-	-	(8.3)	ロクロナナ	ロクロナナ	良	織・織砂合	灰	須溝V期(15世紀前半)相当。口縁部削平部直角丸。
57	39	SE601	2	古代	白磁	圓	底部	-	-	(1.7)	ロクロナナ	ロクロナナ	良	織・織砂合	灰白	大輪・須恵器。14世紀後半相当。口縁部削平部直角丸。
58	39	ST337B, LP14-III	ST337B-1,	中世	深溝式陶器	口縁部	口縁部	(18.4)	-	(4.1)	ロクロナナ	ロクロナナ	良	織・織砂合	灰白	須溝V期(15世紀前半)相当。口縁部削平部直角丸。
59	39	ST347	1	中世	深溝式陶器	器底	底部	-	-	(15.0)	ロクロナナ	ロクロナナ	良	織・織砂合	灰白	須溝V期(15世紀前半)相当。内縫目。

第8表 土器・陶磁器一覧（3）

遺物	樹木	樹木番号	出土位置	部位	時代	種別	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	調査等(外縫)	焼成	胎土	色調	特徴・備考
蓋付 湯呑	5ST4	1	中世	深井窯開窓 平側	齒	口縁部	直	-	-	-	-	ロクロナデ	不良	繩文含	灰	自然火灰削着。
60 39 24 ST715	1	中世	古窯	口縁部	直	深井窯開窓 平側	齒	-	-	-	-	ロクロナデ	良	オリーブ灰	灰	自然火灰削着。
61 39 24 ST331	2	中世	古窯	口縁部	直	深井窯開窓 平側	齒	-	-	-	-	ロクロナデ	良	繩文含	灰	自然火灰削着。
62 39 24 SU280	1	中世	深井窯開窓 平側	齒	深井	深井窯開窓 平側	齒	-	-	-	-	ロクロナデ	良	繩文含	灰	自然火灰削着。
63 39 24 SU280	1	中世	深井窯開窓 平側	齒	深井	深井窯開窓 平側	齒	-	-	-	-	ロクロナデ	良	繩文含	灰	自然火灰削着。
64 39 24 SK714	1	中世	深井窯開窓 平側	齒	深井	深井窯開窓 平側	齒	-	-	-	-	ロクロナデ	良	繩文含	灰	自然火灰削着。
65 39 24 SK714	1	中世	深井窯開窓 平側	齒	深井	深井窯開窓 平側	齒	-	-	-	-	ロクロナデ	良	繩文含	灰	自然火灰削着。
66 39 24 SKP157	1	近世	土器	只見口	深井	只見口	深井	-	-	-	-	ロクロナデ	良	繩文含	灰	自然火灰削着。
67 39 24 SKP147	1	中世	青磁	直	只見	只見口	直	-	-	-	-	ロクロナデ	良	繩文含	灰	自然火灰削着。
SUS4, SESS6, SESS34, LTSM1, MAN1	SESS1-1, SESS1-2, SESS1-3, SESS1-4, LTSM1-1 MAN1-1 トレンチ壁上	中世	青磁	直	只見	只見口	直	50.4	19.0	62.6	調査等(外縫) 底下部付近 黒褐色 ヘタクズリ	不良	繩文含	灰	自然火灰削着。	
112 47 25 LS31	III	中世	青磁	直	只見	只見口	直	-	-	-	-	ロクロナデ	良	繩文含	灰	自然火灰削着。
113 47 25 LS42	III	中世	青磁	直	只見	只見口	直	-	-	-	-	ロクロナデ	良	繩文含	灰	自然火灰削着。
114 47 25 LT34	III	中世	青磁	直	只見	只見口	直	-	-	-	-	ロクロナデ	良	繩文含	灰	自然火灰削着。
115 47 25 MA41	2トレンチ壁上	中世	青磁	直	只見	只見口	直	-	-	-	-	ロクロナデ	良	繩文含	灰	自然火灰削着。
116 47 25 MC28	III	中世	青磁	直	只見	只見口	直	-	-	-	-	ロクロナデ	良	繩文含	灰	自然火灰削着。
117 47 25 MC24	1トレンチ壁上	中世	青磁	直	只見	只見口	直	-	-	-	-	ロクロナデ	良	繩文含	灰	自然火灰削着。
118 47 25 MA38	III	中世	青磁	直	只見	只見口	直	-	-	-	-	ロクロナデ	良	繩文含	灰	自然火灰削着。
119 47 25 LN37	III	中世	青磁	直	只見	只見口	直	-	-	-	-	ロクロナデ	不良	繩文含	灰	自然火灰削着。
120 47 25 MA42	清見	中世	青磁	直	只見	只見口	直	-	-	-	-	ロクロナデ	不良	繩文含	灰	自然火灰削着。
121 47 25 古窯	染付 茶碗	近世	染付	直	只見	只見口	直	14.4	8.2	4.1	調査等(外縫) 底台付	良	灰白色	微	くわい。	
122 47 25 LT50	II	近世	染付	直	只見	只見口	直	-	-	-	-	ロクロナデ	良	繩文含	灰	自然火灰削着。
123 47 25 MD56	II	近世	染付	直	只見	只見口	直	-	-	-	-	ロクロナデ	良	繩文含	灰	自然火灰削着。
124 47 25 MD52	II	近世	染付	直	只見	只見口	直	-	-	-	-	ロクロナデ	良	繩文含	灰	自然火灰削着。
125 47 25 LT43	III	近世	染付	直	只見	只見口	直	-	-	-	-	ロクロナデ	良	繩文含	灰	自然火灰削着。
126 47 25 MD37	III	近世	染付	直	只見	只見口	直	-	-	-	-	ロクロナデ	良	繩文含	灰	自然火灰削着。
127 47 25 LP42	III	近世	陶器	直	只見	只見口	直	-	-	-	-	ロクロナデ	良	繩文含	灰	自然火灰削着。
128 47 25 NC56	III	近世	土器	直	只見	只見口	直	-	-	-	-	ロクロナデ	良	繩文含	灰	自然火灰削着。
129 47 25 古窯	不詳	土器	直	只見	只見口	直	-	-	-	-	ロクロナデ	良	繩文含	灰	自然火灰削着。	

第9表 土製品一覧

遺物番号	種類番号	図版番号	出土位置	層位	時代	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	モチーフ	成形	施土	色調	特徴・備考
69	41	26	ST222 1(底面)	近世	土人形	6.1	5.5	6.1	4.4	子守女?	型合せ?	中空・細口含鉢	上灰・黄褐色	表面に露わざかに施土。成形技術から18世紀以前。
70	41	26	ST222 1(底面)	近世	土人形	6.1	5.5	6.1	3.4	男體?	型合せ?	中空・細口含鉢	上灰・黄褐色	表面に露わざかに施土。成形技術から18世紀以前。
71	41	26	ST222 1(底面)	近世	土人形	8.0	4.6	3.2	3.2	子守女?	型合せ?	中空・細口含鉢	上灰・黄褐色	表面に露わざかに施土。成形技術から18世紀以前。
72	41	26	ST222 1(底面)	近世	土人形	6.3	4.9	3.6	4.9	男體?	型合せ?	中空・細口含鉢	上灰・黄褐色	表面に露わざかに施土。成形技術から18世紀以前。
73	41	26	ST224 3(底面)	近世	土人形	10.6	6.3	5.3	大黒天	型合せ?	中空・細口含鉢	上灰・黄褐色	表面に露わざかに施土。成形技術からモチーフから18世紀以前。	
74	41	26	ST284 磁器面	近世	土人形	5.4	3.1	2.6	大黒天	型合せ?	中空・細口含鉢	上灰・黄褐色	表面に露わざかに施土。成形技術からモチーフから18世紀以前。	

第10表 石製品一覧

遺物番号	種類番号	図版番号	出土位置	層位	時代	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	石質	重さ(g)	石質	特徴・備考
75	41	26	SE167	4	中世	線刻壺	10.3	7.5	1.2	泥岩	151.3	泥岩	半埋面に長方形に区切られた刻線あり。
76	41	26	SE161	3	中世	線刻壺	9.0	(3.8)	(2.6)	泥岩	122.4	泥岩	半埋面に長方形に区切られた刻線あり。
77	41	26	SE289	2	中世	線刻壺	11.4	4.2	4.5	泥岩	95.3	泥岩	半埋面に長方形に区切られた刻線あり。
78	41	26	SE289	2	中世	有孔臼輪輪	4.8	3.4	2.2	泥岩	35.7	泥岩	有孔臼輪輪
79	41	26	SE289	2	中世	有孔臼輪輪	17.2	7.4	1.6	泥岩	164.1	泥岩	有孔臼輪輪
80	41	26	SE292	4	中世	不規行鑿輪	4.4	3.6	1.2	砂岩	25.7	砂岩	有孔臼輪輪

第11表 ガラス製品一覧

遺物番号	種類番号	図版番号	出土位置	層位	時代	器種	直径(cm)	厚さ(mm)	重さ(g)	特徴・備考
81	-	26	ST222 2	近世	鏡片	3.36	1.92	0.1	未測	土層サンプルから出土

第12表 木製品一覧

遺物番号	種類番号	図版番号	出土位置	層位	時代	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	木質	特徴・備考	
82	42	27	SE65	7	中世	井戸枠材	78.2	(9.1)	(9.1)	3.9	青桐板	スズ材。
83	42	27	SE65	7	中世	井戸枠材	31.5	(9.1)	(9.1)	3.5	青桐板	スズ材。
84	42	27	SE65	7	中世	井戸枠材	36.6	[9.1]	3.0	東側桐板	スズ材。	
85	43	28	SE65	7	中世	曲物檻板	3.7	[9.1]	0.7	内曲ケビキ材。		
86	43	28	SE65	7	中世	曲物檻板	14.2	3.6	0.8	内曲面に断続的に丸める刻線あり。		
87	43	28	SE65	7	中世	曲物檻板	15.2	6.0	1.0	内曲板化。		
88	43	28	SE65	7	中世	檻	(21.9)	0.8	0.5	内曲板に削り出し。先端部を削り直している。		
89a	43	28	SE87	6	中世	曲物檻板	19.7	(20.0)	(13.3)	0.4	89bと同じ一全体。木釘残存。木釘頭部も土中に潜伏する。	
89b	43	28	SE87	6	中世	曲物底板	31.8	16.1	0.6	モチ子面(色合物)漆付。木釘頭部も土中に潜伏する。		
90	44	29	SE243	6	中世	折板	31.9	8.6	0.5	内曲面に断続的に丸める刻線あり。		
91	44	29	SE243	6	中世	曲物底板	11.0	-	0.7	内曲面に断続的に丸める刻線あり。		
92	44	29	SE243	6	中世	端入さし	(3.9)	1.0	0.8	未端部に被熱焼痕あり。		
93	44	29	SE243	6	中世	曲物底板	(23.1)	(7.7)	0.8	外曲面に削り直す。スズ材。		
94	45	29	SE334	9	中世	端入木	10.7	15.1	2.5	堅葉面材か。全面平滑に加工。硬樹脂全木被熱。		
95	45	29	SE334	23	中世	不明	19.6	6.7	2.6	堅葉面材か。全面平滑に加工。硬樹脂全木被熱。		

第13表 鉄製品・鉄滓観察一覧

遺物番号	種類番号	図版番号	出土位置	層位	時代	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	特徴・備考
97	46	30	SB281	1	近世?	釘	(6.9)	—	—	9.5	
98	46	30	SK108	1	近世?	釘	7.3	頭部幅1.3	—	10.9	
99	46	30	SA320	1	近世?	釘	4.3	頭部幅0.9	—	2.1	
100	46	30	SE87	3	中世	釘	(8.6)	頭部幅1.4	—	31.9	
101	46	30	SE87	2	中世	不明	3.0	(6.8)	0.6	21.9	
102	46	30	SE161	1	中世	轆	(11.5)	3.7	0.9	※ 54.9 轆の唯(はみ)の部分。	
103	46	30	SE243	1	中世	不明	7.9	1.6	0.5	13.1	
104	46	30	SE401	7	中世	釘	(8.5)	—	—	28.4	
105	46	30	ST315	1	中世	不明	(7.3)	1.3	0.4	13.6	
106	46	30	ST392	5	中世	短刀	27.6	(2.4)	0.6	※ 114.2 刃部長19.7cm、中子長7.9cm、柄頭～目抜き部5.8cm。	
107	46	30	ST392	5	中世	題?	11.5	3.2	1.0	※ 73.9	
108	46	30	ST392	5	中世	不明	(3.7)	3.1	0.8	※ 7.4	
109	46	30	ST392	5	中世	不明	(1.8)	2.2	0.9	5.3 内環状？	
110a	46	30	ST392	5	中世	不明	6.7	1.7	0.8	※ 7.5 110bと同一個体。	
110b	46	30	ST392	5	中世	不明	(4.4)	0.8	0.8	※ 5.1 110aと同一個体。	
111	46	30	SKP446	1	不明	不明	7.6	3.0	0.7	103.9	
130	—	30	SE86	2	中世	鉄滓	4.5	7.8	—	126.5	
131	—	30	SE243	1	中世	鉄滓	3.7	3.9	—	23.6	
132	—	30	ST331	1	中世	楕円形滓	7.4	10.1	—	189.6	
133	—	30	ST386	1	中世	楕円形滓	6.9	8.4	—	98.8	

※は保存処理後の数値

第14表 銭貨観察一覧

遺物番号	種類番号	図版番号	出土位置	層位	時代	銭種	外縁 外径 (mm)	内縁 内径 (mm)	内部 内径 (mm)	外縁 厚 (mm)	文字厚 (mm)	重量 (g)	特徴・備考	
134	—	31	ST386	3	中世	洪武通宝	22.60	16.30	6.27	4.09	1.14	0.81	1.9	初鑄136年。背文字「一錢」。
135	—	31	ST392	5	中世	景德元宝	25.21	15.58	7.10	5.77	1.24	0.67	2.3	初鑄100年。被焼。
136	—	31	ST392	5	中世	至和元宝	24.26	18.75	8.97	6.81	1.05	0.70	1.8	初鑄1054年。篆書体。被焼。
137	—	31	ST392	5	中世	永樂通宝	24.99	20.72	6.47	5.53	1.34	0.71	1.2	初鑄1406年。被焼。
138	—	31	ST392	5	中世	天聖元寶	24.55	19.73	7.50	6.31	1.12	0.53	0.7	初鑄1028年。被燒。
139	—	31	ST222	1(底面)	近世	■ 寛永通宝	—	—	—	—	—	—	113.7	長径6.6×短径3.7×厚さ34.0(cm)筋が激しく鉄種・枚数の詳細不明。寛永通宝(初鑄1739年)含む。推定40枚以上。
140	—	31	ST223	1(底面)	近世	■ 寛永通宝	—	—	—	—	—	—	25.0	長径3.5×短径2.8×厚さ1.8(cm)推定4枚以上。大半は鉄種不明だが古寛永(初鑄1636年)・新寛永(初鑄1668年)・鉄錢(初鑄1739年)含む。
141	—	31	ST223	1(底面)	近世	■ 錢種不明	—	—	—	—	—	—	9.2	長径1.1×短径2.9×厚さ14.0(cm)推定3枚以下。
142	—	31	ST224	3(底面)	近世	■ 寛永通宝	—	—	—	—	—	—	113.2	長径8.8×短径4.8×厚さ3.2(cm)筋が激しく鉄種・枚数の詳細不明。鉄錢(初鑄1739年)含む。推定30枚以上。
143	—	31	ST224	3(底面)	近世	寛永通宝	23.39	17.59	7.81	5.71	1.00	0.50	2.2	新寛永(非文銘、初鑄1697年)。背星。
144	—	31	ST224	3(底面)	近世	寛永通宝	23.28	18.90	8.47	6.43	1.22	0.81	2.0	新寛永(初鑄1668年)。
145	—	31	ST224	3(底面)	近世	寛永通宝	22.98	18.82	7.76	6.10	1.08	0.63	2.1	秋田山(初鑄・初鑄1728年)。
146	—	31	ST224	3(底面)	近世	■ 寛永通宝	—	—	—	—	—	—	7.4	長径2.5×短径2.5×厚さ0.5(cm)3枚固着。1枚は新寛永(初鑄1668年)。他は鉄種不明。
147	—	31	ST224	3(底面)	近世	寛永通宝	22.67	—	—	—	—	—	5.1	2枚固着。鉄錢(初鑄1739年)含む。
148	—	31	ST284	確認面	近世	寛永通宝	24.66	19.68	7.36	5.20	1.10	0.63	1.8	
149	—	31	ST284	確認面	近世	寛永通宝	—	—	—	—	—	—	2枚固着。	2枚固着。計測径は表から数えて1枚目の数値。2枚目は古寛永(初鑄1636年)。
150	—	31	ST284	確認面	近世	寛永通宝	25.52	19.37	—	5.46	—	—	6.5	2枚固着。計測径は表から数えて1枚目の数値。1枚目は古寛永(初鑄1636年)。
151	—	31	ST284	確認面	近世	寛永通宝	24.32	18.48	6.57	4.73	1.44	0.90	2.9	古寛永(初鑄1636年)。
152	—	31	ST284	確認面	近世	寛永通宝	—	—	—	—	—	—	2枚固着。	2枚固着。計測径は表から数えて2枚目の数値。2枚目は新寛永(文銘、初鑄1668年)。
153	—	31	ST284	確認面	近世	寛永通宝	25.91	17.27	8.12	5.23	1.58	1.15	3.7	2枚固着。計測径は表から数えて1枚目の数値。1枚目は古寛永(初鑄1636年)。
154	—	31	ST284	確認面	近世	寛永通宝	25.13	20.23	7.84	5.49	1.43	0.68	1.7	新寛永(文銘、初鑄1668年)。
155	—	31	ST284	確認面	近世	寛永通宝	25.91	20.13	7.70	5.70	1.27	0.87	1.1	
156	—	31	SKP64	確認面	中世	永楽通宝	24.59	19.77	6.95	5.64	1.27	0.80	2.1	初鑄1408年。
157	—	31	MA46	■	近世	■ 寛永通宝	—	—	—	—	—	—	15.2	長径3.0×短径2.7×厚さ0.9(cm)5枚固着。1枚は新寛永(文銘、初鑄1668年)。他は鉄種不明。

第4章 理化学的分析

第1節 放射性炭素年代測定(AMS法)及び樹種同定

1 平成26年度委託分 1

株式会社加速器分析研究所

(1) 放射性炭素年代測定(AMS法)

① 対象試料と方法

西板戸遺跡は、秋田県大仙市南外字西板戸81-2外(北緯39°49'62"、東経140°38'12")に所在し、雄物川支流の檜岡川左岸、標高約20mの段丘上に立地する。測定対象試料は、井戸跡出土木材から採取された木片5点である(第15表)。

井戸跡SE65の覆土中からは珠洲系陶器破片(13世紀前半)、SE401の覆土中から珠洲系陶器の擂鉢破片(15世紀前半)、SE334の覆土中からは青磁破片(14世紀後半~15世紀)が出土していることから、これら陶磁器の時期が遺構の時期を示す可能性が高いと考えられている。また、SE243、SE339からは、年代を特定できる遺物が出土していないが、周辺の遺構等の出土遺物から、いずれも13~15世紀の可能性が指摘される。

・化学処理工程

- a メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- b 酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常 1 mol/l (1M) の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と第15表に記載する。
- c 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO_2)を発生させる。
- d 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- e 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- f グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

・測定方法

加速器をベースとした ^{14}C -AMS専用装置(NEC社製)を使用し、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$)の測定を行なう。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

・算出方法

- a $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(%)で表した値である(第15表)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- b ^{14}C 年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950

年を基準年(0yrBP)として選る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。 $\delta^{13}\text{C}$ 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第15表に、補正していない値を参考値として第16表に示した。 $\delta^{13}\text{C}$ 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 $\delta^{13}\text{C}$ 年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の $\delta^{13}\text{C}$ 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- c pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の $\delta^{13}\text{C}$ 濃度の割合である。pMCが小さい($\delta^{13}\text{C}$ が少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上($\delta^{13}\text{C}$ の量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を第15表に、補正していない値を参考値として第16表に示した。
- d 曆年較正年代とは、年代が既知の試料の $\delta^{13}\text{C}$ 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の $\delta^{13}\text{C}$ 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。曆年較正年代は、 $\delta^{13}\text{C}$ 年代に対応する較正曲線上の曆年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が $\delta^{13}\text{C}$ 年代、横軸が曆年較正年代を表す。曆年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下一桁を丸めない $\delta^{13}\text{C}$ 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、曆年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.2較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。曆年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として第16表に示した。曆年較正年代は、 $\delta^{13}\text{C}$ 年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」という単位で表される)。

② 結果

測定結果を第15表、第16表に示す。

試料5点の $\delta^{13}\text{C}$ 年代は、 960 ± 20 yrBP(試料1)から 470 ± 20 yrBP(試料3)の間にある。曆年較正年代(1σ)は、最も古い1が1025～1147calADの間に3つの範囲、最も新しい3が1426～1445calADの範囲で示される。推定される年代に対して、2、3、5は一致し、4は一致もしくは若干古く、1は古い値となった。試料の炭素含有率はすべて50%を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。

参考文献

- Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon 51(1), 337-360
 Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP. Radiocarbon 55 (4), 1869-1887
 Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of $\delta^{13}\text{C}$ data. Radiocarbon 19(3), 355-36

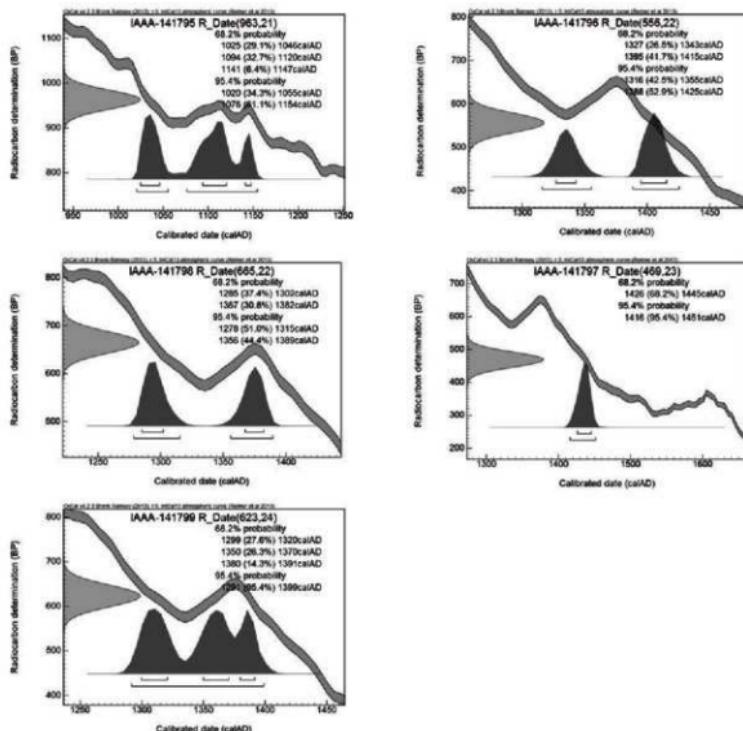
第15表 放射性炭素年代測定結果($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (%)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
					(AMS)	LibbyAge (yrBP)	pMC (%)
IAAA - 141795	1	SE65 7層	木片(井戸枠材(第42回84))	AAA	-27.15 ± 0.23	960 ± 20	88.70 ± 0.24
IAAA - 141796	2	SE339 23層	木片(加工材)	AAA	-27.43 ± 0.22	560 ± 20	93.31 ± 0.26
IAAA - 141797	3	SE243 6層	木片(加工材)	AAA	-31.87 ± 0.26	470 ± 20	94.32 ± 0.27
IAAA - 141798	4	SE334 9層	木片(曲面底板(第45回94))	AAA	-26.72 ± 0.29	670 ± 20	92.05 ± 0.25
IAAA - 141799	5	SE401 10層	木片(加工材)	AAA	-23.56 ± 0.28	620 ± 20	92.53 ± 0.28

第16表 放射性炭素年代測定結果($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、曆年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり		曆年比較用 (yrBP)	1σ 曆年年代範囲	2σ 曆年年代範囲
	Libby Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-141795	1,000 ± 20	88.31 ± 0.23	963 ± 21	1025calAD-1046calAD (29.1%) 1049calAD-1120calAD (22.7%) 1141calAD-1147calAD (6.4%)	1020calAD-1055calAD (34.3%) 1076calAD-1154calAD (61.1%)
IAAA-141795	600 ± 20	92.85 ± 0.25	556 ± 22	1327calAD-1343calAD (26.5%) 1395calAD-1415calAD (41.7%)	1316calAD-1355calAD (42.5%) 1388calAD-1425calAD (32.9%)
IAAA-141797	580 ± 20	93.00 ± 0.26	469 ± 23	1426calAD-1445calAD (68.2%)	1416calAD-1451calAD (95.4%)
IAAA-141798	690 ± 20	91.73 ± 0.25	665 ± 22	1285calAD-1302calAD (37.4%) 1367calAD-1382calAD (30.8%)	1278calAD-1315calAD (51.0%) 1356calAD-1389calAD (44.4%)
IAAA-141799	600 ± 20	92.80 ± 0.28	623 ± 24	1299calAD-1320calAD (27.6%) 1350calAD-1370calAD (26.3%) 1380calAD-1391calAD (14.3%)	1291calAD-1399calAD (95.4%)

[参考値]



第48図 曆年較正年代グラフ(参考)(1)

(2) 樹種同定結果

① 対象試料と方法

試料は、5基の井戸跡から出土した井戸枠材や曲物底板など5点(試料番号1~5)である。このうち試料番号2(SE339)は、全面が炭化していることから、炭化部分を用いて同定を実施する。なお、同一試料の放射性炭素年代測定が実施されている(本節(1)参照)。

全面炭化した試料番号2を除く4点は、木取りを観察した上で、剃刀を用いて木口(横断面)・柵目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を直接採取する。切片は、ガム・クロラール(抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察する。試料番号2は、5mm角程度の破片を採取して自然乾燥させた後、3断面の割断面を作製して实体顕微鏡および走査型電子顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察する。各試料の観察で確認された特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列については、林(1991)や伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)を参考にする。

② 結果

樹種同定結果を第17表に示す。木製品は針葉樹2分類群(スギ・ヒノキ科)と広葉樹1分類群(ヤナギ属)に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。各試料の顕微鏡写真は図版32上段に示した。

・スギ(*Cryptomeria japonica* (L.f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2~4個。放射組織は単列、1~10細胞高。

・ヒノキ科(*Cupressaceae*)

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか~やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1~10細胞高。

・ヤナギ属(*Salix*) ヤナギ科

散孔材で、道管は単独または2~3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減少させる。道管は、單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列、1~15細胞高。

第17表 樹種同定結果

番号	遺構	層位	器種	器種木取り	種類	備考
1	SE65	7層	井戸枠材(第42図84)	板目状	スギ	
2	SE339	23層	加工木	芯持丸木	ヒノキ科	全面炭化
3	SE243	6層	加工木	芯持材	ヤナギ属	二股材
4	SE334	9層	曲物底板(第45図94)	柵目	スギ	片面に褐色の塗布物

③ 考察

試料は、針葉樹のスギ、ヒノキ科、広葉樹のヤナギ属に同定された。スギとヒノキ科の木材は、木理が直通で割裂性と耐水性が比較的高いが、ヤナギ属の木材は軽軟で強度と保存性は低い。

遺構別にみると、SE65の井戸枠材とSE401の加工木は、それぞれ板目状や分割状を呈しており、分割されたスギ材を用いたことが推定される。一方、SE243とSE339の加工木は、芯持材あるいは芯持丸木であり、SE65やSE401とは木材の利用状況が異なる。

さらにSE339の加工木は全面が炭化しており、防腐処理の一環で焼かれた可能性も考えられる。この試料はヒノキ科が用いられており、樹種の面からもSE65やSE401とは木材利用が異なる。一方、SE243の加工木は、ヤナギ属の二股材で径も太くないこと、ヤナギ属の木材が強度・保存性共に低いことから、井戸枠材以外の用途に由来すると考えられる。

SE334の曲物底板は、井戸底面直上から出土している。底板は、柾目板で、片面に褐色の塗布物の痕跡があり、防水のために柿渋等を塗った可能性が考えられる。この試料にはスギが利用されている。

今回調査対象とした井戸跡は、出土遺物等からおおむね13~15世紀頃と考えられ、年代測定の結果もSE65の井戸枠材が推定年代より古いほかは、おおよそ推定に近い結果となった。伊東・山田(2012)によれば、秋田県内では、中田面遺跡、北遺跡、盤若台遺跡、観音寺廢寺跡、金仏遺跡で鎌倉時代の井戸部材について樹種同定が実施されているが、金仏遺跡の1点がトチノキに同定された他は全てスギが利用されており、今回の結果とも調和的である。

参考文献

- 林昭三,1991,日本産木材顕微鏡写真集,京都大学木質科学研究所。
 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載I,木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
 伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載II,木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.
 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載III,木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載IV,木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載V,木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
 Richter H.G.,Grosser D.,Heinz L. and Gasson P.E. (編), 2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト,伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz L and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
 烏地謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織,地球社,176p.
 Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト,伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

2 平成26年度委託分2(樹種同定のみ)

株式会社吉田生物研究所

(1)木製品の樹種同定結果

① 対象試料と方法

試料は秋田県西板戸遺跡井戸跡(SE339)から出土した建築部材と推定される器種不明の木製品1点(第45図96)である。剃刀で木口(横断面)、柾目(放射断面)、板目(接線断面)の各切片を採取し、永久プレラートを作製した。このプレラートを顕微鏡で観察して同定した。

② 結果

樹種同定結果(針葉樹1種)と顕微鏡写真(図版33下段)を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を示す。

樹種同定結果

No 1 出土遺構・層位: SE339 23層 品名: 器種不明 樹種: スギ科スギ属スギ

・スギ科スギ属スギ(*Cryptomeria japonica* D.Don)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に1~3個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

参考文献

- 林 昭三 「日本産木材顕微鏡写真集」 京都大学木質科学研究所(1991)
 島地 謙・伊東隆夫 「日本の遺跡出土木製品総覧」 雄山閣出版(1988)
 北村四郎・村田 源 「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」 保育社(1979)
 奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」 (1985)
 奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」 (1993)

3 平成27年度委託分

株式会社パレオ・ラボ

(1) 放射性炭素年代測定(AMS法)

パレオ・ラボAMS年代測定グループ

伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林絢一

Zaur Lomtadidze・Ineza Jorjoliani・黒沼保子

① 対象試料と方法

試料は、屋外のカマドであるカマド状遺構から出土した炭化材で、SO53の焚口部から1点(PLD-29374)、SO55の焚口部から1点(PLD-29375)、SO60の燃焼部から1点(PLD-29376)、SO89の燃焼部から1点(PLD-29377)、SO111の煙道部から1点(PLD-29378)、SO309の焚口部から1点(PLD-29379)、SO333の燃焼部から1点(PLD-29380)の、計7点である。遺構の時期は、鎌倉時代～室町時代と推測されている。試料の形状は、SO55の焚口部 出土試料(PLD-29375)は最終形成年輪が残存していたが、それ以外の試料は部位不明で最終形成年輪は残存していなかった。

超音波洗浄、酸-アルカリ-酸洗浄の後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS: NEC製 1.5SDH)を用いて、測定を行った。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

第18表 放射性炭素年代測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-29374	遺構: SO53 位置: 焚口部 層位: 5層 試料No.1	種類: 炭化材(クリ) 試料の性状: 最終形成年輪以外、部位不明 状態: dry	超音波洗浄 酸-アルカリ-酸洗浄(塩酸: 12N, 水酸化ナトリウム: 10N, 塩酸: 12N)
PLD-29375	遺構: SO55 位置: 焚口部 層位: 5層 試料No.2	種類: 炭化材(モクレン属) 試料の性状: 最終形成年輪 状態: dry	超音波洗浄 酸-アルカリ-酸洗浄(塩酸: 12N, 水酸化ナトリウム: 10N, 塩酸: 12N)
PLD-29376	遺構: SO60 位置: 燃焼部 層位: 4層 試料No.3	種類: 炭化材(アヌカロ) 試料の性状: 最終形成年輪以外、部位不明 状態: dry	超音波洗浄 酸-アルカリ-酸洗浄(塩酸: 12N, 水酸化ナトリウム: 10N, 塩酸: 12N)
PLD-29377	遺構: SO89 位置: 燃焼部 層位: 3層 試料No.4	種類: 炭化材(クリ) 試料の性状: 最終形成年輪以外、部位不明 状態: dry	超音波洗浄 酸-アルカリ-酸洗浄(塩酸: 12N, 水酸化ナトリウム: 10N, 塩酸: 12N)
PLD-29378	遺構: SO111 位置: 煙道部 層位: 4層 試料No.5	種類: 炭化材(カラム) 試料の性状: 最終形成年輪以外、部位不明 状態: dry	超音波洗浄 酸-アルカリ-酸洗浄(塩酸: 12N, 水酸化ナトリウム: 10N, 塩酸: 12N)
PLD-29379	遺構: SO309 位置: 燃焼部 層位: 3層 試料No.6	種類: 炭化材(クリ) 試料の性状: 最終形成年輪以外、部位不明 状態: dry	超音波洗浄 酸-アルカリ-酸洗浄(塩酸: 12N, 水酸化ナトリウム: 10N, 塩酸: 12N)
PLD-29380	遺構: SO333 位置: 燃焼部 層位: 4層 試料No.7	種類: 炭化材(クリ) 試料の性状: 最終形成年輪以外、部位不明 状態: dry	超音波洗浄 酸-アルカリ-酸洗浄(塩酸: 12N, 水酸化ナトリウム: 10N, 塩酸: 12N)

② 結果

第19表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を、第49図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代(yrBP)の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い(^{14}C の半減期 5730 ± 40 年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

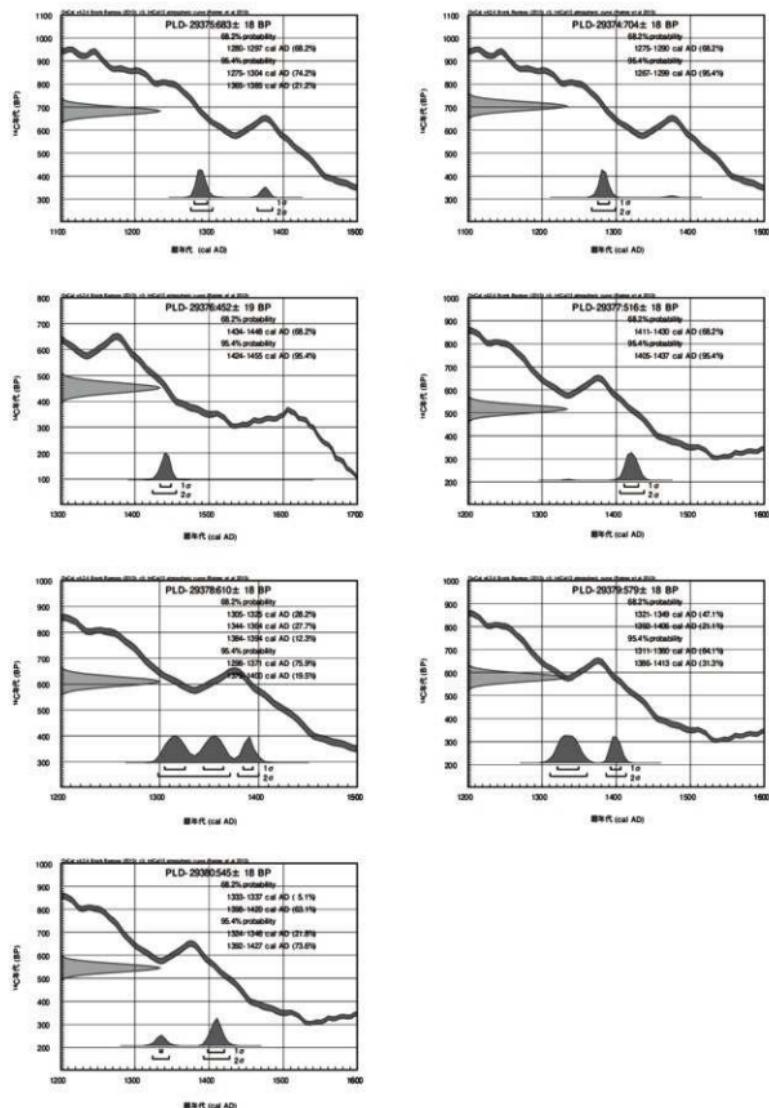
^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.2(較正曲線データ:IntCal13)を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337–360.
 中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」: 3–20. 日本第四紀学会.
 Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869–1887

第19表 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果
 (2) 樹種同定結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-29374 SO53(試料No.1)	-26.87 \pm 0.16	704 \pm 18	705 \pm 20	1275–1290calAD (68.2%)	1267–1299calAD (95.4%)
PLD-29375 SO55(試料No.2)	-26.96 \pm 0.17	683 \pm 18	685 \pm 20	1280–1297calAD (68.2%)	1275–1304calAD (74.2%) 1365–1386calAD (21.2%)
PLD-29376 SO60(試料No.3)	-25.87 \pm 0.18	452 \pm 19	450 \pm 20	1434–1448calAD (68.2%)	1424–1455calAD (95.4%)
PLD-29377 SO89(試料No.4)	-26.38 \pm 0.19	516 \pm 18	515 \pm 20	1411–1430calAD (68.2%)	1405–1437calAD (95.4%)
PLD-29378 SO111(試料No.5)	-25.72 \pm 0.16	610 \pm 18	610 \pm 20	1305–1325calAD (28.2%) 1344–1364calAD (27.7%) 1384–1394calAD (12.3%)	1298–1371calAD (75.9%) 1379–1400calAD (19.5%)
PLD-29379 SO309(試料No.6)	-28.76 \pm 0.20	579 \pm 18	580 \pm 20	1321–1349calAD (47.1%) 1392–1406calAD (21.1%)	1311–1360calAD (64.1%) 1386–1413calAD (31.3%)
PLD-29380 SO333(試料No.7)	-28.89 \pm 0.20	545 \pm 18	545 \pm 20	1333–1337calAD (5.1%) 1398–1420calAD (63.1%)	1324–1346calAD (21.8%) 1392–1427calAD (73.6%)



第49図 歴年較正年代グラフ(参考)(2)

黒沼保子(株式会社パレオ・ラボ)

① 試料と分析方法

試料は、屋外のカマドであるカマド状遺構から出土した炭化材で、SO53の焚口部の試料(No. 1)、SO55の焚口部の試料(No. 2)、SO60の燃焼部の試料(No. 3)、SO89の燃焼部の試料(No. 4)、SO111の煙道部の試料(No. 5)、SO309の焚口部の試料(No. 6)、SO333の燃焼部の試料(No. 7)から採取された炭化材で、同一試料内に複数の樹種が含まれていた試料もあり、同定した炭化材の総計は20点となった。遺構の時期は鎌倉時代～室町時代と推測されており、炭化材の放射性炭素年代測定も遺構の推定時期に対して整合的な結果を示した(放射性炭素年代測定の項参照)。

樹種同定に先立ち、肉眼観察と実体顕微鏡観察による形状の確認と、残存年輪数および残存径の計測を行った。その後、カミソリまたは手で3断面(横断面・接線断面・放射断面)を割り出し、直径1cmの真鍮製試料台に試料を両面テープで固定した。その後、イオンスピッタで金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡(KEYENCE社製 VE-9800)を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

② 結果

樹種同定の結果、針葉樹はアスナロのみ1分類群、広葉樹はクリとクワ属、モクレン属、カツラ属、サクラ属、アワブキ属、エゴノキ属の7分類群、その他に分類群不明の樹皮とタケ亜科があり、計10分類群が確認された。

樹種同定結果の一覧を第20表に示す。SO53の焚口部の試料(No. 1)ではクリとサクラ属、エゴノキ属、樹皮が確認された。SO55の焚口部の試料(No. 2)ではアスナロとクリ、クワ属、モクレン属、カツラ属、サクラ属、アワブキが確認された。SO60の燃焼部の試料(No. 3)ではアスナロとクリが確認された。SO89の燃焼部の試料(No. 4)ではクリが確認された。SO111の煙道部の試料(No. 5)ではサクラ属が確認された。SO309の焚口部の試料(No. 6)ではアスナロとクリが確認された。SO333の燃焼部の試料(No. 7)ではアスナロとクリ、タケ亜科が確認された。

第20表 炭化材樹種同定結果

試料番号	遺構	遺構名称	位置	層位	樹種	形状	サイズ(cm)	年輪数	PLD番号
1-1	SO53	カマド状遺構	焚口部	5層	クリ	破片	0.7×1×1.2	1	PLD-29374
1-2					サクラ属	破片	1.2×1.2×1	6	-
1-3					エゴノキ属	破片	0.6×1×1	5	-
1-4					樹皮	破片	0.5×0.2×1.5	-	-
2-1	SO55	カマド状遺構	焚口部	5層	クワ属	みかん削り状	半径0.7×1.5	7	-
2-2					クリ	破片	1.5×1×2	5	-
2-3					アスナロ	破片	0.5×0.8×1.5	2	-
2-4					アワブキ属	破片	1×1.5×0.7	不明	-
2-5					モクレン属	半剥状	直径1.5cm×1.2	3	PLD-29375
2-6					カツラ属	破片	1.5×2.3×1	7?	-
2-7					サクラ属	破片	1×0.5×1.5	8	-
3-1	SO60	カマド状遺構	燃焼部	4層	アスナロ	破片	1.2×0.7×1.2	6	PLD-29376
3-2					クリ	破片	0.8×0.5×1	1	-
4	SO89	カマド状遺構	燃焼部	3層	クリ	破片	0.8×0.5×0.8	2	PLD-29377
5	SO111	カマド状遺構	煙道部	4層	サクラ属	破片	0.5×0.3×0.5	2	PLD-29378
6-1	SO309	カマド状遺構	焚口部	3層	クリ	破片	1.5×0.7×2	2	PLD-29379
6-2					アスナロ	破片	0.5×0.3×0.5	2	-
7-1					クリ	破片	2×0.5×2	2	PLD-29380
7-2	SO333	カマド状遺構	燃焼部	4層	アスナロ	破片	0.7×1×1.5	4	-
7-3					タケ亜科	破片	0.5×0.2×2	-	-

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、走査型電子顕微鏡写真を図版32下段及び33上段に示す。

・アスナロ *Thujopsis dolabrata* Siebold et Zucc. ヒノキ科

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材部から晩材部への移行は比較的緩やかである。樹脂細胞は晩材部に散在し、放射組織内にも豊富に樹脂を含む。分野壁孔は小型のスギ型～ヒノキ型で、1分野に不揃いに3～4個存在する。アスナロは温帯に分布する常緑高木である。材は、加工性や割裂性は中庸だが、耐朽性および保存性が高い。

・クリ *Castanea crenata* Siebold et Zucc. ブナ科

大型の道管が年輪のはじめに数列並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で主に單列である。クリは温帯下部から暖帶に分布する落葉高木である。材は重硬で、耐朽性および耐湿性に優れ、保存性が高い。

・クワ属 *Morus* クワ科

大型で丸い道管が年輪のはじめに配列し、晩材では徐々に径を減じた小道管が単独もしくは数個複合して斜線方向に配列する半環孔材である。道管の穿孔は単一である。軸方向柔組織は周囲状から異状となる。放射組織は3～5列幅で、上下端の1～3細胞が直立もしくは方形細胞である異性である。クワ属は温帯から暖帶、亜熱帯に分布する落葉高木で、ケグワとマグワ、ヤマグワなどがある。材は堅硬で、韌性に富む。

・モクレン属 *Magnolia* モクレン科

小型の道管が、単独もしくは3～4個複合して均等に分布する散孔材である。木繊維の壁は薄い。道管相互壁孔は対列～階段状、道管の穿孔は単一である。放射組織は1～2列幅で、上下端の1～2細胞が直立もしくは方形細胞である異性である。モクレン属は温帯から暖帶上部に分布する常緑または落葉の低木および高木で、タイサンボクやホオノキ、モクレン、コブシなどがある。材は一般にやや軽軟または中庸程度だが、緻密で狂いが少ない。

・カツラ属 *Cercidiphyllum* カツラ科

小型で角張った道管が、ほぼ単独で密に分布する散孔材である。道管の穿孔は階段状で30段程度となる。放射組織は1～3列幅で、平伏細胞と方形細胞からなる異性である。カツラ属は温帯から暖帶に分布する落葉高木で、カツラとヒロハカツラがある。材は軽軟で韌性があり、加工は容易である。

・サクラ属(広義) *Prunus* s.l. バラ科

やや小型の道管が、単独あるいは斜め方向に2～3個複合する散孔材である。道管の穿孔は単一で、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で、1～5列幅である。サクラ属は温帯に生育する落葉または常緑の高木または低木である。サクラ属はさらにサクラ亜属やスモモ亜属、モモ亜属、ウワズミザクラ亜属などに分類され、25種がある。木材組織からはモモとバクチノキ以外は識別困難なため、この2種を除いたサクラ属とする。材は比較的重硬および緻密だが、加工容易である。

・アワブキ属 *Meliosma* アワブキ科

やや小型の道管が、単独で分布する散孔材である。軸方向柔組織は周囲状に配列する。道管の穿孔は単一である。放射組織は4～10列幅で、方形・直立・平伏細胞が混在する異性である。放射組織の

高さが1mm以上のものもある。アワブキ属は主に温帯～暖帯に生育する常緑もしくは落葉の高木で、フシノハアワブキやヤマビワ、アワブキなど5種がある。アワブキの材は強度および硬さ等は中庸であるが、狂いや割れが出やすい。

・エゴノキ属 *Styrax* エゴノキ科

小型の道管が、放射方向に数個複合して分布する散孔材で、晚材部で道管が小型になり数も減る。軸方向柔組織は短接線状となる。道管の穿孔は10段程度の階段状である。放射組織は1～4列幅で、異性である。エゴノキ属は温帯から熱帯にかけて分布する落葉小高木で、エゴノキやハクウンボク、コハクウンボクの3種がある。材はやや重硬で緻密である。

・樹皮 Bark

師細胞および師部放射組織からなる二次細胞および周皮で構成される樹皮である。樹皮は対象標本が少なく、同定には至っていない。

・タケ亜科 Subfam. *Bambusoideae* イネ科

柔細胞と維管束で構成される單子葉類で、維管束は柔細胞中に散在する。維管束は一对の道管とそれと直行する原生木部間隙と師部で形成され、その周囲を厚膜組織からなる維管束鞘が取り囲む。

タケ・ササの仲間で日本では12属が含まれるが、程の組織のみから属や種を識別するのは難しい。割裂性が非常に大きい。

③ 考察

全体ではクリを中心とした落葉広葉樹が多くみられ、針葉樹はアスナロのみであった。遺構別の樹種組成を第21表に示す。試料の量が少ないSO89はクリのみ、SO111はサクラ属のみであったが、その他の遺構では同一遺構内から複数樹種が確認されており、SO55では7分類群がみられた。形状は破片が多いが、SO55ではケワ属が半径0.7cmのみかん割り状、モクレン属が直径1.5cmの半割状であり、小径の枝材であったと思われる。

試料はいずれもカマド状遺構の焚口部～煙道部から出土しており、燃料材と考えられる。確認された樹種はいずれも温帯に分布する樹木で、遺跡周辺を分布域に含む。クリやサクラ属、ケワ属は比較的重硬な材で、モクレン属やカツラ属、アスナロはやや軽軟な材である(平井1996)。今回の分析試料では多様な樹種が用いられており、材質も均一ではないため、燃料材には材質による選択は行わず、遺跡周辺に生育していた樹木が適宜利用されたと推測される。

引用文献

平井信二 (1996) 木の大百科. 394p. 朝倉書店.

第21表 遺構別の樹種組成

樹種	遺構名							計
	SO53 5層	SO55 5層	SO60 4層	SO89 3層	SO111 4層	SO309 3層	SO333 4層	
位置	焚口部	焚口部	燃焼部	燃焼部	煙道部	焚口部	燃焼部	
アスナロ	1	1	1		1	1	1	4
クリ		1	1	1		1	1	6
ケワ属		1						1
モクレン属		1						1
カツラ属		1						1
サクラ属	1	1			1			3
アワブキ属		1						1
エゴノキ属	1	1						1
樹皮	1							1
タケ亜科								1
計	4	7	2	1	1	2	3	20

第2節 種実同定

バンダリ スダルシャン・佐々木由香(株式会社パレオ・ラボ)

① 対象試料と方法

遺跡周辺における古環境と植物利用を解明する目的で、遺構内の堆積物試料が回収された。ここでは、堆積物試料から出土した大型植物遺体を同定し、当時利用された種実や周辺の植生について検討した。

試料は、水洗選別済みの13試料である。遺構の内訳は、井戸跡がSE65、SE88、SE161、SE292、SE324、SE334、SE335、SE339、SE401の9基、カマド状遺構がSO53とSO55の2基、竪穴状遺構がSKI210の1基である。遺構の時期は、SKI210が19世紀代で、その他の遺構は中世である。

土壤の採取から水洗、種実の抽出までの作業は、秋田県埋蔵文化財センターによって行われた。水洗では、浮遊物を回収後、1mm目の篩で沈殿物が回収された。水洗量は不明である。大型植物遺体の抽出及び同定は実体顕微鏡下で行った。

② 結果

同定した結果、木本植物ではモモ核・炭化核と、スモモ核、サクラ属サクラ節炭化核、トチノキ種子、クマノミズキ核、タラノキ核の6分類群、草本植物ではアサ核と、ミズ属果実、ヤナギタデ果実・炭化果実、イヌタデ果実、ウナギツカミ果実、ギシギシ属果実、キケマン属種子、ヒトリシズカ種子、ハギ属炭化果実、ダイズ属炭化種子、ササゲ属アズキ亜属アズキ型炭化種子、カタバミ属種子、エノキグサ属種子、エゴマ果実、ナス種子、ヒエ有ふ果・炭化種子、ヒエ属有ふ果、イネ炭化種子、アワ炭化有ふ果、エノコログサ属有ふ果、オオムギ炭化種子、スゲ属果実の22分類群の、計28分類群が得られた(第22表)。

以下に、大型植物遺体の産出状況を遺構別に示す(不明芽と同定不能炭化種実は除く)。

SE65：同定可能な種実は得られなかった。

SE88：同定可能な種実は得られなかった。

SE161：スモモとトチノキ、アサ、ヤナギタデ、イヌタデがわずかに得られた。

SE292：モモとアサ、ヤナギタデ、ダイズ属、ササゲ属アズキ亜属アズキ型、ヒエ、イネ、アワ、スゲ属がわずかに得られた。

SE324：モモがわずかに得られた。

SE334：モモとクマノミズキ、タラノキ、アサ、ミズ属、ヒエ属、エノコログサ属がわずかに得られた。

SE335：アサがわずかに得られた。

SE339：ヤナギタデとエゴマがわずかに得られた。

SE401：イヌタデが少量、サクラ属サクラ節とウナギツカミ、ギシギシ属、キケマン属、ヒトリシズカ、ハギ属、ダイズ属、カタバミ属、エノキグサ属、ナス、ヒエ、ヒエ属、アワがわずかに得られた。

SO53：モモがわずかに得られた。

SO55：オオムギがわずかに得られた。

SKI210：モモがわずかに得られた。

次に、大型植物遺体の記載を行い、図版34に写真を示して同定の根拠とする。

・モモ *Amygdalus persica* L. 核・炭化核 バラ科

茶褐色で、上面觀は両凸レンズ形、側面觀は楕円形で先が尖る。下端に大きな着点がある。表面に不規則な深い皺がある。また、片側側面には縫合線に沿って深い溝が入る。高さ25.9mm、幅18.8mm、厚さ14.4mm。

・スモモ *Prunus salicina* Lindl. 核 バラ科

暗褐色で、上面觀はやや扁平な両凸レンズ形、側面觀は紡錘形。両側に縫合線があり、浅い溝が入る。表面は平滑。高さ14.7mm、幅12.5mm、厚さ7.8mm。

・トチノキ *Aesculus turbinata* Blume 種子 トチノキ科

楕円体。下半部は褐色で光沢がなく、上半部は黒褐色でやや光沢がある。上下の境目の下に少し突出した着点がある。種皮は薄くやや硬い。種皮は3層からなり、各層で細胞の配列方向が異なる。種皮表面には指紋状の微細模様が密にある。残存高13.9mm、幅21.3mm、残存厚19.3mm。

・アサ *Cannabis sativa* L. 核 アサ科

褐色で、上面觀は両凸レンズ形、側面觀は倒卵形で側面に稜がある。下端にはやや突出した楕円形の大きな着点がある。表面には脈状の模様がある。長さ4.7mm、幅3.7mm、厚さ3.4mm。

・ダイズ属 *Glycine* spp. 炭化種子 マメ科

変形が著しいが、本来の上面觀・側面觀は楕円形か。へそは側面のほぼ中央にあり、楕円形で全長の1/2未満。へその中央には小畠ほか(2007)に示されたダイズ属の特徴である縦溝(裂けている)とその周囲の隆線がある。長さ4.0mm、幅3.0mm、厚さ2.6mm。破片の大きさは、長さ6.9mm、幅5.3mm、残存厚3.8mm。小畠(2008)に示された現生種と大きさを比較すると、長さ6.9mmの個体は栽培種に近く、長さ4.0mmの個体は栽培種と野生種双方の可能性があるが、形状からみると、厚みがあるため栽培種に近い。

・ササゲ属アズキ亜属アズキ型 *Vigna* subgenus *Caratotropis* var. *angularis* type 炭化種子 マメ科

上面觀は方形に近い円形、側面觀は方形に近い楕円形。小畠ほか(2007)に示されたアズキ亜属の特徴である長楕円形の臍の内部の厚膜(Epiphilum)が残存している個体がある。臍は全長の半分から2/3ほどの長さで、片側に寄る。また、臍の下端には種瘤または種瘤の痕跡が穴になって残っている。小畠(2008)に示された現生種と大きさを比較すると、試料は栽培種に近いため、栽培種のアズキ型とした。長さ6.1mm、幅3.4mm、厚さ3.2mm。

・エゴマ *Perilla frutescens* (L.) Britton var. *frutescens* 果実 シソ科

赤褐色で、いびつな球形。端部にやや突出する着点がある。表面には不規則で多角形の低い網目状隆線がある。網目部分の周囲はわずかに凹む。長さ2.1mm、幅1.8mm。

・ナス *Solanum melongena* L. 種子 ナス科

黄淡色で、上面觀は長楕円形、側面觀は楕円形。着点は明瞭に窪む。表面には歯状突起が覆瓦状となる細かい網目状隆線がある。長さ3.1mm、幅3.8mm。

・ヒエ *Echinochloa crus-galli* (L.) Beauv. var. *frumentacea* (Roxb.) W.Wright 有ふ果・炭化種子(穎果) イネ科

有ふ果は暗赤色で、紡錘形。縦方向に細かい顆粒状の模様がある。壁は薄く弾力がある。内穎側は平坦で、外穎側は中央が山状に膨らむ。長さ2.9mm、幅1.3mm。種子(穎果)は、側面觀が卵形ないし

楕円形、断面は片凸レンズ形であるが、厚みは薄くやや扁平である。胚は幅が広くうちわ型で、長さは全長の2/3程度と長い。長さ1.8mm、幅1.3mm。

第22表 種実同定結果（括弧内は破片数）

通称 別名 略称	SE09 3種	SE08 3種	SE141 3種	SE292 3種	SE324 3種	SE324 3種	SE325 3種	SE329 3種	SE401 12種	SE401 12種	SE03 3種	SE05 3種	SE120 12種	SE120 12種
モモ	桃				1	1	1							1
スズモ	桜桃													
サクランボサクナシ	桑				1									
トクノキ	櫟													
タコノミズキ	桃													
アズキ	豆													
エビヅル	紫莢													
ヤマギラ	紫莢				1	2								
イチゴ	苺					1								
ウツギワカミ	桃													2
ゼンギン属	紫莢													1
キクマン属	桜													1
ヒドリズカ	桜													
ダイズ属	大豆													
サザンアズキ属アズキ属	豌豆	豌豆												
カラハニ属	稻子													1
エビヅル属	紫莢													1
エンドウ	豆													
ナス	茄													5
ニス	有花果													1
ヒメ属	稻子													1
イネ	稻子													1
アワ	淀无有花果				2									1
エプロログサ属	有花果													
スズ属	稻子													
不明	芽				1									
同上	稻子				1									
子穀類	稻子				(+)	(+)								
セリカ、++10-10													根材料	根材料
資料(現生)	有花果													
子穀類	稻子													

・ヒエ属 *Echinochloa* spp. 有ふ果 イネ科

淡褐色で、紡錘形。基部と先端はやや尖る。縦方向に細かい顆粒状の模様がある。壁は薄く弾力がある。内穎側は平坦で、外穎側は中央が山状に膨らむ。栽培型のヒエよりもやや細長く、野生のイヌヒエに近い。長さ2.2mm、幅1.4mm。

・イネ *Oryza sativa* L. 炭化種子(穎果) イネ科

上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形。一端に胚が脱落した凹みがあり、両面に縦方向の2本の浅い溝がある。長さ4.5mm、幅2.6mm。

・アワ *Setaria italica* P.Beauv. 炭化有ふ果 イネ科

紡錘形。内穎と外穎に独立した微細な乳頭状突起がある。長さ1.8mm、幅1.4mm。

・エノコログサ属 *Setaria* spp. 有ふ果 イネ科

黄褐色で、上面観は楕円形、側面観は長楕円形で先端がやや突出する。アワよりも細長く、乳頭突起が歯状を呈する。長さ2.3mm、幅1.3mm。

・オオムギ *Hordeum vulgare* L. 炭化種子(穎果) イネ科

状態が悪いが、側面観は長楕円形。腹面中央部には上下に走る1本の溝がある。背面の下端中央部には三角形の胚がある。断面形状は円形となる(Jacomet, 2006)。長さ5.1mm、幅2.1mm、厚さ1.5mm。

・イネ科 Poaceae sp. 有ふ果(現生) イネ科

透明感のある乳白色で、上面観は円形、側面観は狭錐形。内外穎が観察でき、表面には縦筋と強い光沢がある。遺跡の出土種実では残存しにくい有ふ果の内部に生の種子(穎果)が残存する点や遺跡出土種実ではみられない彩度が高い色をもつ点から現生種実と判断した。長さ3.0mm、幅1.1mm。なお、

科以上の詳細な同定はできなかったが、栽培植物ではない。

・不明A Unknown A 不明

赤褐色で、側面觀はへら形。腹面はやや平滑で、中央にむかってゆるやかに窪む。下方には舌状に張り出した部分があり、下端には半円状の窪みがある。背面はレンズ状に膨らみ、縱方向に浅い溝がある。非常に硬質。種実かどうかかも不明で、二次鉱物やなんらかの傷などの可能性がある。長さ4.6mm、幅3.7mm、厚さ2.7mm。

③ 考察

以下、時期別に考察を行う。

出土した大型植物遺体を同定した結果、中世の遺構からは多種類の大型植物遺体が得られた。栽培植物ではモモとスモモ、アサ、ササゲ属アズキ亞属アズキ型、エゴマ、ナス、ヒエ、イネ、アワ、オオムギが得られた。このうち、カマド状遺構からはモモとオオムギが得られた。ダイズ属は栽培種に近い個体が含まれていた。モモ核の大きさは、高さ29.0mm、幅21.8mm、厚さ16.0mm(SE292)と、高さ23.3mm、幅16.9mm、厚さ13.2mm(SE324)、高さ25.9mm、幅18.8mm、厚さ14.4mm(SE334)、炭化核の残存高19.5mm、幅14.5mm、厚さ11.3mm(SO53)で、形状はすべて完形であった。

山梨県内の遺跡から出土したモモ核の事例を集成了した(新津1999)によると、モモの核は時代ごとに大きさや形状が変化しており、弥生時代には比較的大きくかつ丸味の強い核が多いのに対し、平安時代から近世には縦長になる傾向があるという。さらに、鎌倉期では大きさの変異幅が大きく、江戸時代後期になると大型になり、平均核長26.9mm、最大で38.0mm程度の核がみられるとしている。今回の西板戸遺跡では高さが計測できた個体は少ないが、高さ23.3mmと29.0mmがあり、変異幅が大きかった。なお、モモは食用可能な植物であるが、呪術的な意味を持つため、しばしば祭祀との関連が想定されている。

鎌倉時代から室町時代にかけての西板戸遺跡は、主に掘立柱建物と井戸、屋外での煮炊きに使ったカマド状遺構で構成される集落跡と推定されており、遺跡内および周辺で稲作と畠作、モモやスモモなどの果樹栽培も行われていたと推定される。

このほかに食用可能な植物としては、サクラ属サクラ節とトチノキ、タラノキ、ミズ属が挙げられる。野生植物としては、ヤナギタデヒヌタデ、ウナギツカミ、ギシギシ属、キケマン属、ヒトリシズカ、ハギ属、カタバミ属、エノキグサ属、ヒエ属、エノコログサ属、スゲ属が挙げられる。これらの草本植物は周辺の草地などに生育し、井戸の覆土に入り込んだ可能性がある。

19世紀の竪穴状遺構(SKI210)からは、モモが得られた。モモ(炭化核)の大きさは、残存高25.0mm、残存幅13.9mm、残存厚9.3mmであった。破片であったが、打撲痕など人為的な人間の割り痕は確認できなかった。

引用文献

- 小畠弘己(2008)マメ科種子同定法。小畠弘己編「極東先史古代の穀物3」225-252。熊本大学。
- Jacomet, S. and collaborators Archaeobotany Lab. (2006) Identification of cereal remains from archaeological sites. 2nd edition, IPAS, Basel Univ.
- 新津 健(1999)遺跡から出土するモモ核について—山梨県内の事例から—。山梨考古学論集, IV, 361-374。山梨県考古学協会。
- 小畠弘己・佐々木由香・仙波靖子(2007)土器圧痕からみた縄文時代後・晩期における九州のダイズ栽培。植生史研究15-2, 97-114。

第5章 総括

今回の調査で検出した遺構は、大別して中世前期(13世紀)、中世後期(14～15世紀)、近世(18～19世紀)の3時期のものである。以下ではこれら3時期に分けて記述し、本書のまとめに代えたい。

中世前期(13世紀)

中世前期の遺構は、時期を仮定したものを含め、井戸跡6基(SE65・85・87・161・324・395)、土器溜まり2か所(SU54・280)、カマド状遺構6基(SO53・55・56・59・319・321)を検出した。これらは調査区中央西側に遺構分布が集中する(第50図上)。

上記の井戸跡と土器溜まりからは、大烟・桧山腰窯産の珠洲系陶器が出土しており、時期は13世紀前半と推定される。^(注1)これらは埋め戻し土からの出土であり、遺構の廃絶時に遺棄されたと考えられ、一部遺構間接合が認められる。接合関係は右の通りである。



井戸跡は、遺構間接合遺物から同時期の廃絶が推定され

るが、それぞれの平面形や規模に統一性はない。井戸の構造は大半が不明だが、SE65の下部では井戸枠材の一部が原位置を留めており、横板井籠組の構造が確認できた。ただし、この組板が井戸上部まで続いているのか、下部の集水部のみに設けられていたのかは不明である。また、SE161の底部付近で検出された大形植物繊維束も井戸底の浄水施設の可能性があるものの、周囲から井戸枠等の検出がなく不明な点が多い。各井戸の埋め戻し土には、層中に炭化物の薄層を含む例(SE85・161)や、礫が多量に混入する例(SE65・87・161)が見受けられる。井戸の廃絶儀礼に関わる痕跡と考えられるが、具体的な儀礼の内容は不明である。ただ、廃絶儀礼に関わる遺物としては、SE161・324出土のモモ・^(注2)スモモ種子や、SE65出土の規則的な打ち欠き痕跡が残る擂鉢(第37図35)などがある。

土器溜まりは、井戸跡出土遺物との遺構間接合から井戸の廃絶儀礼に関わる遺構と推定される。平面形は不整形で底面も凹凸が目立つため、自然の凹地を利用したものと考えられ、井戸の廃絶儀礼に用いる陶器を遺構内または周辺で破碎し、大部分を遺構内に遺棄、一部を各井戸に分配・遺棄したと推測される。SU54からは大烟・桧山腰窯産の大甕が1個体出土しており、その破片がSE65・85・324から出土している。SU280の出土陶器は少ないが、SE65出土陶器片と接合する個体が出土している。

井戸廃絶時に破碎した遺物を井戸及び自然の凹地に分配・遺棄する例は、横手市観音寺廢寺跡で確認されており、12～13世紀の県南地域に共通する特徴的な井戸廃絶儀礼の可能性があるが、県内における井戸廃絶儀礼の実態や変遷についてはいまだ不明な部分が多く、さらなる事例の蓄積を待ちたい。カマド状遺構からは時期を特定できる出土遺物がなく、遺構から採取した燃料材の放射性炭素年代測定の結果から時期を判断した。上記のうち年代測定を行ったのはSO53・55のみで、いずれも煙道が西方向を向く(SO53=13世紀後葉、SO55=13世紀後葉～14世紀初頭または14世紀後葉)。そのほか、後述するSO60・89・111・309・333のカマド状遺構も同様の年代測定を行った結果、帰属時期は14～15世紀と推定され、これらの煙道がいずれも南北方向を向くと推定されることから、煙道の向きが西方向のものは概ね13世紀、南北方向のものは14～15世紀と判断した。SO319・321は、残存部の主軸方向から煙道を西向きと推測し、本時期に含めた。年代測定を実施していない遺構を多く含むため、帰属時期は幅を持たせ概ね13世紀としたが、SO53・55の年代測定結果から、存続時期の主体は13世

紀後葉であった可能性が高い。遺構の形状は、全体を検出できたものはいずれも煙道部・燃焼部・焚口部が一直線となる平面形を呈する。上部の削平により構造を明瞭に確認できたものはないが、比較的の残存状態の良いSO59については、燃焼部・煙道部をトンネル状に掘り抜いた地下式の構造が推定される。貼床は本時期とした遺構からは確認されなかった。

以上から推測される中世前期の遺跡の様相は次の通りである。13世紀前半に調査区中央西側に少なくとも6基の井戸が出現する。井戸の出現は集落の創始に伴う可能性があるが、本時期の居住施設は調査区内から検出されていない。居住域が調査区外に存在する可能性、あるいは調査区中央に分布する時期不明の掘立柱建物跡や柱穴様ピットが本時期の居住施設にあたる可能性が想定できるが確証に乏しい。別の可能性として、居住域が周辺に存在しなかったことも想定できる。先述の観音寺廐寺跡では、生活の場ではない寺域内から32基もの多数の井戸跡が検出されており、井戸は水辺の祭祀を目的として設けられたと推定されている。本遺跡の13世紀前半の井戸跡群は同時廐絶の可能性が高く、少なくとも6基の井戸跡が一部区域にまとまって併存した状況が窺える。土器溜まりとの遺構間接合遺物が示す井戸廐絶儀礼の状況を見てても観音寺廐寺跡との類似性が認められ、当該期の遺跡地を祭祀域として想定できるが、同時期の居住域の様相が不明であるため、これ以上の推論は控えたい。ただし、13世紀前半における井戸跡の出現が本遺跡における人間活動の開始であることは間違いない。

井戸廐絶後と考えられる13世紀後葉には、井戸跡と同じ調査区中央西側にカマド状遺構が分布する。同遺構の用途については、屋外の竈説、金属製品の加工場説、麻糺し遺構説などが知られるが、いずれも定説には至っていない。仮に屋外の竈とすれば居住域の併存が想定されるが、本遺跡の13世紀代における居住域は不明であり、13世紀後葉の遺跡地の性格は13世紀前半同様、検討を要する。

なお、本時期の遺構からは一定量の大畠・桧山腰窯産製品が出土している。同窯製品は、雄物川下流の秋田市下タ野遺跡でも出土しており、13世紀には雄物川水運による流通の存在が想定されている。同時期の本遺跡の性格は不明な点が多いが、遺物の出土状況から、雄物川支流の榎岡川に面する本遺跡は、同窯製品の流通経路に沿っていた可能性がある。同窯は本遺跡から榎岡川を2.3km遡った箇所にあり、13世紀前半における本遺跡での人間活動の開始は、同窯の開窯との関連性が窺えよう。

中世後期(14～15世紀)

中世後期の遺構は、時期を仮定したものを含め、掘立柱建物跡1棟(SB279)、柱穴列1条(SA17)、井戸跡8基(SE19・243・289・292・334・335・339・401)、カマド状遺構6基(SO60・89・111・309・322・333)、土坑墓19基、火葬墓12基を検出した。調査区内で検出した土坑墓・火葬墓は全て本時期に属する。これらは調査区南半を中心に立地する(第50図中)。

掘立柱建物跡SB279は、近世の豎穴状遺構SKI08に切られるため近世以前に属するが、柱穴構成等を踏まえ本時期と仮定した。西側に隣接するSA17柱穴列も同建物に伴う区画施設の可能性が高い。

井戸跡は出土遺物及び放射性炭素年代測定の結果から14世紀代の井戸跡(SE334・335・339)と15世紀代の井戸跡(SE243・289・292・401)の2時期に細分できる。前者は調査区南半中央に立地し、後者は同東側に立地する傾向がある。SE334の推定時期は14世紀前葉～15世紀前葉だが、ここでは立地から14世紀代に分類した。また、SB279の北側に隣接するSE19は同建物に伴う井戸跡と推測し、本時期に含めた。これら井戸跡は、中世前期同様、平面形や規模に時期による統一性はなく、構造もほぼ不明である。一部で井戸枠材と推定される部材が出土した井戸もあるが、いずれも破片のため具体

的な構造は推定できなかった。埋め戻し土には層中に炭化物の薄層を含む例(SE401)や多量の礫の混入する例(SE289・335)が見受けられ、中世前期と同様の廃絶儀礼の痕跡が窺える。SE334からは廃絶儀礼に用いられたと推定される節抜竹も出土している。

カマド状遺構は先述したように、煙道の向きが南北方向のものを本時期とした。調査区南半に散漫に分布する。放射性炭素年代測定の結果から、概ね14世紀代(SO111・309)と15世紀代(SO60・89・333)の時期が推定され、煙道の向きはSO60・89・111が北方向を、SO333が南方向を向く。SO309の煙道の向きは不明だが、燃焼部の向きから概ね南方向と推定される。SO322は残存部から推定した主軸方向から煙道を南北方向と仮定し、本時期に含めた。平面形は中世前期と同様、全体を検出したものは焚口部・燃焼部・煙道部が一直線上に並ぶ。構造は不明なものが多いため、埋土からSO60・309は燃焼部・煙道部を粘土で構築した半地下式と推定される。また、SO60・333には貼床があり、確認できたものは、中世前期と構造に相違がある。

土坑墓・火葬墓は、調査区南東部に集中し、墓域を形成している。出土遺物は少ないが、ST392火葬墓で15世紀前半の珠洲系陶器が出土し、他の墓からも14世紀後半～15世紀代と推定される遺物が散見されることから概ね15世紀前半に属すると判断した。調査区南半西側及び南端にも少数が分布するが、これらは南東部墓域の墓と同様の土坑形態または埋土の推定成因が認められるものを認定した。土坑墓・火葬墓は掘り込みの形状において差がなく、埋土の状況から分類した(第3章第3節第1項)。火葬墓は、遺構内で火葬しそのまま埋葬したST392を除き、他は全て別の箇所で火葬した焼骨を埋葬したものと推定される。

以上から推測される中世後期の遺跡の様相は次の通りである。まず、14世紀には調査区南半中央を中心に井戸跡、カマド状遺構が散漫に分布する。中世前期と同じく居住域の併存は不明な点が多いが、中世前期のような井戸跡、カマド状遺構の集中域は認められず、掘立柱建物跡SB279に代表される居住域の存在も示唆されることから、遺跡地は14世紀代には通常の集落として機能していた可能性が高い。次いで、15世紀前半には橋岡川寄りの調査区南半東側に井戸跡が分布する。中には、SE289・292・401のように分布が集中するものも存在する。周囲には同時期のカマド状遺構SO60も存在し、中世前期と似たような立地状況ではあるが、遺構間接合遺物は認められず、時期差も考えられ、遺構の併存状況については検討を要する。したがって、検討の余地はあるが、14世紀に推定される通常の集落としての機能が継続した可能性が高い。加えて、同時期には新たに調査区南東部を中心に墓域が形成される。同箇所は周囲よりわずかに標高が高く(付図3)、地形を意識して選地された可能性がある。

これら本遺跡で検出した土坑墓・火葬墓は、東北の中世墓について整理した田中則和の分類に従^(註6)うと、①土葬土坑墓、②火葬骨埋納坑、③火葬遺構(火葬施設転用墓)に分けられる。すなわち、本遺跡の土坑墓は①、ST392を除く火葬墓が②、ST392が③にあたる。

県内の同時期の中世墓群の類例としては、湯沢市館堀城跡、秋田市後城遺跡などが挙げられる。館堀城跡は、13～15世紀の城館跡であり、同時期の中世墓群が検出されている。墓の内訳は上述の②の形態が31基、③の形態が5基(いずれも火葬施設転用墓)検出されている。^(註7)後城遺跡は漆安東氏の支配下にあった中世秋田湊の湊町と推定されている遺跡で、同遺跡のA地区から14～15世紀の中世墓群が検出されている。墓の数は21基以上あり、②の形態が大半だが、①の形態も存在する。

以上の例からは①～③は混在する場合が多く、うち③は比較的少数である傾向が見られ、本遺跡の

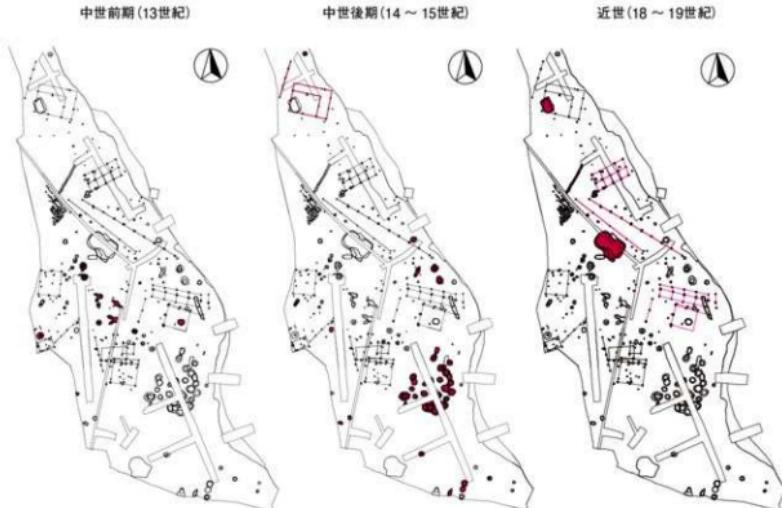
状況と一致する。被葬者は館堀城跡においては在地領主層及びその関係者、後城遺跡においては湊町の居住民または湊安東氏に関係する階層の人々と推定される。本遺跡においては遺跡地の1km南に中世城館の樋岡城が近接することから、館堀城跡や後城遺跡と類似した被葬者の階層を想定することが可能だが、15世紀前半における樋岡城の様相は不明な点が多い。ただし、本遺跡のST392からは副葬品として短刀が出土しており、在地領主層につながる武士階級が被葬者として想定できる。同火葬墓は本調査区内で唯一検出された③の形態の墓であり、副葬品の多さから見ても他の①、②の墓の被葬者との階層差を示している可能性があるが、これに関しては、他の類例を踏まえた細密な検討が必要であり、今後の課題としたい。

近世(18～19世紀)

近世の遺構は、時期を仮定したものも含め、掘立柱建物跡3棟(SB281・403・468)、柱穴列5条(SA320・404・405・467・471)、竪穴状遺構2棟(SKI08・210)、木棺墓4基(ST222・223・224・284)、土坑1基(SK34)、溝跡1条(SD92)を検出した。出土遺物などから時期が特定できない遺構でも、柱間距離や主軸方向等から本時期に属する可能性が高いものはここに含めた。これらは調査区北半を中心に立地する(第50図下)。

このうち、詳細な時期を特定できた遺構は18世紀以降のものしかなく、15世紀後半～17世紀の様相は不明である。ただし、文献上は天正18(1590)年の検地目録帳に、同地に「板戸村」が存在していたことが知られ、近世段階で遺跡地周辺に集落が存在したことは確かである。^(註10)

18世紀中葉以降には、調査区中央北寄りの一部に木棺墓4基からなる小規模な墓域が形成され、幼児の埋葬が行われたと考えられる。近世村落における庶民の墓と推定されるが、副葬品から見ると、緞錢、土人形の副葬は東北地方では珍しく、被葬者は庶民でも上流階層を想定することが可能である。^(註11)



第50図 西板戸遺跡遺構変遷図

また、19世紀前葉～中葉には、堅穴状遺構SKI08・210や、総柱の掘立柱建物跡SB281・403などが存在した可能性が高い。近世の船着場が遺跡北側に隣接することから、これらは倉庫及び馬屋と推定され、遺跡地は船着場を介した物資の貯蔵・運搬に関わる施設が置かれた区域であったと想定される。西板戸は地形的に雄物川と樺岡川の合流点に近いこともあり、樺岡川上流からの物資を雄物川の大船に積み替えを行っていたという記述もあり、西板戸集落は近世において物資輸送の要所であったと考えられる。同集落は、17世紀代の「六郡郡邑記」では家数十一軒の小村であるが、18世紀代の『月の出羽路』には二十戸と記されており、時代を下るごとに村の発展が窺え、天明8(1788)年には西板戸船着場に船調役所が設置されている。上記の倉庫や馬屋と推定される遺構群が19世紀前葉～中葉と思われる時期に出現することは、この船調役所の設置と関連している可能性が高い。

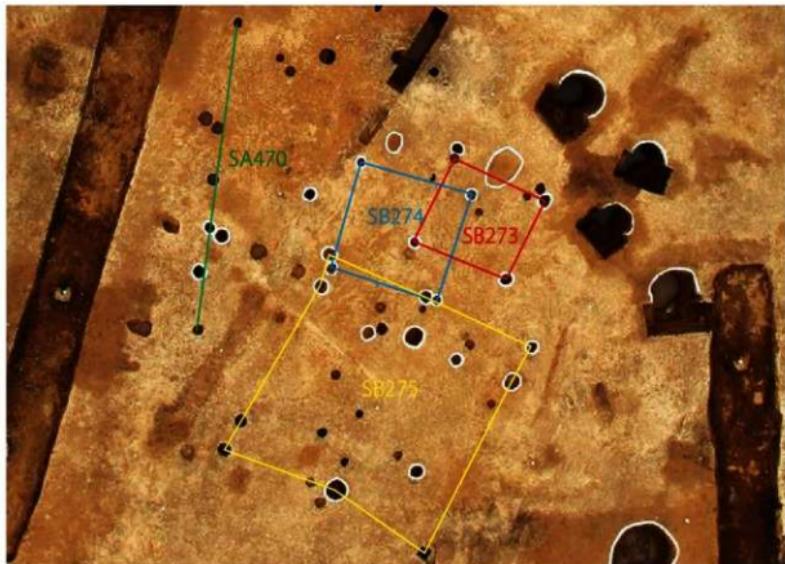
- 註1 南外村教育委員会 「仙北郡南外村大畑窓跡発掘調査報告書」 1981(昭和56)年
南外村教育委員会 「仙北郡南外村大畑・松山腰窓跡発掘調査報告書」 1992(平成4)年
- 註2 モモ・スモモは井戸の祭祀に用いる例が知られている(註3文献、20頁)。
- 註3 秋田県教育委員会 「般音寺庵跡一土地改良総合整備事業(緊急生産調整型)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書一」 秋田県文化財調査報告書第321集 2001(平成13)年
同遺跡は12～13世紀の寺院関連施設であり、井戸跡32基と自然の凹地を利用した不整形土坑14基、河川跡9か所などが検出されている。井戸跡出土の土器・陶磁器の中には、不整形土坑や河川跡出土の遺物と接合するものがあり、破碎した遺物を井戸跡及び自然の凹地、河川に分配・遺棄していたことが確認できる。
- 註4 茅野嘉雄 「カマド状遺構の集成と今後の研究課題について」 『研究紀要』 第13号 青森県埋蔵文化財調査センター
- 註5 神田和彦 「雄物川流域 中世前期の集落一下タ野遺跡一」 『海と城の中世』 高志書院 2005(平成17)年
- 註6 田中剛和 「東北中世墓の様相と画期」 『東北中世史の研究』 下巻 高志書院 2005(平成17)年
なお、同文献で田中が「火葬遺構」としたものは、火葬するための施設とその施設をそのまま墓とするものの2つの類型がある。田中は前者を火葬施設、後者を火葬施設転用墓としており、本遺跡で検出されたST392火葬墓は後者にあたる。
- 註7 田中の整理によると、①は14世紀後半以降、②は14～15世紀にかけて密集地が形成されるとされ、③についても普及は15世紀頃とされており、15世紀前半と推定される本遺跡の中世墓群の時期と矛盾しない。このうち、①、②の密集地の形成については、「土葬が都市的な場や集落の上層構成者に普及した」結果と考えられている(註6文献)。
- 註8 秋田県教育委員会 「館廻城跡一県営ほ場整備事業(寺沢地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書一」 秋田県文化財調査報告書第320集 2001(平成13)年
- 註9 秋田地所(有)・秋田市教育委員会 「後城遺跡発掘調査報告書」 1978(昭和53)年
伊藤武士 「秋田漆と漆安藤氏の城館」 『海と城の中世』 高志書院 2005(平成17)年
- 註10 長禄2(1458)年に樺岡長景が樺岡城主佐原太郎時連を滅ぼし、翌年同城に移住したとの伝承が残るが、史実は不明である(第2章第2節)。
- 註11 南外村史編集委員会 『南外村史』 2003(平成15)年
- 註12 高橋学 「東北地方日本海側における江戸時代の墓」 『平成26年環日本海文化交流史調査研究集会 江戸時代の墓 発表要旨・資料集』 公益財團法人石川県埋蔵文化財センター 2014(平成26)年
- 註13 註11と同じ。
- 註14 註11と同じ。



1 西板戸遺跡遠景（北東から）



2 西板戸遺跡遠景（南から）



1 SB273～275 挖立柱建物跡・SA470 柱穴列（北が上）



2 SB301・302 挖立柱建物跡・SA469 柱穴列（北が上）



3 SB301 挖立柱建物跡 完掘（北から）



4 SB302 挖立柱建物跡 完掘（南から）



1 調査区南東部 中世墓集中域（北が上）



2 SB279 掘立柱建物跡 完掘（北から）



3 SB281 掘立柱建物跡 確認状況（南から）



4 SB281 掘立柱建物跡 完掘（南から）



5 SB403 掘立柱建物跡 完掘（南から）



1 SB468 掘立柱建物跡、SA404 柱穴列 完掘（南西から）



2 SKI08 竪穴状遺構 遺物出土状況（南から）



3 SKI210 竪穴状遺構 遺物出土状況（北東から）



4 SKI210 竪穴状遺構 完掘（北東から）



5 SA320・471 柱穴列 完掘（北西から）



6 SA17 柱穴列 完掘（南西から）



5 SA320・471 柱穴列 完掘（北西から）



7 SE19 井戸跡 完掘（北から）



1 SE65 井戸跡 井戸枠検出状況（北から）



2 SE65 井戸跡 完掘（北から）



3 SE85 井戸跡 完掘（南から）



4 SE86 井戸跡 完掘（南から）



5 SE87 井戸跡 磚出土状況（南から）



6 SE87 井戸跡 曲物出土状況（南から）



7 SE87 井戸跡 完掘（南から）



8 SE88 井戸跡 完掘（南から）



1 SE90 井戸跡 磨出土状況（南から）



2 SE90 井戸跡 完掘（南から）



3 SE161 井戸跡 大形植物纖維束出土状況（南から）



4 SE161 井戸跡 大形植物纖維束出土状況（南から）



5 SE161 井戸跡 大形植物纖維束接写



6 SE161 井戸跡 完掘（南から）



7 SE243 井戸跡 遺物出土状況（南から）



8 SE243 井戸跡 遺物出土状況（南から）



1 SE243 井戸跡 完掘（南から）



2 SE289 井戸跡 砥出土状況（南から）



3 SE289 井戸跡 完掘（南から）



4 SE292 井戸跡 完掘（南から）



5 SE324 井戸跡 完掘（南から）



6 SE334 井戸跡 完掘（北から）



7 SE335 井戸跡 遺物出土状況（南から）



8 SE335 井戸跡 完掘（南から）



1 SE339 井戸跡 完掘（北から）



2 SE395 井戸跡 完掘（東から）



3 SE401 井戸跡 遺物出土状況（南から）



4 SE401 井戸跡 完掘（南から）



5 SO53 カマド状遺構 確認状況（南から）



7 SO55・56 カマド状遺構 確認状況（東から）



6 SO53 カマド状遺構 完掘（東から）



1 SO59 カマド状遺構 確認状況（南から）



2 SO59 カマド状遺構 完掘（南西から）



3 SO59 カマド状遺構 断面（南西から）



4 SO59 カマド状遺構 断面（東から）



5 SO60 カマド状遺構 確認状況（南西から）



7 SO89 カマド状遺構 確認状況（南から）



6 SO60 カマド状遺構 半截状況（南西から）



1 SO111 カマド状遺構 確認状況（北から）



2 SO111 カマド状遺構 断面（西から）



3 SO309 カマド状遺構 確認状況（南東から）



4 SO309 カマド状遺構 断面（東から）



5 SO319 カマド状遺構 確認状況（東から）



6 SO319 カマド状遺構 断面（東から）



7 SO333 カマド状遺構燃焼部 確認状況（南から） 8 SO333 カマド状遺構焚口部 確認状況（南から）





1 ST244 土坑墓 断面（西から）



2 ST244 土坑墓 完掘（西から）



3 ST327 土坑墓 断面（北から）



4 ST327 土坑墓 完掘（北から）



5 ST328 土坑墓 断面（西から）



6 ST328 土坑墓 完掘（北西から）



7 ST330 土坑墓 断面（北から）



8 ST330 土坑墓 完掘（北から）



1 ST336 土坑墓 断面（南から）



2 ST336 土坑墓 完掘（南から）



3 ST337A 土坑墓 断面（西から）



4 ST337A 土坑墓 完掘（西から）



5 ST337B 土坑墓 断面（南から）



6 ST337B 土坑墓 完掘（南から）



7 ST338B 土坑墓 断面（東から）



8 ST336 ~ 338A・B・C 土坑墓 完掘（南から）



1 ST343 土坑墓 断面（東から）



2 ST343 土坑墓 完掘（東から）



3 ST347 土坑墓 断面（西から）



4 ST347 土坑墓 完掘（西から）



5 ST348 土坑墓 断面（東から）



6 ST348 土坑墓 完掘（東から）



7 ST349 土坑墓 断面（北西から）



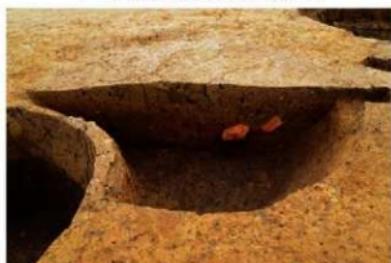
8 ST349 土坑墓 完掘（北西から）



1 ST386 土坑墓 断面（東から）



2 ST386 土坑墓 完掘（東から）



3 ST387 土坑墓 断面（北西から）



4 ST387 土坑墓 完掘（西から）



5 ST389 土坑墓 断面（東から）



6 ST389 土坑墓 完掘（東から）



7 ST393 土坑墓 断面（東から）



8 ST393 土坑墓 完掘（西から）



1 ST397 土坑墓 完掘（西から）



2 ST63A・B 火葬墓 断面（東から）



3 ST63A・B 火葬墓 完掘（東から）



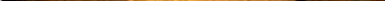
4 ST107 火葬墓 断面（東から）



5 ST107 火葬墓 完掘（東から）



6 ST310 火葬墓 断面（南から）



7 ST310 火葬墓 完掘（南から）



1 ST315 火葬墓 断面（南から）



2 ST315 火葬墓 完掘（南から）



3 ST325 火葬墓 断面（南から）



4 ST325 火葬墓 完掘（南から）



5 ST326 火葬墓 断面（東から）



6 ST326 火葬墓 完掘（東から）



7 ST331 火葬墓 断面（東から）



8 ST331 火葬墓 完掘（東から）



1 ST332 火葬墓 断面（東から）



2 ST332 火葬墓 完掘（東から）



3 ST346 火葬墓 断面（南から）



4 ST346 火葬墓 完掘（南から）



5 ST388 火葬墓 断面（北西から）



6 ST388 火葬墓 完掘（北西から）



7 ST392 火葬墓 短刀出土状況（南から）



8 ST392 火葬墓 短刀出土状況接写（南から）



1 ST392 火葬墓 断面（南から）



2 ST392 火葬墓 完掘（南から）



3 ST222 木棺墓 断面（南東から）



4 ST222 木棺墓 遺物出土状況（南から）



5 ST223 木棺墓 断面（北西から）



6 ST223 木棺墓 遺物出土状況（北西から）



7 ST224 木棺墓 断面（南から）



8 ST224 木棺墓 遺物出土状況（南東から）



1 ST222～224 木棺墓 完掘（南東から）



2 ST284 木棺墓 確認状況（北から）



3 SD92 溝跡 完掘（南西から）



4 SD406 溝跡 完掘（南西から）



5 SU54 土器溜まり 遺物出土状況（北から）



6 SU280 土器溜まり 確認状況（東から）



1 SK26 土坑 完掘(西から)



2 SK27 土坑 完掘(西から)



3 SK29 土坑 完掘(西から)



4 SK32 土坑 完掘(東から)



5 SK33 土坑 完掘(南東から)



6 SK34 土坑 完掘(南から)



7 SK61 土坑 断面(東から)



8 SK62 土坑 断面(南から)



9 SK240 土坑 完掘(北から)



10 SK286 土坑 完掘(北から)



11 SK340 土坑 完掘(東から)



12 SK341 土坑 完掘(東から)



13 SK342 土坑 完掘(東から)



14 SK344 土坑 完掘(北から)



15 SK390 土坑 完掘(南東から)



16 SK399 土坑 完掘(北から)



17 SK400 土坑 完掘(南から)



18 SK402 土坑 完掘(南東から)

図版21
遺構内出土土器・陶磁器(1)





図版 23
遺構内出土土器・陶磁器 (3)



図版
24遺構内出土土器・陶磁器
(4)





図版 27
遺構内出土木製品
(1)





85
SE65 7層



86
SE65 7層



87
SE65 7層



88
SE65 7層



89a
SE87 6層



89b
SE87 6層



90
SE243 6層



91
SE243 6層



95
SE334



92
SE243 6層



93
SE243 6層

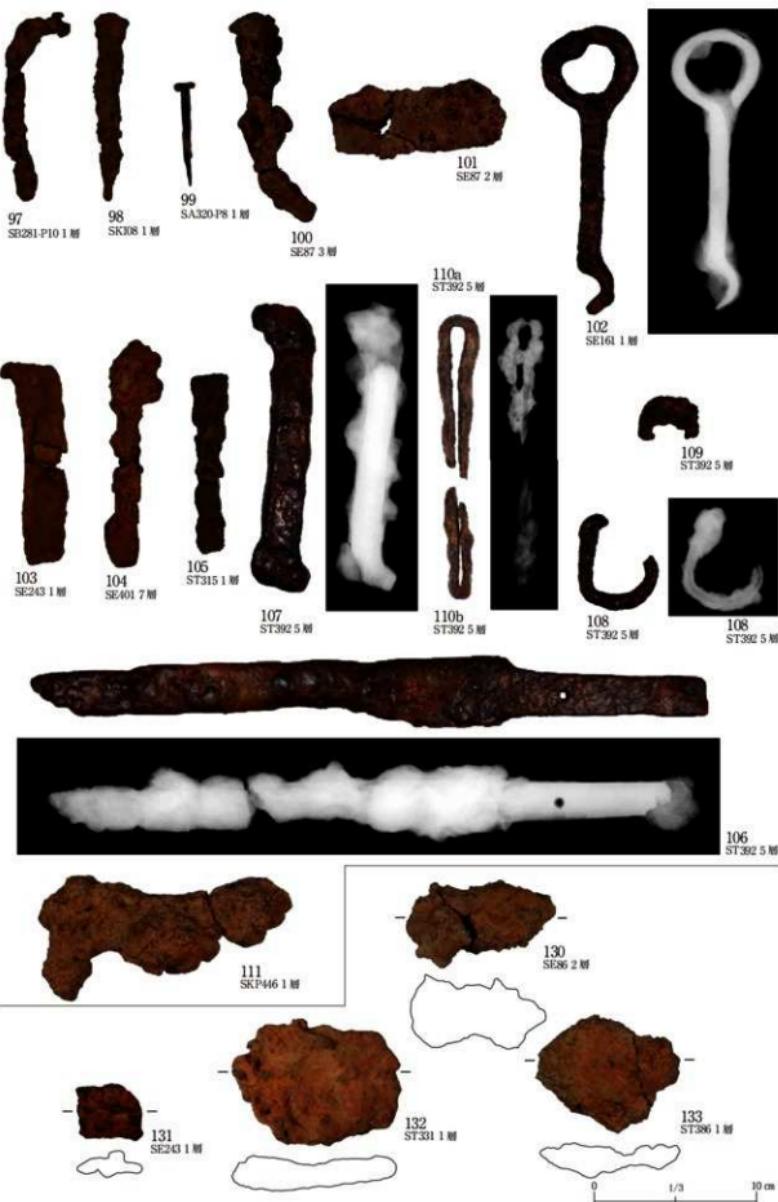


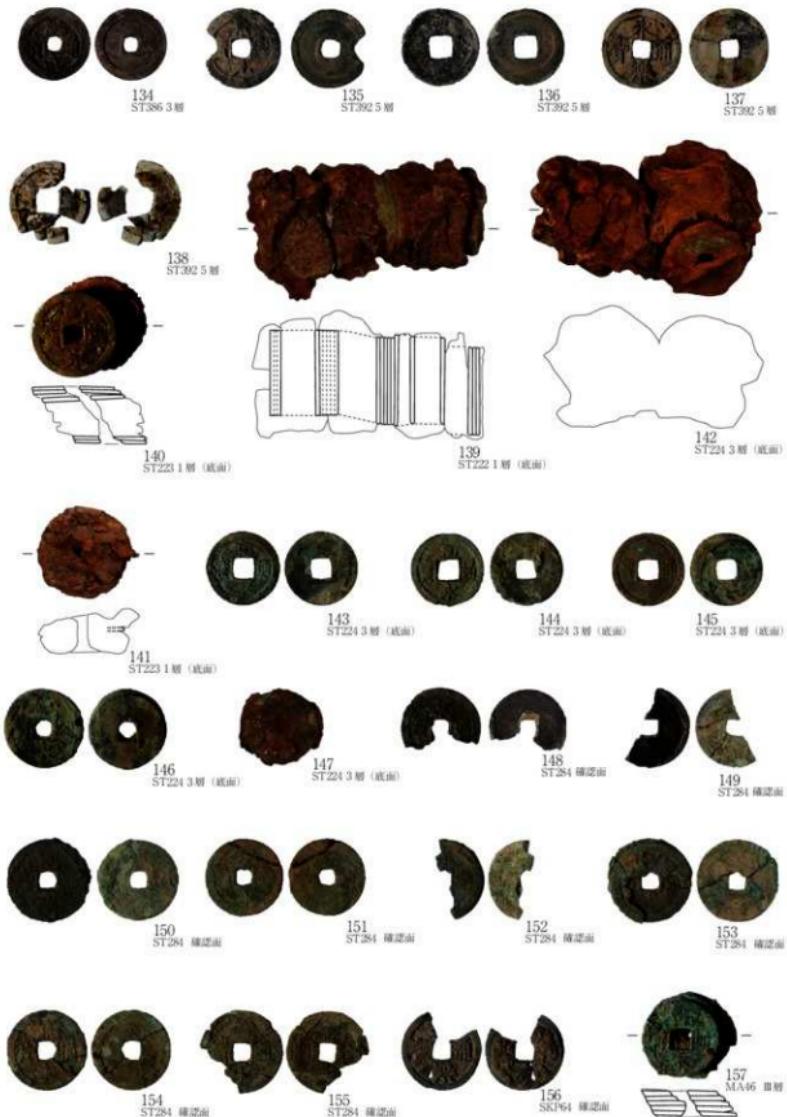
94
SE334 9層



96
SE339 23層

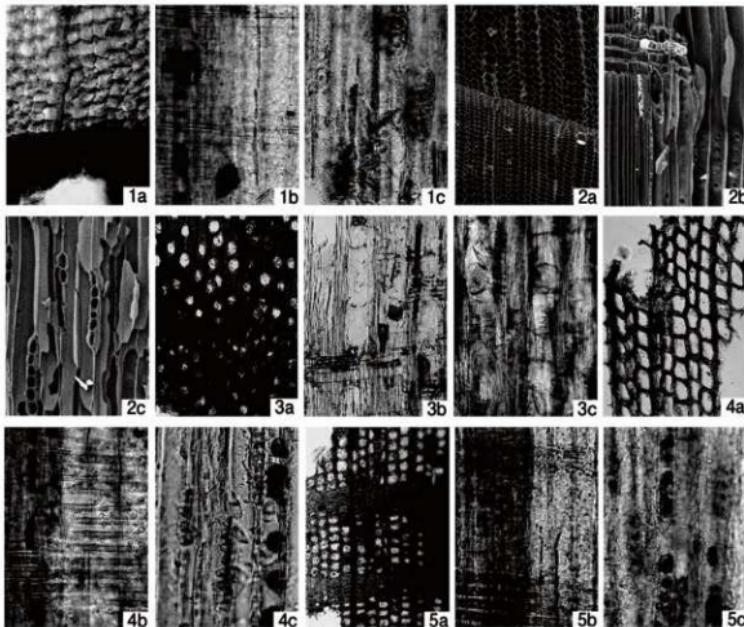
図版 30
造構内外出土銭貨





0 2/3 6cm

平成26年度委託分 1



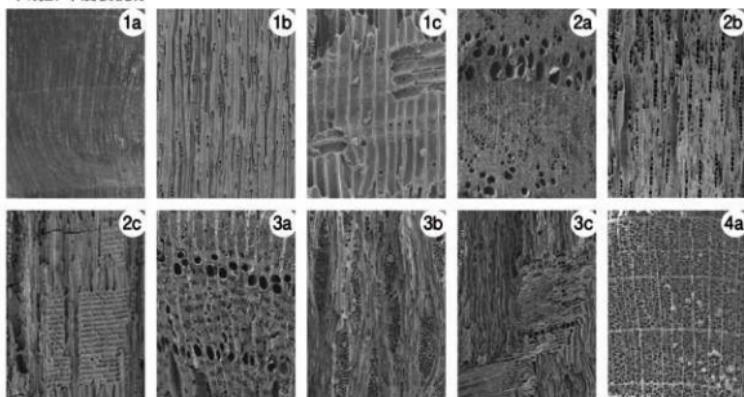
1.スギ(試料番号 1)、2.ヒノキ科(試料番号 2)、

3.ヤナギ属(試料番号 3)、4.スギ(試料番号 4)、5.スギ(試料番号 5)

a:木口 b:柱目 c:板目

■ 100 μm :3a
 ■ 100 μm :1-2a,3b,c
 ■ 100 μm :1-2b,c
 ■ 100 μm :4-5a
 ■ 100 μm :4-5b,c

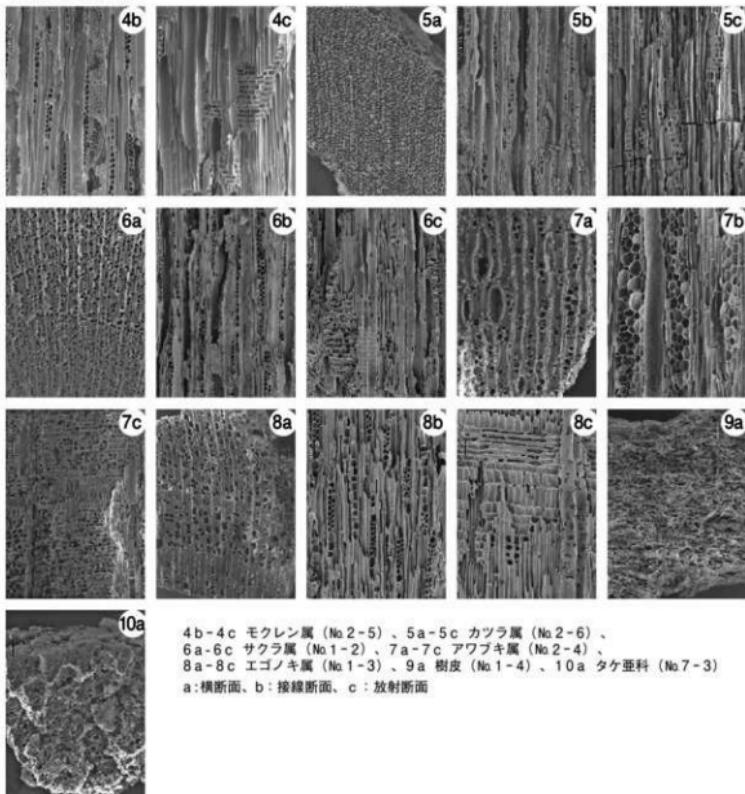
平成27年度委託分



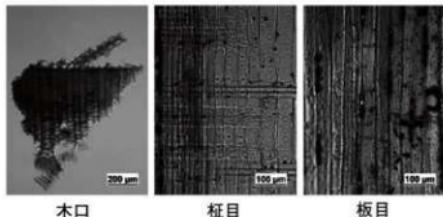
1a-1c アヌクロ(No3-1)、2a-2c クリ(No1-1)、3a-3c クワ属(No2-1)、4a モクレン属(No2-5)

a:横断面 b:接線断面 c:放射断面

平成27年度委託分



平成26年度委託分2



No.1 (第45図96) スギ科スギ属スギ



スケール 1-3 : 5mm 4-17 : 1mm

1. モモ核 (SE334)、2. スモモ核 (SE161)、3. トチノキ種子 (SE161)、4. アサ核 (SE334)、
5. ダイズ属炭化種子 (SE292)、6. ササゲ属アズキ亚属アズキ型炭化種子 (SE292)、
7. エゴマ果実 (SE339)、8. ナス種子 (SE401)、9. ヒエ有ふ果 (SE401)、10. ヒエ炭化種子 (SE401)、
11. ヒエ属有ふ果、12. イネ炭化種子 (SE292)、13. アワ炭化有ふ果 (SE401)、
14. エノコログサ属有ふ果 (SE334)、15. オオムギ炭化種子 (SO56)、16. イネ科有ふ果 (SE339)、
17. 不明 A (SE161)

窟 遺 跡
(7 K)

—雄物川上流河川改修事業(寺館大巻地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ—

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所(以下、湯沢河川国道事務所)による雄物川上流河川改修事業は、平成25年度に着工された。同事業は雄物川沿岸地域において、昭和19年7月洪水、戦後最大の昭和22年7月洪水等の昭和以降に発生した代表的洪水と同規模の洪水が発生しても、外水氾濫による床上浸水等重大な被害を防止するとともに、水田等農地についても被害の軽減に努めることを目的とするものである。特に雄物川中流部は治水安全度が低く重点的に流下能力の向上を図るために、平成31年度の竣工を目指している。

同事業に伴う堤防整備予定地内には埋蔵文化財が包蔵されている可能性があるため、平成23年に湯沢河川国道事務所長から、秋田県教育委員会教育長(以下、県教育長)に寺館大巻地区ほかについて埋蔵文化財の分布調査依頼があった(平成23年5月9日付、国東整湯一工第1号)。これを受け、秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室(以下、文化財保護室)は、平成23年度に寺館大巻地区堤防整備予定地内の分布調査を実施し、新たに窪遺跡と大川端道ノ上遺跡を発見し、その旨を県教育長から湯沢河川国道事務所長に通知した(平成23年5月23日付、教生-404)。窪遺跡については、平成26年4月21日から4月25日にかけて秋田県埋蔵文化財センター(以下、埋文センター)が13,500m²を対象に確認調査を実施した。調査の結果、対象範囲の西端部で土坑1基を確認し、当該土坑北側に隣接する未調査地点の分布調査結果を総合して要本発掘調査範囲を確定することとなった。平成26年6月26日に文化財保護室が未調査地点の分布調査を実施した結果、遺構・遺物は確認されなかった。これらのことから、最終的に上記土坑とその周囲計16m²について本発掘調査が必要と判断し、その旨を県教育長から湯沢河川国道事務所長に報告した(平成26年8月19日付、教生-1158)。その後、湯沢河川国道事務所と文化財保護室との協議を経て、埋文センターが平成26年度内に窪遺跡の本発掘調査を実施することとなった。

第2節 発掘調査の経過

発掘調査は調査員2名の体制で、平成26年9月29日から10月1日までの3日間実施した。調査経過は次の通りである。

【9月29日】発掘調査を開始した。0.25バケットバックホウにより確認調査試掘溝の埋め戻し土を掘削除去し、今回調査対象の土坑(SK01)を再検出した。さらにバックホウにより土坑周囲の表土及び客土を除去した。当初は土坑を中心に周囲4m四方16m²を調査対象とする計画であったが、周辺の遺構分布状況を改めて再確認することとした。バックホウによる表土・客土の除去範囲を拡張し、最終的に調査範囲をおおよそ10m~12m四方程度の120m²とした。その後、人力により基盤層である黄褐色シルト質粘土層上位で遺構検出作業を実施し、SK01土坑のほかに、調査区南西部で径2m以上の大形の落ち込みを確認した。SK01土坑は精査を開始し、土坑内で石器の可能性ある礫2点を検出した。

また、調査地点の南東約1.1kmに位置する三角点を既知点として水準測量を実施した。

【9月30日】SK01土坑を完掘した。土坑内から出土した礫2点は軽微な使用痕が残る凹石と磨石の可能性が高いものと判断した。午後は豪雨のため、現場作業を休止した。

【10月1日】調査区南西部で確認していた大形の落ち込みを断ち割った。断面観察の結果、開口部長径約2.5m、深さ約1.2mの素掘り井戸状の掘り込みであることが判明した(SE02)。掘り込みは湧水層に達していないことから、遺構は雨水等を溜めた水溜施設と判断した。出土遺物がなく、詳細な時期は不明であるが、集落に付随するものではなく近世以降の畑作に伴う施設と推定した。当該遺構の平面図と断ち割り断面図及び調査区南西壁の基本層序図を作成後、調査区をバックホウにより埋め戻し、調査を完了した。

第3節 整理作業の経過

整理作業は、発掘調査終了後、平成26年度から平成27年度にかけて秋田県埋蔵文化財センターで実施した。平成26年度は、出土遺物の洗浄及び遺構図面の整理を行った。平成27年度には、出土遺物についても、注記後に実測及びデジタルトレースを行い、その後、デジタルカメラで写真撮影した。これらの作業と平行して遺構図面・基本層序図等のデジタルトレース図を作成した。トレース図と写真データをもとに挿図及び図版を編集し、これらを参照して本文原稿を作成した。西板戸遺跡発掘調査報告書原稿と合わせて全体の編集作業を行い、平成28年1月に入稿した。平成28年3月に西板戸遺跡との合冊として報告書を刊行した。

註1 秋田県教育委員会「遺跡詳細分布調査報告書」秋田県文化財調査報告書第475集 2012(平成24)年

註2 秋田県教育委員会「遺跡詳細分布調査報告書」秋田県文化財調査報告書第497集 2015(平成27)年

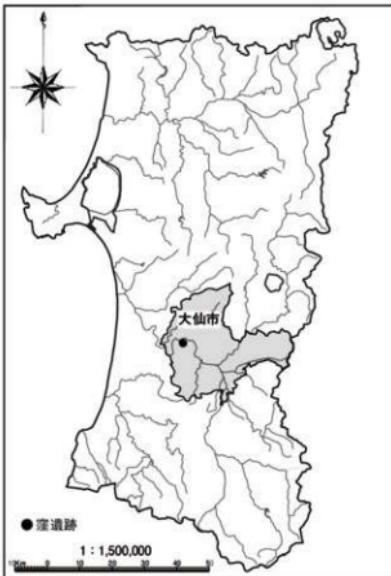
第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

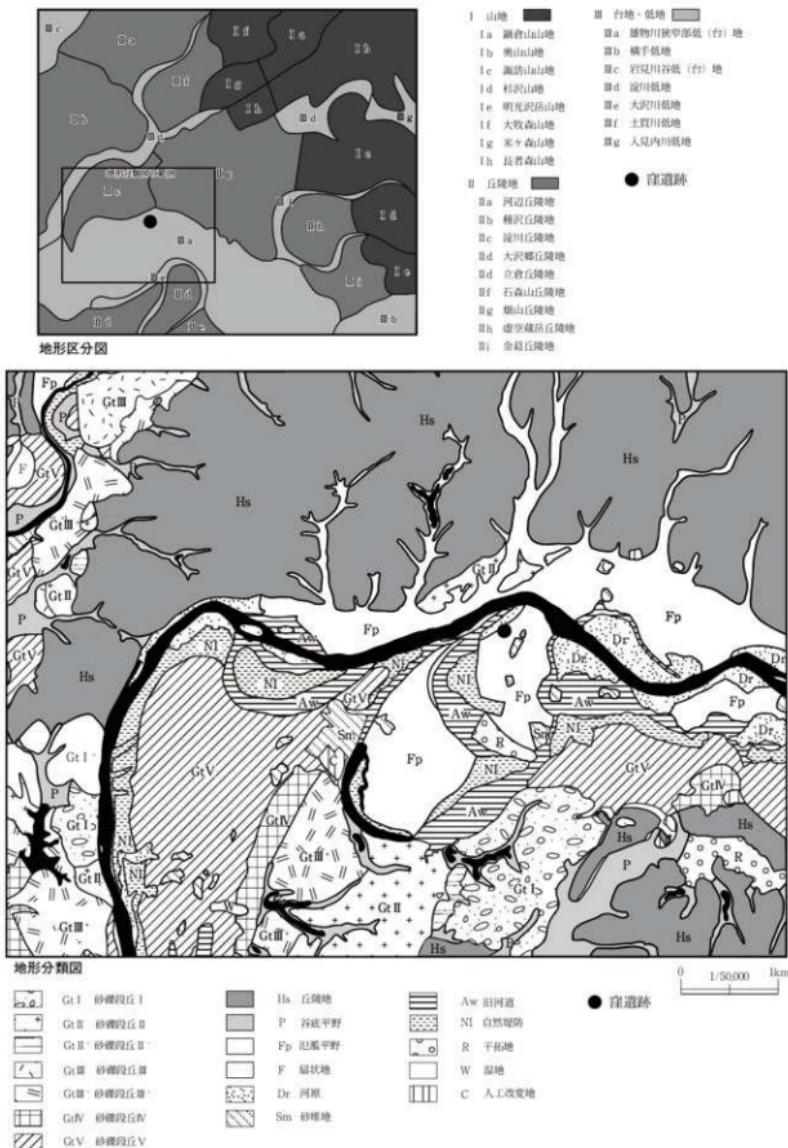
窪遺跡は、秋田県大仙市大巻字瀬ノ上90外に所在する。JR奥羽本線峰吉川駅から雄物川を挟んで南約0.9kmに位置する。中心地点の経緯度は北緯 $39^{\circ} 33' 37''$ 、東經 $140^{\circ} 19' 14''$ である。遺跡は、雄物川中流の左(南)岸沿いの氾濫平野に立地する(第2図)。遺跡周辺は現状で標高18~19m前後の段丘状の平坦面となっており、北西端側は狹小な自然堤防状の微高地であったと見られる。

周囲の地形は、大きくは低地、台地(段丘地)、丘陵地、山地に分かれる。遺跡が立地する雄物川左岸には雄物川狭窄部低地が広がる。当該低地は、遺跡が立地する氾濫平野(Fp)のほか、旧河道(Aw)、自然堤防(NI)、段丘(Gt I~V)などが複雑に入り組んでいる。雄物川を挟んだ遺跡北東側は山地で、北西から南東に向かって大牧森山地(I f)、鍋倉山山地(I a)、奥山山地(I b)、米ヶ森山地(I g)、長者森山地(I h)、諏訪山山地(I c)などが連なる。これら山地と雄物川との間は丘陵地となり、河辺丘陵地(II a)、種沢丘陵地(II b)、淀川丘陵地(II c)、畠山丘陵地(II g)などが分布する。山地から丘陵部には泥川、土買川などが貫流し、雄物川と合流している。

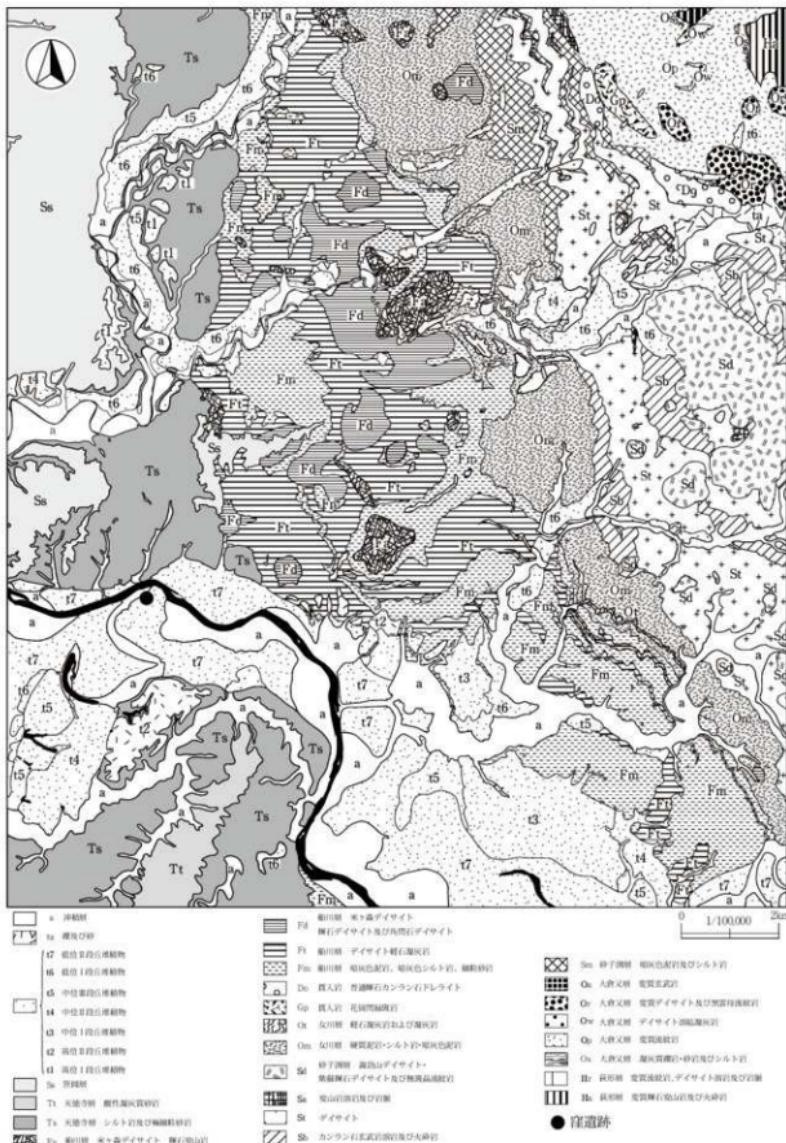
遺跡周囲の表層地質は、本遺跡を含めた雄物川沿岸部に高位から低位の段丘堆積物が分布する(第3図 t2~t7)。その周囲の丘陵地においては、第三紀上位の女川層(Ot・0m)が畠山丘陵地などに分布する。女川層は、硬質頁岩、硬質シルト岩、暗灰色泥岩から構成される。その上位の船川層(Fa・Ft・Fm)が同じく畠山丘陵地などに分布する。本層には泥岩、シルト岩、ディサイトなどを含む。その上位の天徳寺層(Tt・Ts)は、河辺丘陵地、大沢郷丘陵地、立倉丘陵地、石森山丘陵地、畠山丘陵地などに広く分布する。シルト岩、細粒砂岩などから構成される。笛岡層(Ss)は、種沢丘陵地などに分布し、中粒砂岩、シルト岩などから成る。遺跡周辺の雄物川の河床礫は、主としてこれらの丘陵地周辺の表層地層に由来するものであろう。



第1図 窪遺跡位置図



第2図 遺跡周辺の地形区分図・地形分類図(註1文献をもとに作成)



第3図 窪遺跡周辺の表層地質図(註2文献をもとに作成)

第2節 歴史的環境

第4図の「窪遺跡と周辺遺跡位置図」を見ると、窪遺跡を中心とした東西約8km、南北約11.7kmの範囲では、遺跡分布は総体として大きくは雄物川沿岸周辺と雄物川の一次支流である淀川及び荒川流域の段丘上に比較的まとまる傾向が認められる。前者では、雄物川左岸側に発達する段丘上に立地する例が多く、本遺跡のように雄物川の氾濫平野に立地するものは少數である。以下、各時代及び時期ごとに遺跡の分布やその特徴などについて発掘調査された遺跡を中心に概観する。

現在確認されている岩宿時代の遺跡には、岸館遺跡(8)、坊台遺跡(22)、上ノ山II遺跡(26)、柏台遺跡(51)などがある。いずれも石刃、ナイフ形石器などが少量採集されているに止まり、遺跡の詳細な性格は不明である。現状では上記4遺跡中3遺跡が淀川～荒川沿いの段丘上に立地する。さらに荒川流域では、岸館遺跡の上流約3.5kmの右岸段丘上に複数時期にまたがる石器集中域が伴う米ヶ森遺跡^(註3)が立地している。^(註4)淀川～荒川流域では、河川に沿って岩宿時代遺跡が点在する分布状況となっている。

縄文時代草創期では、淀川中位段丘上に立地する上ノ山II遺跡(26)で当該期に属すると推定される有舌尖頭器5点が出土している。縄文時代前期を中心とする遺物と混在して出土しており、遺跡の具体的な様相は不明である。

縄文時代早期では、半仙遺跡(39)、上野台遺跡(52)がある。両遺跡とも早期末の土器が出土している。雄物川右岸高位段丘上に立地する上野台遺跡では、このほかに該期の土坑1基も検出されている。また、雄物川左岸沖積低地の自然堤防上に立地する大川端道ノ上遺跡(45)ではトランシェ様石器が1点出土している。当該石器は縄文時代早期まで遡る時期のものと推定される。早期の大川端道ノ上遺跡の具体的な様相は不明であるが、雄物川中流域の沖積低地に進出す最古期の縄文遺跡の可能性があり注目される。現状では、草創期から早期にかけては一定数の住居が集合し、かつ一定期間継続するような集落の出現は認められない。

縄文時代前期になると遺跡数が増加する傾向が顕著になる。発掘調査された遺跡には、五百刈田遺跡(23)、館野遺跡(24)、上ノ山II遺跡(26)、上ノ山I遺跡(27)、半仙遺跡(39)、常野遺跡(46)、寺沢遺跡(50)などがある。このうち、五百刈田遺跡、寺沢遺跡では主に前期前半の土器が出土し、淀川右岸低位段丘上に立地する前者では当該期の可能性ある竪穴建物跡(住居)1棟、雄物川右岸高位段丘上に立地する後者では同じく土坑7基がそれぞれ確認されている。現状では、前期前半に複数の住居が集合するような集落が出現していたかは判然としない。一方、館野遺跡、上ノ山II遺跡、上ノ山I遺跡、半仙遺跡では、前期後半の竪穴建物跡(住居)が確認されている。中でも上ノ山II遺跡では、中央の広場の周囲に大小の竪穴建物跡(住居)が巡る大規模な集落が出現している。さらに隣接する上ノ山I遺跡、館野遺跡にも同時期の竪穴建物跡(住居)が併存し、少なくともこれらの遺跡群を包括する村落が形成されていたと判断される。上ノ山II遺跡からは累積で70棟以上となる竪穴建物跡や30基以上のフラスコ状土坑など多数の遺構に加えて、多種多量の遺物が検出されている。前期前半の五百刈田遺跡出土遺物と比べると、堅果類などの植物性食料の加工工具と想定される凹石、磨石、半円状扁平打製石器等の礫石器が急増していることが大きな特徴となっている。大規模集落出現の一因として、植物性食料を集中的かつ大量に採集・加工し、貯蔵する複数の単位集団による協業が発達したことが

想定できよう。このほか、雄物川左岸低位段丘上に立地する常野遺跡では、縄文時代前期に属すると推定される狩獵用陥穴が6基見つかっている。

縄文時代中期では、岸館遺跡(8)、西町後遺跡(13)、五百刈田遺跡(23)、館野遺跡(24)、上ノ山I遺跡(27)、寄騎館遺跡(36)、大川端道ノ上遺跡(45)、柏台遺跡(51)、上野台遺跡(52)などがある。現状では中期前半の遺跡は顕著ではなく、中期後半の遺跡が目立つ。このうち、淀川左岸中位段丘上に立地する館野遺跡・上ノ山I遺跡、雄物川右岸(北)側の丘陵裾部上に立地する寄騎館遺跡、上野台遺跡では中期後半の竪穴建物跡(住居)が確認されている。前期の上ノ山II遺跡のような広場の周りに多数の住居が巡るような大規模集落は認められないが、中期後半には一定規模の集落が再度形成されるとみられる。また、窓遺跡の下流側約1kmの雄物川左岸自然堤防上に立地する大川端道ノ上遺跡では住居は未確認であるが、縄文時代中期末から弥生時代中期までの遺物が出土している。遅くとも縄文時代中期末以降には、雄物川中流域の沖積低地が断続的に利用されている。大川端道ノ上遺跡の発掘調査結果からは、当該地点は通年の居住地としてではなく、貯蔵や埋葬などのある程度限定された目的のために、季節的、短期的に利用されたものと推定される。

縄文時代後期では、上述の大川端道ノ上遺跡(45)のほか、柏台遺跡(51)、上野台遺跡(52)などがある。このうち上野台遺跡では、後期前葉の竪穴建物跡(住居)が1棟確認されているほか、地点を異にして同時期の掘立柱建物跡も分布する。当該時期では、複数住居が集合して集落を形成するのではなく、単独の住居が分散して立地していた可能性も想定される。また、大川端道ノ上遺跡では住居は確認されず、主として後期前半には貯蔵穴が、後期後半から晩期にかけては土坑墓がそれぞれ累計で10数基前後営まれた可能性が想定される。両者は大きくは分布域を異にするとみられるが、いずれも比較的分散した分布状況を呈し、明瞭に貯蔵域や墓域が形成されたとは認め難い。既述のように季節的、短期的活動に伴う施設であったものと推測される。窓遺跡で確認した土坑は、現状では詳細な時期を特定できないが、大川端道ノ上遺跡の土坑墓と大きくは併存する時期の土坑墓であった可能性もあり得よう。

縄文時代晚期では、野崎遺跡(4)、寄騎館遺跡(36)、大川端道ノ上遺跡(45)などがある。窓遺跡周辺においては、現在のところ晩期の竪穴建物跡(住居)の確認例はなく、集落の存否も不明である。これに対し、寄騎館遺跡では、10mほど離れた南北2地点で、小判形平面の土坑墓が合わせて20基近く確認されている。土坑墓平面の主軸方位は大半がほぼ西北西方向にまとまり、例外的に直交するものなどが僅かに存在する。現状の遺構分布からは、二つに分節される双分的な墓域を形成しているものと認められる。また、大川端道ノ上遺跡では、縄文時代晚期初頭まで下る直径0.9m前後の円形平面で一度に埋め戻されたと想定される小形土坑が確認されている。大川端道ノ上遺跡のこの種の土坑を土坑墓と推定し、寄騎館遺跡と併存する可能性を認めるに、近接地域内で、墓制を異にする集団が併存したことを示唆するものである。今後の検討課題であろう。^(註6・7)

弥生時代では、和田遺跡(18)、中沢遺跡(32)、大川端道ノ上遺跡(45)、上野台遺跡(52)、上野台X遺跡(56)、上野台VI遺跡(65)などがある。上野台遺跡では弥生時代中期の土坑1基が確認されているが、遺構及び遺跡の詳細な性格は不明である。また、大川端道ノ上遺跡では破片ではあるものの、比較的大形の弥生時代中期の甕などが出土している。大川端道ノ上遺跡においては、自然堤防上の微高地に居住し、周囲の低地で水田耕作を行ったとする想定もあり得よう。ただし、既述のように微高地

の利用そのものは縄文時代中期末から断続的に行われており、弥生時代になって当地で水田耕作が導入されたかについては現状では確実な根拠はない。一方、弥生時代後期には、淀川右岸中位段丘上に立地する和田遺跡で、住居の可能性がある焼土構造と柱穴群に加えて土製紡錘車が検出されている。このほか、弥生時代後期には、中沢遺跡などのように丘陵部に立地する例がある。これらの遺跡では、水田耕作とは異なった形態の生業活動が行われた可能性があろう。

古墳時代もしくは続縄文文化の遺跡は、窪遺跡周辺では現在のところ未確認である。古代になると、峰吉川中村遺跡(38)、寺沢遺跡(50)、上野台遺跡(52)で平安時代の遺構、遺物が確認されている。このうち、周辺沖積地とは比高40m前後の雄物川左岸高位段丘上に立地する寺沢遺跡では、竪穴建物跡(住居)2棟が確認されている。住居は同時に併存していた可能性が高く、遺跡は短期間営まれた小規模集落であったと想定される。一方、雄物川右岸の沖積低地に立地する峰吉川中村遺跡では、住居は未確認であるが、墨書き土器を含む平安時代初頭の土器群と水田祭祀に関わるとみられる土坑群が検出されている。遺跡は秋田城と払田柵との中间地点に位置し、おそらく律令政府の水田開発に関わって出現した集落と推定される。寺沢遺跡と峰吉川中村遺跡の両者とも周辺の低地で水田耕作が行われた可能性が想定されるものの、遺構分布や出土遺物の時期が限定期であることを勘案すると、いずれも長期的に安定した水田経営を行うことはできなかったものと考えられる。

中世では、馬館跡(33)、根岸館跡(34)、館ノ沢城跡(35)、寄騎館跡(37)、湯ノ沢城跡(41)、白岩城跡(42)などの館跡が丘陵部を中心に点在して分布する。いずれも詳細な時期や構造などは不明であるが、多くは戦国時代前後の造営と推測されている。また、寄騎館跡に隣接する寄騎館遺跡(36)では、中世の火葬施設及び火葬骨を埋納した火葬墓などが確認されている。これらの遺構も詳細な時期は不明であり、寄騎館跡と関係するかは判然としない。一方、雄物川沿岸の沖積低地では、左岸の大川端道ノ上遺跡(45)で2棟の掘立柱建物と井戸などから成る鎌倉時代の屋敷跡が、右岸の峰吉川中村遺跡(38)で鎌倉時代～室町時代の集落跡がそれぞれ確認されている。両者とも周辺低地での水田開発及び雄物川水運と関連する可能性が推測される。大川端道ノ上遺跡は短期間に居住に限定されるとみられ、おそらく雄物川の氾濫により短期間で放棄されたようである。一方、峰吉川中村遺跡は、中世において断続的に営まれ、最終的には近世以降は現代の中村集落に連続すると考えられる。雄物川沿岸沖積地に立地する現集落には、この峰吉川中村遺跡のように中世近くまで遡るものも存在すると予想される。一方、近年、雄物川中流域の沖積低地の微高地部では、船戸遺跡、沖田(I)・II遺跡など中世及び近世にかかる集落遺跡の新たな発見例が増加している。^(註8)新発見の遺跡例は、雄物川周辺沖積低地では、雄物川の氾濫などによって、必ずしも安定して長期にわたり集落を営むことができなかつた場合があったことを示していよう。

近世の代表的な遺跡には、雄物川左岸段丘に部分的に遺存する亀田街道跡(68)と御番所跡(69)がある。なお、窪遺跡周辺は、江戸時代においては秋田藩、亀田藩、矢島藩の境界地点であり、古くは延宝年間(1680年前後)を始めとして、畠地開発などと関わり領地紛争が頻発している。本遺跡で確認した水溜施設(SE02)も、これら江戸時代の畠地開発に伴うものであろう。

註1 秋田県『土地分類基本調査 割和野』1980(昭和55)年

註2 土谷信之・吉川敏之『割和野地域の地質』通商産業省工業技術院地質調査所 1994(平成6)年

- 註3 近年、放射性炭素年代測定の高精度化及び組織的な年代測定の実施などから、縄文土器編年と曆年較正年代との対比について整合的に理解されつつある(下記工藤文献参照)。そのうち、日本列島における土器の出現年代は、更新世末氷期まで遡り、ヨーロッパにおける上部旧石器時代末に併行することが確実視されるに至っている(下記今村文献参照)。現時点では、日本列島における岩宿時代あるいは旧石器時代と縄文時代にわたる時代区分や用語の整理などについて定見は認め難い。本節では、日本列島における土器の出現をもって縄文時代草創期の開始とし、それよりも前を岩宿時代として扱う。これは、かつて近藤義郎が、特徴的かつ重要で普遍的な道具として打製石器をもつ土器出現よりも前の(列島独自の)時代を岩宿時代と呼称した考え方(下記近藤文献)に従うものである。
- 工藤雄一郎『旧石器・縄文時代の環境文化史』新泉社 2012(平成24)年
- 今村啓爾「世界史における縄文文化の位置づけ」泉拓良・今村啓爾(編)『縄文時代(下)』講座日本の考古学4 青木書店 2014(平成26)年
- 近藤義郎「岩宿時代とはいかなる時代か」笠懸野岩宿文化資料館(編)『岩宿時代を知る』笠懸町教育委員会 1995(平成7)年
- 註4 協和町教育委員会『米ヶ森遺跡発掘調査報告書』1971(昭和46)年
協和町教育委員会『米ヶ森遺跡発掘調査報告書』1977(昭和52)年
- 註5 縄文時代中期前半や後期以降の検出住居数の減少は、植物性食料への依存度が高いことに伴い、列島規模の寒冷化イベントの影響を強く受けた結果、人口減少や生業形態・労働編成の変容などが生じたことを反映している可能性も想定される。今後、地域の遺跡の実態を精査し、改めて検討すべきであろう。
- 註3 工藤文献参照。
- 註6 寄騎館遺跡において縄文時代晚期の土坑墓群に伴うと推定される土器埋設遺構3基は、埋設土器の形態からいずれも大洞BC式期以降に属すると判断される。よって、寄騎館遺跡の墓域形成の主体時期は縄文時代晚期前葉以降となる可能性も想定される。これに対し、大川端道ノ上遺跡の土坑墓群は主として縄文時代後期後半に属するものが中心となり、一部例が晚期まで下る可能性が認められる。両遺跡の土坑墓形態の相違は時期差に起因することもあり得よう。
- 註7 寮遺跡周辺に地域を限定すると、大川端道ノ上遺跡の土坑墓群を季節的臨時的な造墓の累積ととらえるならば、特定範囲に集中的に墓が造営されるような明瞭な墓域の形成は、現状では縄文時代晚期の寄騎館遺跡が初現となる。しかし、横手盆地全城を見ると、横手市(旧増田町)八木遺跡や同(旧大雄村)江原鷲1遺跡などから、遅くとも縄文時代後期前半以降、特定の遺跡では墓が集中する墓域が形成されたものと判断される。これに対し、縄文時代中期以前においては、現状では墓域の形成は認め難い。例えば横手市(旧雄物川町)神谷地遺跡や美郷町(旧千畠町)内村遺跡の広場の周りに半環状に住居が巡る縄文中期後半~中期末の集落、あるいは既述の上ノ山II遺跡の広場の周りに多数の住居が巡る縄文前期集落では、広場内や住居の周囲などに墓域が形成されたことは認め難い。横手盆地周辺では、墓域の本格的な出現はおそらく縄文時代中末期もしくは後期以降と予想される。その出現の背景には集団領域の占有権の強化などと関連した、始祖と同じくする親族集団(観念)の新たな成立のような集団関係の再編が関わっているではなかろうか。
- 秋田県教育委員会『八木遺跡発掘調査報告書 - 公害防除特別土地改良事業八木地区に係る埋蔵文化財調査 - 』秋田県文化財調査報告書第181集 1989(平成元)年
- 秋田県教育委員会『江原鷲1遺跡 - 県営ほ場整備事業(北阿賀地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 - 』秋田県文化財調査報告書第310集 2001(平成13)年
- 秋田県教育委員会『内村遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第82集 1981(昭和56)年
- 横手市教育委員会『神谷地遺跡・小出遺跡 - 農地集積加速化基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報

告書－』横手市文化財調査報告書第32集 2015(平成27)年

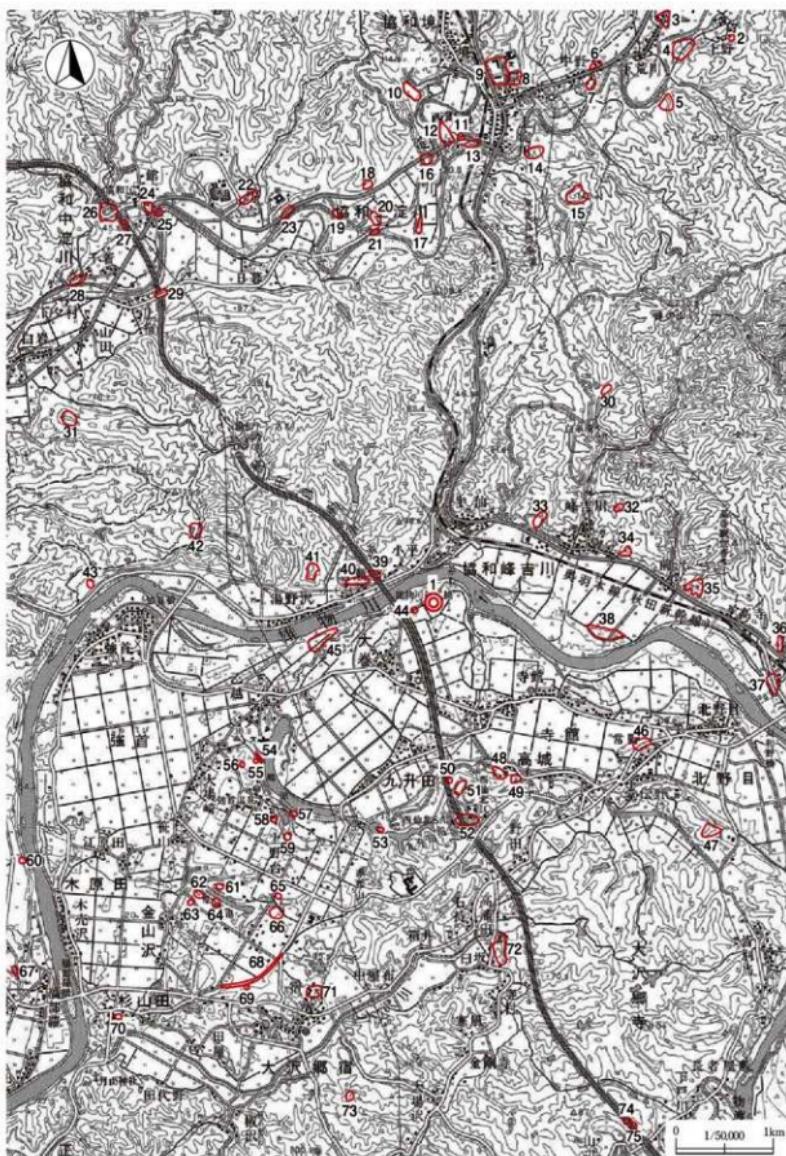
- 註 8 秋田県教育委員会「船戸遺跡 一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書V－」秋田県文化財調査報告書第490集 2014(平成26)年

秋田県教育委員会「沖田遺跡・沖田Ⅱ遺跡 一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－」秋田県文化財調査報告書第443集 2009(平成21)年

大仙市教育委員会「沖田Ⅰ遺跡・沖田Ⅱ遺跡 農地集積加速化基盤整備事業神岡西部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書」大仙市文化財調査報告書第13集 2011(平成23)年

- 註 9 進藤孝一「第五編 第一章 第三節 近世の村々」協和町史編纂委員会(編)『協和町史』上巻 2001(平成13)年

『秋田領峰吉川同領寺館村矢島寺館戸引村地境争論絵図』1680(延宝8)年



第4図 墓遺跡と周辺遺跡位置図

第1表 窟遺跡周辺遺跡一覧（1）

第2表 窟遺跡周辺遺跡一覧（2）

番号	遺跡地図番号	遺跡名	種別	主な構造・遺物	文献
53	212-46-44	称宜館	駄跡		3
54	212-46-45	旁助塚	駄跡	駄の一部	21
55	212-46-20	上野台I	遺物包含地		1
56	212-46-46	上野台X	遺物包含地	弥生土器（中期）	12
57	212-46-47	上野台XI	遺物包含地		12
58	212-46-28	上野台IX	遺物包含地	縄文土器、石器	12
59	212-46-21	上野台II	遺物包含地		2
60	212-51-87	太平山	遺物包含地	土器、石器、門石	12
61	212-46-26	上野台Ⅲ	遺物包含地	縄文土器（中期）、磨製石斧	12
62	212-46-23	上野台IV	遺物包含地	弥生土器、石器、石槍、石器	22
63	212-46-22	上野台Ⅴ	遺物包含地	縄文土器、石器	12
64	212-46-24	上野台V	遺物包含地	縄文土器、石槍、石器、打製石斧	12
65	212-46-25	上野台VI	遺物包含地	弥生土器、石器	22
66	212-46-27	上野台Ⅶ	遺物包含地	縄文土器、門石	12
67	212-51-88	鏡台	遺物包含地	土器	12
68	212-46-41	亀田街道跡	街道跡	旧道、両側の土盛り	4, 21
69	212-46-40	御番所跡	番所跡	番所跡、井戸跡	4, 21
70	212-46-18	杉山田	遺物包含地	縄文土器（晩期）、石槍、石斧	12
71	212-46-19	角間沢	遺物包含地	縄文土器（晩期）、石斧	12
72	212-46-39	白坂館	駄跡	土郭、帯郭。陶磁器	3, 19
73	212-46-42	キッカ沢館	駄跡		3
74	212-46-49	戸川堤沢II	遺物包含地	石器	12
75	212-46-48	戸川堤沢I	遺物包含地	縄文土器、石器	12

第1表・第2表文献（表中の文献番号は以下の番号に対応する。）

- 秋田県「秋田県史 考古編」 1960(昭和35)年
- 秋田県教育委員会「秋田県遺跡地名表(新産都市指定地域内埋蔵文化財附載地一覧)」 1967(昭和42)年
- 秋田県教育委員会「秋田県の中世城館」 秋田県文化財調査報告書第86集 1981(昭和56)年
- 秋田県教育委員会「歴史の道調査報告書XⅧ 亀田街道」 秋田県文化財調査報告書第161集 1987(昭和62)年
- 秋田県教育委員会「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書II -上ノ山I 遺跡・館野遺跡、上ノ山II 遺跡-」 秋田県文化財調査報告書第166集 1988(昭和63)年
- 秋田県教育委員会「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書III -上野台遺跡・寺沢遺跡、半仙遺跡-」 秋田県文化財調査報告書第180集 1989(平成元)年
- 秋田県教育委員会「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書II(補遺) -上ノ山II 遺跡-」 秋田県文化財調査報告書第186集 1989(平成元)年
- 秋田県教育委員会「五百刈田遺跡発掘調査報告書 -県道協和・松ヶ崎線緊急地方道路整備工事に係る埋蔵文化財発掘調査-」 秋田県文化財調査報告書第194集 1990(平成2)年
- 秋田県教育委員会「和田遺跡発掘調査報告書 -県道協和・松ヶ崎線緊急地方道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査-」 秋田県文化財調査報告書第212集 1991(平成3)年
- 秋田県教育委員会「寄騎館遺跡 -一般国道13号刈田野バイパス改築事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書-」 秋田県文化財調査報告書第277集 1998(平成10)年
- 秋田県教育委員会「常野遺跡 -主要地方道本荘西仙北角館線緊急地方道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書-」 秋田県文化財調査報告書第368集 2004(平成16)年
- 秋田県教育委員会「秋田県遺跡地図(仙北地区版)」 2007(平成19)年
- 秋田県教育委員会「遺跡詳細分布調査報告書」 秋田県文化財調査報告書第475集 2012(平成24)年
- 秋田県教育委員会「遺跡詳細分布調査報告書」 秋田県文化財調査報告書第486集 2013(平成25)年
- 秋田県教育委員会「大川端道ノ上遺跡 -雄物川上流河川改修事業(寺館大巻地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書I-」 秋田県文化財調査報告書第496集 2015(平成27)年
- 秋田県埋蔵文化財センター「平成26年度秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会資料」 2015(平成27)年
- 協和村郷土史編纂委員会「協和村郷土誌」 1968(昭和43)年
- 協和町史編纂委員会「協和町史」 上 2001(平成13)年
- 長山幹丸「協和町の城と館」 1980(昭和55)年
- 西仙北町教育委員会「上野台遺跡発掘調査報告書」 2000(平成13)年
- 西仙北町郷土史編纂委員会「西仙北町郷土誌 近代編」 1976(昭和51)年
- 西仙北町郷土史編纂委員会「西仙北町史 先史～近世編」 1995(平成7)年

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

平成26年4月の確認調査で検出し、今回の発掘調査における調査対象であった土坑1基は、確認調査終了時にブルーシートで覆って養生し、目印として測量用ポールを立てて埋め戻していた。この埋め戻し土の除去は、0.25バケットバックホウにより行った。さらに、当初は土坑を中心とした周囲の4m四方16m²を調査対象範囲とする計画であったが、周辺の遺構分布状況を改めて再確認するためにはバックホウにより表土（基本層位第I層）及び客土（同第II層）を掘削して、調査対象範囲を最終的に120m²まで拡張した（第5図・第7図）。その後、人力により後述する基盤層（同第IV層）上位面において遺構検出作業を行った。また、調査区南西側壁面（第7図A-B）で、遺跡基本層序図作成と写真撮影を行った。

検出した遺構には、略記号と通し番号を付して精査を行った。遺構の記録は、確認・断ち割り・完掘の各段階に応じて図面作成・写真撮影・土層注記を行った。出土遺物には、遺跡名・遺構名・出土層位・出土年月日を記録して取り上げた。

平面実測は、原則としてトータルステーションを使用し、土層断面図及び微細図の作成は手実測によった。平面実測の基準点は河川改修事業に伴う周囲の用地杭を利用した。当該用地杭は平成21年の国土交通省による3級基準点測量成果を用いて設置されている。また、調査地点の南東約1.1kmに位置する四等三角点「寺館」（平成26年3月標高改算）を既知点として水準測量を実施し、調査地点にペンチマークを設定した。

遺跡・遺構の写真撮影は、ニコン製デジタルカメラCOOLPIX S5100を使用した。

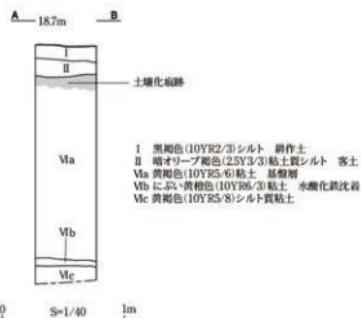
第2節 基本層序

窪遺跡は雄物川左岸の氾濫平野に位置する。今回の調査対象地点の現況は元来水田であったが、堤防整備工事に伴う用地買収後は耕作されておらず、荒蕪地となっていた。現地表面の標高は18.5m前後である。調査対象地点周辺は、雄物川氾濫平野のうち、雄物川に面する極小規模の段丘面状平坦面から5m前後上位に位置する最低位段丘面の川寄りの北西端部に当たる。当該地点は自然堤防様の小規模な微高地であったと推定され、調査対象範囲の北側を東西に走る農道の北隣には微高地が杉林となって部分的に残っている（図版1-2）。

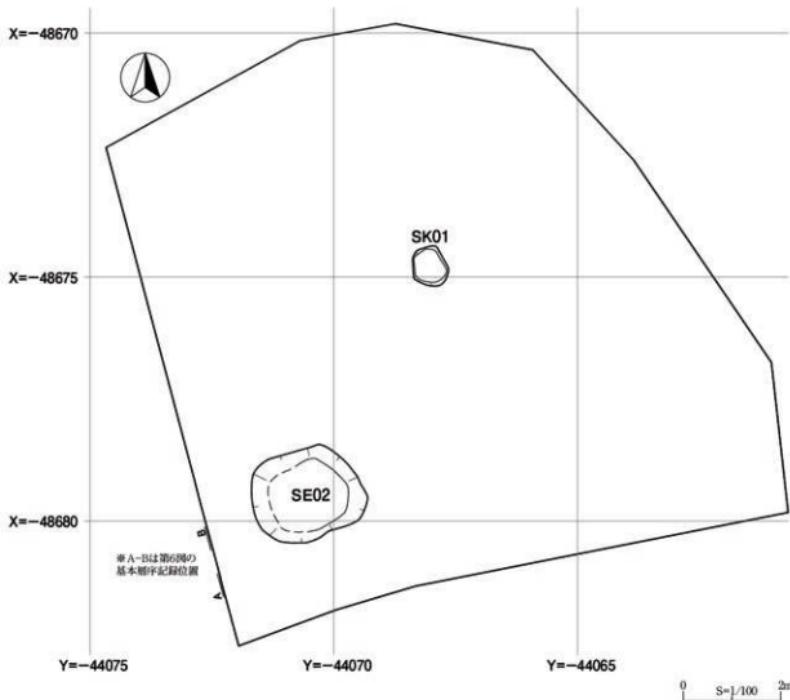
調査対象範囲では、水田造成によって、旧表土層以下が大きく削平されていた。基本層序は、水田旧耕作土（平成26年度確認調査と共通の第I層）が厚さ10cm前後堆積し、その下位には水田造成時の客土（同第II層）が厚さ15cm程度堆積する。その直下は基盤層（同第VI層）が不整合に接する（第6図）。第VI層は雄物川の氾濫堆積物であり、調査対象地点では厚さ1m60cm以上堆積している。本層上面から深さ10cm前後には土壤層位C層に相当すると推定される土壌化の痕跡が認められる。さらに本層上面から1m50cm前後下位に厚さ5cm前後の水酸化鉄沈着層があり、第VI層は当該沈着層を境に第



第5図 痕跡発掘調査範囲図



第6図 窪遺跡基本層序図



第7図 窪遺跡遺構配置図

Vla層、第Vlb層、第Vlc層に細分可能である。上位の第Vla層は均質な粘土で、明瞭な層理面や葉理は認められない。第Vla層上面が本来の遺構確認面である。

なお、平成26年度確認調査では、微高地の後背部に当たる東側の低位部で、旧表土(埋没古土壤)に相当する暗褐色(10YR3/4)砂質シルト層(確認調査第Ⅲ層)、その下位の基盤漸移層に相当する褐色(10YR4/4)シルト質粘土層(同第V層)などが遺存する地点を確認している。平成23年度の分布調査と平成26年度の確認調査では、低位部の第Ⅲ層(相当層)及び第V層上位から極少量の縄文土器破片が出土している(第5図・第9図)。

第3節 検出遺構と遺物

1 概要

今回の発掘調査においては、縄文時代に帰属すると判断される土坑1基(SK01)と近世以降に属すると推定される水溜施設1基(SE02)を検出した(第7図)。これらの遺構は、最終的に第Vla層上位の土壤化した範囲を削り込んで検出し、その検出面の標高はほぼ18.0m前後であった。

平成26年4月の確認調査では、13.500m²を対象範囲とし、全体の約7%に当たる982m²を試掘したが、SK01土坑以外に遺構は確認していない。窪跡のこれまでの分布調査及び確認調査結果からは、SK01土坑周辺に関連する遺構が一定程度の密度で分布するとは想定できず、SK01土坑が単独で分布する可能性が高いと判断される。また、今回の発掘調査出土遺物は、SK01土坑から出土した石器2点のみである。このほかには、発掘調査地点から100m余り東に位置する微高地の後背低地周辺において、平成23年度分布調査で縄文時代後期前後と推定される土器破片数点が、平成26年度確認調査で詳細な時期不詳の縄文土器の小破片2点がそれぞれ出土しているに過ぎない(第5図・第9図)。

水溜施設SE02は、開口部の長径約2.5m、深さ約1.2mの素掘り井戸状の円筒形の掘り込みである。第1章第2節の「発掘調査の経過」で記述したように、掘り込みは湧水層に達していないことから、雨水等を溜めた水溜施設と判断した。覆土は人為的に埋め戻されたと推測されるが、遺物は出土しなかった。さらに確認調査においても周辺で関連する遺構・遺物は確認できなかった。これらのことから、本遺構は集落に伴うものではなく、近世以降に開発された畠地に伴うものと判断し、ここでの具体的な報告は割愛する。

2 土坑

(1) SK01土坑(第8図・第9図)

本土坑は、当初、平成26年4月に実施した確認調査において、確認調査対象範囲の西端側に設定した第2トレンチで確認した。土坑確認面は黄褐色粘土層(第Vla層)上位で、確認面での土坑覆土は周囲よりも黒みが強かった。第Vla層上面は不整合面となっていることから、遺構上位は現水田造成時に削平されたものと推定される。現状で土坑上端面は長径0.83m、短径0.74mの不整の円形平面を呈する。確認面からの深さは0.26mである。底面はほぼ平坦で、壁は直立気味に立ち上がる。

覆土は主として色調をもとに5層に分けた。成層状ではなく塊状を呈していることから、連続した埋め戻し土と判断される。上述したように遺構確認面での覆土の色調は周囲の第Vla層よりも黒みが

強く、おそらく遺構覆土は既に削平された埋没古土壤である旧表土層(確認調査第Ⅲ層)に主に由来するものと推定される。

土坑中央南寄りの底面上位約14cmから凹石1点が、土坑中央やや北西寄りの底面直上から分割された磨石破片1点がそれぞれ出土した。これらの石器以外に出土遺物はない。第9図1は底面上位約14cmから出土した凹石である。重量は370.3gである。棒状の白色凝灰岩円礫を素材とする。図正面上端側に微かに敲打痕が存在する。その他の部分には敲打痕等の明瞭な使用痕跡は認め難い。第9図2は土坑底面直上から出土した磨石破片である。現状で重量821.4gである。横断面が三角形の花崗閃綠岩の亜円礫を素材とする。図右側面が平坦面をなし、明瞭ではないが磨面と判断した。器体中央部への打撃により二分割されたものと推定される。本土坑からは残りの破片は出土していない。出土した2点の石器は、いずれも使用痕跡が極めて軽微であることが特徴的であり、近隣の河床礫などを臨機的に使用したものと推測される。^(註4)

本土坑は、覆土が縄文時代の遺物出土層準に相当する旧表土層(埋没古土壤)に由来すると推定されることから、詳細な時期は不明であるが縄文時代に属すると判断する。さらに覆土は一気に埋め戻されたと考えられること、出土した2点の石器は埋め戻し時に意図的に埋めたものと判断できることから、本土坑は小形ではあるが、石器を副葬した土坑墓であったと判断する(以降の記述では原則として土坑墓とする)。土坑墓からは現状では焼骨、焼土などの火葬等による二次葬の痕跡は認められず、土坑墓規模からは、成人ではなく小柄な未成人の遺体を直接埋葬したものと推定する。

3 遺構外出土遺物

既述のように、今回の発掘調査ではSK01土坑墓から出土した石器2点以外の出土遺物はない。ここでは、平成26年度確認調査及び平成23年度分布調査において、本発掘調査地点東方の微高地後背低地部で出土した縄文土器破片のうち、分布調査で出土した縄文土器破片3点を掲載する。これらはいずれも確認調査第Ⅲ層(旧表土)相当層からの出土と推定される。

第9図3は、第5図の分布調査地点1(分布調査時のNO.9地点)から出土した深鉢体部破片である。外面にはRL縄文を不整に施す。内面はナデ調整である。幅20mm前後の粘土紐を内傾接合した成形痕が認められる。同4・5は、いずれも第5図の分布調査地点2(分布調査時のNO.11地点)から出土した深鉢体部破片である。4は外面にはLR縄文を横位回転施文する。内面調整は摩滅のため不明である。幅20mm前後の粘土紐を内傾接合した成形痕が認められる。5は、内外面とも摩滅のため、施文や調整等は不明である。幅10mm前後の粘土紐の内傾接合の剥離痕が認められる。これらの縄文土器破片の詳細な時期は不明であるが、縄文、胎土、粘土紐接合痕の特徴等から縄文時代後期後半前後に属する可能性がある。^(註5)

註1 秋田県教育委員会「遺跡詳細分布調査報告書」秋田県文化財調査報告書第497集 2015(平成27)年
なお、平成26年度確認調査における第IV層は、確認調査対象範囲東端側に位置する埋没谷を埋積するグライ土壤である。

註2 秋田県教育委員会「遺跡詳細分布調査報告書」秋田県文化財調査報告書第475集 2012(平成24)年

註3 註1文献

註4 石質鑑定は、秋田県立博物館渡辺均主任学芸主事兼學習振興班長、同工藤伸也学芸主事、同宮本康男元主

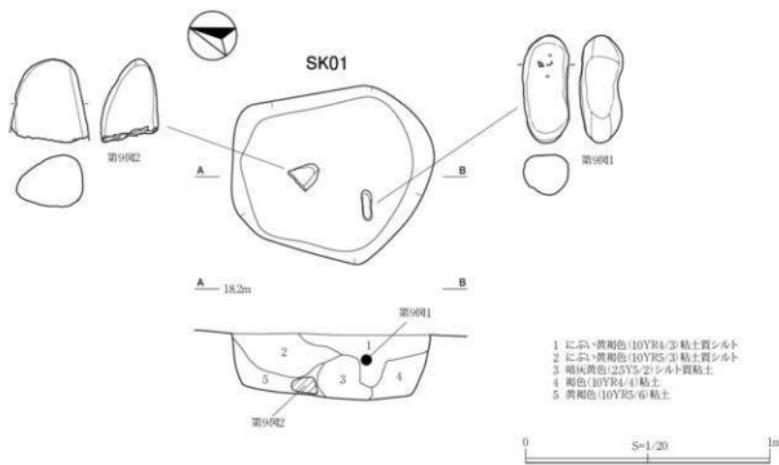
任専門員の3氏による。宮本氏の御教示によると、花崗閃緑岩は雄物川水系では、岩見川流域で確認されるとのことであり、窓跡形成集団の活動範囲が岩見川流域に及ぶ可能性を示唆する。今後、雄物川水系での河床礫の種類ごとのより詳細な分布状況を精査し、出土石器の素材礫の最寄り産地を改めて検討する必要があろう。

- 註5 掘載した縄文土器はいずれも体部の小破片であるため、破片天地の認定については必ずしも確実ではない。よって、粘土紐接合面の傾きの判定にも不確実さがある。ただし、縄文中期後半の大木系土器及び縄文後期土器の縦位割れ面の肉眼観察からは、大きな傾向として前者では幅数10mm前後でほぼ目的の厚さに事前に整形した粘土帯を外傾接合に積み上げて成形するのに対し、後者ではおそらく土器器形の多様化と関連して、最終的に幅10～20mm前後となる粘土紐を積み上げて目的の厚さまで伸ばすように外傾接合もしくは内傾接合で成形するものと想定される。第9図5のように粘土紐の幅が10mm前後と狭小化したものは、遡っても縄文時代後期以降のものであろう。

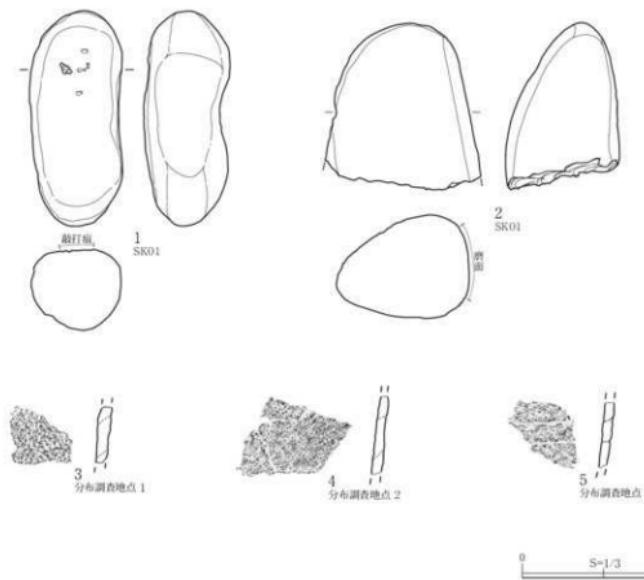
なお、小林正史・高木晃らは、東北地方北部においては、縄文時代後期中葉後半(加曾利B3式期)以降、粘土紐の外傾接合による成形から内傾接合による成形へ変化することを指摘している。さらに、小林正史と鍾ヶ江賢二は、津軽地域の縄文前期・中期土器(円筒下層式・同上層式)、縄文後期前葉土器を対象として、水平割口と接合刺痕の観察、土器断面薄片の粒子配向顕微鏡観察から、いずれにおいても粘土紐2～3本を積み上げて、伸ばし圧着して成形したものと判断している。ただし、三内丸山遺跡の円筒下層式及び同上層式土器の断面薄片の粒子配向顕微鏡観察では、連続した粘土紐積み上げ部での接合痕跡(接合線)の確認頻度は必ずしも高くないようである。当該土器においては、上述したような粘土紐積み上げ成形が行われた可能性も検討すべきではなかろうか。

小林正史・高木晃・岡本洋・永鶴豊「縄文土器の紐積み成形における「外傾接合か内傾接合か」の選択理由」青森県教育委員会『特別史跡三内丸山遺跡年報-15-』2012(平成24)年

小林正史・鍾ヶ江賢二「縄文土器の紐積み方法の復元とそれらの技術を選択した理由の解明」青森県教育委員会『特別史跡三内丸山遺跡年報-18-』2015(平成27)年



第8図 産遺跡SK01



第9図 産遺跡出土遺物

第4章 総括

今回の窪遺跡発掘調査においては、縄文時代の土坑墓1基(SK01)と近世以降の畑作に伴うと推定される水溜施設1基(SE02)を確認した。本章では、SK01土坑墓の特徴と遺跡の性格についてまとめた後、近接する大川端道ノ上遺跡との異同を検討し、総括とする。

SK01土坑墓と遺跡の性格

SK01土坑墓は、径0.8m前後の不整円形平面で深さ0.26mの小形のものである。土坑墓には凹石と分割した磨石破片各1点を副葬する。土坑規模及び覆土の様相から、未成人が直接埋葬された可能性が想定される。分割例を含む石器の副葬行為の具体的な意図については、現時点では特定し難い。土坑墓の詳細な時期も不明であるが、覆土の特徴と分布調査及び確認調査での縄文土器出土状況からは、縄文時代後期に属する可能性も想定される。

過去の分布調査及び確認調査結果を勘案すると、土坑墓周囲には住居を始めとした関連する遺構が分布するとは想定できず、本土坑墓が単独で存在する可能性が強い。このように本遺跡には墓域が形成されたとは考えられないこと、さらに土坑墓に副葬された石器は軽微な使用痕しか認められず、臨機的な石器と判断されることなども勘案すると、遺跡は、本来、縄文時代後期頃以降に雄物川の沖積低地に進出した集団による野営地的な短期間の占地跡であったと推定される。出土石器から堅果類の採集加工が行われた可能性や立地から雄物川を遡上するサケを対象とした漁獵活動が行われた可能性なども想定されるが、いずれも具体的な根拠を欠く。また、遺跡を形成した集団の詳細も不明であるが、上述した土坑墓が葬者の想定からは、集団には未成人を含んでいたものと考えられる。土坑墓以外に集団の活動痕跡が認められない状況を重視すれば、想像をたくましくすると、夫婦とその子供を含む核家族が一つの世帯となり、特定時季に遺跡周辺で短期間の生業活動を行っていたのではなかろうか。その際に不慮の事故等で亡くなった子供を手元の石器を副葬して埋葬したものと想定できるかもしれない。

大川端道ノ上遺跡との比較

ここで、窪遺跡周辺の遺跡を見ると、雄物川の下流側約1kmに位置する大川端道ノ上遺跡^(註2)が、立地、分布構造、時期などに共通性が認められる。大川端道ノ上遺跡は、窪遺跡と同じく雄物川左岸の沖積低地内の自然堤防上に立地する。第2章第2節「歴史的環境」でも触れたように、縄文時代中期末から弥生時代中期までの遺物が一定量出土し、遅くとも縄文時代中期末以降には、断続的に利用されたものと判断される。住居が未確認であることから、当該地点は通年の居住地としてではなく、季節的、短期的に占地され、場合によって食料貯蔵や埋葬などにも利用されたものと推測される。

その中で、縄文時代後期後半から晩期にかけては土坑墓の可能性がある径1m未満の円形平面基調の小形土坑が累計で10数基前後認められたとみられる。これらの土坑は比較的分散した分布状況を呈し、土坑墓が一定の規範のもとで集中するような墓域が形成されたとは認め難い。これらの土坑(墓)の多くは、副葬品、供獻品と認められる供伴遺物に乏しいが、SK95土坑(墓)からは、少量の縄文後期中

葉の土器破片のほかに重量5.7kgの完形の石皿が出土している。本土坑は開口部が長径0.88m、短径0.72mの円形に近い楕円形平面をなし、深さは0.28mと、窓遺跡SK01土坑墓に近似した規模である。出土した石皿は埋葬時の抱石であったと想定されている。SK95土坑(墓)以外にSK85・86・87土坑(墓)なども窓遺跡SK01土坑墓と近似した規模、形態のものである。

大川端道ノ上遺跡は、窓遺跡よりも、より長期にわたって継続的に利用されてきたと想定されるが、住居が確認されないことなどから、既述のように基本的には季節的、短期的に利用されたものと考えられる。ただし、SK95土坑(墓)からは、大型の石皿が出土している。当該石皿は大形の扁平円礫をほとんど未整形で使用していることから臨機的な石器であった可能性もあるが、石皿のような大形遺物を定住度の指標ととらえるならば、少なくとも窓遺跡よりは相対的に定住度は高かった可能性がある。あるいは、大川端道ノ上遺跡のような沖積低地においては、竪穴形式の住居ではなく、掘立柱形式の住居が営まれた可能性も想定し得るかもしれないが、現時点では具体的な根拠はない。

窓遺跡と大川端道ノ上遺跡は、雄物川左岸の沖積低地に約1km離れて隣接し、両者は同時期に営まれた可能性も想定される。縄文時代後期後半前後の一時期に両遺跡が併存していたと仮定するならば、両遺跡周辺地域のセトルメント・システムとして、例えば次のような考えが想定される。

①大川端道ノ上遺跡をその定住性を認めて母村とし、窓遺跡をその母村から季節的、短期的に分かれた野営地とする。

②雄物川沖積低地ではなく、段丘上などに未確認の母村となる集落が存在し、当該集落の集団が分岐し、両遺跡のような季節的、短期的野営地などが営まれたとする。

③縄文時代後期後半前後においては、複数住居が集合するような集落は発達せず、一家族程度の小規模集団が季節的、短期的に移動を繰り返したとする。

横手盆地全体を見ると、縄文時代後期以降には、例えば横手市(旧増田町)八木遺跡のように少數の竪穴建物(住居)のほかに大規模な墓域や捨て場が営まれる遺跡が出現することなどから、上記3案以外にも多様な考えがあり得よう。現状では、これまでの発掘調査成果からより具体的な検討を行うことは難しく、今後の課題である。^(注3)

今回の窓遺跡の発掘調査は、おそらく縄文時代後期における雄物川中流域のセトルメント・システムにおいて、沖積低地に短期的に占地するセトルメント・パターン^(注4)が存在する可能性を示したものと考えられる。セトルメント・パターンの詳細やセトルメント・システムの全容については、今後の資料蓄積を通じて検討を継続する必要があろう。

註 1 江戸時代においては、窓遺跡近辺の雄物川(流瀬)でサケ漁の網場が営まれていたとの記録がある。

進藤孝一「第五編 第一章 第三節 近世の村々」協和町史編纂委員会(編)『協和町史』上巻 2001(平成13)年

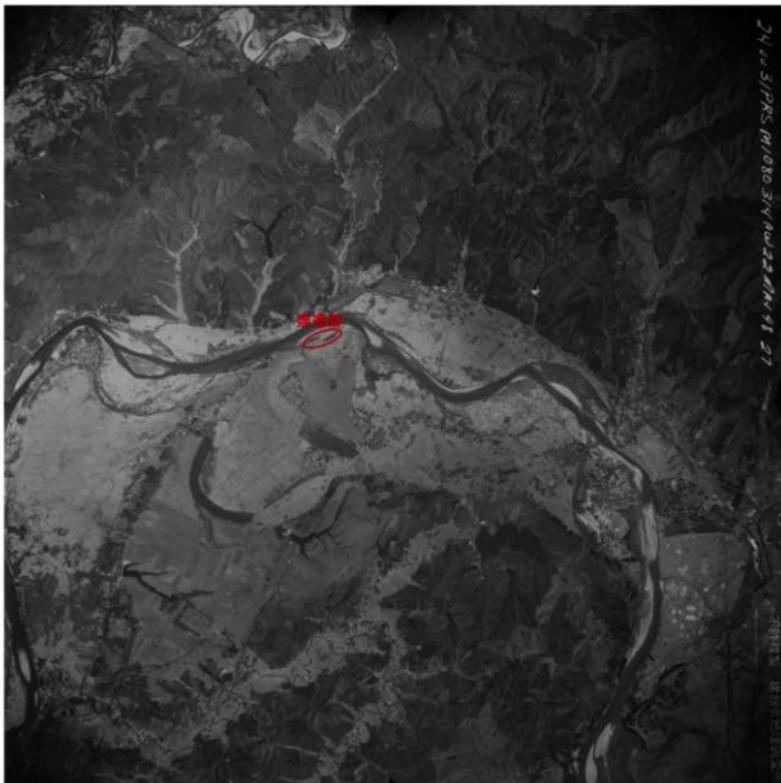
註 2 秋田県教育委員会「大川端道ノ上遺跡 - 雄物川上流河川改修事業(寺館大巻地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書1-」秋田県文化財調査報告書第496集 2015(平成27)年

註 3 秋田県教育委員会「八木遺跡発掘調査報告書 - 公害防除特別土地改良事業八木地区に係る埋蔵文化財調査 -」秋田県文化財調査報告書第181集 1989(平成元)年

註 4 ここでセトルメント・パターン及びセトルメント・システムの概念は、基本的に小林達雄に従う。

小林達雄「多摩ニュータウンの先住者」『月刊文化財』112号 第一法規出版 1973(昭和48)年

241031/PMS/M-080-3140022/NW 41-21



1 墓遺跡周辺の空中写真（上が北） 1948(昭和23)年 米軍撮影(USA M1080 24)



2 墓遺跡遠景（南東から）

手前側の杉林の奥に雄物川が西流



3 墓遺跡調査区（北から）

中央がSK01 土坑、右奥がSE02 水溜施設



1 窪遺跡基本層序（東から）



2 窪遺跡SK01確認状況（南西から）



3 窪遺跡SK01土層断面（南西から）



4 窪遺跡SK01完掘（南西から）



5 窪遺跡出土遺物 縮尺不同

報告書抄録

ふりがな	にしいたどいせき くぼいせき						
書名	西板戸遺跡 窪遺跡						
副書名	雄物川上流河川改修事業(西板戸地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 雄物川上流河川改修事業(寺館大巻地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ						
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書						
シリーズ番号	第501集						
編著者名	伊豆俊祐・赤星純平(編)・榮一郎						
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター						
所在地	〒014-0802 秋田県大仙市払田字牛嶋20番地 TEL0187-69-3331						
発行機関	秋田県教育委員会						
所在地	〒010-8580 秋田県秋田市山王三丁目1番1号 TEL018-860-5193						
発行年月日	西暦2016年3月						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 ○○○.○	東経 ○○○.○	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
にし 西 板 戸 遺 跡	秋田県大仙市 南外字西板戸 81-2外	05212	212-52-46 29° 47"	140° 22' 51"	20140428 / 20140909	4,000	雄物川上流 河川改修事 業(西板戸地 区)に係る事 前調査
窪 遺 跡	秋田県大仙市 大巻字瀬ノ上 90	05212	212-46-54 33° 37"	140° 19' 14"	20140929 / 20141001	120	雄物川上流 河川改修事 業(寺館大巻 地区)に係る 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
西板戸遺跡	集落跡 墓地	中世 (13世紀) (14~15世紀) (時期不詳)	井戸跡 カマド状遺構 土器溜まり 掘立柱建物跡 柱穴列 井戸跡 カマド状遺構 土坑墓 火葬墓 掘立柱建物跡 柱穴列 井戸跡 カマド状遺構	6基 6基 2か所 1棟 1条 8基 6基 19基 12基 3棟 1条 4基 2基	中世陶器 青磁 近世陶磁 土人形 石製品(砥石、 線刻繙など) 木製品(井戸 枠材、曲物、 折敷など) 鉄製品(短刀、 轡、鉄釘など) 銭津 銭貨	土器溜まりと複 数の井戸跡から 大烟・桧山腰窓 産の珠洲系陶器 が出土し、各遺 構間に接合関係 が認められた。	

			近世	掘立柱建物跡 柱穴列 竪穴状遺構 木棺墓 土坑 溝跡	3棟 5条 2棟 4基 1基 1条		
			(時代不明)	掘立柱建物跡 柱穴列 土坑 溝跡 柱穴様ピット	2棟 1条 17基 1条 127基		
遺 跡	跡	墓	縄文時代	土坑	1基	凹石1・磨石1	小形土坑墓が単独で立地する。
【西板戸遺跡】							
雄物川支流の橋岡川左岸、標高約20mの段丘上に立地する中世～近世の複合遺跡である。13世紀～現代まで断続的に集落が存続していたと推定されるが、遺構の時期は13世紀、14～15世紀、18世紀～19世紀に大別できる。							
13世紀の遺構は、井戸跡・カマド状遺構・土器溜まりを検出し、複数の井戸跡と土器溜まりで出土した大烟・桧山腰窯産の珠洲系陶器が遺構間接合した。井戸の廃絶時に土器溜まりまたはその周辺で破碎した陶器を各井戸に分配・廃棄したと推定され、横手市観音寺庵寺跡に類似する特徴的な井戸の廃絶儀礼の痕跡を確認した。							
14～15世紀の遺構は、井戸跡・カマド状遺構・土坑墓・火葬墓を検出した。同時期には集落が営まれたほか、15世紀前半には調査区南東部を中心に墓域が形成され、副葬品として短刀、六道鏡などが出土した。							
18～19世紀の遺構は、掘立柱建物跡・竪穴状遺構・木棺墓などを検出した。18世紀中葉以降に調査区中央北寄りの一画に、木棺墓4基からなる墓域が形成される。いずれも幼児を埋葬した墓と推定され、副葬品として銭銭や土人形などが出土した。19世紀頃には、総柱の掘立柱建物跡や大型の竪穴状遺構などが存在したと考えられ、遺跡地北側に隣接する近世船着場の存在から、倉庫や馬屋など物資の貯蔵・運搬に関わる施設が置かれた区域であったと推定される。							
【窓遺跡】							
雄物川中流の標高18m前後の沖積低地に当たる低位段丘面上で、直径約0.8mの小形土坑1基を検出した。土坑内からは完形の凹石と半割された磨石各1点が出土し、覆土は人為的に埋め戻されたと判断されることから、当該遺構は石器を副葬した土坑墓と推定される。遺跡では単独の土坑墓が営まれたにとどまる可能性が高く、住居跡など他の遺構は認められない。これらのことなどから、遺跡は、本来、縄文時代後期前後以降に雄物川沿いの沖積低地に進出した集団による短期間の占地跡であり、占地時に発生した死者を埋葬した可能性が想定される。							

秋田県文化財調査報告書第501集

西板戸遺跡

—雄物川上流河川改修事業(西板戸地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ—

建遺跡

—雄物川上流河川改修事業(寺館大巻地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ—

印刷・発行 平成28年3月

編 集 秋田県埋蔵文化財センター

〒014-0802 大仙市払田字牛嶋20番地

電話 (0187) 69-3331 FAX (0187) 69-3330

発 行 秋田県教育委員会

〒010-8580 秋田市山王三丁目1番1号

電話 (018) 860-5193

